幻想水滸伝４【永遠の空】

明太子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想水滸伝４【永遠の空】

【Ｎコード】
Ｎ３４９１Ｄ

【作者名】
明太子

【あらすじ】
幻想水滸伝４のファンフィクションです。オリジナルキャラが出張っています。「存在が反則」と設定したら本当に反則キャラになってしまい、作者が驚いたくらいです（オイ）４主人公が乙女なので、苦手な方はご注意を。ボーイズラブ要素高し。

永遠の空・1（前書き）

オリジナルキャラ嫌い、主人公が乙女イヤ、ぼおいずらぶぅ!?等、苦手な方はご注意ください。あと、結構ばかっぷるです。

永遠の空・1

見つけた、と思った。
何故そう思ったのかは分からない。
ただ、自分を見る瞳を見た瞬間に、思った。
ああ、自分を捕らえるのは彼だ、と。

どうしようもなく、思った。
初めてあった瞬間、胸が熱くなって、鼓動が早くなって、とても苦しくなった。
でも、彼の顔から目を離せなくて。
――離したくなくて。

ドウシヨウモナイクライニ捕ラワレタ。

一瞬で――互いに。

……一年半後。
ラズリル近郊海上。
ラズリルのガイエン海上騎士団の見習いたちが演習をしている。
指揮を取るのはラズリルの領主の息子である、スノウ・フィンガーフート。
見た目からして育ちの良さを感じさせる青年は、傍らの少年に話しかけている。
赤いバンダナをしているスノウよりやや幼い感じのする少年だ。
海のような青く澄んだ瞳で海面を見つめている。
「大丈夫、大丈夫だ、僕はちゃんとやり遂げてみせる」
スノウは言い、顔を横に向けた。視線はブリッジの上に向いてい

る。
横にいる少年もスノウに習うかのように同じ方向に視線を向けた。
ブリッジの上、屋根の部分、梯子もない場所にどうやってのぼったのか。
一人の男が彼らに背を向けて座っている。
腰には使い込まれた双剣。
ごく普通の動きやすいジャケット姿から、騎士団の人間ではないことはすぐに知れる。
騎士団の者は皆、独特の鎧を身に着けるからだ。
見習いもそれは例外ではなく、スノウも少年も重そうな鎧を身に着けていた。
もっともスノウの鎧は特注で、ほかの皆よりも数段立派な鎧だが。
「……彼もいるしね」
あんまり頼りにしてもいけないけど、とスノウは言いながら、背を向けている男にうっとりとした視線を向けている。
スノウが彼のことを好いているのは誰が見ても明らかだ。
横の少年は少しだけ複雑そうな表情になった。
少年も彼に好意を抱いているのだが、スノウの小間使いの立場として言葉には出来ない。
「でも、いいなぁ、ライガ。そのバンダナ……」
スノウはうらやましそうに少年――ライガがしている赤いバンダナに目をやる。
「僕もヒサトからなにか貰いたい……騎士になるお祝いに」
ライガのバンダナは、男――ヒサトから貰ったものだった。
スノウはそれがうらやましい。
何せそのバンダナはヒサトが大切にいつも身に着けていたものだからだ。
それをある日ライガが受け取ったことに、スノウは驚いた。ヒサトはライガのことを嫌っているとばかり思っていたからだ。
自分のことを好いていてくれているとばかり思っていたからだ。

理由はひとこと。
ライガに怪我をさせた侘びだとヒサトは言った。
話を聞くと、たまたまヒサトが買い物をしている最中に、使いに出ていたライガとぶつかって、持っていた荷物を落としたのだという。
中には小刀が入っていて、咄嗟に拾ったライガの手を傷つけたのだ、と。
確かにそのとき、ライガは手に包帯を巻いており、怪我をしたらしかった。
「いいなぁ」
心底からうらやましそうなスノウに、ライガは苦笑するしかない。
このバンダナに秘められた想いを、分かっているのはライガだけ。
知られてはいけないから。
スノウに頂戴(ちょうだい)といわれてもこれだけは譲れなかった。海原を漂流して何もない状態で拾われた自分に出来た、大切なたった一つの品だから。
「敵襲です！」
何度目かのスノウからのおねだりが出る前に、見張りが叫んだ。
演習の始まりだ。
ヒサトはのんびりとブリッジの上から動かず、ばたばた走り回る見習いたちを見てもいない。
彼がここにいるのは万が一のことが起こったときのためだ。
見習いしか乗っていない船だ、海賊になど襲われたらひとたまりもない。
いわば、ボディーガードである。
この船にはラズリル領主の息子、スノウが乗っている。彼に何かあったらガイエン騎士団の存続が危うい。
本当は演習になど付き合うつもりもなかったが、親友である団長、グレンに頭を下げて頼まれては断れなかった。
一応、客将の扱いで騎士団に滞在している身としても、付き合っ

てやらねばいろいろとややこしいことになる。ヒサトを呼んだことでフィンガーフート伯につつかれて困るのは親友のグレンだ。
仕方なく、滞在している間くらいは少々付き合ってやることにしているが――実のところ理由は他にもあった。
ライガ。
ちらりとだけ視線を向け、ヒサトは再び海面に目をやる。
この海のように澄んだ目をした少年。
この船には彼が乗っているからだ。
実のところ、スノウなどどうでもいい。ヒサトが護りたいと思っているのはライガだけだ。
海戦が始まっている。紋章砲が派手に撃ち合い、船を揺らしたが、見習いたちが転ぶ中、ヒサトはびくともしていない。
この船が相手にしているのは、団長たちが乗っている船だ。命の危険などない。
ぼーっとしていると、海戦は終わり、あっという間に接舷され、大柄な男と、魔術師風の女が乗り込んできた。
団長のグレンと、副団長のカタリナだ。
あっさりと乗り込まれて、模擬戦にまで持ち込まれたスノウを、グレンが注意している。
それはそうだ。これが実戦だったら、スノウはすでに斬り殺されている。
「いくらヒサトが同乗しているとはいえ、気を抜きすぎだ」
とか何とか言っているのが聞こえた。
俺のせいかい、と口の中で呟く。本質的に誰かがしてくれることしか知らないスノウには、釈迦（しゃか）に説法だろう。
育ちのいい、世間知らずなのだ。親は親で息子を甘やかしまくりで、権力を持って押さえつけてくるタイプ。しかも能無し。
ヒサトの一番嫌いな権力者のタイプだ。
スノウになつかれているのも実は気に食わない。
ヒサトとしては、はっきりと言ってやりたいのだが、フィンガー

フート伯に睨まれるから止めてくれとグレンに止められている。
あー、めんどくさ。
ヒサトは心で思い、ブリッジの上から飛び降りた。
グレンの説教は終わり、団長はライガと一騎打ちをしている。
この少年を、グレンも目をかけているのだ。いつまでもスノウの小間使いでは忍びない。
そのうち必ず、と団長も思っているのだろう。
目の上のたんこぶ、フィンガーフート伯をまずどうにかしないとならないが。
一騎打ちはライガの勝ちで勝負がついた。
人知れず、鍛錬してやった甲斐があると、ヒサトは内心で笑んだ。
いつもスノウがべったり張り付いているライガに、隙を見て稽古をつけてやっていたのだが、実を結んでいるようだ。
ライガはかなりスジがいい。
「なんだ、グレン？　なまったか？」
「ヒサトか。いいや、ライガが強くなってきているのだろう」
寄ってきた親友に、グレンは苦笑した。グレンは五十、ヒサトはどう見ても二十代、親友というには違和感がある二人だが、年の離れた酒飲み友達である。
「ヒサトっ」
スノウが目を輝かせた。
「見てくれた？　僕、海戦勝ったよ」
「そのあと接舷されてたのまでしっかり見たぞ。ま、がんばれや」
「う、うん！」
ぽん、と頭を叩いてやると、スノウは嬉しそうに頷いた。子犬のようである。
「ヒサト、俺たちは船に戻るが、お前はどうする」
グレンが言う。演習は終了。後はラズリルに帰港するだけだ。
「んー、どっちでもいいが……まぁ、後は帰るだけだろ、子守しとくわ」

乗り移るのがめんどくさい、そう取られたのだろう。グレンもカタリナも苦笑して戻っていった。

ヒサトは欄干に近寄り、海を眺める。彼の瞳もまた、深い海底と同じ蒼だ。

その瞳に宿るのも、海のような深遠で深淵――。

彼の名はヒサト。

あまりの強さゆえ、剣神（けんしん）の名を冠する男。

永遠の空・2

港町ラズリル。
いつも人気あり賑わう町だが、今日はいつもと盛り上がりが違う。
見習いたちが卒業して正式に騎士になる日だからだ。
夜に行われる火入れの式の準備のため、町はなんとなく落ち着きがない。
喜びと祝いの儀式だ。浮かれた雰囲気が漂っている。
まずは館内で団長のあいさつを聞き、それから町で儀式が行われる。
グレンは過去の、クールークとの一戦を話し出した。
年若い指揮官、トロイがたった一隻でガイエン側の勢力を撃退したときの話を。
隅っこで聞いていたヒサトはちょっと苦笑している。
七年前のエルイール攻防戦。
実は彼はクールーク側で参戦していた。
その頃クールークを旅していたのである。たまたま傭兵として雇われ……ガイエン側を撃退したのだった。
彼の名は出ていない。トロイに口止めしたからだ。
おかげで名が売れたのはトロイのほうで、今では海神の申し子とまで呼ばれている。
なつかしーなーと思うと同時、グレンには申し訳がない。
容赦なくガイエンの船の半数を沈めたのは自分だ。
残りの半数を沈めたのは確かにトロイの実力だが、ヒサトがいなければ彼の勝利は危うかっただろう。
苦い負けだった、とグレンは言う。
いててて、とヒサトは内心思う。
耳が痛い。グレンはうすうすヒサトがクールークについていたこ

とを知っているのだろう。
傭兵というのはそういうものだと納得してもいるはずだろうが。
なんつーか針のむしろか？これは。
苦笑するしかない。
話は見習いたちがトロイのように強くなることを期待しているという結びで終わった。
次の火入れの儀式の後は町の広場で祝宴だ。ぞろぞろと見習いたちが出て行く。
「……いやがらせか？」
むっつりとグレンに言ってやると、いかつい団長はしれっと笑った。
「なんのことだ？」
分かってやがる。確信するヒサトである。
「お前のようになれ、というのは無理な話だからな。お前は強すぎる。トロイくらいがちょうどいい」
「あーあー、はいはい」
グレンはやる気無くヒラヒラ手を振る親友に苦笑した。
ヒサト。
強すぎる男。たった一人で何隻もの戦艦を信じられない手段で沈める男。
一人で乗り込み、全員を惨殺して、自身は無傷で戻ってこれるような男だ。
ヒサトを目指せというのは酷だろう。
ラズリルでは彼の剣が振るわれることは滅多になかったので、団員のほとんどは剣神の話を単なるウワサだと思い込んでいるようだが。
それはウワサではなく、残酷なまでの真実だ。
グレンはそれを知っている。今ここで手合わせをしても、負けるのは確実にグレンだ。
ヒサトは剣すら抜かないだろう。そこまで実力差があるのだ。

ガイエン海上騎士団団長のグレンでさえ、ヒサトには勝てない。
勝てる気がしない。
「ヒサト」
「あ？」
「お前には感謝している。俺の無理を聞いて長く滞在してくれた」
この親友はひとつ所に長く留まらない。長くても一月から二月だ。
短いときなど二日もいない。
だが、ラズリルにはもう一年半も滞在してくれている。
「ああ、気にすんな。他に目的があるからな」
「？　目的？　なんだ？」
何にも執着しない彼が望むことなどあるのだろうか、とグレンは不思議そうだ。
ヒサトはにんまり笑う。
「本命が出来た」
「！！！？」
言葉を失うグレンである。
「本命！！　お前がかッ！！！」
心底から驚いている。なにせヒサトは流浪人の上、遊び人だ。
しかも、男女関係ない。相手の年齢範囲も広い。
どれだけの美女だろうと美男だろうと食っちゃ捨て食っちゃ捨てしてきたヒサトが。
「……本気か？？　誰だ！！？？」
「真剣に驚いてやがるな？　はっはっは、その態度がむかつくぞ、おい。俺が本気になっちゃー悪いのか」
「悪くはないが、心から驚いた！　誰だ、相手は！？」
「なんかむかついたから教えてやらん。どうせそのうち分かる」
にんまりと笑う彼に、グレンは思いつく限りの人間の顔を考える。
ヒサトが本気になるような人物。このラズリルで。
そう簡単には思いつかないが。
「……まさかとは思うが……スノウではないだろうな？」

グレンは恐る恐る尋ねる。
「なわけねぇ。俺がアイツみたいなお貴族様大っ嫌いなの知ってるだろう」
「いや、目をかけているように見えたのでな」
一見だけするとヒサトはスノウを可愛がっているように見えた。
「そりゃお前がフィンガーフートと波風立てるなって言ったからだ」
グレンが頼み込んでこなければ、ヒサトはスノウが寄ってくるのを拒んでいる。
では一体誰だろうと真剣に悩んでいる親友を置いて、ヒサトは町に出た。あの分では、かなりの間悩んでいるに違いない。
ちくちく言われたイヤミのお返しだ。

永遠の空・2（後書き）

剣の神といわれる男は、結構面倒くさがりです。ええ。

永遠の空・3

町はすでに日が暮れていて、暗い。火入れの儀式はもう終わっただろうか。

町の住民が持つたいまつに、卒業生の代表が火をつけていく儀式だ。

代表はまず間違いなくスノウだろう。

ほかにもっと優秀な人材はいるが、なにせ領主の息子だ。無碍に出来ないのだろう。

どうでもいいと思いながら町をぶらつく。人気はほとんどない。祝宴が行われるのは広場で、ヒサトが歩いている場所からはまだ遠い。

腹は減っているが、祝宴に出るのは面倒くさい。どうせ、息子の晴れ姿を自慢するフィンガーフート伯に捕まるだけだ。

祝宴には出ないつもりで、ヒサトは近くの酒場で軽く食事を終えた。

外に出ると、ちょうどライガとスノウの姿がある。港の店で働いているネコボルトのチープーと何か話していた。

ただならない様子だ。

「どーした？」

なにかあったなと察して近寄ると、チープーがアワアワと話しかけてきた。

「あ、ヒサト！　あのね、海賊に女の子が連れてかれるのを見たんだ」

どうやら、誘拐事件を目撃したらしい。それで騎士見習い――今はもう騎士か――のライガとスノウに助けを求めたようだ。

「騎士として放ってはおけないよ！」

スノウは鼻息が荒い。

「ね、ヒサト、一緒に来てくれるよね？」

すがるようなスノウの目。自信がないというよりは、ヒサトと行動したいのだろう。

「……少しだけならな」

ヒサトはため息混じりに答える。スノウとライガだけで行かせるのは、不安だった。

実力のないスノウをかばってライガが怪我をしかねない。しかもスノウはそれを感謝はするものの当然だとどこかで思っている。この二人はそういう間柄だ。

使う者と使われる者。

主人と小間使い――スノウとライガ。

忌々しい。張り切って進むスノウの後をだるい様子でついていきながら、ヒサトは隠さず息をついた。

「ごめんなさい」

ライガが小さく言ってくる。

「……」

ヒサトは無言。スノウに聞こえているからだ。

何も返さない自分の反応を聞いて、スノウは安心したのだろう。

「ダメだよライガ。ヒサトを困らせちゃ。ヒサト、ライガにつき合わせてごめんね」

にこにこと言う。ヒサトは僕のことが好きなんだから、ライガは気安く話しかけちゃダメだ、と。

勝手だ。

なまじ、その勝手を通す権力を持っているから余計に性質（たち）が悪い。

ま、付き合ってやるつもりもないので、そのまま海賊が去ったらしい裏通りを進む。

中ほどに少し広くなっている場所があった。そこで、かすかに泣き声が聞こえてくる。

……子供の声だ。

ヒサトはくい、と首を振った。スノウとライガがそっちを見る。

壁の隙間、ちょっと見ただけでは分からないような場所に人影があ

った。
男が二人。そのかげに幼い少女が泣きながら座り込んでいる。
「なんだてめぇら!?」
ガラの悪い男だ。
「僕らはガイエン騎士団の騎士だ！　その子を返してもらおう!!」
スノウが声を張り上げる。
数歩下がったところでヒサトはそれを見守っていた。自分が出るつもりはない。
心配してついてきたが、この程度ならスノウとライガの二人で充分だ。
腕を組んで後ろにいるヒサトに、海賊たちは視線を向けた。
「？　てめえも騎士か」
ラフなジャケット、ごく普通の格好をしているヒサトは、どう見ても騎士には見えない。
腰の双剣だけが、彼を剣士に見せている証。それがなければその辺の町人とたいして変わらない。
「俺はホゴシャだ。気にするな」
ヒサトはケロリと言って、剣を抜く様子もない。
「へっ、ガキの騎士に保護者はへたれか？」
武器を抜きながら海賊たちはあざ笑う。ヒサトは相手にしなかった。
弱い犬ほど良く吼えるとはよく言ったものだ、などと考えている。
スノウとライガも武器を抜いた。スノウは父から貰った剣、ライガは訓練生が持つ剣だ。
キィンキン！　鋼がぶつかり合う音が響く。
ヒサトはかまわず泣いている少女の下まで歩み寄り、彼女を抱き上げた。
「おとーさんか、おかーさんと一緒に来たのか？」
「お、おとーさん……」
「そーか、もう大丈夫だぞ。おにーちゃんたちがやっつけてくれる

からな？」
「うん……」
「あっ、てめえ！！」
海賊の一人が気がついてこちらに向かってきた。
スノウはもう一人と切り結んでおり、ライガはそのフォローで手一杯。スノウが弱すぎるのだ。
「！　ヒサト！！」
ライガが声を上げた。青年は少女を抱きかかえており、剣を抜くことが出来ない。
海賊が剣を振り上げた。
剣が振り下ろされるより遥かに早く、がら空きになった腹部に蹴りを叩き込んだのは、子供を抱きかかえているヒサトである。
蹴られた海賊は、吹き飛んで壁に激突した。そのまま失神したのか動かない。
人一人を抱いているとはとても思えない速さと力だった。
ライガは一瞬呆然としたものの、あわてて競り負けたスノウのフォローに入って海賊を切り伏せた。
スノウもライガも肩で息をしている。一応念のためにヒサトは二人に問いかけた。
「怪我したか？」
「う、ううん」
「いえ」
疲れているだけのようだ。初めて実践で武器と殺意を持った相手と戦い、予想以上に疲れと恐怖を感じたのだろう。
命がかかっている戦いとは、甘いものではない。
ヒサトは女の子を腕からおろした。海賊に人質に取られる恐れがあったので、一番安全な場所――自分の腕の中に確保しただけである。
「ほら、大丈夫だったろう？」
「うん！　ありがとう、おにいちゃんたち！」

少女は嬉しそうに笑った。
「じゃ、俺はこの子を父親のところまで送ってくるから、お前らは帰っていいぞ。疲れたろ」
「あ、うん。ありがとヒサト」
もうあまり動きたくないのか、スノウはホッとした様子で頷いた。
ここで送ってやるくらいのことはするのが騎士だろうとは思うが、ぼっちゃん育ちのスノウには言っても無駄だ。少女と手をつなぎ、ぐったりとしているスノウの横をすり抜け、剣を収めているライガだけ聞こえるように囁く。
「……あとで、部屋来いよ？」
「！」
びくんと身体をすくめたライガの反応を見ずに、ヒサトは裏通りから出て行った。
「……」
ライガは耳まで赤くなっている。部屋まで来い、その意味が分かっている。
「？　どうかした、ライガ。顔赤いよ」
「え、あ、ううん、ちょっと……必死だったから」
あわてるライガは必死で言い訳する、スノウに知られるわけにはいかない。
「そうか、そうだよね。僕も必死だったよ。でも、ヒサトはすごいなぁ……女の子抱えてても　強いんだもの」
「うん、そうだね……」
ライガはヒサトが去った方向へ目をやる。
剣神。
本当に彼は強いのだ――。

永遠の空・3（後書き）

ヒサトはたらしなのです。

永遠の空・4

夜半。

ラズリルのガイエン海上騎士団館、客間。

ヒサトが使っている部屋は、団長たちの部屋からも離れている。

ライガは今、そのドアの前に立っていた。

お風呂には入ってきた。これでもかって言うくらいに洗ってきた。

それでも不安でたまらない。

ドキドキして、体が震える。どうしよう。

ノックしなければ。でも。

緊張と迷いと不安でドアの寸前で手が止まる。来いと言われた。

呼んだのはヒサトで、意味も分かっているけれど、こんな自分でいいのかとても恐い……。

手を伸ばしては止め、戻しては伸ばし——何度目かでようやくライガは小さくドアをノックする。

すぐにドアが開いた。

腕をつかまれ、室内に引き込まれる。

気がついたときには彼に抱きしめられていた。

力強い腕が、苦しいくらいに自分だけを抱きしめているのを理解していたとき、ライガはもう死んでもいいと思った。

ずっと好きだった。初めて会った瞬間に、彼を好きだと思った。

でも、彼が優しかったのはスノウで、だからきっとこの想いはかなわないと思っていた。

でも、彼は何度か自分にキスをしてきた。最初は半年前、たまたま町で出会ったとき。

人気のないところで会ったそのとき、彼に引き寄せられ触れるだけのキスをされた。

遊び人だと聞いていたから、ふざけているだけかと思ったけれど、彼はバンダナをくれたのだ。ずっと肌身離さず頭に巻いていた赤い

バンダナ。
『お前のほうが似合うな。つけてろ。ああ、スノウにはうまく言っとくから気にするな』
そう言って、彼は怪我などしていない自分の手に包帯を巻いた。
後日、スノウから彼が話した言い訳らしいものを聞いたとき、どうしてだろうと思った。
どうして？　大切なものなんじゃないの。僕なんかが貰ってしまっていいの？
ヒサトにそんな嘘をつかせてまで、僕は彼の大切なものを受け取ってしまっていいの？
次は、風を引いて熱が出た日。
夜中、薬を持ってきてくれたヒサト。人目を引かぬよう、こっそりと入ってきて、薬を飲ませてくれた――口移しで。
二回目のキスは薬の味がしたけれど、飲み込んだ後もヒサトは離してくれなくて、大人のキスをした。
熱でぼうっとなった頭が、本当にとろけてしまいそうなくらいのキス。
『なんで……こんなことを……？』
分からない。あなたが好きなのはスノウでしょう？　遊びなの？
それでも、かまわないと思ったけれど。
彼は言ったのだ。
『イヤだったか？』
真顔でそう訊いてきたから、泣きそうな気分で首を振った。
『どうして……？』
期待してしまいそうになる。ひょっとしたらって。
もしかしたらって。
『分からないか』
俺がこうした意味が分からないか、と彼は問う。頷いたライガに、ヒサトはやわらかく微笑み、
『じゃあ、考えろ』

そう言って、もう一度キスをした。
それだけで出て行ってしまったけれど、ライガの頭の中は他に何も考えられなくなるくらいにヒサトでいっぱいになった。
それからだ。
ライガは本当に考えた。ヒサトがあんな風に触れるわけ。日中は全然、本当にそんなそぶり一つ見せない。ライガにあれだけ熱いキスをしたことなど、顔にも出さない。そんな態度もない。むしろつっけんどんで、ライガを嫌っているようにしか思えないくらいだ。
でも、夜半に館の中を掃除していたとき、物陰に引っ張り込まれてもう一度キスされた。
足に力が入らなくなるくらいに、濃厚なキスで。
『……考えてみたか？』
すがりついた自分を抱きとめる腕に、半分以上は希望だったけれども、離したくなくて離して欲しくなくてライガはやっとの想いで言葉にした。
『……ヒサト、僕のこと……好きなの？』
返答は。
『やっと気付いたか？　そうだよ』
彼は微笑み、もう一度キスをした。
彼が昼間つっけんどんにする理由もそのとき聞いた。ヒサトがライガをかまうと、スノウがライガに何をするか分からないからだと。
スノウは主人、ライガはその小間使い。
スノウがヒサトに好意を寄せているのはヒサトが一番理解しており、一番うんざりしているのだと言う。
迂闊（うかつ）な態度を取れば、スノウは父親に言うだろう。それで困るのはヒサトを連れてきた団長、グレンなのだ。
つかず離れず、微妙な態度を取るしかない。
だからライガにもつっけんどんに振舞うしかない。ライガはフィンガーフート伯に育てられた恩があり、スノウの小間使いだ。

そしてスノウはヒサトに気がある。父親のフィンガーフート伯もそれを知っている。

ヒサトをどうにかしてラズリルに永久滞在させ、息子の愛人にしてやろうと企んでいるのが、恐ろしいことに目に見えるのだ。

だから、ヒサトは下地作りから入った。

ライガを嫌っているように周囲には思わせる。

それから、ライガにアタックしようと。

それで、どこにも長期滞在しなかった彼が、ここに一年半。

ただ、ライガのために。

それを聞いたとき、ライガは泣き出しそうになった。

嬉しい。そんな思いまでして自分を好いてくれているのか。

遊びなのかと思ったけれど、ヒサトは違うといった。

『遊びじゃない。遊びならこんな手間なんかかけるか。ライガ、俺も驚いてるんだけどな。どうやら俺は生まれて初めて本気になったらしい』

彼はライガの頬を撫で、囁いた。

『と、いうことで、逃がさんからな。覚悟しておけよ。お前が卒業して正式に騎士になったら、フィンガーフート親子も迂闊に手を出せなくなってくる。俺も、遠慮しなくてよくなるからな』

もう一度ライガにキスをして、彼は部屋に戻っていった。

へたり込んだライガは、信じられないと思った。

でも。

「ライガ。ライガ……」

今、自分を抱きしめている彼からは、本当に自分を求めているのが伝わってくる。

初めて会ったときから、自分が卒業するまでの一年半も、彼は待ったのだ。

「ひ、さと……」

苦しい。息が出来ないのは、彼の腕のせいじゃなくて、とても緊張しているからだ。

「……来たってことは、ＯＫと受け取るぞ」
低く、耳元で囁かれた。それだけでもう足に力が入らない。
すがりつくライガに、ヒサトはもう一度たずねる。
「……いいんだな？」
拒むことなどライガにはできない。彼もヒサトを愛している。
ライガは頷いた。愛しい人の腕が、一層強く自分を抱きしめる。
苦しくなってあおのくと、ヒサトの顔が見えた。
整った顔。前髪の一部だけが赤い。
赤が好きなのかな、と、ぼんやり思った。彼から貰ったバンダナも赤いから。
でも、いまは、それよりも。
ライガは目を閉じた。

しばらくは隠れた逢瀬が続くだろう。それは二人とも覚悟している。

永遠の空・４（後書き）

初夜はかっ飛ばします。恥かしいから（笑）

永遠の空・5

朝。ヒサトの部屋、彼の腕の中でライガは目を開けた。昔から小間使いをしていた彼は、目覚めるのも早い。早く起きて自分の仕事をしないと殴られるからだ。

でも、今は。

目の前にヒサトの寝顔がある。昨夜、激しく自分を抱いた彼。

一年半の我慢をぶつけてくるかのように、熱くて激しかった。

最後のほうはあまり記憶がない。熱に浮かされるようにヒサトの腕の中で意識を失ってしまった。

ライガが気を失ったように眠った後、ヒサトは後始末もきちんとしてくれたのだろう。

どちらも服を着ていた。ヒサトが服を着ているのは、裸では何か起きたとき咄嗟に動けないからだろう。その辺の意識が、彼が歴戦の傭兵だということをあらわしている。

ヒサトはジャケットこそ着ていなかったが、あとはいつものシャツとズボンという格好だった。ラフだが、何より動きやすい。

すごく強い人。

ライガは彼の寝顔を見つめる。それだけで至福だ。

この上もなく幸せで、なんだか泣き出しそうになる。

自分でいいの？　何度も何度もそう思う。

自分は海に捨てられて、何もないまま拾われて、お情けで生きているような人間だ。

そんなライガを、ヒサトは欲しいといってくれた。

好きな人。

愛しい人、求められたことが信じられないくらいに嬉しくて、幸せで、恐い。

後悔していないですか？

本当に、僕でいいの？

ねえ、スノウでもほかの人でも、あなたにはもっと素敵な人が選べるでしょう？

僕でいいの……？

「ライガ」

呟くような声の後、抱きしめられた。

「！」

ビックリするライガに、ヒサトが目を開け、微笑む。

「早いな」

ライガが見つめていたことくらい、彼にはお見通しだ。

他人に寝顔など見せたことなどないヒサトである。でも、ライガには許した。

それがどれほど特別なことなのか少年はまだ知らない。

ライガの肩に顔をうずめるようにして、少年の体臭を、ぬくもりを楽しんでから、ヒサトはライガを腕の中から開放した。

あまり抱きしめていると抑えがきかなくなる。朝っぱらからヤリ殺しそうだ。

「部屋まで送る」

ヒサトは言ってベッドから出、ジャケットを羽織った。

「あ……ひとりで大丈夫」

ライガはあわてて立ち上がろうとしたが、かくんと床に倒れそうになった。膝が床に当たる前に素早くヒサトが抱えてくれたのでどこにもぶつからずに済んだが。

「今日はなるべくゆっくり歩け。昼くらいまではそんな状態だろうから」

軽々とライガを抱き上げ、ヒサトは苦笑する。

「すまん、やっぱり歯止めがきかなかった」

「……ううん」

恥ずかしそうに少年は首を振る。昨夜だけでどのくらい抱かれたのか。

最後のほうなど泣いて許しを乞うたような気もする。

許して、お願い、離さないで、と。
「目が少し腫れぼったいな。冷やしておけばよかったか」
すたすたと誰もいない早朝の廊下を歩きながらヒサトはケロリとしている。
ライガが参った回数、ヒサトも疲労しているはずなのだが。
さすが、タラシでも名高い男である。
ライガの部屋は厨房（ちゅうぼう）の横にあった。彼は騎士団の宿舎にも入れてもらえないのだ。
今回はそれが好都合だったと言える。宿舎から客室まではかなり距離があるので、その分誰かに見つかりやすい。
本館厨房の横にある部屋からならば、客室まではまだ近い。
部屋のドアの前でライガを腕からおろし、ヒサトはライガの目じりにキスをした。
「……まだ時間があるから、少し目の回り冷やしておけ」
「うん……」
離れたくない。そう言いたいけどダメだ。ライガにはよく分かっている。
ヒサトの立場、自分の立場。
「夜、また来い」
ヒサトは言い、軽いキスをライガに与えて身を翻した。
真っ赤になったライガだが、ヒサトの背中から視線を外すことはなかった。

ライガがスノウや仲間たちと初めての哨戒（しょうかい）任務に出て、戻ってきて、しばらくは同じような日々が続いた。夜間、こっそりとヒサトの部屋へ行き、早朝、彼に抱えられて自分の部屋に戻る。
秘密の逢瀬。
何日かそんな日々が続き、とある日。
騎士団に警護の依頼が舞い込んだ。
オラーク海運という名の商会が、イルヤ島まで護衛して欲しいと

いう。
　下手をすれば海賊が出るかもしれないので、どうかお願いします、と。
　グレンはその任務をスノウに任せることにした。
　依頼の仲介をしてきた、フィンガーフート伯が同席していたからである。息子のスノウならば簡単な任務でしょう、と鼻高く言う伯に、ヒサトは内心であきれたものである。
　子供の実力が見えていない。
「……マジでスノウにやらせるのか？」
　オラーク海運の代表、ラマダに話しかけている伯を半眼で見やり、しらけた様子でヒサトはグレンにこそっと話しかける。
「……ライガもつける。大丈夫だろう」
　こそっとグレンが返してくる。ヒサトはうんざりしたような表情になった。
　ライガ。彼のことをグレンが買っているのは分かるが、これではいつまでたってもスノウの小間使いから抜け出せないような気がする。
　いっそ、ライガを連れてラズリルから脱出するか？
　そのほうが早い気がしてきたヒサトだ。
　スノウとライガを呼びに行っていたカタリナが戻ってきた。彼らはすぐ来るという。
　程なくして、二人が応接室に入ってきた。青年と少年。スノウは一見して頼りないし、ライガは幼さの残る少年だ。
　一目でラマダは不安になったらしい。
　しきりに大丈夫でしょうか、と口にしている。
　気持ちは分かるよなぁ、とヒサトは思った。室内には団長グレンや副団長カタリナ、剣神ヒサトがいるというのに、よりにもよって同行するのは頼りない青年とまだ少年。
「せ、せめて貴方がご一緒してくだされば……」
　すがるようにヒサトを見るラマダ。彼の恐ろしいまでのウワサを

聞いているのだろう。
「いやいや、これくらいのことヒサト殿の力を借りなくてもスノウは立派にやり遂げますとも。グレン殿ももっと難しい依頼を与えてくれてもいいくらいだ」
ヒサトが何か答える前に、伯が遮ってそう言ってしまった。スノウがこれまた自信満々に大丈夫ですと言ってしまっている。
すっげぇ不安。
ヒサトは正直に思った。スノウはどうなってもかまわんが、ライガまで巻き込まれるのは真剣に困る。
ついていくか。
だが、ただのお使いのような任務にそこまで神経質になることもないような気もする。
そして、ついていくと言い出せばまず調子に乗るのはスノウだろう。
ただでさえ夢の国に生きているような坊ちゃんを、さらに舞い上がらせるのもどうだろう。
そして、同行しても、ライガといちゃつけるわけでもない。かえってスノウにまとわりつかれ、ライガにはつっけんどんに接しなければならない分、精神的に消耗すること確実だ。
同行は、あきらめたほうがよさそうだ。
「……ちゃんと無事に帰ってこいよ?」
「！　うん！」
元気にスノウが返事する。

いや、お前じゃなくて。

内心で言いながらヒサトは苦笑したが、ライガには伝わったらしい。ちょっと嬉しそうにはにかんでいるのが目に映る。
くそう、可愛いな、押し倒してぇ。
本能もろ出しで思うが、秘密の仲なのでヒサトのほうは顔には出

さない。
スノウとライガは準備のために一旦退室した。
「ええと……本当に大丈夫ですかねぇ」
ラマダはまだ諦めがつかないのか、ちらちらとヒサトを見ている。
「ええ、大丈夫ですよ」
カタリナがなだめているが、彼女もそう思っているのだろうか、と訊きたくなる。
まぁ、ここ数日の哨戒任務はうまくやっているので、お使いくらいなら何とかなるだろうと、思いたい。
だが、ラマダの態度が気にかかる。ヒサトの何かにこの男の雰囲気が警告を発している。
剣神といわれる自分のウワサを知っている男。それだけならまだしも、実際のヒサトを見ても意気消沈するどころか頼ろうとして来る男。
大半の人間は実際にヒサトを見ると、最初にため息をつく。
剣神という言葉の印象からとてつもなくいかつい大男か、かなり年を取った男を想像するらしい。タラシというもうひとつのウワサを知らない人間が想像するのはまずそれだ。
だが、実際のヒサトはどう見ても二十代半ばで、かなりの色男に見える。一見しただけでは優男にも見えるような体格だ。
服を脱ぐか体に触れるかすれば、極限まで鍛えられていることくらいは分かるが、服の上からでは分からない。
それを、なんの迷いなく頼ろうとする男。
どこかで会ったとは思えない。覚えがない。では、知っているのだ。
ヒサトの実力を、その恐ろしさを。
うさんくせえな、とヒサトはラマダに無遠慮な視線を向ける。
顔に見覚えはない、が……。
スノウたちが戻ってきた。すぐに出発できるという。
「行ってきます、ヒサト」

「おう、気をつけてな」
何かあったらナセル鳥を使って連絡を、と言いかけたカタリナを、
「副団長」
グレンが止める。それは内輪だけで知られている連絡方法で、部外者の前で口にしていいことではない。
ここには今、ラマダがいるのだ。
「二人とも、気を抜くなよ？　依頼者が不安がってるから、ちゃんとやり遂げて、大丈夫だったろって胸張って帰って来い」
すかさずヒサトは話を逸らしたが、ラマダは聞いてしまっただろう。
「うん！　では、団長。出発します」
「うむ」
ラマダを連れてスノウとライガは出て行った。ライガは出て行く一瞬ちらっとヒサトを見た。スノウはすでに室外だ。少し笑いかけてやる。これからしばらく戻って来れないのでこれくらいはいいだろう。
嬉しそうに微笑んで、ライガも行ってしまった。気配が遠ざかるのを確認して、
「無用心だな、カタリナ」
カタリナに苦笑する。心配なのは分かるが、あの場面で言うべきことではない。
「ごめんなさい……申し訳ありません、団長」
「むう……何事もなければいいが」
「俺、ついていってやるべきだったか？」
何か嫌な胸騒ぎがする。ヒサトのこういう勘はよく当たるのだ。
「いや、大丈夫だろう……ライガもついていることだし」
グレンは言うが、彼もどことなく不安そうだった。
その予感は当たることになる。

永遠の空・5（後書き）

次、あのシーンです。ええ。

永遠の空・6

急報が入った。スノウたちが向かった先に、海賊が現れたとの報。
相手は、海賊ブランド。
「！　くそっ、あいつか！」
思わず叫ぶ。近海を凶暴な手段で荒らしまわっている海賊だ。
明らかにスノウでは荷が重い。
「高速艇を出せ！　俺が行く！！」
ヒサトは思わず叫んでいた。船には彼の愛しいライガが乗っている。
「いや、俺も行こう。急げ！！」
団長と剣神が同時に動く。それは滅多にない光景だ。
間に合ってくれ、ヒサトは祈るようにそう思う。
ライガ。彼を失うのは恐い。まだ数日。彼と体を重ねたのはたったの数日だ。
時間が許す限りそばにいたいと思っているのに。
ライガ。
やはりついていくべきだった。
ヒサトは知っている。この世界に神などいない。
在るのは残酷なまでに非情な力だけ。
それでも祈ってしまう。
どうか、無事でいてくれ――！

高速艇でも追いつくまでにはそれなりに時間がかかる。
ヒサトは欄干（らんかん）にもたれ、軽く息をついた。
こうしている間に海賊ブランドと遭遇しているかもしれない。
奴は危険な相手だ。まず相手が誰だろうと容赦はしない。
襲われればそれまでだ。スノウでは役に立たないだろう。船員は

ほとんど物の数にも入らないような人間ばかりで、唯一の例外はライガだけ。
ヒサトが直接鍛錬を重ねていた彼ならば、何とか立ち向かえるかもしれない。だが、確実ではない。負ける可能性もある。
まだ、ライガも未熟だ。
「……珍しいな、ヒサト。お前があわてるなど」
グレンが声をかけてくる。
「お前だってあわててただろう」
言い返すと、グレンは苦笑した。
「俺とお前は違う。俺は部下が可愛いが、お前は――」
言いかけて、グレンの瞳に理解の色が走った。
気がついたか、とヒサトも感じている。
まぁ、意中の相手が出来たことは話しているので、ヒサトの態度を見ていればおのずと分かることなのだが。
スノウではない、と明言した。では、ここまであわてる理由は。
「――そうか、ライガか」
ボソリと小声でグレンが呟く。頷きつつ、複雑な様子だ。それはそうだろう。グレンはヒサトのことを、いろいろと知っている。
「何故だ？」
訊いてくる親友に、ヒサトはあっさりと返した。
「――捕まったと思った、それだけだ」
グレンは目を見開く。誰にも何にも捕らわれることなく、雲か風か、それともありのままの海原のように日常を過ごしてきた男。
そのヒサトを、あの少年――ライガが捕まえたというのか。
「そうか……うーむ、そうか……」
横でうなる親友に、ヒサトはこそっと打ち明ける。
「ちなみに、もう食ったからな。お前も変にちょっかいかけるなよ」
「！！！　なにぃ！？」
「俺のだ。いいな？」
にんまりと宣言する。グレンはあっけに取られた。本命が出来た

と聞いたのは数日前、火入れの儀式があった日だ。
それからたった数日で、ヒサトはライガを手に入れたという。
あれだけスノウにこき使われているライガ（スノウにもライガにも自覚はないが）を、いつの間に、どうやって、しかもスノウに知られずに。
ヒサトの手腕に脱帽を示すグレンだ。
「……早いな」
「早くねぇよ。あの親子に気取られないよう舞台を整えるのに一年半かかった。本気じゃなかったらやれん」
そういえば、とグレンは思う。ヒサトはライガを全く意識してはいなかったように思う。それもライガを手に入れるためのお膳立てか。
フィンガーフート親子に気取られないために。
それはグレンのためでもあり、なによりライガのためでもある。
ライガを掻っ攫っていくほうがヒサトには簡単だったのだ。
だが、ライガはフィンガーフートに拾われた恩を返したいと頑張っている。
その気持ちを、尊重したのだろう。
無理に連れて行くよりは、ライガの望むことをさせてやりたいと。
自分の想いとライガの気持ちを両立させるには、どうしてもフィンガーフート親子に気取られるわけにはいかない。
それで、一年半。
「……本気なんだな」
しみじみと思うグレンである。
このタラシの親友が、どれだけライガのことを想っているのか、よく分かる。
「それはいいが、あっさりと捨てたりするなよ」
ライガのほうがヒサトを好いていることはグレンも知っていた。
スノウと一緒に時折、とても切ない瞳でヒサトを見ていたからだ。
ヒサトはスノウしか構ってやっていないように見えたから、なおさ

らライガが可哀想だと思っていたグレンだ。
ところがふたを開けてみればヒサトの本命はライガ。
少年はさぞ嬉しかったことだろう。
出発前、ヒサトを見て嬉しそうにしていたのはそれが理由か。
「捨てる……捨てる。考えたくもねぇな」
ぶつくさとヒサトは真剣に呟いている。
どんな男女でもあっさりと何の感慨も無く捨ててきた男が、これだ。
相当ライガに参っている。
まぁ、悪いことではないので、グレンは苦笑しただけだ。
「……まぁ、お前のことだから上手くやるとは思うが、気をつけろよ」
目の上のたんこぶがラズリルには存在しているのだから。
「ああ。イヤになったら掻っ攫って逃げるさ」
いざとなったらその手がある。ヒサトはその点では迷っていない。
グレンは再び苦笑した。そのときは止めるつもりはない。本気でラズリルを出ると決めたヒサトを止められもしないだろう。
ライガも、おそらくは喜んでついていくだろうから。
「……その前に、助けてやらんとな」
「ああ」
頷きを返したヒサトが、いきなり振り返った。
海上に目を凝らす。確かに何かの気配を感じた。
「なんだ？」
グレンも同じ方向を見るが、まだ何が起きているのか分からない。
船に追いついたわけではないようだ。ヒサトが呟く。
「……ボート、だな」
小さな小船が波間にちらちらと見え始めた。こちらに向かっている。
誰かが乗っている。近付くにつれて、それが誰か分かった。
――スノウだ。

しかも、彼一人だけ。
近付いて、手を振る彼に、ヒサトは内心で血の気が引く思いがしている。
何故一人だ？　船はどうした？　船員は。
ライガは！？
救助されたスノウは言った。海賊に襲われたと。砲撃で腕が動かなくなったんだと。
手漕ぎのボートを漕いでここまで来ておきながら、腕が動かないなどと戯言をぬかす。
この船はもうダメだと判断したと。
だから、逃げてきた。
船も船員も皆置き去りにして。
自分ひとりだけで！！
ついていかなかったことを激烈に後悔したヒサトである。
ライガ。ライガ、ライガ――ライガ！！
ガンッ！！　欄干を殴りつける。
彼の力のままに硬いはずの欄干が歪んだ。
スノウの横っ面を張り飛ばしてやりたかった。これで、もし、ライガに何かあったら。
彼が、物言わぬ死体にでもなっていたら。
殺す。
スノウもフィンガーフート伯も、殺してやる。
煮えたぎるような殺意に身を委ねたくなる衝動を抑え、ヒサトは息を吐いた。
とにかく今は、急がなくては。
ヒサトの怒気を感じ取って、船員は皆無言だ。グレンだけが指示を飛ばしている。スノウも話しかけてはこなかった。
それで正解だ。今、スノウが迂闊なことを言えば、ヒサトは瞬時に彼を殺しただろうから。

……船はまだ形が残っている。離れているオラーク海運の船は無事だったようだ。

と、いうことは、残った船員たちが海賊を撃退したのか。

船を見上げたヒサトは、ある感覚を感じ取ってぎくりとした。

これは……！！

まずい、と瞬間で判断する。

言葉も無く彼は欄干を蹴った。乗り移るのに梯子や板などヒサトには必要ないのだ。

「おい、ヒサト……！」

あわてるグレンの声を背に、ヒサトは看板に着地した。

「！！」

見えたのは、今まさに、愛しい少年に剣を振り下ろそうとしている隻眼の男。

剣を抜きもせずヒサトは動いている。剣先がライガに届く遥か先に、ヒサトの足が男を蹴り飛ばしていた。

ごきり、バキンという感触が靴越しに伝わってきた。間違いなく、肋骨を蹴り砕いている。

甲板にたたきつけられ、呻く男には構わず、崩れ落ちるライガを抱きとめる。

少年は無事だ。多少の怪我はしているものの、命に別状はない。

それから濃厚な気配にヒサトは眉を寄せた。

この気配は倒れている男から発せられている。

こいつが――ブランドか。

この男……この気配。

――継承者――！！

「ヒサト！　無事か！！」

グレンが上がってきた。

ライガを抱える親友を見て、ホッと息をつく。それから、彼は倒れているブランドに油断無く近寄った。

「！」

ヒサトはハッとする。グレン、親友の左手、その甲が淡く赤い光を称え始めたからだ。
そして、同じ光が倒れているブランドの体から発せられている。
しまった。
痛恨に感じる。
ヒサトの蹴りでブランドは内臓に痛撃を受けたのだろう。間違いなく致命的な一撃だった。
もう、ブランドの命は尽きる。
そして、奴が宿していたモノが、次の宿主を定めてしまった。
「なんだ……？」
グレンがブランドを見、自身の左手の異変に気がついた。
「ひひ……ひひひ……ひ、次は、てめえだ……これで……俺は開放される……！！」
ブランドは最後の言葉を放ち、その体は黒く灰に変わり、潮風に流されるように崩れていく。
命を、食い尽くされた瞬間。
グレンの左手が強く輝いた。
「！？　なんなんだこれは！！！？？？」
視界を埋めるようなおぞましく赤い輝き。
「グレン！！！」
ヒサトの叫び。だが、彼はもうどうにも出来ないことにも気がついている。
“アレ”は次に宿る先をグレンと定めた。止めることはできない。
「うおおおおぉおおおおっ！！！」
グレンが叫び――倒れる。
「っ！！　くそっ！！　誰か来い！！」
ヒサトはグレンが連れてきた数名の部下を呼びつける。
「！？　団長！！」
「ヒサト殿、これは一体……！？」
「ウダウダ言う前にグレンを運べ！！」

「は、はいっ！！」
あわててグレンを運んでいく部下たち。ヒサトはライガを抱えて立ち上がった。
船の上を見回す。誰の姿もない。
おそらくはブランドが力を行使したのだろう。
“アレ”の力に襲われれば、灰しか残らない。潮風に流され、海に消える。
食われ尽くした、ブランドのように。
ヒサトは意識のない少年を見下ろした。愛しい少年は多少の怪我だけだ。
何故、ライガだけ助かったのだろう？
だが、彼だけでも、助かって良かった。少しだけホッとしたが、問題は……これからだ。
まさかブランドが“アレ”を宿しているとは考えもしなかった。
“アレ”――世界創生より存在する、二十七の真の紋章、そのひとつ。
『罰の紋章』……。
「……まさか、ここにあるとはな……」
呟く。『罰の紋章』は長く封じられていた。開放されたのはわずか十数年前。
悲劇しか呼ばないこの紋章を、まさかブランドが宿しているとは。
それを、グレンが継承してしまうとは……！！
忌々しく思いながら、ヒサトは高速艇に戻った。今はとにかくライガとグレンの手当てをしなければ。
グレンにしてやれることなど、そう多くはないのだけれど。
それでも、できることはあるはずだ。

永遠の空・6（後書き）

知っている人は知っている。『腕が！　腕が動かなかったんです！！』……どれだけの人が画面に向かって突っ込んだのだろう……私も突っ込みました（笑）『今ボート漕いでたろお前っ！！』

永遠の空・7

簡易的に作られたベッドに横たわる親友を、ヒサトは見下ろしている。

グレンの左手甲には、くっきりと『罰の紋章』の姿がある。

剥がすには、左手を切り落とすしかないだろう。そうしても、紋章は別の人物に宿り、別の命を食っていくだけだが。

「……ヒサト、か？」

グレンが目を開けた。さっきまでピンと立って歩いていた男は、ひどく憔悴しているように見える。

当然だ。この紋章に宿られたのなら、そうなる。

「ああ。気分はどうだ？　まぁ……最悪だとは思うが」

「……そうだな」

「無事だったのはライガだけだ。あとは……“コレ”に食われたらしい」

こつ、と親友の左手の甲をつつく。

それで意味は通じるだろう。

「……そうか」

グレンは左手を上げ、自身の手の甲を見る。

刻まれたかのような、紋章。

「……俺は、どうすればいい？」

グレンが訊いてくる。ヒサトはキッパリと答えた。

「使うな。俺が言えるのはそれだけだ。使うな。死ぬぞ。そいつは所有者の命を食う」

全てを承知しているかのように、ヒサトは言い切る。

年かさのグレンでさえ知らないことを、まだ年若いヒサトは知っているようだった。

各国を旅していたとはいえ、真の紋章のことまで知っているとは、詳しすぎる。

長く旅をしても、真の紋章のことを知っているものは珍しい。ヒサトは以前関わったことがあるかのような口ぶりだ。
「使わなければ、まだ普通に生きていられる……時の流れからは切り離されるだろうが」
「……使わなければ、か」
真の紋章。その力はすさまじい。宿しただけで時間から切り離されるくらいだ。
変わらなくなる外見。
「……使わらざるを得ない状況をそいつは創り出してくる。だが、使うな」
使うな。ヒサトには繰り返しそう告げることしか出来ない。
グレンを紋章から救う方法は、ないのだ。
宿しただけでここまで衰弱するようでは、手を斬り落とすことも不可能だろう。落とした瞬間にショック死する。他にも方法はあるかもしれないが、探す時間はおそらく、ない。
「一か八かで、腕を落とすか？　俺の腕なら死なずに済むかもしれん」
剣神の放つ斬撃なら、その瞬間にはほとんど痛みもない。出血も最小限で済む。どうしてもショック症状からは逃れられないだろうが、それもおそらくは軽く済む。
「そうしたらどうなる？」
「……そいつは近くにいるほかの人間に宿る。そして、同じことの繰り返しだ」
変わらない。誰かが食われ、そいつが死ねばほかの人間が犠牲になる。
そういう紋章だ。
「ならば、このままでいい」
ほかの人間を犠牲にすることなど望まない。
グレンは言い切った。
「……言うと思ったよ」

親友の気性を熟知しているヒサトは息をつく。
「――言っとくが、甘いもんじゃないぞ」
真の紋章を宿すということ。その現実はほとんどが辛く、厳しい。
「だろうな……」
グレンは弱く苦笑し、左手を握り締めた。

ラズリルに帰港した彼らを出迎えたカタリナは青くなった。
グレンはヒサトの指示でそのまま自室のベッドに直行。絶対安静。
唯一の生き残りのライガは、歩けないほどの怪我ではなく、逃げ出したスノウも痛めた腕はたいしたことがなかった。
事後処理に引っ張り出され、ヒサトはうんざりした。結局彼が客室に戻れたのは、深夜になってからである。
何で俺がこんなことを。正直に思い、カタリナにも言ったが、グレンが倒れてしまっている以上、一緒に行った人間で頼れるのはヒサトだけなのだ。
「うあー、びんぼうくじー」
枕に突っ伏して呟く。とにかく疲れた。
ライガを心配して行ったのはいいが、より大きな心配の種をグレンが抱えてしまった。これでは当分ラズリルを出られない。呻くヒサトである。
ライガが無事だったのは嬉しい。よく『罰の紋章』の力を食らって生き延びたと思う。
問答など無用の勢いで、命を喰らっていく紋章だ。
人を、食い殺していく紋章だ……。
コンコン。弱いノックの音。ヒサトはがばっと起き上がる。
この控えめなノックの仕方。
ドアを引き開ける。立っていたのは、愛しい少年、ライガ。
「ライガ。動いて大丈夫か?」
少し衰弱していたから、今夜は来ないものだと思っていた。

「うん……」
頷く彼を招き入れ、抱き寄せた。ライガも抱きついてくる。
「助けに来てくれてありがとう。お礼が言いたくて」
それで来た、と言う。健気だ。
「別に、当たり前だろう？　初めからついていくべきだったな、やっぱり」
そうしていたら、もっと違った展開になっただろう。知識があるヒサトが一緒だったならば、むざむざブランドに紋章を使わせたりはしない。
危険性も知っているので、即座にブランドの左腕を海の中に斬り捨てただろう。
誰も、犠牲にはならなかったはずだ。
『罰の紋章』が親友の左手に宿ることも……。
「ヒサト、団長の具合……どうなの？」
何が起こったのか、あの時意識のなかったライガには知る由もない。
「ああ……ちょっと衰弱している。ブランドの紋章の力を食らったから」
「大丈夫なの？」
「……ああ」
少しだけ首をかしげるライガに、キスを落とす。
「グレンは頑丈だから心配要らん」
口付けて、ライガの頬を撫でる。
「……お前が無事で、良かった……」
それだけは心から思うことだった。

数日が過ぎた。グレンは弱ってきている。今すぐどうこうというわけではないが、ヒサトの目から見れば一目瞭然だ。グレンもヒサトにはごまかせないと分かっているので、彼の前では　ほとんどベ

ッドからは起き上がらない。
やはり、年のせいもあるのだろう。グレンはもう五十。真の紋章を宿すには、体力が保たない。なにより宿したのが厄介な紋章である。
「無理するなよ」
「ああ、分かっている」
そうは言うものの、副団長のカタリナにはまだ騎士たちを率いていくだけの力がない。
カリスマも実力もあるヒサトにはそこまで騎士団に関わるつもりがない。
いずれ出て行くつもりでいるところに、肩入れはしない主義だ。
どうしても、グレンの力なくしてラズリルの騎士団は存続しないだろう。
「ヒサト、お前団長にならないか」
「断る」
一応訊いてきたグレンに、ヒサトは即答。
「ンな面倒なことやらん」
「向いていると思うが」
「イヤだ」
即答。考えることもしない。出来ない理由があるからだ。
「早く後進を育てろよ。俺は面倒なことはやらんぞ」
「お前がやってくれれば俺もずいぶん楽になるんだが。喜ぶ者も大勢いるだろう？」
「ウザい」
即答。やはりこの男にはこだわる者も物もライガ以外にはないらしい。
そんな会話をしていると、カタリナが入ってきて、今日の鍛錬予定表に確認を求めてきた。
グレンは起き上がり、一覧を見て、許可を出す。
ドアがノックされた。気配で誰かはすでに判別しているし、そろ

そろ時間だと思っていたのでヒサトが声をかけてやる。
「ライガ、入ってきていいぞ」
ドアを開けてやる。入ってきたのはグレンの食事を手に持ったライガだ。
部屋が食堂の横にあるため、いいように使われてしまっている。
これではいつ小間使いから抜け出せることか。
カタリナが礼を言って食事の載った盆を受け取る。盆の上には食事ではない包みが乗っていた。
「これは？」
「スノウからです。団長に薬を、と」
道具屋で手に入れた特効薬らしい。
スノウなりに失点を回復しようとしているのだろう。
艦長でありながら、真っ先に船を捨てた行いが、そう簡単に回復できると思っているのだろうか？
考えが甘いな、とヒサトは正直に思ったが、スノウは温室育ちでその辺りのことも分からないのだろう。
グレンがすまないなとライガをねぎらう。いつまでもこんな雑用をしたくはないだろうと。
ちらりとヒサトを見た。視線を受けて彼は肩をすくめる。
それから少し会話をして、ライガは部屋を出て行った。ヒサトも部屋を出る。
グレンの部屋にいつまでも入り浸っているのは、親友も休めないだろう。
そう思って、階段を降りている最中だった。轟音と共に地面が揺れる。
――砲撃！？
ヒサトは階段を飛び降り、外に出た。
館の中庭には、うろたえている団員たちが立っている。
「何をしてる！！　追い返すぞ、船の準備を！！」
ヒサトは迷わず叫ぶ。

「ガイエン騎士団の誇りにかけて、奴らを陸に上げるな！！」
団長の指示を仰いでいるヒマはない。
「はいっ！！」
ヒサトの声に活力を取り戻した団員たちが駆けていく。
ヒサトも港へと急いだ。見えるのは海賊の船だ。自分も船に乗るべきかとも思ったが、襲ってきているのはたったの二隻だ。この程度なら自分が出るまでもないだろう。
スノウの姿が見えた。自分が率いて海賊を追い返すつもりなのか、意気揚々と指示を飛ばしている。
もう一方の船には、ライガの姿があった。
大丈夫だと、思う。もし危なくなったら、すぐにでも駆けつけるつもりではいるが、心配するほど手ごわい相手ではない。
嫌な予感はしなかったからだ。
ヒサトは館の前から船を見送る。海戦が始まるのを、そこから見守った。

永遠の空・7（後書き）

こいつがついていっていたら『幻水４』はブランドのところで終わっていただろうなぁ……と、書いている最中思いました（笑）

永遠の空・8

激しい砲撃がしばらく続き、やがて沈黙したのは海賊船のほうだった。

あわてて船首を返し、逃げ出していく。

こちらの被害は軽微のようだ。ケガ人もほとんどいないだろう。

やれやれだ、と息をついたヒサトの視線の先で、スノウが指示する船が海賊の船を追撃にかかった。

一隻だけで、だ。

「おい……」

思わず呟くヒサトである。

間違いなくスノウの独断だろう。しかも、誤った判断だ。

たった一隻で追撃をかけても、返り討ちにあうだけだ。

海賊は喜んで獲物に船首を向けようとした。

あわててライガの船が援護に追いかける。それを見たのだろう、海賊の船は再び船首を返して逃げていった。

はーっと息をつくヒサトである。どこまでも判断が甘いスノウだ。

あれを補助するライガの苦労は並々ないものだろう。本人たちに自覚がないだけに、余計にライガがかわいそうだ。

ゲンナリと息をついてヒサトは館内に戻った。勝手に騎士団を動かしたことを、グレンに報告しなければ。

ドアを軽くノックするとすぐに返事があった。

入ってすぐにグレンとカタリナに詫びる。

「悪いな、勝手に動かした」

「いや、かまわん。お前の指示は早い上に的確だった。だからこそ、皆従ったろう?」

「そうよ、ヒサト。おかげでラズリルが助かったわ。ありがとう」

ヒサトが動いたのを上から見ていたのだろう。だから二人は降りてこなかったのだ。

「そう言ってもらえると気が楽だな」
言って、本題に入る。騎士団を動かしたことなど些細なことだ。
詫びは社交辞令に近いもので、どちらもそれと分かっている。
問題は。
「見ていたか？」
あの海戦を。
「ああ」
グレンは頷く。
「スノウとライガを呼んできてくれ」
「はい」
グレンの指示に、カタリナはすぐに従い、部屋を出て行った。
「どーするよ？　あのボンボン」
追撃をかけたスノウの判断ミス。
「……どうもこうも、叱るしかあるまい」
グレンも気が重そうだった。
「大変だな、団長」
目の上のたんこぶ、無能な貴族の血を色濃く引いている無能な息子。しかも自覚していないので、厄介この上ない。
「ヒサト、お前本当に団長をやる気はないか。お前の指揮なら皆従うし、スノウも」
「こーとーわーる」
この件に関してはにべもないヒサトだ。
グレンは苦笑。もったいないと思う。これほどまでに人をひきつけるカリスマを持ち、それに値するだけの実力もあるのに。
……そう出来ないわけも知ってはいるのだが、それでも惜しいと思ってしまう。
カタリナが戻ってきて、ほとんど間をおかずノックの音。
スノウとライガが入ってくる。
スノウは顔が輝いていた。こんどはちゃんとやり遂げたでしょう、と表情が言っている。

船を見捨てさえしなければ良いというわけではない、と分かっていない。
船員の命を預かる身だと、理解していないのだ。
グレンはライガに声をかけ、適切な対応を褒めた。それから、スノウに声をかけ、青年を殴る。
厳しく叱りつけた。だが、スノウの目に理解の光は浮かんでこない。どうしてライガは褒められて自分は叱られているのか分かっていない。
すがるようにヒサトのほうを見たが、
「……グレンと同意見だ。少し考えろ、スノウ」
ヒサトとていくらなんでもこんな場面で甘くはない。
フィンガーフートとの関係云々などといっていられる場合ではないのだ。スノウの行動には、船員の命がかかっていたのだから。
スノウは肩を落として出て行った。好かれていると思っていた相手からのひとことが、心に痛かったのか。
次に活かせることが出来なければ、どれだけ痛かろうと意味がない。
廊下で何かを話しているのがドア越しにヒサトには聞こえている。
どうして君だけが。
ライガにそう言っているようだった。今度は船を捨てなかったのに、と。
やはり、理解していない。
だめだな、とヒサトは思った。
「聞こえてないぞ。ヤツの耳には筒抜けらしい」
廊下の会話はグレンたちには聞こえていないようだが、ヒサトの様子から察して苦い表情だ。
「ヒサト、本当にしつけてくれない？　あなたの言うことなら聞くと思うのよ」
カタリナにまで言われた。
「俺はアイツの親でもなんでもないぜ。きっぱりと御免だ」

断ると、カタリナは苦笑した。

夜。ヒサトの部屋をノックする音。

ライガだ。

海戦で神経を使っただろうに、それでも会いに来るのがいじらしく、可愛い。

キスを交わしてから、ヒサトの腕の中でライガはほっと息をついた。

「疲れたか」

「うん……少し」

隠さず呟くライガを抱き上げ、ベッドに運ぶ。

今日は抱くつもりはなかった。疲れているライガに無理をさせたくない。ただ、抱きしめて眠ろうと腕に抱く。

「ねえ、ヒサト」

「ん？」

「ここの団長になるの？」

「……待て。誰がそんなこと言った？」

「え、違うの？」

「ならんって。誰だよそんな無責任なこと言ってるの」

苦笑する彼に、ライガは少し残念そうに言う。彼が団長になってくれたら、もっとずっとそばにいられると思うのに。

「誰ってわけじゃないけど……今日のヒサト、すごくかっこよかったから」

迷わず皆に指示を飛ばしていたあの姿。

心からヒサトに惚れているライガでさえ、もっと溺れてしまいそうになるくらい格好良かった。

「団長、具合悪いし……ヒサトがついていてくれたら安心だって、皆言ってる」

見上げてくる視線に、ヒサトは苦笑いを続けている。

「ガラじゃねえよ」
「そんなことないよ。かっこよかった……」
思い出しても心が震える。綺麗でかっこいい人。とんでもなく素敵な人。
……大好きなヒサト。
ここにいてはくれないだろうか。ずっとずっと、ライガのそばに。
「団長にはならん。グレンから打診はされたが、俺はガラじゃない。はっきりと断った」
「そ、っか……」
やはり、いつかここを離れるつもりなのだろう。そのとき、自分は笑って彼を送ることができるだろうか？
ライガはヒサトが自分を連れて行ってくれるとは考えていなかった。何の取り柄もなく、何もない彼を、何でもできるヒサトが連れて行ってくれるわけがないと、自然とそう考えている。
「まぁ、グレンの容態が落ち着いてから考えるさ。お前とラズリルを出るにしても、な」
「え？」
目を丸くするライガを、ヒサトは抱きしめる。
「お前を離すつもりはない」
言って深いキスをくれる。蕩けそうな感覚に溺れながらライガは歓喜した。
彼が本気でそう言ってくれているのなら、どこにだってついていくから。
「……離さないで」
お願い。潤んだ瞳で必死に訴える少年を、青年は抱きしめ、息を吐いた。
我慢するつもりでいたが、できそうにない。

永遠の空・9

“……さよなら……あなた……そして、子供たち……”

どこかで聞いたことがある優しくて悲しい声で、ライガは目を覚ました。

ヒサトもすぐに目を覚まし、ライガを抱えていつものように部屋まで運んでくれた。

彼はそのまま団長の部屋に行ってしまう。

すぐに隣の厨房からフンギの呼ぶ声。団長の食事を持っていくのはすっかりライガの役目になっていた。

ライガはこの役目をイヤだと思ったことはない。たいがい、持って行くと団長の部屋にはヒサトがいるのだ。伏せっているグレンの代わりに、カタリナとヒサトが代行している。

このまま団長になってくれたら、と考えたりもしたが、昨夜のヒサトの言葉にライガは心が躍っているのでさしたることではなくなっていた。

ヒサトは一緒に居てくれるのかもしれない。例え彼に飽きられて捨てられる日が来るとしても、彼の言葉で夢を見ていられる。

一緒に、ずっと。

ドアをノックする。グレンが入っていいぞと声をかけてくる。ライガは両手が塞がっているため、開けてくれるのはいつもヒサトだ。

「おはようございます」

「よ、ライガ。いつもめんどくさいことご苦労だな」

最近、ヒサトはスノウがいないときは昼間も優しい（夜はもっと優しいが）。

以前なら、視線を向けてくれることもあまりなかった。どこで誰が見ているか分からなかったからだろう。ここは団長の部屋で、ヒサトは親友の団長にだけは話してあるとのことだし。

「いつもごめんなさいね、ライガ」

カタリナは知らないので、ライガをいたわってくれた。
「いえ」
ライガははにかむ。ヒサトに会えるだけで嬉しいのだ。
グレンの体調が優れないのは心配だが、ヒサトにこうして朝から会えるのはとても嬉しい。
不謹慎かなとも思うが、想いは止められなかった。
やっぱりとても、ヒサトが好きだ。
グレンと話しているヒサトをちらりと見たときだ。
ヒサトがバッと窓のほうを振り返った。表情が険しい。
「どうした――？」
グレンが問いかけたときだった。

ズン！

地面が揺れる。ヒサトが窓に走り寄った。ライガも彼の背から覗き込む。
「！！」
愕然とした。
港に、海賊船が入り込んできている。
隣の窓を覗き込んだカタリナが呆然と呟く。
「そんな……連絡は何も……」
海賊船を見かけたなら近くの哨戒船から必ず連絡が入る手筈になっている。それがなく、ここまで入り込まれるとは。
「……オラーク海運か」
ヒサトが呟き、グレンとカタリナは言葉を失った。
「！　私が、あの時……！！」
スノウたちを心配して言った言葉。ナセル鳥を使った連絡方法。
ラマダに聞かれた。
そこを突かれた。鳥は途中で落とされたのだろう。
「ど、どうしたら――」

うろたえるカタリナを横目に、ヒサトは窓を開け放った。階段を下りるよりはこちらのほうが早い。
「先に行く。ああ、ライガ、真似するなよ」
ひとこと告げて、ヒサトはそのまま身を躍らせた。
ここは尖塔の二階だ。ほかのところより高さがあるので、実質的には三階か四階くらいの高さはあるだろう。ヒサトは迷わず飛び降りた。
「ひ、ヒサト！」
ライガが覗き込むが、彼は身軽に着地して港のほうへ走っていった。
「ヒサトは心配要らん。ライガ、お前も行ってくれ」
グレンに言われ、ライガは頷いて部屋を出て行く。
残されたカタリナに、グレンは言う。
しばらくの間、館に人を近づけるな、と。
その言葉が意味することを知るのはヒサトだけだが、彼は戦いに行ってしまった。カタリナはうろたえたが、団長の命令は絶対だ。
出て行く前、何かを感じ取ったのか、グレンに何かを話そうとした。
だが、結局言わずに出て行く。
彼女が何を言いたいのか、グレンには分かっていた。
調べてくれたヒサトから半年ほど前に聞いている。
カタリナはグレンの娘だ。昔別れた女性との間に出来た子供。
すまん。
呟いたのは娘と親友に。
使うな、と幾度も忠告してくれた友。
その紋章は使わざるを得ない状況を創り出す。それでも、使うな、と。
ヒサトは忠告してくれたけれども。
「お前ともう一度酒を飲むことはかなわないな……」
体が保たないのが分かる。やはり真の紋章を宿すには少々年を取

りすぎているのだろう。
ならば、出来ることを。
せめて、為すべきことを。
「許せよ、ヒサト」
もう二度と会えないだろう旧き友よ。
お前と過ごした時間は、本当にかけがえのないものだった。
さらばだと、伝えることもしないまま逝くことを、せめて許してくれ……。

館の外に出たライガは、まずヒサトの姿を捜した。彼は一番先頭で双剣を振るっている。
剣筋が、全く見えない。ヒサトが立つ位置を変えるたびに海賊が倒れていく。血が流れるのは海賊が倒れ伏してからだ。
自分が死んだことも気がつかないのではと思うような、剣閃。
その彼を狙って船から砲撃が飛んだ。とんでもない強敵だと、船から見ていて分かったのだろう。
「ヒサト！！」
紋章砲は船か要塞相手に使われるものだ。人間相手に使うようなものではない。直撃を食らえば人の体など跡形もなくなる。ライガは悲鳴を上げた。ライガだけではない、見ていた者全てがヒサトの死を垣間見た。
だが、剣神をその程度で仕留めようと思うほうが甘いのだ。
ヒサトは右手を突き出した。
炎の形の紋章が浮き上がる。
そのまま彼は右手を振り切った。放たれた炎が砲弾を直撃、海上で爆発、威力を相殺する。
「……すごい……」
カタリナが呆然と呟く。紋章魔法で紋章砲を撃墜、相殺させることなど、彼女には出来ない。いや、ほかの誰にも出来ないだろう。
ヒサトは剣だけでなく、魔法も異常なくらいに強いのだ。

「ばけもんか！？　あの男はっ！？」
船の上では海賊ダリオが喚いていた。普通の人間にあんなコトが出来るわけがない。
港で戦うあの男一人に一体何人がやられたのか、考えるのも恐ろしい。
紋章砲で跡形もなく吹き飛ばしてやると意気込んだのはいいが、反対に撃墜された。
船をこれ以上近づけるのははっきり言って恐い。
恐ろしいくらい強い剣士である上に、紋章魔法の使い手であることは充分に分かった。
弱点などないのではないか。
「ちっ、近付いて来やがらねえ」
ヒサトは舌打ちする。海賊たちの船が少し離れてヒサトから距離を取ったのだ。これではこちらから乗り込むことも紋章魔法で沈めることも少し辛い。
紋章砲を撃墜されたのがよほど恐かったらしい。
「……撃墜しないほうがよかったか。しかしいくら俺でもアレの直撃はちと辛いし」
普通は、骨も残らない。『ちと辛い』どころの話ではないはずなのだが、ヒサトは本気で言っていた。
さてどうするか。考えながらヒサトは剣をふるって踊るように海賊たちを斬り伏せていく。
返り血も飛ばない、刃が汚れることもない。剣閃が早すぎるのだ。
海賊船の数が多い。自分はともかくほかの連中は押し切られるだろう。現に息が上がってきているものもいる。
海賊たちもヒサトの周りにはなるべく近寄らないようにして、ほかの連中を狙い始めた。
ほかの連中のフォローに回っていれば、いつかヒサトとて体力が尽きる。
「……あの辺、一掃してみるか」

半眼で海上を眺める。後続の船。港からは離れすぎていて、とても紋章魔法が届く距離ではない。
ぐ、とヒサトは左手を握りこむ。あまりやりたくはないが……。
その、瞬間。

ドクン。

脈動。
「！！」
ヒサトは頭上を振り仰ぐ。
尖塔、屋上。
ここから見えるはずのない角度。
だが。
グレンがいる。
親友が、左手を掲げるのが分かる。
「やめろ……」

ドクン。

「使うなっ！！！　グレンーーーッ！！！！」

キィヤァアアアァアアーーーーッ！！！

悲鳴のような音と共に。
禍々（まがまが）しい紅い光が放たれた。
光は、海賊の船を薙いでいく。
無慈悲で、あっけない、命の終焉。
つぎつぎと爆発し沈んでいく船。
それを見ながら、ヒサトは歯を食いしばる。
「……ばかやろう……っ！！！」

親友の死を、そのとき彼だけが理解していた。

永遠の空・9（後書き）

親友との別れ。

永遠の空・１０

ザアアアアア。
雨のように海水が降り注ぐ。あまりの威力で海がなぎ払われたため、吹き上がったのだ。
塩辛い雨に打たれ、ヒサトは剣を収めた。
海賊たちは退いていった。おそらく何が起こったか分かっていないだろう。
それはこちらの連中も同じで……。
カタリナが何も分からず、とにかくしばらく館内に入らないよう団長の指示があったことを伝え、ケガ人の手当てに走る。
ああ、くそ。
ヒサトは彼女から目を背けた。
グレンが、自分が出て行った後に彼女に指示したのだろう。
『しばらく館に人を近づけるな』……遺言ではないか。
最初から死ぬつもりで、ほかの誰にも紋章を伝えないつもりで。
「ばかやろうが……！！」
再度ヒサトは親友を罵倒（ばとう）した。やるせない。悔しい。
使えば紋章が命を削ることを教えた。
紋章がこういう状況を創り出すことも伝えた。
なのに、グレンは死に急いだ。
もう少しだけ待てば、ヒサトが状況をひっくり返したというのに。
むざむざ親友が死ぬことなど、なかったというのに！！
雨が塩辛い。
そのくせどこか生ぬるく、忌々しい。
嫌な、雨。
スノウはどこに行ったんだろう、と言うケネスの呟きが聞こえた。
今の、なんだったの？　……ジュエルが呟いている。
ヒサトの耳には届かない呟き。

どうでもいい声が――もうひとつ届いたとき、ヒサトは愕然とする。

「ライガが館内に入っていったと――」

カタリナに報告する騎士の声。

「！　なんですって？　すぐに連れ戻して！！　団長命令――」

稲妻が全身を貫いたような気がした。

ライガ。

「！！？　ヒサト！？　ダメよ、中には――！！」

カタリナの声は、彼の背を打っただけだった。

団長の体が心配だった。館に残ったのは団長だけで、あの力は確かに館から発せられたもの。ライガが見た、海賊ブランドの放った力と同種のものだ。

あの赤い光。おぞましい声のような悲鳴のような、音。

あの一件から、団長の左手にも、ブランドと同じ紋章があった。

それがどうしてなのか、気にはなっていたけれど聞く機会がなくて。

けれどあれは確かにブランドが宿していた紋章のような気がする。

ライガが意識を失っていた間に、なにがあったのか。

団長の命に関わるようなことではないのか。そう心配したライガの行動が、運命を決めた。

尖塔屋上。

細かく雨が降る中を、グレンがよろめき、ゆっくりと倒れる。

「！！」

走り寄ろうとしたライガの左手の甲が、淡く輝きだしていることに、倒れたグレンは気がついた。

「！？　馬鹿……もの……ライガ……すま……ん……」

消えゆく意識の中で、グレンは親友に詫びる。

すまん、ヒサト。紋章が、ライガに宿ってしまう……。

グレンの全てが『罰の紋章』に食われていく。

同時に、ライガの左手に生まれた光が強くなってくる。
「団長！？」
スノウが現れ、グレンに駆け寄った。
だが、すでに遅い。グレンの息は絶えており、その体は黒く灰に変わる。
雨に溶けるように消え去る団長の体のそばで、スノウが声を上げてへたりこむ。
ライガは反応できない。体が言うことを利かない。
動かない。
声がする。
どこから？
自分の体を包む赤い光を感じながら、ライガの意識は薄れていく。
これは、なに？
「――ライガッ！！！」
ヒサトの、声。

影の中から声がする。
「ラクジー、お母さんを頼む」
「うん」
「いってらっしゃい、気をつけてね」
「今日は大物が釣れそうだ。期待して待っててくれよ」
仲睦まじい家族の会話。
「ラクジー……リキエ……お父さんは……帰れないみたいだ……
これは……一体なんなんだ……！？」
驚愕する男性の声。
「……俺を……俺を殺してくれ……俺を……解放してくれ……」
呻くような、懇願の声。
いたたまれない、痛いくらいの望み。
ライガは影に剣を振り下ろす。そうしなくてはならないと感じた。

そうすることでこの人の痛みがなくなるなら。
このひとに安らぎが訪れるなら。
眠れるのなら……。
「ありがとうよ……ラクジー……お母さんを頼む……
いつかまた……三人で……」
影は消えていった。

「ライガが団長を殺したんです！！」
僕は見た、とスノウは言い張った。
あの雨の中、グレンが死んだのを目で確認したのはスノウとライガだけだ。
そして、ライガは意識を失って自室にいる。目撃したもうひとり、スノウはライガがグレンを殺したとまくし立てた。
そんな、とカタリナは言う。ライガは団長に目をかけてもらっていたのに、と。
フィンガーフート伯が言う。それに満足していなかったということですな、と。
「ヒサト、ヒサトは僕の言うこと信じてくれるよね！？」
スノウは自信満々ヒサトに目をやったが、ヒサトは無言。とても険しい表情で考え込んでいて、スノウのことも目に入っていないようだ。
「ヒサト……？」
てっきり諸手（もろて）を挙げて賛成してくれると思ったのに。
スノウにとって邪魔なライガ。ヒサトにとってもそうだろう。
やっと排除できる、と喜んでくれると思ったのに。
ヒサトは無言でそのまま室内を後にした。
「……グレン殿とは親友という話だったからな。ヒサト殿もお辛いのだろう」
父親の声に、スノウは納得した。ヒサトはグレンを失って悲しん

でいるのだろう、と。
確かにそれもある。だが、それ以上にヒサトは苦しんでいた。
ライガの左手に『罰の紋章』が宿ったのを、見てしまったのだ。
今、ライガは紋章の記憶の中にいるだろう。継承者が必ず見せられる紋章の記憶。
グレンもそうだった。継承した直後に倒れ、紋章の記憶を見、そして衰弱していった。
ライガが昏倒したのは、確実に少年が継承者となった証だ。
最初からスノウの話など耳に入ってはいない。ヒサトはグレンの死因を知っている。
親友は紋章に殺された。そして、愛しい少年もその紋章の犠牲者となろうとしている。
「……させるか……っ！！」
呻くように呟く。
親友は助けられなかった。
だが、ライガは助けてみせる。
……死なせるものか……！！
ヒサトは顔を上げた。このままラズリルにいることはライガにとってはよくない。スノウと馬鹿親父はグレン殺害犯に仕立て上げてしまうだろう。カタリナも信じ始めている。
なによりも、グレンが死んだ今、ヒサトがラズリルに滞在し続ける理由がひとつ減った。
ライガが犯人扱いされるのは、いっそ好都合だろう。
ラズリルにいても、ライガの幸福な未来はない。フィンガーフート親子が彼の頭の上にいる限りは、間違いなく、ない。
ならば。
やることはひとつだ。

永遠の空・１０（後書き）

そして、最愛の恋人にふりかかる最悪の出来事。

永遠の空・11

カタリナと一緒にヒサトが入ってきたのを見て、ライガは不安な表情になった。

部屋の外から聞こえてきた声が、少年の不安の元になっている。

『アイツが団長を』

『海賊のときも団長一人倒れただろう？　……きっとアイツが』

カタリナが告げた。

団長を殺害した罪により、国外追放にする、と。

「……僕は……団長を殺していません……」

か細く言うが、カタリナは聞く耳を持っておらず、冷たい瞳で少年を見下ろし、軽の執行は明朝だと告げた。

ヒサトにも、信じてもらえないのだろうか。

そう思うとライガの胸は痛く締め付けられ、愛しい人を見上げることも出来ない。

団長はヒサトの親友で、とても仲が良かったことを知っているから、ヒサトは悲しんでいるだろう。

ライガが殺したと、彼も自分を憎んでいるのだろうか……？

「ないとは思うけれど……鍵をかけさせてもらうわ。見張りもいるから。悪く思わないで。行きましょう、ヒサト」

「……少し話がある。俺が鍵をかけておくから、先に行ってくれ」

「ヒサト」

まさか逃がすつもりでは、とカタリナは少し疑っている。彼女はここ最近ヒサトがライガを可愛がっているそぶりを見せていたことが気になっているのだ。

「逃がすつもりならここで悠長に話してないさ。邪魔者全員斬り殺してラズリルを出ている。それくらい軽いこと、知っているだろう？」

剣神は自嘲気味に笑った。グレンを失った傷を、思い起こさせる

ように。
「……分かったわ」
カタリナは思い直し、ヒサトに鍵を手渡した。グレンが死んで、その犯人がライガだとしたら、少年を憎むのは当然だろう。カタリナがそうなように。
殴るくらいはしたいのかもしれない。
いっそ、ヒサトがこの少年を斬り殺してくれないだろうか。彼が手にかけたというなら、ライガの延命を願った連中も誰も文句は言わないだろう。
カタリナはそう思いながら部屋を出て行った。
「ヒサト……！」
ライガは思わず立ち上がる。泣き出しそうになりながら愛しい人を見上げた。
ヒサトはものも言わずにライガを抱きしめる。
「っ……！」
抱きしめる腕は力強く、ぬくもりもそのままで。
ライガは涙をこぼした。
「僕は……僕じゃない……っ、殺してない……！！」
お願い、信じて。
ほかの誰でもない、貴方だけは。
どうか……！！
「分かってる」
小さく彼は囁いてきた。その言葉に、ライガは再び涙する。
ヒサトが信じてくれるのならもうそれだけでいい。
ほかの誰が信じてくれなくても、ヒサトが信じてくれるのなら、死んでもいいから。
もう、二度と会えないだろう。
明日刑が執行されたら、ライガはもうヒサトには会えない。
二度と、会えない。
「お願……っ、抱いて……」

泣きながら訴えた。
明日自分は罪人として流され、二度と生きて土を踏むことはないだろう。
だからせめて、今夜だけは。
ヒサトは涙するライガを引き離すように離れた。
「ひさ、と」
喉がひりつく。ダメ、なの……？
やっぱり、僕が団長を殺したと思っている、の？
彼は何も言わずに出て行った。鍵がかけられる音がする。ライガは床にへたり込んだ。
もうダメなのだ。
世界が壊れた気がした。

早朝。
タルとポーラがライガを連れて行くために部屋を訪れた。信じているからと、手を握って言ってくれたけれど、ライガにはとても遠く聞こえる。
すでに私服には着替えている。もうガイエン海上騎士団の鎧をまとうことはない。ラズリルの地を踏むこともないだろう。
ヒサトに、会うことも……。

「運がよければ、どこかの船が拾ってくれることもあるでしょう」
そんな可能性はないと分かっている。
「……首を落とされないだけ、ありがたいと思って頂戴……！」
怒りと憎しみ。
「団長はあなたを買っていたのよ……なのに、何故……！！」
あなたの声が僕には遠いように、僕の言葉は、あなたに届いていないでしょう。
カタリナが乗っている船が離れていくのを、ライガはうつろに見

送った。
少年が乗っているのは、小さな船。
流刑用の、小さな船だ。大きな波が来たら、そのまま転覆するだろう。
こんな船で長く漂流など出来ない。罪人の死刑用の船、だ。
ライガは膝を抱えて座り込む。周りはどこを見ても海原。
広い広い海の中ライガは一人、さまようことになる。
ひとり。
ひとりだ。
誰もいない……。
「ヒサト……」
最後にもう一度だけ、会いたかった。
顔を見るだけでよかったのに、朝どころかカタリナと一緒にもいなかった。
嫌われたのだろう。グレンの一件、やはり犯人だと思われたのか。
分かっている、と言ってくれたあの言葉は、どういう意味だったの？
ライガの疑問の答えはすぐ次の瞬間に、訪れた。
「――狭いっ！！！」
声が。

ドカンッ！

音が。
……背後から。
ライガは振り返った。船の後ろにあった木箱のひとつが転がっていて、いるはずのない人が立っている。
自分の目を疑った。
「ひ、さと……？」
「おう」

返事があった。幻聴だろうかと、ライガは自分の耳も疑う。
「ヒサト……？」
こわごわと呼びかける。近付くことができない。そうしたら消えてしまうのではないかと思ったからだ。幸せな夢が、覚めてしまうと感じたからだ。
ヒサトは笑ってライガに近寄ってきた。
腕を取り、引き寄せて、腕の中に抱きしめる。
「本物だろう？」
「うそ……っ」
どうして。思いながらもきつく抱きしめてくれる腕にライガは泣き出した。
「どうし……っどうして……？」
「どうしてもなにも、お前じゃないのは分かってるし。フィンガーフート親子に付き合うのもいい加減イヤになってきてたからなぁ」
ヒサトは微笑み、泣きじゃくるライガにキスをする。
「言ったろう？　分かってるって。お前がグレンを殺したりするわけはない。あいつは……衰弱してたから、紋章の力に耐え切れなかったんだ」
今はそう説明して、ヒサトはライガが落ち着くのを待った。
何度も軽いキスをかわしながら。
「ふ、う、ひさ、ヒサト……ヒサトぉ」
「泣くな。可愛すぎて抱きたくなる。昨夜も辛抱するのが大変だったんだぞ？　外に見張り来てるってのに押し倒したくてたまらんかった。どれだけ我慢したか」
昨夜抱いてと訴えたライガを引き離したのは、外に見張りが立つ気配がしたからだ。
そして、あまり時間を取られると、流刑用の船に潜り込む時間がなくなる。
ライガに説明してやる時間もなかったし、誰かに気取られるわけにもいかなかった。

今頃ラズリルはヒサトを捜して大騒ぎだろう。
次期団長と目されていた男が、忽然と消えたのだから。
まさか流刑用の船にライガと一緒に乗っているとは誰も思うまい。
「お前を離す気はない、とも前に言っただろ」
「うん、うん……」
ライガは頷く。それをヒサトが実行してくれるなんて。
全部捨てて、自分と一緒にいてくれるなんて。
「夢、見てるのかな……」
「ほほう？」
呟いたライガにヒサトは息もつけないような濃厚なキスをした。
「ん、んぅ」
くらくらする。膝に力が入らなくなって、いつものようにヒサトに必死ですがりつく。
支えてくれる腕は、夢でなく力強くて、優しい。
長いキスのあと、ようやく離れてヒサトは微笑む。
「夢だと思うか？」
「……ううん」
しっかりと感触を確かめるようなキスだったから、現実だと認められる。
離れたくなくてヒサトに擦り寄る。
「ヒサト……好き」
「……」
なんでかヒサトは無言になった。何か変なことを言っただろうかと見上げると、なにやら複雑な顔をしている。
「？　どうしたの？」
訊くと、ヒサトはため息をついた。ため息をついたのは、ライガに向かってではなく、船の後方部分。
そちらには背を向けたまま、やはりため息混じりに言う。
「おい、二人とも。俺は今ライガを抱く気満々なんだが、お前らいつまで出歯亀する気だ？」

「？」
二人って？　そう訊こうとしたライガの視界に、もそもそと動く影。
「！？」
目を丸くするライガに、荷物に隠れていた二人は決まり悪い笑顔を浮かべる。
ケネスとジュエルだ。騎士団の同期で、ライガとチームを組んでいた二人。
「な、なんで！？」
「いや……おれたちはライガのこと、無実だと思ってるから」
「う、うん。それで、隠れてついてきたんだけどぉ」
ライガを一人にしたくなくて心配してついてきた。
彼を脅かして励ますタイミングを計っていたら、ケネスもジュエルも全然気がついていなかったヒサトに先に出られ、あまつさえヒサトには気付かれていて存在をばらされた。
それだけでなく。
「あの……ヒサト？　ライガのこと嫌ってたんじゃないの？」
ジュエルはおそるおそる尋ねる。騎士団の連中は皆てっきりヒサトはライガのことを嫌っているものとばかり思い込んでいたのだから、当然の反応だろう。
ヒサトは堂々とライガを抱きしめたままである。
そんでもって、ケネスもジュエルも荷物に隠れてヒサトとライガのやり取りを聞いていただろう。
「！！！」
今更ながらに耳まで赤くなるライガだ。
ヒサトと二人っきりだと思っていたから、存分に彼に甘えてしまったところを、聞かれていた！！
恥ずかしさ極限大だ。
「見て分かるだろ。俺とライガはそういう仲だ」
「「嘘ぉ！！？？」」

ハモるケネスとジュエル。
「ほーらライガ、俺が苦労しただけあって誰も気がついてないだろ？　すげえな、俺」
真っ赤になっているライガの耳に口付けるヒサトに、ケネスが唖然としている。
ジュエルがあわてて訊いてきた。
「じゃ、じゃあ、酒場のローライラさんとデキてるってウワサは！？」
「知らんな。向こうが勝手に俺に熱を上げてただけだ」
「えぇ！　じゃあ、未亡人のハンナさんはっ！？」
「知らんって」
「道具屋の甥っ子のロートさんはっ！？」
「……そーか、お前か、ラズリルで俺に関する変なうわさを広めたのは」
ジト目になるヒサトに、ジュエルは首を振った。
「ちち、違うよ！？　あたしも聞いただけだもん！！　だってヒサト、遊び人だって言われてたし！！」
「誰だよ広めたの……俺はラズリルでは誰にも手を出してないぞ。ライガだけだ」
「スノウはっ！？」
言われた名前にヒサトは思わず声を張り上げた。
「出すかっ！！　頼まれたってごめんだっ！！」
「えー、だって仲良かったでしょ！？」
「違う。あれはカモフラージュ。俺はスノウみてえな能無しのボンボンは大嫌いだ」
きっぱりと言い切る。スノウとデキているなどというウワサは心外の極みだ。
腕の中では可愛いライガが、仲間に知られてしまって恥ずかしいのかうつむいている。首筋まで真っ赤だ。そこに口付けて少年をビクリとさせてから、ヒサトは視線を船の後部へやった。

「ところで、アレはお前らの連れじゃないのか？」
「アレ？」
ヒサトがごく普通にライガといちゃついているのが刺激的なのか、ケネスが赤い顔のまま呟く。言われた意味が分からない。
「もう一人乗ってるんだが」
ヒサトには気配で分かる。
「え！？」
まだ乗ってるの、とジュエル。その反応からして示し合わせていたわけではないらしい。
後部の荷物置き場を覗くと、コロンと人影が転がり出てきた。
どこかで見たような、ネコボルト。
「チープー？」
ラズリルの港で働いていたこいつが、なんでここに。
んぐーっと寝ていたチープーを揺り起こして事情を聞いてみると、彼は将来大商人になるために、アチコチの船に勝手に乗り込んではその辺の港町で商売の修行をしているのだという。
ようは、密航だ。
「……忍び込む先を間違えたな、お前」
「え、なんで？」
「これ、流刑船だぞ」
あっさりと言うヒサトに、チープーは目を真ん丸くした。
どこかの港に着く以前に、自分たちが無事でいられる保証もないような船である。
「え、あ、う……そうなんだ……」
ガックリと肩を落とす彼に、皆苦笑する。
「まぁ、とにかくどこかへたどり着かなきゃどうにもならん」
ため息混じりにヒサトは言う。
考えるのは、それからだ……。

永遠の空・11（後書き）

駆け落ち（他に三人つきですが・笑）これからばかっぷる度が上がっていきます。剣神は遠慮していたのです……恐ろしい（ぶるぶる）

永遠の空・12

――漂流を始めて、そろそろ最初の夜を迎える。
漕ぐのを止めて、何度目かの休憩をしようということになった。
ライガはヒサトに寄りかかって座っている。ヒサトもごく自然にライガの肩を抱いていた。
「……いちゃついてるよね……」
「ああ……でも、驚いたよ……ヒサトとライガがなぁ……」
「ねぇ、いつからなの？　いつからなの？」
こそこそ囁きあっているジュエル、ケネス、チープーの声が丸聞こえだったが、とりあえずヒサトは黙って言わせていた。ライガが幸せそうにしているので、水を差すこともないかなと思っているのだ。
「……疲れたか？」
「ううん」
短いやり取り。こんなこともラズリルにいる間は出来なかった。
これでケネスたちがいなければ、このままライガを抱いてしまうのだが。
ライガのほうも実は少しそう思っていたりする。二人きりだったら、昼夜問わずヒサトに抱いてもらえるのに。
流刑の最中だというのに、ヒサトといるというだけで心は躍っている。
嬉しそうに擦り寄ってくる少年を抱いて、ライガの髪に顔を寄せ、ヒサトも微笑む。
寄り添って座っている、こんなことだけで幸せを感じている自分の心がちょっと信じられない。
昔なら、ヤリたいと思ったら即効で口説いて、ＯＫをもらったら即座に押し倒して、スッキリしたらそれでバイバイだった。かろうじて強姦はしない主義だ。

それが。
「……なんつーか、俺も変わったなぁ」
思わず自分で呟いた。
「そうなの？」
ライガがきょとんと見上げてくる。
「……お前、昔の俺の話聞いたことないか？」
「遊び人っていうのは……聞いたことあるけど……」
言い辛そうなライガの顎を掬い上げ、ヒサトは軽く口付ける。
「！」
途端に赤くなる少年に、にんまり笑いかけ、
「こういうことをだな、お前にしかしたくないって思うようになった。一人にそう思うことなんて今までなかったんだ」
そう続ける。
誰でも良かった。
どうでも良かった。
だから、何も気にしなかった。
ライガは真っ赤っ赤。遊び人の彼にそこまで思わせるだけの魅力が自分にあるなんて思えない。
でも、ヒサトが本気でそう言ってくれているのは伝わってきた。
だから、もっと幸せだと思った。
微笑んでヒサトに抱きつく。ヒサトもライガを拒まない。
「……いちゃついてるよねぇ……」
「ほんとになぁ……ライガとヒサトがなぁ……」
「ねぇ、いつからなの？　いつからなの？」
ヒサトは首だけ振り向いた。
「うるさいぞ、外野」

深夜に近くなったころ、一艘の船の姿が見えた。助かったと喜ぶ少年たちの後ろで、一人ヒサトは船に目を凝らす。見た感じは普通の商船のようだが……何か引っかかる。

向こうもこちらに気がついたのだろう。近付いてきて、梯子（はしご）がおろされた。

救助してくれるつもりらしい。

とりあえず、今のところ殺意や敵意のようなものは感じない。はしゃぐジュエルたちが梯子を上っていく。

まぁ、もしものことがあったらヒサトが剣を抜けばいいだけの話だ。

このくらいの大きさの船なら、乗員を拘束して奪うくらいヒサト一人でたやすい。

一番最後にヒサトは梯子を上り――甲板にあがって愕然とした。

よりにもよって。

甲板に上がった自分を目を見開いて見ている一人の青年がいる。

ヒサトは表情をつくろうのに苦労した。ライガに感付かれるわけにいかない。

ライガ以外の子供連中は、相手をしている初老の男性に無理を言って怒られている。

ヒサトはそちらに視線を向けたが、甲板の青年はずっとこちらを見つめたままだ。背中に視線を感じる。

イタイイタイ。ちくちく感じながらとりあえず子供らをどうにかしなくては話も出来ない。

「お休みになったらいかがです」

咳払いした初老の老人に言われ、子供たちはお互いの顔を見合わせた。

「甘えさせてもらえ」

後ろから声をかけてやる。

「疲れたろ、とにかく休ませてもらえ」

「あ、うん」

ライガが頷き、ほかの三人も頷く。一日中オールと格闘して疲れたのは事実だ。

「ヒサトは？」

ライガが小首をかしげる。
「俺は大人として挨拶しとくよ。お前らあの爺さんに無茶言って怒らせてたからな」
「てへへ」
ジュエルが舌を出した。食べ物が欲しいだのチーズよこせだの寝床をくれだの、色々と言っていたので、怒られて当然だろう。
「後から行く、寝とけ」
言うと皆素直に頷いてブリッジに入っていった。
気配が完全に中に入ったのを確かめて、ヒサトは振り返る。
なんでよりにもよって、こいつがここにいるのか。
「……よお」
軽く手を上げてやると、向こうも近づいてきた。商人には似つかわしくない雰囲気と、肩あて、マント、腰に下げられている剣――
そしてその顔。

「七年ぶりか……剣神、ヒサト」

少し寂しげに声をかけてきたのは、『海神の申し子』トロイ。
クールークの将だ。
彼が乗っているということは、これは商船などではない。偽装された哨戒船だ。
子供に大人気なく怒っていたあの初老の老人もクールークの軍人だろう。
「お前は変わらないな……あれから七年も経ったというのに」
トロイはそう言ってヒサトの眼前に立った。殺気などはない。瞳はとても切なかったが。
七年前。引き止めるトロイを置いてヒサトは彼の元を去った。
今もトロイはヒサトとのことを引きずっている。
出来れば彼を引き止めたいと今でも思っている。
「捜した」

言葉短くトロイは言う。
「そうか」
短くヒサトも返す。
「……やったのか」
手を伸ばしてトロイはヒサトの額を指した。いつもしていた赤いバンダナ。それを、双剣を携えた少年がしていたのは闇夜でも見えた。
何故、と訊きたかったのだろう。だが、ヒサトは答えず、暗い海面に目をやる。
答がもらえないことを、トロイも分かったのだろう。静かに話を変えた。
「……ラズリルから出たのか。珍しく長く滞在していたから……住み着く気になったのかと思った」
「いや、あそこの団長が親友だったんでな。頼まれて断れなかっただけだ」
ほかの理由は告げなかった。ライガのことは、トロイには関係ない。
「どうして出た？」
顔を覗き込んでくるトロイに、苦笑を返す。
「調べればすぐ分かる」
おそらくはラズリルの情勢を調べるためにトロイはここにいるのだ。
群島諸国へのクールークの侵攻が始まるのだろう……。
「……お前と戦うことになるのかと、思っていた……」
トロイはヒサトの力をよく知っている。剣神。彼の力で自分は勝利を得、彼と過ごして幸せを得、彼が去ってからはぽっかりと穴が開いたかのような日々を過ごした。
群島諸国へ侵攻すれば、ラズリルに滞在していたヒサトと確実に戦闘になるだろう。恐いのはガイエン海上騎士団ではなく、そこに滞在していたヒサトだ。

個人で簡単に戦況をひっくり返す男だから。
それ以前に、心が彼と戦うことを拒んでいるから。
「ヒサト」
トロイは七年前も口にしたことを七年後も口にした。
「クールークへ来い。私の……片腕として」
ヒサトもまた、七年前と同じ言葉を返す。
「集団生活は向かん」
トロイは眉をひそめる。同じ言葉で拒むのか。
「ヒサト」
留めたいのに。
「ガキ共に手は出すなよ。俺の弟分たちだからな」
トロイが伸ばしかけた手を、ヒサトは背を向けて拒んだ。
トロイは目を閉じる。伸ばした手はヒサトには届かない。それは七年前からよく理解していることだった。彼には大切なものなどない。作らない、捕らわれない。
そう思っていた。
なのに。
トロイの心は粟立つ。
ヒサトのバンダナをしていたあの少年はなんなのだろう？
クールークにいたころから、それ以前からずっとヒサトは赤いバンダナを額に巻いていた。
とても大切なものなのだろうと思っていた。
それを、額に巻いている、少年。
もしかしたら？
トロイは首を振った。
考えたくなかった。

永遠の空・１２（後書き）

海神の申し子もお手つきしてますタラシの剣神……。

永遠の空・七年前前編

――それは、七年前の話。

エルイール要塞攻防戦。
たった一隻の船でガイエン海上騎士団を撃退した若き指揮官。
名を、トロイ。
だが、多くには知られていないが、この戦いには一人の男が大きく貢献していた。
剣神の異名を持つ男――。

第一印象。
気に入らない。
軽い男。
ウワサどおりのタラシでコマシ。
言われているほど強いのか？
心底から疑問に思ったくらい、いい加減な男。
腰には双剣を下げているものの、それが抜かれるところなど見たことがなかった。
だが。

ガイエン海上騎士団との攻防戦で、彼が剣を抜くのを初めて見た。
迫る騎士団の大量の船に、彼は全く臆することなく、自分に言ったのだ。
「お前は指揮をしろ。何隻なら突破する自信がある？」
にやりと笑い、そう言われて、出来ないとは言えなかった。
このふざけた男に、弱音は見せたくない。
そして、彼は近付いた敵国の船に信じられない跳躍で、ひとり飛

び乗った。
「後で迎えに来い。合図する」
それだけ言い残して。
そして、彼は一人で次々と半数の船を陥落させた。
抵抗してきたガイエン騎士団の騎士を、皆殺しにして。
煌(きら)めく合図に船を出し、戻ってきた彼は、袖口が少しだけ血で汚れていたが怪我ひとつなく。
「っち、汚れた。まだまだだな、俺も」
返り血を浴びたのが不満のようだった。
愕然とした。
この男、強い。
恐ろしいほどに。
残りの半数の船はトロイの指揮で撃退できたが、彼の力がなかったら突破されていたかもしれない。
「……一応、感謝する」
しぶしぶ言うトロイに、彼は要らんとそっけなく言った。
「俺は金で雇われただけだ。その分働いた。それだけのことだ」
これだけの腕を持ちながら、流れの傭兵なのだ。ひとつところには決して長居しない。
どれだけ誰が頼んでも、彼は長くて二月、短いと二日も滞在しないという。
金も地位も女も男も、彼を引き止める理由にはならないらしい。
ここに滞在する期間は一月。ガイエン海上騎士団の来襲のために雇った男だ。
ガイエン騎士団を撃退した今、彼の仕事はもうないが、期間はまだ半分以上残っている。
受け取った報酬で、期限が切れるまでは遊んで暮らす気らしい。
やはりこの男とは合わん。
トロイは思った。
剣神ヒサト。おそらくはこの海域で最強の男。

だが、自分とは合わない――確かにそのときはそう思っていた。

ガイエン騎士団を撃破した数日後、トロイはある貴族の招待を受けていた。

軍でもそれなりに階級のある親を持っている男で、まだそれほど地位の高くないトロイには無碍（むげ）には出来なかったのだ。

何故かヒサトはついてきた。

一応金を貰ってトロイの護衛という名目で雇われているから、ついていかないとまずいと言う。意外に律儀な男だ。

だが、正装ではなく、いつものジャケットに赤いバンダナ、腰には双剣。

とてもラフな格好に、トロイは眉をひそめる。

「……これから行くのは貴族の屋敷だぞ」

「正装は性に合わん。庭の隅でメイドでも口説いてるから放っておけ」

屋敷のメイドをつまみ食いするつもりらしい。

どこが護衛だ。トロイは顔中でそう言って、ヒサトには目もくれずに歩き出し、馬車に乗った。

食事をして、酒をたしなみ、会話をする。

貴族の子息はガイエン騎士団を撃退したときの話を聞きたがった。

もういろんな人間に同じ話を何度もしているトロイは内心うんざりしながらも話す。

ヒサトの話は省いた。彼自身から要らん話はしなくていいと釘を刺されている。

あまり名を売りたくはないのだという。傭兵ならば名が売れたほうがいいと思うのだが、彼は余計なことはするなとトロイに冷たく言い放った。

正直にむっとしたのでほかの人間には言っていない。

あんな男、雇った期限が切れればそれでもう二度と顔も合わせないだろう。

忌々（いまいま）しく思いながら、話を続けて……しばらく。

くらりとした。

それほど酒を飲んだだろうか？

「失礼。少し酔ったようです」

たしなむ程度に飲んだはず。思ったより強い酒だったのか。

「ご気分が？」

「いえ……少々めまいが」

言っているうちにどんどんひどくなってきた。眉を寄せるトロイに、子息は肩にふれ、ソファにどうぞとトロイを抱き起こすように移動させた。

なんだか、その手に不快感を感じてしまう。

「すみません、無様なところをお見せして……」

「いいえ、かまいませんよ。どうですか、ご気分は？」

言いながら、子息の手がトロイの頬に触れる。

その手が、トロイの上着を脱がし始めた。

「よいクスリでしょう？」

「！？」

絶句する。身体の自由が利かない。

「大丈夫、たっぷりと可愛がってあげますよ。海神の申し子どの？知っていますか？　今あなたはそう呼ばれているんですよ。たった一人でガイエン騎士団を撃退した男として」

子息はトロイの顔を見下ろして、にんまりと好色に笑った。

「以前からあなたが欲しいと思っていたんだ。ふふふ、ほかの連中にとられる前に、手をつけちゃおうと思ってね。来てくれて嬉しいよトロイ？　君も期待してくれたのかな？」

子息の顔が近付いてきた。口付けを狙っているらしい。

怖気がしたが身体が動かず、声を上げることも出来ない。

このまま手篭（てご）めにされるなど冗談でもイヤだ。

「――っ！！」
突き飛ばしたい。
そう思った瞬間だった。

ドバンッ！！

ドアが乱暴に蹴り開けられる。寸前で邪魔され、気分を害した子息が邪魔をするなと怒鳴ろうと顔を上げたおかげで、トロイにも見えた。
立っているのは、ヒサトだ。何かを察して来たらしい。
「！？　だ、誰だお前は」
「ちはー。ソレの護衛です」
やる気のない声でそう返し、ヒサトはずかずかと遠慮なく室内に入ってきた。
「一応訊くが、同意の上か？　トロイ」
「……ちが、う……」
舌がしびれていて上手く話せない。それでも何とか言葉を搾り出した。
彼の声から、ヒサトは勘良く薬を盛られたと察したらしい。
「そーか。じゃ、連れて帰るぞ」
ヒサトの登場に、彼に借りを作るのは心外だが心からホッとしたトロイだ。
男に手篭めにされるなど冗談じゃない。
近付こうとしたヒサトに、子息が剣を抜いた。
「邪魔をするな。失せろ」
が、ヒサトは興味なさそうに鼻を鳴らしただけ。
「ゴーカンはダメだろ。同意の上なら俺も止めないが。しかも薬盛っておいて邪魔するなも何もねぇだろ。いくら俺でも止めるっての」
すたすたと無造作に歩み寄る。
トロイは内心で青くなった。彼はこの子息が結構な使い手だと知

っている。
単なる貴族のボンボンではないのだ。そんなに無造作に寄ってきては為す術もなく斬り捨てられる。
「ひ、さと……」
危ない、という声さえ出てこない。
逃げろ、という言葉も出せない。
流血の惨事を予想して、トロイはきつく目を閉じた。

どか。

重い音がした。どさり、と体の上に誰かが倒れてくる。
きっとヒサトだ。血が流れる感触が――してこない。
体の上から人の体の重い感触が消えた。
「おい、トロイ？　意識なくしたのか？」
ヒサトの声だ。驚いて目を開けるトロイである。眼前に、彼の整った顔があった。
「お？　意識はあるな？」
「あ……」
無事だったのか、という声も出ない。
が、視線の問いかけに彼は気がついたのか、教えてくれた。
「あんなトロくせぇのに俺が斬られるかよ。一発殴って気絶させた。斬るのはまずいんだろう？　お前がわざわざ招待受けたくらいだし、軍の上層部の息子か何かってとこか？」
そこまで察していたらしい。
剣技だけでなく、頭も回る男なのだと、そこで初めて気がついたトロイだ。
ぽかんとしていると、抱き上げられた。
それも、軽々と。
成人男性であるトロイだ。愛用の剣も下げている。かなりの重量だろうに、ヒサトは苦にもしていない。

「!?　ひ、ひさ……」
「動けないんだろ。おとなしくしてろ」
おとなしくしていろと言われても。
薬が効いている身には身動きも出来なくて。
ヒサトの力強い腕に抱きかかえられてトロイは呆然としている。
彼はあまり筋肉質にも見えなかったのに、どこにこんな力があるのだ?
声も出せずに馬車まで運ばれ、従者にはギョッとされたが、ヒサトが『上手い酒に悪酔いしたんだと』と言うと納得したようだった。
ぐったりとしているように見えるトロイに説得力があったのだろう。
そこまでハメを外すトロイ様なんて初めて見ました、などとヒサトに笑いかけている。
そのまま自分の屋敷まで戻った。
再び抱えられて自室まで運ばれる。
薬は結構効き目が強いようで、まだ動けない。
ベッドに思ったよりそっと優しく下ろされた。
それからヒサトはトロイの剣やベルトを外し、上着に手をかけた。
「!?　お、い」
何をする気だ!?　と視線で問いかける。
なにせこの男はタラシでコマシだ。しかも男女関係ない。
あの子息のように自分にいかがわしい真似をする気なのだろうか。
だが、ヒサトは上着のボタンを二つほど外し、身体の締め付けを緩めただけだった。
ちょっとホッとしたトロイだ。
ただ、介抱してくれているだけらしい。
「息は出来るな?」
「あ、あ」
顔を覗き込まれる。整った顔が見つめているのに気がついた。真剣な顔をしていれば、かなりのいい男である。

海のような深い蒼い瞳がじっと自分を見つめている。
こんな顔も、するのか。
「痺れているのか？　話せないみたいだな」
「ああ……」
身体は動かないし、上手く話すことも出来ない。
ヒサトは顔を寄せてきた。思わずびくりとするトロイの口元に鼻先を寄せる。
「息を吐け」
キスでもされるのかとびくつくトロイに、そう言う。
「？」
「いいから」
意味が分からないが、言われるまま、トロイはゆっくりと息を履いた。
身体に覆いかぶさるヒサトの体温がやたらと気になる。
トロイの吐く息を嗅いで、ヒサトは彼が呑まされた薬物の種類を特定した。
が、そんなことなどトロイには分からない。
大体ヒサトに、匂いをかいだだけで薬物を特定できる特技があるなど、知らない。
何をしたいんだと、怪訝な表情だ。
ヒサトは無言でベッドから立ち上がり、部屋から出て行った。
戻ってこないヒサトに、トロイは少しだけ置いていかれたような気がする。
このまま放って置かれるのか。確かに放っておけば薬物の効果も切れるだろうが……なんだか納得がいかない。
面倒を見るのなら最後まで介抱しろ、などと思ってしまう。
彼は単なる傭兵だ。ここまで運んでくれただけでも恩の字だろう。
そうは思うのだが……なんだろう。
すごく、納得がいかない。
身体が動くようになったら、ヒサトを殴ってやりたいような衝動

に駆られた。
助けてくれたのは彼なのだが。
「……ひ、さと」
「呼んだか」
呟いた声に返答があって、トロイは驚いた。
いつの間にか戻ってきていたらしいヒサトの姿がある。手には水の入った水差しとコップ、薬のような包みが載った盆がある。
「解毒剤持ってきた。たまたま持ち合わせがあったんでな。飲め。スッキリする」
盆をベッドサイドに置き、包みを開ける。
丸薬が入っていた。
「口開けろ」
今は彼を信用するしかないだろう。トロイは少し口を開いた。
丸薬が二つ、転がり込んでくる。
苦い。
顔をしかめる彼に、ヒサトがコップに水を入れ、飲ませようとしたが、飲めなかった。
喉までしびれているのか、丸薬も水も飲み込めないのだ。
喉までくる感触はするのだが、むせこんで吐き出してしまう。
「う……」
苦しげにせきこむトロイの息が治まるまで待って、ヒサトはシーツに転がった丸薬を拾い上げた。
「飲み込めないか」
「だ、めだ……」
効果が切れる時間が経過するまで待たなくてはならないのか。不快な気分のままで。
忌々しく眉を寄せるトロイの口に、ヒサトは再び丸薬を押し込んだ。
「!?」
飲み込めないと言っているのに。

苦味に顔をしかめながらヒサトに視線をやると、彼はコップの水を口にしていた。
トロイに覆いかぶさってくる。
「！」
ちょっと待て、と、止める間もない。
唇に感触。
「う」
呻いてもどうにもならない。
口腔に水が流れ込んでくる。苦い丸薬が押し流されて、喉の奥に落ちた。
「く」
唇を塞がれているので吐き出せない。
「ん、ん」
――ごくり。
「……飲んだな」
ヒサトが少し離れる。けろりとしていた。
「お、まえ……」
苦しさに目じりに涙が浮かんでいるトロイだ。真剣に苦しかった。
ヒサトは何気ない動作でトロイの涙を舐め取る。
「！」
目を見開くトロイ。
「えらかったな」
子供に言うようにそんなことを言ってにまりと笑い、ヒサトは起き上がる。
「水置いておくから、動けるようになったら飲んでおけ」
それだけ言ってさっさと出て行った。
……今夜はもう戻ってはこないだろう。
おそらくどこかの女か男のベッドに潜り込んで、楽しんで帰ってくる。
毎晩そうだから今夜もそうだろう。不思議と泊まっては来ないの

だが。
ヒサトの寝顔を見たものはいないらしい。
どんな美女や美男と床を共にしても、彼は決して人と眠らないと聞いた。
誰とでも、そうだと。
閉じられたドアを、どれくらい眺めていただろう。
気がつくと身体は動くようになっており、トロイは起き上がる。
開かないドア。
戻って、こない。
トロイはベッドサイドに置かれたコップを手に取り、水を注いで一気に飲み干した。
ヒサトの唇の感触を洗い流すかのように。

永遠の空・七年前前編（後書き）

昔話。基本的にヒサトは、ひとでなしです（爆）

数日が過ぎ、ヒサトとの契約があと十日で切れるころ。
あの貴族の親からトロイとヒサトに呼び出しがあった。凄腕の護衛がいるとの話を聞きつけて（おそらくは息子がチクったのだろうが）ぜひその腕前を見たいとのことだった。
トロイは遊びに出ていたヒサトをわざわざ呼びに行ったが、
「面倒（メンド）い。断れ」
大概ここに連れ込むと決めている街の安宿で、ナンパしたらしい女の服を脱がしかけていたヒサトは一刀両断。
「そういうわけにはいかん。さっさと来い」
女性から目を逸らし、トロイは不機嫌に言う。
また違う女だ。とっかえひっかえ食っているヒサトに腹が立つのはなぜだろう。
「邪魔が入った。また今度な」
謝って女と濃厚な口付けをかわし、ヒサトは口紅を拭いながらトロイのところまで来た。
「本気で行く気か？　今度は未遂じゃなくてマジで犯されるぞ、お前」
言われてトロイは言葉を失ったが、断れない誘いなのだ。
言葉に詰まった彼に、ヒサトは半眼で言う。
「まさか考えてなかったのか。ああいうタイプはしつこいぜ」
「……今度は日中だ。昼日中から妙な真似はしないだろう」
「関係ないだろ。俺は昼夜関係ないぞ」
「皆がお前と同じだと思うな」
トロイはあきれた。
「それに、今回は親同伴だ。妙なことは企んでいても出来ない」
「そうならいいけどな」
自宅までの道を歩きながら、トロイはヒサトの横顔をのぞき見た。

整った顔。トロイも長身だが、彼は自分より少し背が高い。
何かポリシーでもあるのか、前髪の中心、一部だけが赤い。
いつもしている赤いバンダナは、とても大切にしているようだった。
「なんだ？　惚れたか」
こちらを見ずにヒサトはあっさりと言ってくる。盗み見していたことなどすぐに分かるのだ。
「違うっ！　……全く、黙っていればそれなりに見られる男だろうに。お前は余計な口をききすぎだ」
言われた言葉に必要以上に動揺し、トロイはうろたえた声音でそう言った。

通されたのは広い中庭だった。
そして、そこにはずらりと武器を携えた連中が立っている。
その数、ざっとで四十はいるだろうか。どれも正規の兵ではない。貴族が私的に雇っている荒くれ連中だろう。
「！　こ、これは……どういうことですかっ！？」
トロイにもヒサトにも武器が突きつけられる。声を上げるトロイと違って、ヒサトは予想していたのか落ち着いたものだ。武器に手をかけてもいない。
「どういう？　はは、いやいや、凄腕と聞いてね、これくらいはさせてもらわんと。息子に恥をかかせた男を八つ裂きにするショウだよ、トロイ殿」
貴族は笑っていた。始めからヒサトをなぶり殺しにするつもりだったのだ。
子息も笑みを浮かべてトロイを見ている。
「トロイ、君がここで私のものになるというなら、私を殴った無礼なその男は見逃してあげてもいい。まぁ、ただの傭兵だろう？　一人減ったところでたいしたことはないから、ショウを見ていくのもいいだろう」

子息はグラスに注がれた液体をトロイに示す。
あの時飲んだものと同じものだ。ヒサトを助けたいのならこれを飲み、おとなしく身をゆだねろ、というのだ。
どちらでもいい。飲まなければヒサトは殺されるがトロイは開放されるだろう。
ただの傭兵だ。もうすぐ期限も切れる。
いけ好かない男だ。ここで死んだほうが世の中のためかもしれない。
――何故ヒサトは何も言わないのだ？
助けてくれ、とも、好きにしろ、とも言わない。
逃げるそぶりもない。
でも、あきらめているようにも見えない。
トロイは手を伸ばした。

――グラスへ。

屈辱に手が震える。こんな卑怯な策に、屈するのはイヤだ。
……ヒサトが殺されるのは、それ以上にイヤだ。
いけ好かない男だ。
とっかえひっかえ男女問わず食っては捨てるような男だ。
そのくせ何故か憎まれない、変な男だ。
さっきも女を抱こうとしていた。
だが。
死なせたくない……！
グラスを手に取ろうとするトロイを、貴族親子があざけるように見ている。
どのみちヒサトを許す気などない。子息に身をゆだねたトロイの目の前で殺してやろうと思っている。
トロイがどうしようが、ヒサトは殺される――はずだった。

キィンッ！！

音を立ててグラスが真っ二つになる。それから地面に落ちて砕けた。

中の薬物が混じった酒がシミになる。

トロイが呆然とする。何が起こったのか分からない。

もしかして。

「ヒサト……？」

声をかけると、彼はつまらなさそうに頭をかいた。

「くだらねぇ」

その片手に、いつ抜かれたのか、彼の愛用の刃。

本当にいつ抜いたのか分からなかった。そして、何をしたのかも。

どさどさ。

二人に武器を突きつけていた連中が倒れる。

「！？」

彼らは地面に倒れてから、ジワリと出血しだした。

命尽きても自分たちが斬り殺されたことに気がつかなかっただろう。

それくらいの、瞬間の出来事。

それを為しえた、ヒサトの技量。

「トロイ」

ヒサトが短く話しかけてくる。

「くだらないが、片付けてやる。褒美よこせ」

「褒美……？」

珍しい。ヒサトが報酬以外のものを望んだりするのは、これが初めてだ。

「お前を」

にやりと笑ってヒサトは言い、瞬間だ。

貴族親子が吹き飛んだ。
まとめて庭の端まで落ちて、そのまま動かなくなる。
「!?」
呆然とするトロイの耳に、だんっ!!　という大きな音。
それがヒサトの踏み込みの音だと、トロイは気付かない。
そして、瞬く間に中庭にいた男たちが倒れていく。
トロイがひとつ瞬きをする間に、数人が倒れる。何度かの瞬きの後、立っているのはトロイと――ヒサトだけ。
中庭にいた武器を携えていた連中は、すでに息絶えている。
「お、前……殺したのか、全員……」
唖然として問いかける。
あまりの速さに、トロイは反応することも出来ず、動くことも出来なかった。
「そのアホ親子は生きてるぜ。蹴り飛ばしただけだからな。ま、骨の三本くらいはイってるだろうが」
ヒサトは双剣を収める。刃には血しぶきひとつついていなかった。
剣捌(さば)きがあまりにも早すぎて、血や脂もつかないのだ。
いとも簡単に、四十人からの男たちを一掃してのけた男は倒れている貴族親子に近寄った。
「う、うぅ」
痛みのせいで動けない親父に言う。
「こいつは俺のお手つきだ。手ぇ出そうとするなよ？　次は……どうなるか分かるよな？」
気絶はさせていなかったから、何が起こったのか親子ともに理解しただろう。
中庭には血臭が立ち込めてきている。
「俺はこいつとの契約が切れてもしばらくはクールークにいるつもりだ。あんたらがなんかしようとしたらすぐ耳に入ってくる。次はないぜ？」
にまり、と血塗れの獣を連想させるような顔で笑う。

実際には返り血などひとつも浴びておらず、だからこそ、圧倒的な力を感じて恐ろしい。
貴族親子は猛烈な勢いで頷いた。
ヒサトの実力は理解した。立ち向かえるレベルの相手ではない。
たとえ今回の事を根に持って彼に刺客を送っても、まず間違いなく返り討ちだろう。
そして、ヒサトは仕返しに来る。
下手なちょっかいを出したら、殺されるのは確実に貴族親子だ。
敵わない相手だ。これがトロイなら、国に縛られているから上層部から押さえつけることが出来るが、ヒサトはフリーランスの傭兵。
圧力などかけられない。
結果、親子はトロイをあきらめるしかないのだ。
それが、自分たちの命を長くする唯一の回避策だから

その晩。
トロイは自室のソファにもたれるようにして休んでいた。
あのあと、ヒサトと別れて自分の屋敷に戻ったのだが、どうなったのだろう。
下手をすればヒサトと自分は罪に問われる。屋敷に押し入って雇われたものたちを惨殺していった、と言われればそれまでだ。
……ヒサトだけでも国外に逃がすか。
契約はまだ続いているがどうでもいい。赤月帝国かグラスランドにでも逃げてしまえば追っ手はかからないだろう。
真剣に彼を逃がすことを考え始めたとき、ドアがノックされた。
こんな夜半に訪れる者など思い当たらない。
「？　誰だ」
「俺だ」
「ヒサト……？」
昼、あれから今までどこに姿をくらましていたのか。トロイは急

いでドアを開けた。
「よう」
平然としている男が立っている。
「何をしていた？　今まで」
「昼間の女のとこ行ってた。お前に邪魔されてすねてたからな」
この状況で女遊びをしていたらしい。神経が太いにもほどがある。
「……何の用だ」
トロイはあきれて言った。なんだかこの男のことを心配していた自分が馬鹿に思える。
「褒美」
にまり、と彼は笑っている。
「貰いに来た」
「……！」
昼間言われたこと。思い出して硬直したトロイを、ヒサトは強く引き寄せる。
唇が触れる寸前で止め、ヒサトは笑みを浮かべたままトロイに問う。
「いやなら拒め。俺はあのボンボンと違ってゴーカンはしない」
あくまでも同意の上でなければ、そういう行為はしない、と。
「拒んだら……止めるのか」
目前に、こんなに近くに迫りながら。
それでも訊くのか。
「おう。言ったろう？　ゴーカンはしない」
拒んだら、この男はどうするのだろう。
……想像はつく。
他へ行くのだ。トロイではない誰かのところへ。
彼には誰だろうとどうでもいいのだ。特別な誰かを作らない。
契約が切れれば、トロイともあっさりと別れて行ってしまうだろう。
そういう男だ。

トロイが拒んでもなんとも思わず、受け入れても変わらないだろう。

どこかへ行く、誰にも捕まらない男。

「……」

惑いは数瞬。

トロイは身体から力を抜いた。

どこかへ行かなくなるかもしれない。

彼の特別になれるかもしれない。

ならば。

こうすることで少しでも、ヒサトの心に残れるかもしれない……。

トロイは自分から唇を押し付けた。

あの晩、ヒサトが自分に口移しをしてくれたときの感触を、ずっと忘れられなかった。

忘れたく、なかった。

ヒサトの腕が腰を抱く。

止められない。

止める気も、ない。

十日後。

契約が切れ、ヒサトはあっさりと姿を消した。

その前日までトロイを好きなだけ抱いて、トロイの心を掻っ攫っていったまま。

彼が去っても、貴族連中からの報復はなかった。

剣神のお手つきだと言うあの一言が、よほど効いたらしい。

……残っては、くれなかった。

軍に入って、いや入らなくていいから自分のそばにいてはくれないかと誘ったトロイに、彼は『手段生活は向かない』と笑うだけで、とうとうそのまま姿を消した。

結局、トロイもヒサトにとってはその他大勢の一人なのだろう。

トロイにとってヒサトはたった一人だったのだが――やはり彼に特別な存在はないのだ。
これから先も、きっとない。
そう思った。
皆と同じなら……さほど辛くないような気がしたからだ。
誰も特別でないのなら、一緒なら。

だが。

――七年後、海神の申し子は剣神と再会する。
ラズリルから少し離れた海域。
小船に乗った彼と。
船には彼のほかにも数人の人間が乗っていた。
一人はネコボルト。
二人はラズリルのガイエン海上騎士団の騎士。
そして――。

永遠の空・七年前後編（後書き）

ええ、ひとでなしなのです……書いてて作者が一番痛感しました。
なんでこんなのに惚れるんだライガ。

永遠の空・１３

ヒサトはブリッジの中には入らず、梯子もない屋根部分に軽やかに飛び乗って座った。

目撃した船員がビックリしているがかまわない。

クールークの船の中で眠るつもりはない。何より他人に寝顔を見られるのは嫌いだし、迂闊に眠るとエルイール要塞か、下手をするとクールーク本国まで連行されかねない。

トロイの様子を見てよく分かった。彼はまだ自分に思い切り未練がある。

それはそうだろう。

いいだけ抱いて、惚れさせておいて、それでもあっさりと捨てていったのだから。

いつも思うのだが、刺されないのは何故だろう？

時折、心底から不思議になるヒサトである。

ライガを手に入れた今、刺されても困るのだが。多分あっさりと返り討ちにする可能性のほうが高いし。

しばらく夜空を見上げた。

これからどうする？

『罰の紋章』のことを調べるべきだ。だが、何か伝承が残っているだろうか？

確率としては……もともと『罰の紋章』が封印されていたオベル王国か。

あの小船でたどり着くのは難しいだろう。かと言って、敵国であるクールークの船に送ってくれ♪と言うのはさすがのヒサトでもためらってしまう。

そんなこと頼もうものならトロイに貸しを返せとか言われるのは間違いない。

絶対に連れて行かれる。間違いない。確信できる。

ヒサトは頭を抱えた。せめて拾われたのがクールークでもほかの人間の船だったら、まだ何とかなったかも……と考えて。
そして浮かんだ顔ぶれに、ヒサトは首を振った。

ダメだ。トロイと変わらん。

――クールークでの行いが、目に見えるようである。
とにかく今夜はライガたちを休ませて、明日の朝どこか港の近くでおろしてもらうというのが一番無難な手だろうか。
考えているヒサトの耳に、ばたばたとした音が聞こえた。
「そこの者！出て来い！！」
今まで考えたことが全て無駄になったことを、ヒサトは直感し半眼になった。

商人などではない。クールークの軍人、哨戒船だ。
トロイとコルトンという老人の会話を聞いてしまったライガたちは思わず音を立ててしまった。後から行くといっていたヒサトがなかなか来ないので、心配になって外に出てみたら、ヒサトではなくてクールークの軍人の会話を聞いてしまったのだ。
物音に感付かれ、コルトンに怒鳴られた。
抵抗はしたものの、コルトンとトロイは強かった。今のライガたちではどうにもならない。
あっけなく拘束される。
「……ラズリルのガイエン騎士団の者か」
「……元、だけどな」
ケネスが呟く。ライガについてきた時点で追放されたも同然だ。
チープーがあわてている。ライガはそれどころではなかった。ヒサトの姿が見えない。
甲板にはいないようだった
では、どこにいったのだろう？　これがクールークの船だと分か

った以上、ヒサトも捕まったのだろうか？
「……なーにやってくれちゃってるんだよ、お前ら」
ゲンナリとした声がした。ライガは振り返る。
ヒサトがいた。どこにいたのかは分からなかったが、無事でいた。
だが、コルトンの合図で瞬く間に船員たちが駆け寄り、彼を包囲して武器を突きつける。
「ヒサト！！」
思わずライガは声を上げたが、ヒサトは平然。
「動くな。ふん、剣神というのもずいぶんと弱腰だな。所詮はタダの噂話ですかな、トロイ殿」
コルトンがトロイに言うと、トロイはわずかに眉を寄せたが何も言わない。
「あー、まー、いいや、もう」
ヒサトは投げやりに言って、武器を突きつけられているというのに緊張感なく首筋を掻く。
「動くなと言っているだろうっ！！」
コルトンが声を上げたときだった。

ギィンッ！！

鋭い音が駆け抜けた。ヒサトを包囲していた船員たちの武器が、根元から落ちる。
「え……」
いつの間にか、ヒサトの手には彼愛用の刃が抜かれている。
もう一瞬。
船員がばたばたと倒れる。コルトンが目を丸くした。
何が、起きているんだろう？
ライガにも分からない。
理解しているのはヒサトの力を知っているトロイだけだ。彼だけが剣を抜こうとして。

だんっ！！

大きな音がしたあと、トロイは剣を抜くことが出来なかった。
トロイたちの前――ライガたちよりも後ろにいたはずのヒサトは、すでに彼とコルトンの後ろに回りこんでいる。
首筋に冷たい刃の感触を感じて、コルトンは青くなった。
横目で見ると、トロイの首筋にも刃が光っている。
「……ライガ」
ヒサトはそのままライガに呼びかけた。
「はい！」
「俺たちの乗っていた船がまだある。乗り込め。とっとと逃げるぞ」
「え、あ……ヒサトは！？」
「後から行くよ。いいから乗って、必死で漕げ」
ライガは一瞬戸惑いを見せたが、ケネスたちを連れて小船のほうへ走った。ヒサトの言葉を信じよう。そう思ったのだ。
少年たちが小船に走っていくのを見送って、トロイはヒサトに声をかける。始めからあんな子供はどうでもいい。目くじらを立てているのはコルトンだけだ。
「……私の部下を、殺したのか」
先ほどヒサトを包囲していた船員たちは倒れたまま動かない。
「いいや。寝てるだけだ。武器は斬ったが、それくらいは補充が利くだろう？」
会話をする剣神と海神の申し子の隙を見てコルトンは武器を抜こうとしたが、ヒサトは見越している。くい、と軽く刃をコルトンの首に押し当てた。
「やめとけ。首を失くしたいなら止めないが」
コルトンは本能的に直感した。剣を抜いた瞬間にヒサトはコルトンの首を落とすだろう。目にもとまらぬ速さで、だ。
――桁（けた）が、違う。

今更ながらに剣神の強さを知った。
手を出したのは間違いだった。心から悔やむ。
「……私を殺すか？」
トロイは首筋の刃にも動じずヒサトに問う。彼がその気なら自分はとうに殺されていると知っていた。
「いいや。死にたいのか？」
「いいや」
予想通りの返答だ。ヒサトに自分とコルトンを殺すつもりはない。ただ、少年たちを逃がすために行動しているだけだろう。それでも刃の感触は冷たく、こちらが何かしようとすれば彼は容赦なく斬るだろうが。
少年たちが小船を漕ぎ、離れだした。
「ヒサト！」
バンダナの少年が声を上げる。
ヒサトは剣を収めて船の舳先（へさき）に歩いていく。一見無防備な背中。好機とばかりにコルトンが部下に合図する。トロイがよせと止める間もない。弓に矢が番えられ、剣神の背に飛ぶ。

ピキンッ！

音だけだ。ばらりと両断された矢が落ちて、そこで初めて何が起こったのかを理解する。
背中を向けている剣神が、飛来する矢を見もせずに斬りおとし、コルトンたちにも分からない間に剣を収めたのだと。
「トロイ、止めさせろ。矢の無駄だ」
顔を向けずに笑みを含んだ声でそう言って、ヒサトはかなり離れている小船を見る。ライガが心配そうに立ち上がってこちらを見ていた。すでに飛び移れる距離ではない。
常人なら、の話だが。
「逃げ場はないぞ！」

コルトンが叫ぶ。老人もこの若者の実力は知った。しかもここにいるトロイは剣神のお手つきと言われている青年だ。ここでヒサトをクールークに引き込めば、どれだけの戦力アップになるのか見当もつかない。ぜひとも捕らえてこちらに引き込みたい。

老人は言い、ライガは不安そのものの表情で立ち尽くす。

ヒサトは笑った。不敵に、にやりと。

まるで不可能など無いと言うように。

「じゃあな、トロイ」

言葉だけが、甲板に残る。

次の瞬間、ヒサトの体は音もなく小船の上にあった。

「ヒサト！」

ホッとしてライガが駆け寄ろうとするのをヒサトは手で制し、

「漕げ」

とひとこと。

「えー、ヒサトも漕いでよー」

チープーが不満そうな声を上げると、彼はにんまりとした。

「俺も漕いでいいのか？　チープー」

「え、なんで？」

ヒサトは手を閃かせた。キキキンキンっ！　何本かの矢が小船の甲板に落ちる。コルトンはまだ追撃をかけようとしているようだ。

「当たってもいいなら、俺も漕ぐが？」

しゃがみこんでチープーの顔を覗き込み、意地悪く訊いてやるヒサトだ。チープーはブンブン首を横に振った。

「イイエ。ガンバリマス」

「漕げーっ！！」

ケネスが悲鳴を上げる。

甲板で、トロイが小船を見下ろしていた。彼が真摯に見ているのはヒサトの姿だ。

そのトロイをライガが見ている。

ああ、この人も、ヒサトを。

ライガの胸はずきりと痛んだ。敵国の、海神の申し子とまで言われている人も、ヒサトを。
あきらめきれずにいるのか。
ライガは顔を上げ、トロイの秀麗な顔を挑むように見た。
――渡さない。
初めてそう思った。
いつ捨てられてもいいと、今までは思っていたけれど、今は。
ヒサトを誰にも渡したくない……！！
ちらりとトロイがライガを見る。視線は一瞬。逸らしたのはトロイ。
遠ざかっていく小船。
交わされた視線と、想い。

「追撃しろっ！　なんとしても剣神を捕らえるのだ！！！」
声を上げるコルトンを、トロイは制した。
「放っておけ。どうせ祖国にも戻れない弱者たちだ。奴らの裁定は海が下すだろう」
ヒサト。
彼だけはどんなことがあっても生き残るだろう。
トロイは確信している。彼は海に愛されている。
ほかの少年たちが死ぬことはあっても、ヒサトは大丈夫だ。
「ですが」
「放っておけ」
剣神の力を得たいのだろう、コルトンは後ろ髪を目一杯引かれている。
それはトロイも同じ気持ちだが、剣神は気まぐれで、気が向かないと動いてはくれないから。
「次の機会も、あるだろう……」
この海の上で生きている限り、彼と再会する機会は必ず、いつか。

永遠の空・１３（後書き）

ウチの剣神、本当に最低なんですけどどうしたらいいですかね（笑）

「何とか逃げられたね」
ジュエルがホッと胸を撫で下ろしている。
「ああ。でも、ヒサトって本当に強いなぁ」
ケネスが感嘆の目でヒサトを見ている。彼ひとりの力で危機を脱してしまった。
「ううー、こわかったぁ」
チープーはへたり込んでいた。
「ごくろーさん。お疲れ」
ヒサトだけが元気だ。ライガは無言で彼のそばに立っている。
「？　どした、ライガ？」
「……ううん」
首を振って、ライガはヒサトの腕にそっと抱きついた。
不安げな態度だ。可愛らしい顔に翳(かげ)りが濃い。
トロイとのやり取りを聞いて不安になったらしいのを、ヒサトは察した。
「なんだ、気にしてるのか」
「……」
「気になるだろうけど、気にすることでもないぞ？」
七年も昔の話。今はライガだけだ。安心させてやりたくてヒサトはライガを抱きしめる。
「……うん」
ライガはヒサトの胸に顔を押し付けた。トロイとのコトはとても気になるけれど、でも、今彼はこうして自分のそばにいてくれるのだ。
渡したくない。誰にも。
ライガはヒサトにしがみついた。
瞬間、ヒサトの腕に引き離される。

「！？」
何か気に障ることでもしたのだろうかとライガは一瞬で不安に包まれたが、ヒサトは腰の双剣に手をかけて体勢を変えた。
「来るぞ」
「え、何が」
ケネスが言うのとほぼ同時。

バシャァアアッ！！

音を立てて波が跳ね上がり、何頭もの翼持つドラゴンが海面に浮かび上がった。小船を包囲するような数だ。
「うーそー！！！？？？」
ジュエルが悲鳴を上げる。クールークから逃れられたと安心したら次はこれか。
とても対抗できる数ではない。
「あー、一匹くらい何とかなるだろ？　後は俺が片付ける」
ヒサトは苦笑し、『海王（かいおう）』を抜き放った。
「え、ヒサト？」
とん、と彼が船の後方に飛ぶと同時に、ライガたちに一頭のドラゴンが吼（ほ）える。
「と、とにかくやろう！！」
ライガの指示で、皆武器を抜いた。
早く片付けて、ヒサトの援護をしなければ！！

ドバァン！！

のけぞってドラゴンが海中に転落していく。
四人がかりでやっと一匹片付けて、ライガは汗を拭いながら振り返る。
「ヒサト……！！」

少年の愛しい人は、刃を納めたところだった。
「あ、あれ？」
チープーが声を上げて首をかしげる。あれだけいたドラゴンが、もうどこにも姿がない。
「おう、怪我ないか？」
ヒサトは余裕でこちらに手を上げてきた。
「ヒサト！」
ライガは駆け寄り、ヒサトの無事を確かめる。怪我どころか、かすった様子もないライガの恋人だ。
「ああ、ちょっと怪我してるな。かすったか？」
ライガの頬のかすり傷を見つけて、ヒサトはそこをぺろりと舐めた。
「ひゃう！？」
真っ赤になるライガが可愛くて、ヒサトの行為はエスカレート。鼻や額にもキスをして、しまいに唇にもキスをする。ヒサトの腕に捕らえられてはライガも逃げられず、一旦キスをされれば逃げる気もなくなってしまう。仲間たちの前だということも頭から飛ぶようなキスだから。
いちゃつく二人から目を逸らして、ジュエルが呟く。
「……ねえ、あの数、一人で倒したのかな、ヒサト……」
同じく目を逸らして、ケネスも呆然と呟く。
「……いないってことはそういうことだろう……レベルが、違いすぎるよなぁ……」
最後に視線を逸らしたチープーが声を上げた。
「あー！！！」
絶叫に、さすがにヒサトとライガも目をやり、
「うわ」
呻く。
こちらに迫り来る、大きな波――。
流刑用の小船ではどうしようもない。

為す術もなく呑み込まれた。

海中で、ヒサトは何とかライガを抱きしめた。

荒れ狂う水の中、さすがの剣神でも身動きは取れない。もみくちゃにされ、意識が遠のいてゆく。

それでもライガだけは離すまいと、ヒサトは腕の中の少年を必死に抱きしめ――彼の腰で、『海王』がうっすらと輝いた。

ふっと意識が回復する。横たわっているのは、漂流中に焦がれた大地だ。体の下の砂の感触からして、どこかの海岸に流れ着いたか。すでに陽は高くなっている。

腕の中にはライガがいた。離さなかった自分の根性に乾杯したい。ヒサトはまず少年の呼吸を確かめようと起き上がろうとして、眉を寄せる。

……右手首に、違和感。平たく言えば、痛い。

流されたときにライガをかばってどこかへぶつけたか、変な具合にひねったか。

自分の手は後回しにして、ライガの無事を確かめる。

息はしている。呼吸も安定しているので、気を失っているだけのようだ。

「ライガ」

呼びかけると、少年はすぐに目をあけた。

「あ……」

「分かるか？　流されたんだ」

「あ、うん……！　ヒサト、大丈夫!?」

やっと意識がはっきりしたらしい。ヒサトはとりあえず落ち着かせるために笑いかけ、それから周りを見回した。

ジュエル、ケネス、チープーが少し離れたところに倒れている。運のいいことに全員がちゃんと同じところに流されたらしい。横に

は壊れてはいるものの小船も流れ着いていた。
津波にあったわりには都合よく、やたらと運がいいような気がする。
ライガが仲間たちを起こして回る。
ヒサトは砂浜に座りこみ、右手のグローブの留め金を外してグローブを脱いだ。
手首が倍に腫れあがっている。
「うっわ、ヒサト、怪我したの？」
チープーが覗き込んできた。
「えっ！！」
最後にジュエルを起こしていたライガがあわてて戻ってくる。青ざめてヒサトの手首を見た。
ヒサトは顔色も変えずに腕から手首に向かって触っていく。筋、骨……折れてはいないと確認できた。
この脱力のような痛みと、手首から先が動かないことから、脱臼したのだと見当をつけ、左手で右手首を押さえる。

ごきん。

抜けていた関節を自分で入れる。ジュエルがひきつり、ケネスが言葉をなくし、チープーがぎゅっと目をつぶった。
ライガが、まるで自分が痛みを感じたかのように泣き出しそうになる。
「ひ、ヒサト」
自分をかばって彼が怪我をしたのはライガにも分かった。
「……関節が抜けただけだ。できれば、そこらから手ごろな板と紐でも拾ってきてくれ。しばらく手首固定しておかんと」
「う、うん」
苦笑してヒサトは頼んだ。このくらいの怪我は物の数にも入らない。消毒がいるわけでも縫う手間があるわけでもないし、しばらく

固定して腫れが引けばすぐに治る。
長いこと一人で旅をしていた彼には、たいしたことではないのだ。
ほかの仲間たちよりも数倍早く、ライガは手ごろな板と流れ着いていた紐を何本か抱えてきた。本当に泣き出しそうだ。
「泣くなよ？　たいした怪我じゃない」
「でも、僕をかばったからでしょう？」
応急処置の仕方くらいは騎士団で習っている。ライガはヒサトの手首に小さな板を両側から重ね、その上から紐を巻きつけ固定する。
「ヒサトだけなら、こんな怪我しなくてもよかったのに……」
とてつもなく強い人。彼の足を引っ張っていると痛感するライガだ。
もっと強くなりたい。この人を護れるくらいに。
気にするなとは言ってくれるけれど、そんなわけにはいかない。大切な人だから、なおのことだ。
「僕、強くなるから」
ライガは泣き出しそうに瞳を潤ませながらも、強くヒサトにそう告げる。
ヒサトのそばにいられるだけの人間に、彼にふさわしいくらいの人間に。
足手まといでなく、そばにいることを誇れるような人間であろうと。
そういう彼の強さを、ヒサトは愛しているのだと、ライガは気がついているのだろうか？

ヒサトの手当てがひと段落すると、ここは一体どの辺なのだろう、という話になった。
旅慣れているヒサトでも見覚えがないところらしい。
とりあえず、歩いてみた。
「ヒサト、後ろにいてね。無理しちゃダメだから」
「へいへい」

ライガが先頭に立つ。
林のほうや洞窟内には怪物の姿もあったが、あまり強くなく、ライガたち四人で何とかなった。
そして、一回りして気がついたこと。
人がいない。いるのは自分たち五人だけだ。
しかも一日かからずに周りきれてしまうくらいに狭い島。
「……無人島、だな」
やっと土を踏めたと思ったら、街どころか人もいないところだった。
まぁ、食べ物は豊富なようだから、ここで暮らしていこうと思えば暮らしていけそうなところではある。
ここでなら、ライガも『罰の紋章』を使うこともさすがになく、平穏に暮らしていけるだろう。
が、いつか飽きること確実だ。
そしてライガの無実も晴れないままだ。
「脱出しよう」
ライガは一も二もなくそう言った。ヒサトとならどこでだって幸せだろうが、今は仲間たちもいるのだ。ライガの無実を信じてくれている人たち。
ヒサトに甘えて過ごす無人島生活を夢見ないわけではないけれど、強くなると決めたから。
ここで止まれない。
手分けして船を修理する材料と食料を集めることにした。
木材とロープとヤシの実。食料は、チープーが集める係をやると名乗り出た。
他をライガ、ケネス、ジュエルで分担する。
ヒサトはライガと同行。右手が使えないので無理をしないよう、ライガが監視するように、とジュエルが言い出したのだ。気が利くというのか、ちょっと怪しい。
「……ただの脱臼だぞ……？」

右手が使えないだけで、左手は普通に使えるのだが。
ヒサトは双剣を扱うだけあって、両手とも不自由なく使えるのだ。
が、少年たちは断固としてヒサトが働くのを反対した。
「クールークの船でもその後のドラゴン戦でも一番働いたんだから、怪我したときくらい休んで！！」
ライガに叱られ、ヒサトは苦笑い。
結構尻に敷かれるタイプなんだろうか、俺？　とか首をひねっている。
それともライガに亭主関白（？）なところがあるのだろうか。
初日、ライガは浜辺でロープを拾う係を選んだ。ヒサトは木陰で休んでいるだけ。
浜辺を走って、時にはかがみこんでロープを拾うライガの姿を眺めているだけでも、実は結構楽しかった。
スケベ親父みたいだな、と思いながらも視線が外せない。
ガイエン騎士団特製規格鎧のような色気がない姿より、私服姿のほうが断然可愛いライガだ。
すんなりと伸びた手足、華奢なようで抱き心地のいい体つき、髪もさらさらで、顔は文句なく可愛い。
よく騎士団内で今まで手を出されなかったものである。それだけはスノウに感謝できる。
もっと美しい男女を腐るほど抱いたヒサトだが、ライガほど瞳が強く美しい人はいなかった。
多分、あの瞳に捕まったのだ。
自分と同じようで違う、海の色……。
「ヒサト？」
ロープを抱えてライガが戻ってきた。じっと自分を見つめるヒサトの視線を感じ取っていたのだろう。頬が赤い。
「あの……どうしたの？　僕……どこかに何かついてる？」
「いや……可愛いなと思って」
「！！」

真っ赤になるライガに、ヒサトは真顔で畳み掛ける。
「つか、足。触りたくなる。お前足綺麗だよな」
「え、え」
「……あー、くそっ、抱きたいな、ダメか」
ガシガシと頭を掻くヒサトに、ライガは口をパクパクして周りを見た。
ちょっと離れたところにチープーがいる。も少し離れたところにはジュエルとケネスがいるだろう。
「こここ、ここで？」
動揺のあまりにどもりまくる恋人に、ヒサトも周りを窺った。
……ここでヤルと、ジュエルあたりは喜んで見に来そうだ。ケネスに見せるのもいやだ。
チープーはネコボルトなので人間の『なんちゃら』には興味ないかもしれないが、油断は出来ん。
ぶっちゃけ、ライガの身体を見るのは自分だけでいい。他の奴には見せたくない。
自分で自分の強い独占欲にあきれながらも、素直に従うヒサトだ。
「……洞窟のほう、行くか」
そこなら、仲間たちも来ないだろう。

永遠の空・１４（後書き）

見境のない剣神……（汗）

永遠の空・15

奥のほうには温泉が湧いていたはず。事後、身体を洗うには都合がいい。

そう思いながら奥まで行って、人影に硬直する。

「！！」

向こうも硬直した。うろこ模様のズボンを履いたような、女の子。

彼女はあわてて水中に飛び込んで姿を消した。

「……珍しいな、人魚だ」

「え、今のそうなの？」

ライガは初めて見る。

「あれが、人魚……」

確かに、耳の辺りとか腕の辺りに人間とは違う箇所が見受けられた。

彼女が消えた水面をぼうっと見ていると、ヒサトに左手で引き寄せられた。

「ライガ？」

「え？」

ヒサトはなにやら複雑な表情だ。

「……ああいうの好みか？」

「ええっ！？　違うよ！？　初めて見たからビックリして――」

上向いたライガにヒサトは口付けてくる。片手が使えないのでいつもよりはし辛そうだが、それでも技巧に長けているのは違いなく。

「は、あ」

ライガは簡単に降参した。いつ人魚が戻ってくるか分からない場所。

でも、もう治まらない。

「ひ、さと……好き……大好き」

好きなのは彼だけ。人魚を見ていた自分に嫉妬してくれたのは、

とても嬉しい。
「右手、使っちゃ、ダメだからね……」
「使わなくて済むようにしてくれるか……？」
囁かれ、ライガはちいさく頷いた。

※※※

戻ったライガとヒサトを見て、仲間たちはなんとなく目を逸らした。
色っぽすぎる。特にライガ。いつもはきらきらと輝いていて澄んでいる瞳が、熱っぽく潤んでいて、時折もらす吐息が悩ましいくらいに情欲をあおる。
誰が見ても、ヒサトと一戦交えてきたと思うだろう。
ヒサトのほうもなんだか気だるげで、こちらもとんでもなく色っぽい。
抱いて！！　と男性も女性も殺到しそうな感じだ。
大人の男性の色気というものを、ジュエルは初めて知ったし、ヒサトがライガを選んだわけをケネスもなんとなく理解した。
「ねえ、どうしたの？　ヒサトとライガ、具合悪いのかなぁ？」
「あああ！！　訊きに行っちゃダメよチープー！！」
「ダメだ！！　行っちゃいけないっ！！」
「えー、なんでー？」
ネコボルトのチープーだけが分かっていなかった。
何を騒いでるんだか。
聞こえてくる声に苦笑して、ヒサトはライガを寄りかからせる。
かなり無理な行為だったので、ライガはぐったりしていた。
それでも少年は満足げだ。どれだけひどい行為でも、ヒサトを受け入れることは嬉しくてたまらない。幸せだと思う。ヒサトのほうはライガにひどいことはしたくないのに、今回は我慢できなかった。
右手が使えていたら痛い思いなど絶対にさせないのだが。

「身体、キツいだろ。寝ていいぞ」
「うん……」
ライガは言われるまま目を閉じた。
ライガの方を抱いていたヒサトの左手が、するりと降りてきてライガの左手に触れ、握り締める。
「！」
ビクンとしてライガは目を開ける。左手。
『罰の紋章』の宿った手。
「いや……ヒサト」
離して、と言おうとしたライガに、ヒサトは、
「いいから、寝ろ」
囁き、強く手を握る。
ライガの不安など見透かしているとでも言いたげに、ヒサトは手を離さない。
恐れていない。
ライガは泣きそうになった。どうして、こんなにも、ヒサトは。
自分の望むことをしてくれるのだろう？
「恐い、よ……」
ライガはヒサトにだけ聞こえるように呟いた。
本当は、とても恐い。
団長のように自分も死ぬのではないか？
ブランドのように、自分も灰になるのではないか？
死。
それはライガの左手に在る。
愛しい人にすがるように、ライガは目を閉じる。
この人のそばに、いつまでいられるのだろう？

グレンとライガは違う。
ヒサトはそれを感じていた。
宿しただけであそこまで衰弱したグレン。

宿しても衰弱の様子が見られないライガ。
何故だ？
年齢か？
単純に体力ならばグレンもライガに引けは取らなかった。団長だけあって鍛錬はしていたし、実力的には実戦経験の少ないライガよりは強かったはず。
ならば、ライガが衰弱しない理由は？
恋人の左手に触れた瞬間、ヒサトは理解した。
脳裏に宿るその影は。
……そうか、あんたが、ライガを。
穏やかに微笑む、彼女。
あの日さよならと届いた声。
『……さよなら……あなた……そして、子供たち……』
それは。
彼女の残した、唯一の。
ならば自分は、ヒサトのするべきことは。
……護るよ。まかせとけ。
かつての、友へ。
肩に寄りかかる恋人は安らかに寝息を立て始めていた。

二日目。変わらず脱出への物資集め。
ヒサトの手の腫れは引いてきたものの、まだ安静にしてなさいと彼は再びライガの監視つきで木陰に座る。
まぁ、この島にはたいして強い怪物もいないようなので、ヒサトものんびりしたものだ。
ライガを見ていると、どーしてもムラムラしてしまうので（長い間の辛抱で、欲求不満が相当溜まっているらしい）ヒサトは木陰に寝転んだ。
手首の痛みは大分引いてきた。あと二日もあれば動かせるように

はなるだろう。
　ここを脱出したら、なんとしてでもオベル王国へたどり着かねばならない。
　ヒサトはそれを痛感している。
　オベル。緑豊かで優しい国。
　『罰の紋章』が眠っていた地――。

「ヒサトってトロイとどういう関係？」
　その日の晩、ずばりとジュエルが言ってきた。
　洞窟へライガと散歩して（さすがに昨日の行為でライガは歩くのが辛そうだったので、今日は何もしなかったヒサトだ）、また奥にいた人魚とちょっと言葉を交わし、それから仲間たちと海岸で晩飯を食べながらの会話で、いきなりこれだ。
「……なんだ急に」
　横に座るライガの目を意識しながら、ヒサトはむっつりと答える。
「え、だってなんか、トロイはヒサトのこと知ってそうな感じだったから」
　それはまぁ、あれだけ切ない瞳でヒサトを見ていたなら、まず気付くだろう。
「結構いい男だったし……ヒサト、ああいう人好みかなぁって」
　ジュエルが何か言うたびにライガの気分は重くなっていく。
　確かにトロイは美形だった。ヒサトは言うまでもなくとてつもなくカッコイイし、二人とも背が高いし、さぞかし並ぶと映えるだろう。
「あー……お前ら卒業するとき、グレンが話しただろう？　七年前のエルイール攻防戦」
「ああ、トロイ一人の指揮する船にやられたって話だろ？」
　ケネスが頷く。確かに団長はその話をしていた。トロイのような指揮官になれと、もういないグレンは言っていた……。
「あのとき、俺はクールークについて、トロイに雇われてた」

「えっ！！！」
絶句。
「ガイエンの騎士団に対抗するためにな。んで、あの攻防戦にも参加した」
そして半数の船を沈めた。剣神の名のまま力を振るい、死を与え、絶望と敗北をガイエン騎士団に送ったのだ。
「団長の親友なのに！？」
「う」
それを言われると反論できない。グレンも確かにあの戦いに参加していて、それでも自分は容赦しなかった。さすがにグレンの船を襲うことはしなかったが。
「……あー、まー、傭兵だったからなー。契約分は働かないとならんし」
「ヒサトって薄情者……」
「うるさい。グレンも分かってたよ。傭兵ってのはそういうもんだ。あいつもいい性格してるんだ！　それを盾に俺をラズリルに呼びつけたんだから」
「はーくじょー」
ジュエルはなおもそう言い立てる。
「で？　トロイとはどういう関係だったの？」
ちっ。ヒサトは内心舌打ちする。ごまかせなかった。
「……まぁ、お前が考えている通りだ」
「うわ、やっぱり？」
予想してるなら訊くなよと、正直に思ったヒサトだ。
「ライガ、先に言っておくが、俺がアイツと関係を持った期間は十日だ。それっきり、トロイとは会ってはいない。再会したのはこの間が七年ぶりだ」
今更トロイとどうこうなる気はない。
「いいか？　誤解するなよ、俺は今、真剣にライガ一人だけだ」

真顔で言われ、ライガは一気に赤面した。言われた本人ではないジュエルとケネスも何故か赤面している。

「分かったか？」

「う、うん……」

ヒサトはやっぱり天然でタラシでもあるんだと、ヒサト以外の全員が思った夜だった。

永遠の空・15（後書き）

たらし。でも恋人にメロメロ。そして、剣神は何か知っている模様。

永遠の空・16

無人島生活三日目。
物資集めは順調で、この分では明日にも脱出できそうだ。
ヒサトの手首は大分いい。でもまだ監視つきである。
物資を集めるのを待ち、また洞窟に気分転換と散歩をかねて行くと、人魚がまた居る。
「……お前たちは、殴らないの？　わたしの皮をはがないの？　わたしたちを……殺さないの？」
長い沈黙の末、見つめてきてそう問いただしてきた。そういや人魚って高く売れるんだよなと思い出したヒサトである。
彼女が自分たちを警戒するのは、長く迫害を受けてきたからなのだろう。
「しないよ」
ライガはやわらかく答えた。
「……お前も？」
人魚はヒサトにも視線を向けてきた。
「ああ。しない」
苦笑する。まぁ、腰に武器を下げている人間を彼女が警戒するのも当然だ。
「……わかった。信用、する」
彼女は微笑み、そして水中に消えていった。
来た道を戻りながら、ライガはヒサトに話しかける。
「あの子、人間を恐がっているんだね」
「ああ、人魚を捕まえて売りさばく連中はいるからな。高く売れるんだとよ、剥製（はくせい）が」
「！　剥製……？　それで、皮を剥がないのって訊いてきたんだね……」
自分が痛そうな表情だ。

「人間にもいい奴と悪い奴がいる。彼女はそれを分かってくれただろ。充分だと思うが」
ライガの肩を抱いて言うと、少年は頷いた。
「うん……」

その晩、疲れがたまっていたのか、ライガは真っ先に寝入ってしまった。
その代わり、いつもは一番早く寝てしまっていたチープーが今夜は起きている。
「ねえ、ヒサトってちゃんと寝てるの？」
「あ？　寝てるに決まってるだろ」
「寝てるとこ見たことないな、いつ寝てるんだ？」
「寝てるよ。遅寝で早起きなだけだ」
ジュエルとケネスとそんな会話をしていると、チープーがねえねえと話しかけてきた。
「この辺ってまるっこいカニみたいなの多いよねえ。アレ食べられないかなぁ？」
「ええ？　あの小さいヤツ!?　無理じゃない？　だってすっごい硬そうだよ？　あたしは魚のほうがいいなぁ……」
「うむ、苦労したところで食える部分は少なさそうだ。他に食えるものを探したほうがいいんじゃないか？」
ジュエルとケネスは同意見。とにかく殻が固そうで食べる部分も少なさそうだと。
「食い意地はってんなー、チープー……」
殻など一刀両断できるヒサトは固さなどどうとも思っていないが、チープーの食い意地にあきれた。
「食べられそうなのにー」
未練がましく呟くチープーの食い意地が、翌日えらいことを引き起こすとは誰も気付かずに夜は更けていった。

無人島生活四日目。
準備が整ったのでそろそろ脱出しようかという日だというのに、朝からチープーの姿が見えない。
狭い島なので、迷子になったとかそういうことはまずないだろうし、そのうち帰ってくるだろうと思っていたら、海から人魚が上がってきた。
チープーを目撃したらしい。彼女はあどけなく罪のない表情で言い切る。
「ネコが『ヌシ』に追われてる。ネコじゃ、勝てっこない。きっと、もう、ネコかえってこれないよ」
頭痛を感じてヒサトは思わず顔を覆った。
「チープー……あのバカ……」
昨夜言っていたことを実行したらしい。
カニを追いかけて、カニの主に逆に追いかけられているのだろう。
人魚がかなりの強敵だと言っていたから、それなりの怪物と見た。
「……見捨てていくか？　自業自得のような気がひしひしとしてるんだが、俺は」
「だ、だめだよっ！　助けなきゃ！！」
昨夜はヒサトの横ですでに寝入っていたライガはチープーとどういう会話が為されたのか知らないが、とにかく見捨てるわけにはいかない。
人魚が教えてくれた高台に行ってみると、ネコボルトはカニに追い掛け回されていた。
「……」
脱力してしゃがみこむヒサトだ。
ライガも呆然と見ている。
小さいカニたくさんと巨大なカニたくさんのカニ一家に追いかけられているチープー。
どことなく、楽しそうだとか考えてはいけない。

チープーはカニを食べてみようとしたのだろうが、逆に食べられてしまいそうだ。
というか、このまま放っておけば確実にネコボルトは食われる。
「うひゃあああ」
悲鳴を上げて逃げ回っているチープーが、転んだ。
「チープー！！」
ライガがあわてて走り寄る。ヒサトも仕方なく剣を抜いた。
まだ右手は固定したままなので、左手しか使わないが、充分だろう。
ザウッと草を巻き上げて一気に近寄り、チープーの前に立ったでかいカニを断ち割る。

ザグンッ！！

硬いはずの甲羅も、剣神の手にかかればそこらの木切れと変わらない。
バッキリと硬いはずのカニを両断してのけて、ヒサトはあっさり逃げろと告げる。
「ほれ、海岸に戻ってろ」
「あ、う、うん」
目を点にしてライガは頷き、チープーを立ちあがらせて退こうとした。このままいればヒサトの邪魔になる。
しかし、カニはチープーを許さなかった。ちっこいカニがチープーを追いかけ、でっかいカニが一匹ライガたちに襲い掛かる。
ヒサトはほかのでかいカニをざんざか断ち割っているところだ。
このくらいは自分たちでなんとかしようとライガは思った。
しかし、ライガたちの腕ではカニの固いガードをくぐり抜けることが出来ず、殻を傷つけることすら出来ない。
左手一本で戦っているヒサトに、これ以上頼りたくない。
ライガは自分の左手の紋章に目を留めた。

一緒に戦っているジュエルやケネスも息が上がってきている。
……この力を、使ってみよう。
恐いけれど、でも、仲間たちを護るために。
ライガは左手を掲げた。

ドクン。

脈動に、ヒサトは動きを止める。バツンと目の前のカニを瞬時に両断しておいて、目線をやった。

ドクン。

ライガが、左手を掲げている!!
「ライガ……ッ!!」
あの時と同じ、光が。

キィヤァアアァアアアーーーッ!!!

あの時と同じ、悲鳴のようなおぞましい音を立てて。
「ライガっ!!!」
止める間もなく炸裂した。

最後のヌシガニが、音を立てて吹き飛んだ。

光のような影。
「……どうだ?」
「おいしい!　今度のも、すごくおいしいよ」
「そうか。よかった……今度は一緒に作ろうな。面白い形のやつを、いっぱい作ろう」

「うん！！」
幸せな親子の会話。
「おとうさん……？」
「来るなっ！！　くそっ！！！　こんな……紋章などっ！！！」
「おとうさん！？」
それもまた、足掻くかのような父と子の会話。
「どうして……どうしておまえに……」
「おとうさん、僕はいいんだ」
「いいか、その力は使うんじゃないぞ……」
「大丈夫……約束する……」
それは、子供を思う父の言葉。
父の心配を知る、子供の言葉。
「おとうさん……ごめんね……でも、おとうさんの村を焼いたあいつらを……僕、放っておけなかったんだ……ごめんね……おとうさん……約束をやぶったこと……ごめんね……ごめんね……」
それは、何度も父に詫びる、子供の、声。
ライガはやるせなく思いながら剣を振り上げる。
痛いね、苦しいね、でも、もういいんだよ。
持っていってあげるから。
君の痛みも苦しみも、僕が……全部。
「おとうさん……もう一度……おとうさんの作ったパンが……
食べたかったよ……」
影は消えていった。

目を開けると、目の前に愛しい人の顔があった。
「あ……」
「気がついたか」
ヒサトがホッとした表情を浮かべる。ライガは彼の膝を枕にして寝かされていた。

「わ、ヒサト、ごめん……っ」
あわてて起き上がろうとするライガを、ヒサトは止める。
「いいからもう少し休んでろ」
「で、でも」
額を押さえ込まれて起き上がれないライガは重たいでしょうと呟く。
「重くない、軽いくらいだ。寝てろ」
ヒサトは言い、それから大きく息をつく。
彼はライガの意識が戻って心底からホッとしていた。今回は助かったけれど、『罰の紋章』がいつライガの命を食い尽くすか分からない。
使わないで欲しい。そう思って行動しているというのに、この愛しい少年は他人のために躊躇なく紋章の力を使うのだ……。
そんなライガだからこそ惚れたのかもしれないが、彼を失うのは冗談でも耐えられない。
考えたくもないのに。
ヒサトはライガの髪を撫でた。
一刻も早く。
オベルに着かなくては。

午後。無人島を出発した。
ヌシガニを倒したライガたちを、人魚が見送ってくれた。
「いつの間に人魚と仲良くなったんだ?」
ケネスが首をひねっている。
「えっと……ヒサトと散歩している間にね」
ライガが言うと、ケネスは視線を泳がせて、ああ、と頷いた。あのときの色っぽいふたりを思い出しているのかもしれない。
一生懸命漕いだり休んだりしているうちに、ヒサトが立ち上がった。表情がうんざりしている。隣に座っていたライガが不思議そう

に見上げる。
「どうしたの？」
「……何か来る」
「え」
ライガも立ち上がった瞬間だ。
この間はドラゴンだったが、今度現れたのは、でかいエイ。
の、大群。
「……こいつら、食えると思うか？」
ゲンナリとヒサトは言いながら剣を引き抜いた。
いつものようにライガたちには一組（二匹）だけまかせて、後はヒサトが一掃する。
ヒサトにとってはたいした相手ではないが、ライガたちを鍛えるのにはいい相手だ。
と、思ったのだが、戦闘終了後にケネスが青くなった。
「……今の化け物に……オールが……」
落とされたというのだ。
ヒサトは息をつくしかない。
オールがなければ本当に波任せに漂流するしかない。どこかの船に拾われなければ、あとはこの広い海上で……死体になるだけである。
「ヒサト……なんとかならない？」
「どーしろと？　ジュエル、お前な、俺を万能の神様かなにかと勘違いしてるだろう」
「いや、ヒサトなら何とかできそうかなーって思っちゃって」
「無理言うな」

数日後の夜。
起きているのはヒサトだけだ。
ライガは彼の肩によりかかり眠っている。ジュエルとケネスも互

いに寄りかかって眠り、チープーは丸くなって熟睡している。
そろそろ限界だった。
まずあと二日ほどで食料が尽きる。水も危うい。
それが分かっているので皆精神的に追い詰められている。
「……」
ヒサトは無言で自身の左手を持ち上げ、グローブに包まれた手の甲に視線を落とした。
助かる、手段。

永遠の空・１６（後書き）

隠し技のある剣神。

永遠の空・17

朝。

近付いてくる船がある。

気がついて皆が歓声を上げた。

拾われた船はヒサトには見覚えがあるものだ。

まず飲み物が与えられ、彼らは喜んで口にしてやっと一息つくことが出来た。

頼りなさそうな男が寄ってきて、どうしてあんなところを漂流していたのかと尋ねてくる。

ジュエルとケネスとチープーが一生懸命事情を話す。

流刑にされたライガを追ってきて、でも彼は無実で、それで漂流していた――サッパリ要領を得ない。

てんでばらばらに喋るのだ。聞くほうも大変だろう。

案の定男はヒサトとライガに助けを求めて視線を向けてきた。

「え……っと」

ライガはちょっと詰まりながらも説明する。変わった紋章により起こった出来事を。

それによって命を失った人の事。そして、今、その紋章は自分の手にあることを。

男はあわててライガの手の紋章を見せてくれと言い出した。

ライガはヒサトを見上げる。見せてもいいものだろうか？

視線を受けてヒサトは頷いてやった。

見せても大丈夫だ。

いや、見せなければならない。

ライガがグローブを外す。男はその手を掴んで刻まれた紋章を確かめるようにまじまじと眺めた。

そしてちょっとお待ちくださいとあわてて船室に引っ込んでいく。

呼ばれてきたのは美しい女性だ。二十歳くらいだろうか。

ヒサトを見て目を見開いた。
「!?　ヒサトさん!?」
「あれ？　お知り合いですか、姫様」
「何を言ってるの、デスモンド。剣神ヒサトさんよ!!」
「!!　え、あ、ええ!?」
剣神。それでデスモンドにもようやく分かったらしい。心の底から驚いている。
ヒサトは苦笑を浮かべ、片手を上げた。
「よぉフレア。久しぶり。リノは元気か」
「はい！　父は相変わらずです。ヒサトさんもあまり変わりませんね。昔から……素敵な人でしたから」
言ってからフレアはあわてて首を振り、一体どうしてヒサトさんが漂流なんてと呟いた。
「あー、まぁ、話はそこの兄ちゃんから聞いたと思うけど」
「あ……」
言いづらそうに言葉を濁したので、フレアもハッとした。それからライガに向き直る。
ライガは不安そうだった。いきなり現れた美人とヒサトが親しげにしているので一気に不安になったらしい。
「あなたね？　紋章……見せてもらえる？」
「あ、はい……」
フレアはそっと少年の手を取り、甲の紋章を見つめる。瞳は何故か悲しく揺らいでいた。
「本当に……こんなことって……」
彼女は呟き、ヒサトに顔を向ける。
今にも泣き出しそうな瞳だ。ヒサトは首を振った。
「フレア、ここで会えたのは都合がいい。俺はライガをつれてオベルに行くつもりだった。連れて行ってくれるな？」
「はい」
フレアは一も二もなく頷く。ヒサトの目的が彼女には分かるのだ。

何故ならば彼女はオベル王国の王女。かつて『罰の紋章』が封じられていた地の姫君。

そして、かつて……。

船室に戻った彼女がオベルの姫だとデスモンドから聞いて、ジュエルとケネスは目が点。

ライガは不安げにヒサトに寄り添う。

肩を抱いてヒサトは説明してやった。

「昔オベルにもいたことがあってな。それでフレアとも知り合いなんだ。先に言っておくが、なんもないからな彼女とは。俺がオベルにいたとき、フレアはまだ十歳くらいだし」

さすがに幼女趣味はない。妹のように思っていただけである。フレアも兄のように思ってくれていただけだろう。ヒサトが個人的に『かまう』相手は他にも山といたのだから。

ライガはホッとしてヒサトに抱きついた。フレアはかなりの美人なので心配だったのだ。

どこにでもお手つきのいるヒサトだから、いちいち気にしていたら身が保たないだろうと分かっているのだが、まだ感情がうまくついてきてくれない。

「大丈夫だ。今はライガだけだから」

「うん……」

軽く口付けられ、ライガは微笑んだ。

※※※

オベル王国について、王宮まで来るようにといわれ、ライガたちはまっすぐ王宮に向かった。活気のある街の中を通り、階段を上がったところにオベルの王宮はあった。

ゆったりとした雰囲気の、開放感に満ち溢れた王宮だ。王宮前の庭園に、一人の男が立っていた。見た感じ、そこら辺の漁師のおっさんである。

「ねえおじさん、王様ってどこにいるの？」
チープーが話しかけると、男はにやりとし、
「そりゃー、王様ってくらいだから王宮の中にいるんじゃねえか？」
と楽しそうに答えた。
じゃあ行こうかと、ライガたちが王宮に足を向ける。ヒサトはちょっと立ち止まり、ニヤニヤしている男に呟いてやる。
「……子供をからかうなよ」
「嘘じゃねえだろ？」
「嘘に近いだろうが。王宮になんざ滅多にいねえくせに」
「はっはっは、ほらいいのか？　置いていかれるぜ」
「ったく。ちゃんと会ってやれよ！」
言うと漁師風の男は応と言うように片手を上げた。

ライガはぽかんとして目の前のオベル王を見た。
立っているのはさっき庭園であった漁師風のおじさんだ。
「ええー！！　王様だったの！？」
隠さずチープーが驚きの声を上げる。どう見ても漁師にしか見えなかったのだろう。
無礼なと、脇にいた腹の出た中年の男が声を上げるが、王は笑っただけだった。
「無理もねえよな。どう見ても浜辺の漁師のおっさんだぞ」
威厳はない。ヒサトが指摘すると王――リノ・エン・クルデスは豪快に笑った。
「お前も変わんねえな、ヒサト。言いたいことはすっぱり言い切るあたり、恐いものを知らん男だ」
「やかましい。俺のことを言えるのか」
「言えんな」
わはははと、また笑う。豪放磊落（ごうほうらいらく）な男だ。
それがイヤミでなく魅力になっている。オベルの民はそういう王をとても慕っているのだ。

「まじめな話をしに来たんだ、聞け」
挨拶のじゃれあいをさておいて、ヒサトが言うと、リノも表情を変え真顔になる。フレアからある程度報告を受けているのだろう。
「……紋章を見せてもらえるか」
「……はい」
ライガがグローブを外す。リノはその手を覗き込み、確かにある紋章に顔をゆがめて息をついた。
「……確かにな」
そして話し出す。ヒサトも知っている話だ。
かつて『罰の紋章』はここにあったこと。封じられていて、開放されてしまったこと。
その紋章は宿しているものの命を食うこと。使えば使うほど宿主は命を食われ、喰らい尽くしたらまた次の宿主に宿り……繰り返して次々と宿主を変えていくこと……。
ライガの顔色は青ざめた。
だから、ブランドや団長はあんなふうに死んだのだ。
これで納得がいった。
喰らい尽くされれば灰になる。遺体も残らない。
そして紋章は無作為に近くにいる人間に宿るのだ。
ただ近くにいるというだけで、次の犠牲者になりかねない。
左手に視線を落とす。手の甲に宿る紋章。
使うたびに見る夢のようなあの影たちは、今まで紋章に食われた人たちなのだろう。
いつか、自分もああなるのか。
ヒサトがライガの肩を包むように抱く。
「リノ。遺跡に入る許可をくれ」
「遺跡……ああ、かまわん。行って来い。ライガ、遺跡には『罰の紋章』を知る者がいる。行って話を聞くといい」
それからと、王はライガに話を持ちかけた。オベルに滞在する許可をやる代わりに、人材を集めてくれないかと。

ラズリルで罪人として流刑になったライガを置いてやるのだから、それなりに働いてくれという。ライガには頷くしかない。置いてもらえるだけで充分ありがたいのだ。断れるはずもない。

「で、だ。ヒサト」

「断る」

ヒサトはにべもない。が、リノも簡単にはあきらめない。

「クールークが」

「断る」

「この辺を哨戒（しょうかい）」

「断る」

「近々攻めて」

「こ・と・わ・る！！」

リノは息をついた。どうも、無理っぽいと悟ったらしい。

「……金は出すぞ？」

「今はそれどころじゃない。悪いが先にやらなきゃならんことがある」

一刻も早く、ライガを『罰の紋章』から開放してやりたいのだ。せめて命を削られることがないようにしたい。

「何だぁ？　ずいぶん面倒見が良くなったな。ラズリルに長くいて性格変わったのか？」

「やかましいわ。ライガに面倒な仕事押し付けやがって。あまり無理押し付けると本気で暴れてやるからな」

キッパリと言い切ると、リノはいぶかしげな表情になった。

「？　こいつお前のお手つきか？　にしてはなんか……いつもと態度が違うような」

「本命だ」

言い切ると、リノは言葉を失った。反応が亡き親友、グレンと同じである。

むかつく。正直にそう思った。

「そんなに俺に本命が出来たことが意外か。グレンと似たような反

応しやがって」
今までどんな行動を取っていたか、よく分かるだろう。
「……団長にも言われたんだ、やっぱり……」
「……一体どんだけの人に手を出したんだ……？」
「すごいねぇ。ヒサト、モテモテだったんだぁ」
背後で無責任にはやし立てる外野。
「マジかっ！！？？」
そして、驚きすぎるほど驚くリノ。
そこら辺りまでグレンと同じ反応なので、ヒサトははっきりと額に青筋が浮いたのを自分で感じた。
「そんなに意外か、俺が本命作るのはっ！？」
「何言ってんだ、当たり前だろう！！」
間髪入れずに断言しやがるリノである。
ちょっと殺意を覚えたヒサトだ。そこまで意外に思われるようなものだったかと、過去の自分の行いを思い返して……咳払いする。反論できなくなった。
「……とにかく、ライガは俺の恋人だからな。あまり無茶させるなよ。お前らが無理させてると感じたら俺は遠慮なく暴れるぞ」
「か、カンベンしてくださいよぉ」
デスモンドが泣き出しそうな声を出した。リノに言われてこれから彼がライガの補佐につくのだ。ヒサトの敵意が真っ先に向きそうな立場に立たされていることを恐れている。
「はっはっは、大丈夫だ、そのときはあんたからじゃなくてリノからヤるから」
さらにおっかないことを言われてデスモンドは余計にあわてた。
「うわわわ、カンベンしてくださいよっ！！」
「……マジなんだな……」
リノは目を真ん丸くしている。反対にさっきまで不安げだったライガは真っ赤っ赤だ。
ヒサトが自分を恋人と公言してくれるのは嬉しいけれど、恥ずか

しい。
そして少し不安になる。リノ王もヒサトの過去を知っているのだ。訊いてみたいが、訊くのは恐い。なんだかとんでもない話ばかりが返ってきそうだ。
まだぎゃあぎゃあリノ王に文句を言っているヒサトのジャケットの袖を、くいくいと引っ張る。
「あ？　おお、行くか？」
ヒサトはすぐに振り返ってくれた。ライガには甘い。
「う、うん……」
王に頼まれた人材探しもしなくてはならないし、『罰の紋章』を知る人の話も聞きたい。
出て行きかけたライガたちに、リノは東の岸壁にある洞窟を貸し出すのでそこを拠点にしろと申し出てくれた。
とりあえずはそこを見て、少し休んでから遺跡か人材探しに向かうことにした。

永遠の空・17（後書き）

オベルでもいろんなことをやらかしていた模様。

永遠の空・18

岸壁を歩き、雄大な景色を堪能しながら洞窟にたどりつく。
中に入って驚いた。じめじめしているただの洞窟かと思いきや、内装はしっかりとされていて、どこかのサロンのようだ。
しかも、広い。
洞窟を建築したというトーブや、もう少ししたらここに道具屋を開きたいといっているシャドリ、酒場兼宿屋をするというルイーズなどが新たに仲間に入った。
「ライガ様、二階にお部屋を用意させていただきました」
トーブに言われ、ライガは目を丸くした。自分に、部屋!?
しかも『様』づけされている!!?
「え、いえ、僕そんな大層な人じゃないんで……っ」
あわてるライガに、ヒサトは笑いかけてやる。
「いいんだよ、リノの代理で人を集めるんだから。ここではライガが一番偉いんだ」
「そ、そんなこと……」
ヒサトのほうがよっぽどふさわしいだろうに。
「いいから。威張りくさって命令してやれ」
ヒサトは面白そうに笑っている。
遊ばれているなぁと思いながら、ヒサトが自分の緊張をやわらげてくれているのを感じる。
だから、甘えようと思った。
「……じゃあヒサト、一緒に来て。最初の命令」
「お、俺にきたか？　いいぜ、どこに行く？」
「僕の部屋」
むっかりとした表情を作って言ってやると、ヒサトは瞬いた。
それから、笑い出す。
「あははは、分かったよライガ様。この剣神ヒサト、どこまでも

お供しますとも」
　優雅に一礼してみせる。貴族のような綺麗な姿勢に、その場の誰もが見惚れたくらいだ。
「それでは、恐れながらエスコートさせていただきましょう」
　するっとさりげなく、けれど大切そうにライガの左手を取る。からかおうと思って言ったのに、逆にそんなに優雅に対応されてライガは真っ赤になる。
「っ、ひ、ヒサトっ」
「さあさ、ライガ様、こちらへ」
　微笑んでヒサトはやわらかくライガの手を引く。誘われるようにライガは続くしかない。
　……彼らがサロンを出て行ってから、ルイーズがうっとり呟いた。
「……イイ男ねぇ……」
　ジュエルが呆然と閉まったドアを眺めて言う。
「ヒサトって……ほんとにタラシだわ……」
　あんなふうに大切そうにされたら、きっと誰だってヒサトにすっ転ぶ。

「あ、あの、ヒサトっ？　じょ、冗談なんだけど……」
　階段を上りながらライガはヒサトに焦って言う。部屋まで来てなんて、なんて大胆なことを言ったのかと今更ながらに恥ずかしい。
　しかもこんなふうにエスコートされるなんて。
「……部屋見とくくらいいいんじゃないか。どうせもう夜になるし」
　振り返ったヒサトはいつも通りだった。にんまりと笑っている。
「俺の手も治ったし、な」
　ぐいとライガを引き寄せる、力強い腕。
「……それとも、サロンに戻るか？」
　ずるい。ライガは痛烈にそう思った。そんな目で、そんな声で、そんな風に言われたら。
　断れるわけないのに。

「……部屋、行く」
消え去りそうな声でライガは答える。
無人島の洞窟で抱かれてから、もう数日が過ぎている。その間、軽いキスだけだ。
だから、我慢なんて出来ないし、したくもない……。

※※※

ぐったりとしているライガの体を拭いてやり、服を着せてからヒサトは汚れ物を持って部屋を出て行った。
ライガはヒサトが取り替えてくれたシーツに顔を押し付ける。ヒサトがいないと途端に不安になった。
左手に目をやる。
『罰の紋章』……このせいで死んでいった、人たち。
いつか、ライガも？
そのときだ。人の気配が室内に現れる。
「！？」
だるい身体を押して起き上がる。薄ぼんやりと光る人影。
女性だ。彼女は突然現れた非礼を詫びてから、名乗った。
レックナート。彼女は『罰の紋章』の意思を見守り続けるといった。
これからのライガのことを見続ける、と。
彼女は真の紋章が世界にもたらす出来事を見守る、バランスの執行者と自らを評した。
だから、『罰の紋章』がこれから何を為すのか、見届ける、と。
ライガの命を喰らい尽くしてほかの誰かに移るのか、それとも他に意図があるのか。
まだ、それは分からないけれど。
それでも、最後まで見届けましょう。
言って彼女は消えた。

残されたライガは呆然と左手を見る。
所有者の命を喰らう『罰の紋章』。これが、何かを為そうとしているのか？
ドアが開いてヒサトが戻ってきた。ライガの様子に顔色を変える。
「どうしたライガ！？　左手、おかしいのか！？」
「あ、ううん……今、レックナートって名乗る女の人が現れて……」
「れっくなあとぉ？　あのアマ……タイミング計ってやがったな……」
苦く呟くヒサトにライガは驚いた。
「え、知り合いなのっ？」
人の部屋に一瞬で出たり入ったりするような不思議な女性と、どこでどう知り合ったというのだろう？　ひょっとして、彼女もヒサトのお手つきなのだろうか。
「いや、あんまり知り合いたくない。つか、知り合いじゃない。うん」
ヒサトは彼女のことがあまり好きではないらしい。故意に存在を忘れようとしている。
やはり知り合いであることに間違いはないようだが、訊かないほうが良さそうだ。
ヒサトはそれ以上何も言わずにライガを抱きしめる。
ライガも彼に抱きついた。それだけで不安が溶けていく。充分だった。
ヒサトが何を隠していてもいい。それでも彼と共にいたいのだから。

まずは遺跡に向かうことにした。
とにかく『罰の紋章』のことを知らねばならない。使えば使うほど命を削るもの。
その回避策はないのか。

すこしでも手がかりが欲しかった。
団長殺しの無実を証明する前に、紋章に殺されるかもしれないのだ。
ヒサトは無論のこと、ジュエル、ケネス、チープーもついてきてくれた。
遺跡の前にはまだ十歳くらいの男の子が立っていた。彼は名をラクジーと言い、オベル遺跡の案内人をしているという。
ラクジー。
剣神ヒサトに目を輝かせている少年を眺めてライガは首をかしげる。
どこかで、この子の名前を聞いたような……。
ラクジー少年を連れて遺跡の中を進むが、少年は案内するのは初めてで、中の構造をよく知らなかった。
「まぁ、いい鍛錬だとでも思え。この子は俺が護るから、お前らは頑張って怪物殴るように」
ヒサトは苦笑してそう言った。どこの怪物でもそうだが、剣神の力を振るうほどでもないので、ライガたちの鍛錬代わりにいいだろう。
危なくなったら即座に助けには入るつもりだが、よほどでない限りは大丈夫だと見越している。
「え、戦わないんですか、ヒサトさん」
剣神の力を見てみたいらしいラクジーはちょっとガッカリしている。
「ああ、このくらいならライガたちの鍛錬にちょうどいいかなぁと」
「……ヒサトが前に行ってくれたらラクなのにぃ……」
「チープー？　あまり俺に頼ると、皮剥ぐぞ？」
にこやかにエグいことを言ってのけるヒサトだ。
「もう言いませんっ」
「あ、こんがり焼くのもいいかな。どっちがいい、チープー？　多分俺の魔力なら灰も残らんが」

右手に宿している上位紋章・烈火の紋章を示しながらなおも笑いかけてやる。
「もう言いませぇぇえんっ！！」
半泣きでチープーはライガの背中に隠れた。
「あ、てめえ、ライガの後ろに隠れるな！　ライガに触って良いのは俺だけだ！！　マジで殺すぞっ！！！」
「うわ、大人気ない」
子供なジュエルに言われた。
ヒサトはさっきまでチープーに向けていた笑顔を彼女に向ける。
「……ジュエル？　あとでゆっくりお兄さんとお話でもしようか」
こっちに矛先が向いたー！！　とひきつるジュエルである。
「イエ、結構デスっ！！」
逃げたチープーが通路の端っこで怯えているのを見て、ライガは苦笑した。
「もう、行くよ皆！　ヒサトもチープーやジュエルで遊ばないでね」
「へいへい。んじゃ行こうか、ラクジー」
けろりとしてラクジーの手を引くヒサトだ。ライガにはやはり、甘い。
「……ライガが神様に見える……」
心底から呟くケネスだった。

遺跡内を怪物を片付けながら進み、もうすぐ出口だとラクジーが教えてくれたとき、
「何か来るぞー」
ヒサトが言いながらラクジーを抱えて後ろに跳んだ。
構えたライガたちの目前に、大きなゴーレムが現れる。
「遺跡の番人です！！」
ラクジーが叫んだ。
いかにも硬そうなゴーレムだ。ちらりと見ただけでヒサトは前線に出る気配がない。

ライガたちで充分倒せると見ているのだろう。彼がそう判断しているのなら、自分たちだけで倒せるのだ。ライガは思い、剣を構えた。

ヒサトのように強くなるために、戦う。

何とかゴーレムを倒して奥の出入り口をくぐると外に出た。

「ここまではアイツは来れませんから、もう安心ですよ」

ラクジーが走っていく。ついてゆくと少し開けた場所に出た。

小さな小さな墓のような盛り土と、その脇に枯れた巨木が立っている、どこか悲しい場所。

そこには一人の女性が立っていた。彼女は、ラクジーの母で、リキエと名乗った。

リキエ。その名にもライガは聞き覚えがあるような気がする。

その理由が、リキエが話した内容で分かった。

リキエの夫、ラクジーの父もまた『罰の紋章』の犠牲者だったのだ。

紋章を宿したとき、彼は妻子に危害が及ぶのを恐れて姿を消した。消えた夫の手がかりを求めて、かつて紋章が封じられていたこの地へ親子はたどり着いたと言う。

ライガが自分の手の甲を示すと、リキエは泣き崩れた。

自分を犠牲にして、紋章が他者を食わないようにと一人去った夫。紋章がここにあるということは、彼女の夫はもう死んだということだから。

たった一人でさまよい、疲れ果て、どこか遠くでひとり、力尽きた夫……。

どう慰めようもなく、そっとするのが一番だとヒサトに言われて、ライガたちは一旦戻ろうとしたが、止めたのはリキエだった。一緒に連れて行ってくれと言う。

夫の命を奪った紋章。自分たちの幸せを奪った紋章。

でも、その紋章のそばにいたいのだと。

夫をそばに感じるような気がするのです。と。
ライガは思い出す。紋章の記憶。
ラクジーとリキエを呼んでいた、あの声。
あれは、リキエの夫、ラクジーの父の記憶だろう。
ライガは頷いた。彼らがそれで少しでも悲しみから逃れられるのならかまわない。
きっとあの人もそれを望むだろう。
最期まで、家族を思っていた人だから……。
「じゃあ、戻ろうか」
ケネスが言って振り返ったとき、ヒサトがそのフードを掴んで引っ張り戻した。
「ちょい退がってろ」
「え」
何気ない動作で前に出るヒサトの眼前に、いきなり落下してきたもの。
さきほどライガたちが遺跡内で倒したはずのゴーレムだ。
「!!　ここまで来れないはずなのに……!!」
ラクジーが驚き、リキエが声を失う。
「ヒサト!」
ライガが声を上げた。ゴーレムはさっきはなかった両腕を生やしていて、明らかにパワーアップしている。
ヒサトは予想していたのだと思う。だからケネスを引っ張り戻した。
でも、彼一人で大丈夫だろうか、加勢したほうがいいんじゃないか。足を引っ張る可能性のほうが高いかな。どうしよう。
迷うライガの目前で、ゴーレムはヒサトに左腕を飛ばした。当たれば骨が折れそうな勢いだ。
「ヒサトさんっ!!」
ヒサトの噂しか知らないラクジーが悲痛に声を上げる。
ヒサトは顔色も変えずにそのまま動かない。まともに腕が彼に当

たると思われた。
が。
ヒサトの目前で腕はゴトンと地面に落ちる。落ちてからぽっかんと真っ二つに割れた。
「え」
きょとんとするラクジー。
「……なんかさ、心配するだけ損だよね」
チープーはのんびりした声でそんなことを言っている。ヒサトはすたすたと無防備にゴーレムに近寄って、無造作に剣を振り上げて——剣を収めてしまう。
「え、え??」
ラクジーとリキエが目を点にしている。
「ヒサト!!」
くるりと振り返ってこちらに戻ってくるヒサトに、ライガが駆け寄る。
彼が何をしたかは見えなかったが、予想はつく。
剣閃が速すぎるのだと。
ライガがヒサトに抱きつき——その前方でゴーレムが五つほどに分かれて崩れた。
「!!!???」
「……あ、あのう、今、何が……?」
あわてていないジュエル、ケネスにリキエが訊くと、二人は苦笑した。
「まあ、あれが剣神の実力ってやつですよ」
「そうそう。速すぎて見えないの。うーん、ヒサトはゆっくり動いてくれたんだろうけど……やっぱりあたしたちには見えなかったなぁ……」
歩き寄った辺りからしてすでにヒサトは余裕だったのだと、何度か彼の力を見た今なら理解できる。
「見えたか?」

「ううん、全然。ごめんね、ゆっくり斬ってくれたのに」
彼が自分たちに分かるように、なるべくゆっくり斬ってくれたのだと見当はついたが、その剣閃も全く見えなかった。
謝るライガにヒサトは笑いかけ、
「まぁいいさ、見えなくてもかまわんし、強くはなれるもんだ」
言い切った。
「……カッコイイ……！！」
ラクジーが呟く。瞳がきらきらしていた。
ここにもまた、剣神に魅せられ、捕らわれた少年がひとり。

一度洞窟に戻ると、デスモンドが港にある船を使ってもいいと、リノからのお達しがあったと教えてくれた。
オベルだけでなく、さまざまな島から対クールーク要員を集めてこいとのことなのだろう。
「……リノ斬ってもいいか、デスモンド」
「止めてくださいぃっ！！」
「ダメだよヒサト」
早速粛清（しゅくせい）に走ろうとしたヒサトをライガは苦笑して止めた。

永遠の空・１８（後書き）

４でも５でも何もしてくれなかったレックナートさん。１と２では弟子貸してくれたのになぁ（笑）夜這いだけか、するのは（爆笑）

永遠の空・19

何でほかの島まで回らないとならんのだと、ぶつくさ腐るヒサトを連れてライガたちはネイ島やナ・ナル島を回った。

新聞作らせろと熱意溢れるペローやナ・ナル島で詐欺のような一騎打ちをけしかけていたミツバという少女と、共犯ラインホルト、それからオベル国内で見つけたフラレマン・ダメ男オルナン。

「いつまでも女のケツ追いかけてんじゃねえよ。女なんて腐るほどいるじゃねえか。自分に甲斐性がなくて逃げられたことぐらい気付け」

『罰の紋章』の力から逃れられる方法を見つけられなくて機嫌の悪いヒサトに、オルナンはぐっさりとトドメを刺されていたりしたものの、仲間集めはとりあえず順調だった。

再びオベルから仲間探しに出航したライガたちの船に、海上で声がかけられたのはそんなときだ。

「おーい」

呼ばれて海上を覗き込んだライガに、手を振っているのは無人島で会ったあの人魚だ。

「あ、あの子！」

「んあ？」

ライガの背後から覗き込んだヒサトに、人魚は必死に手を振っている。

ただならない様子に、彼女を船上に乗せて事情を聞いてみると、どうやらあの島にタチの悪い人間がやってきて、彼女の仲間たちを攫っていったらしい。そういえば、とライガは思い返す。

洞窟で出会った彼女――リーリンと名乗った――が人間を恐がっていたことを不思議に思ったライガに、人魚の剥製は高く売れるのだと、ヒサトが教えてくれた。

「……そういうことしそうなのは……クレイ商会あたりか」

ヒサトには心当たりがあるようだ。ライガもその名を聞いたことくらいはある。

いろいろと後ろ暗いことをやって『死の商人』とも言われているような商会だ。

「わるいふね、近くにいる。お願い、たすけて」

リーリンはすがるように言ってきた。他に頼るものはないのだろう。

仲間を連れて行った船に追われて、彼女にも行くところがない。

ライガがそんな彼女を見捨てることが出来るわけがなく、少年は迷いなくクレイ商会の船を追いかけた。

近くをリーリンを捜してうろついていた商船は、彼女がこちらの船に乗っていることを知り、すぐに横付けしてきた。

「いらっしゃーい♪」

そこに待ち受けていたのは、愛剣を携えたヒサトである。

勝負など、一瞬だ。ばたばた倒れる連中を、ケネスとチープーが一生懸命海に放り込む。

「剣神のエジキになりたいひと、まだいるー？」

わざとジュエルが商船に向かって叫ぶと、ヒサトが誰なのか理解した商船はあわてて踵を返した。

「撃てっ！！」

ライガが砲撃を許可して、お仕置き完了。

リーリンはきゃあきゃあ喜んで、ライガたちといるとわたしも仲間に会えるかもしれない、と仲間に加わってくれた。

人魚を仲間にして、オベルに戻ろうとすると、

「おめえらか！？　人魚をとっ捕まえて売りさばいている不届き野郎は！？」

何かを勘違いした海賊船が近寄ってきた。

確かにこちらにリーリンが乗ってはいるが、別に拘束しているわけでもなく、かえって彼女は海賊に怯えてライガとヒサトの後ろに隠れるくらいだ。

「何勘違いしてんだ？」
「うるせえ！！　天誅じゃあ！！」
聞く耳を持っていない。どうやら状況把握が出来ない男らしい。
「やりましょう、パパ！！」
横にいる少年も、なんだかあおっている。
「……馬鹿親子って、どこにでも結構いるんだな……」
どこか遠い目でヒサトが呟くのを、ライガが聞きとめて苦笑いを浮かべた。多分、彼と同じ親子を思い浮かべている。
ラズリル在住、能無し親子。
「あの、誤解です、僕らは――」
ライガの説得も全く無駄だった。挙句（あげく）、砲撃してくる。
仕方なく応戦して、しばし。
あっけなくライガたちの勝ちで決着はついた。
「パパ、応援を要請するしかないですよ」
「おう！」
こちらを見上げて睨み付けてくるところを見ると、まだあきらめていないらしい。
「……俺、あっち乗り込んで船員みんな斬殺してこようか？　このくらいの距離なら余裕で行って帰ってこれるし。どーするライガ？」
「ヒサト……あんた本当にやれるからシャレに聞こえないよ……」
ケネスがぐったりと突っ込む。
「いや、三割ほど本気なんだが」
「……三割で全滅させられるんだ……」
ジュエルも乾いた笑みを浮かべて突っ込む。
何せこの男は強すぎるので、行って♪と、ひとことライガが頼めば本当に全員殺して帰ってくるだろう。
実行できるのが分かっているので、ライガも迂闊に頷けない。ぶるぶる首を振ってヒサトを止めていると、一隻の船が近付いてきた。
「うげ」
見つけたヒサトが呻く。見覚えがある船だ。

大きな船だ。そしてどこか威厳のようなものを感じさせる。
甲板に乗っているのは、背筋をきりりと伸ばした女性。
「キカ姉！！」
「……ダリオ、何をしている？」
「え……何って、正義のために人魚をさらったやつらに天誅を――」
言いかけた海賊ダリオに、キカはため息混じりに言い返す。
「……正義のために戦うと言うならば、まず、戦う相手を間違えぬことだ、ダリオ」
「へ！？」
キカと同じ船に乗っている青年が、ライガの後ろに隠れるリーリンを見て、
「あれのどこが攫ったって？　どう見ても保護してるだけ――」
目を見開いた。
「ヒサトォッ！？」
少年の横に立って頭痛を感じているかのように顔を押さえている青年の名を口にする。
また、彼の知り合いらしい。
「何故あなたがここに――」
もう一人、黒髪の青年が呟く。キカも眉を寄せた。
「ヒサト、お前、今、ラズリルに滞在しているのではなかったのか？」
「……情報が旧いぞ、キカ」
そう返すしかないヒサトだ。頼むからもうあんまり突っ込まないでくれと態度が言っている。
ライガのこっちを見る視線が、イタイ。
また美人。しかも隣の青年たちも美形。その上やたらと親しげ。
ねえ、どういう関係なの？
――目が不安に揺れているのが分かるのだ。

「オベルにいるのか」
船体を見てキカはそう判断した。
「まぁな」
言葉少なくヒサトは返す。
「ヒーサトー♪　また会えるとは思わなかったぜ。なぁなぁ、もう一回俺とさぁ」
嬉しげな茶髪の青年に、ヒサトは断固として返す。
「知らん！！　知らんぞ！！」
横にライガがいるんだってーの！！内心冷や汗ものである。
「ハーヴェイ、お前も彼と？」
「あ？　シグルドもか？」
「……ほほう、それは初耳だ。いつくらいだヒサト？私と別れた後か？」
海賊三人に言われた言葉にヒサトは頭を抱えたい気分になった。
ええっ！！　キカ様もですかっ！！？？　私は八年前でとか、俺も八年前です、とか何とか騒いでいる海賊なんぞどうでもいい。
「お前ら何しに来たんだよっ！！？？」
はよ帰れっ！！　心からそう叫びたい。
こいつらが去った後、ライガに何をどう告げるかで心底から困っているのだ。
「……ああ、部下の非礼を詫びよう。すまなかった」
ライガに向けてそう告げて、キカはヒサトに向き直る。
「ヒサト。私は以前言ったこと忘れてはいない。お前も忘れてはいないと思うが」
「……知らん。忘れたっ！　いいから行けっ！！　そいつがこっちに砲撃したことは忘れてやる」
ダリオがヒサトの言葉を聞いてなにをぉっ！？　といきり立ったが、ハーヴェイの言葉に止まった。
「バーカ。お前、誰にケンカ売ってんのか分かってんのか？　剣神だぞ？」

「へ」
「け・ん・し・ん。この海で最強の男だよ」
「へぇぇっ！？」
目を丸くするダリオ。どう見ても優男にしか見えないから、高をくくっていたのだ。
そこでようやく思い出す。ラズリルに攻め込んだとき仲間の海賊をひとりで斬殺しまくり、紋章砲を紋章魔法で相殺してのけたのがこの男だということに。
シグルドが苦笑した。
「殺されなくて良かったな。彼にかかったら、あっという間に死んでいるぞ、ダリオ」
「うへぇ……」
ダリオだけでなく、余計なことを言いやがったここにいる海賊連中皆殺しにして、過去の隠滅を計りたい心境のヒサトだ。
何が悪いって全員が全員ヒサトに未練たっぷりなのが悪い。
キカなど今にもヒサトを引きずって帰りたそうな感じだし、横の美青年たちも同様だ。
ライガがいるのだ、横に！！！
「帰れ」
「そうだな、私にも用がある。では、ヒサト、いずれまた」
「いらんっちゅーに……」
余計な挨拶を残してキカ一味は去っていった。
残されたのは、ライガとのイヤ～～～な沈黙。
「……ヒサトって、面食いだよね」
「ジュエルっ！！　しーっ！！」
ケネスがあわててジュエルの口をふさいだ。そのままヒサトとライガから遠ざかる。チープーがこっちに来ようねーとリーリンを引っ張って、ケネスたちのところに避難した。
「……オベルに帰港する！！」
ライガはひとこと指示して、そのまま甲板の後方へ行ってしまっ

た。ヒサトと顔を合わせないまま。
「……キカ……今度会ったら一味全員ぶっ殺す……」
理不尽な八つ当たりを呟いて、ヒサトはすぐさまライガを追いかけた。

自分の中で暗いもの、汚いものがどろどろと渦巻いているような気がする。
その名を、嫉妬というのだと、ライガは知っている。
欄干に額を押し付けるようにして、潤みかけてきている瞳に力を入れる。
泣きたくなかった。こんな汚い心をヒサトに見せたくもない。
昔のことなのに。ヒサトは今、自分だけだと言ってくれて、現に全部を捨ててライガのそばに居てくれているのに。
それでも、イヤだった。ヒサトに誘いをかける人全部を切り裂いて、誰にも彼を渡したくないと思う。
「僕の……ヒサトなのに……ッ！！！」
呻くように望みを吐き出す。誰も見ないで。僕だけを見ていて。
そんなの、ヒサトは一番嫌うだろう。誰よりも自由な人だから。
束縛したくないのに、縛り付けてでも離したくないと思ってしまう。
こんな考え、嫌われる。
嫌われるのは耐えられない。だからこんな考えを彼には話せない。
「ヒサトぉ……」
一番醜い自分。あの船に乗っていたヒサトの知り合いの海賊たちはみんな綺麗な人ばかりだった。ジュエルが呟いた言葉。
『ヒサトって面食いだよね』。自分もそう思う。すごく綺麗な人たちばかり。
トロイだって綺麗な人だった。
でも、自分は？　ライガは？
「――怒っていいぞ」

「！！」

ライガの身体の両脇に手を突く人。それによってライガは彼にすっぽりと抱き込まれてしまう。

「言い訳をいろいろ考えた。でも、上手いのは思いつかない。何を言っても傷つけるような気がする。だから、怒ってくれ。そのまま、受け止める」

ただし、と彼は続ける。

「それでも、俺はお前を離さない。どれだけ傷つけても悲しませても、別れる気はないからな」

「……バカぁ……」

ずるいと思った。彼の言葉だけ、それだけでライガの涙は止まらなくなる。

背中越しの体温。愛しい人。誰よりも愛しい人。それだけは確かで。

「……どうしたらいい？　言ってくれ」

ずるい人。ライガは心の内の醜くドロドロしたものを全部吐き出した。

「……僕だけ……見てて……！！　僕だけって……言って……！！」

ヒサト、ヒサト、ヒサト。

ライガの愛しい人。

「ライガ、ライガだけだ。ライガだけだよ。これから先の未来の果てまで、お前だけだよライガ……」

欄干に突いていた腕が、優しくライガを抱きしめた。

ぼろぼろと涙をこぼしながら、ライガは彼の腕にすがるように告げる。

「……離さないで……そばに、いて……！！」

「誓う。そばに居る。お前が嫌だと言っても……そばに居る」

その言葉だけで、生きていけるから。

「ヒサト……愛してるの……好きなんだ……ヒサトだけ……！！」

こんなに人を好きになれるなんて、考えたこともなかった。こん

なに苦しいものなんて、想像したこともなかった。そして、愛されることがこんなにも幸せなことなんて、思ったこともなかった。

「ライガ、愛している……」

だから、お願い。

もし自分が死ぬことがあっても、あなただけはそばに居てくれるだろうか？

この紋章に、いつか食われるときが来ても――そばに、いてほしいと願うのは……罪ですか？

永遠の空・２０

港に戻ると、兵士から連絡があるのでデスモンドのところへ戻ってくださいと伝えられ、ついでにオベル国内で食い逃げ騒動を追いかけ、犯人セドリックを仲間に入れてから洞窟に戻ると、リノからの依頼でネイ島へ行って、オレーグという人材を連れてきてくれと頼まれた。

戻ってきたばかりで次はネイ島だ。ヒサトは真剣にリノを斬り殺そうか考えた。

『罰の紋章』のことを調べに来たものの、いいように使われてばかりだ。

海賊たちは余計なことを言って去っていったし、おかげでライガを泣かせてしまうし。

ライガが『罰の紋章』のことで不安になっているというのに、ヒサト個人のことで悩ませてしまってどうする。

ヒサトは過去の自分を罵倒した。

昔のことで泣かせたくなどない。過ぎたことで、ライガが気にすることはない。

だが、少年が気にしてしまうのも分かる……。

ひたすらにそばに居て、支えていれば不安ではなくなるだろうか？

どうしたら、泣かせなくて済むのだろう？

ネイ島までは、数日。ライガはずっとヒサトと過ごした。それはいつもと変わらない日々だったが、ヒサトはライガに触りたがった。ことあらば抱きしめてくれる。誰が見ていようとも自信満々で。

ライガが不安に思っていることを感じているのだろう。

ライガは嬉しかった。ただ嬉しかった。

ヒサトが抱きしめてくれるだけで、死の予感は遠く離れていくよ

うな気がした。

かつて国中の全ての命を食い尽くした『罰の紋章』。
一人残された最後の寄生者は、巨木に見守られながら力を解放し、紋章と共に眠りについたという。
それはどれほど孤独な死だったろう。
そしてそれは、ライガにも訪れかねない未来なのだ――。

ネイ島、高台に目当ての人物、オレーグはいた。
なにやら一抱えはある塊をいじっているところを見つけ、声をかけると彼は嬉しそうに声を上げた。やっと自分の発明を認めてくれる人が来た、と。
なんのこっちゃと首をひねるライガとヒサトに、抱えていた箱のようなものを土台に置いて、オレーグは宿で一眠りしようと言った。
ヒサトは一瞬眼光を鋭くしたが、別にナンパとか深い意味はないらしい。
下心でライガを誘ったのなら、この場で斬り捨てるつもりでいたヒサトの心配は、杞憂である。
たまたま空いていた海側の部屋に入るなり、オレーグは寝てしまった。
ベッドは、あとひとつだけ。
「……一緒に、寝る？」
上目遣いに見上げてくるライガに、ヒサトは大きく息を吐いた。
可愛らしい恋人の誘いには乗りたいが。
「……止めとく。理性が持たん。横のオレーグに聞かれてもいいなら、寝るが？」
一緒に寝るのなら、我慢せずに抱くぞ。ヒサトが言外にそう述べていることを感じ取り、

「……おやすみなさい」
ライガは真っ赤になってベッドに入った。見届けてヒサトは壁際に座る。
ライガも疲れていたのか、すぐに寝息が聞こえてきた。
ヒサトも目を閉じる。

夜の帳は柔らかく誰もを包み込もうとしてくれるけれど、今夜は違った。

何か、異質な胸騒ぎを感じて、ヒサトは薄い眠りから覚める。
室内には何も変わったところはない。だが、ライガも目を覚まして起き上がった。
「ヒサト……？　寝てないの？」
「いや……寝てたんだが、何か落ち着かなくてな」
「ベッド代わる？」
「……お前の匂いがするベッドで寝ろって？　拷問か？　身体火照（ほて）って眠れんだろ」
「……ヒサト、えっちだ」
「何を今更。身体で知ってるだろうが」
ライガはまた顔を赤くしてベッドから出た。ヒサトに近寄り、彼の腕に抱きつく。
ヒサトはすぐに恋人を抱き寄せて口付けた。オレーグが起きる様子はないので、これくらいは許されるだろう。
可愛い恋人を腕に抱き、キスをかわしているというのに、それでも心がざわつく。
これは一体、なんだ？
ライガをそっと腕から離して、ヒサトは気配を探ったが、取り立てて近辺に妙な気配は感じない。
「ヒサト？」
きょとんとライガが首をかしげている。

「……なんだろな、落ち着かん。ちょっと外を見てくる」
外を確認してきたほうがよさそうだ。
「僕も行く」
ライガも一緒に室外に出ようとしたときだ。

どくん。

ヒサトは何かを感じ取った。
一瞬後。
室内が真昼のような光に溢れた。咄嗟にライガを腕に抱きこむ。
何が起こった!?
まぶしさに目を細める。ライガも腕の中で絶句していた。
ここで何かが起こっているわけではない。だが、どこかで何かが起こっている。
どこで、何が!!??
光は一瞬で駆け抜けていった。室内には夜の暗闇と平穏が戻ってくる。
光が差し込んだ窓のほうに行って外を見てみたが、穏やかなネイ島周辺の海が見えるだけだ。
ヒサトの胸騒ぎは消えている。元凶はあの光か。
「今の……？」
「分からん。何が起こった……？」
――何が？

翌日、あれから一睡もしていないヒサトとライガを連れて、オレーグは高台の塊を手に取った。
覗き穴らしきものを覗き込んだ彼は、驚きの声を上げる。
「こ、これ……見てください！！」
ライガとヒサトに塊を渡す。それはカメラというもので、景色を中に残しておけるものだという。中を覗いたライガは絶句した。

始め映っていたのは雲海と海原で、少ししてそれらを切り裂くような光が走っていく。
ライガは直感した。これが、昨夜の光の正体だ。
光は方向から考えてイルヤ島に向かっていた。
ヒサトもライガからカメラを受け取って中を見る。
彼も言葉を失った。映像を見ただけで、とんでもない威力だと思う。見た感じでは紋章砲にも思えたが……威力は段違いだ。
あれが放たれたイルヤ島は、おそらく壊滅しただろう。
「……まさか、エルイールからか……！？」
愕然と呟く。光が放たれた方向、走っていった方向。
エルイール要塞から、イルヤ島まで、どれだけ離れているのか。
射程も威力もなまじの紋章砲の比ではない。それは確実だ。
こんなものがエルイールにあるというのか。
どこまで届くのだろう？　もしかしたら群島諸国の端まで届くのではないか。
だとしたら、クールークに対抗する術（すべ）など、各国にはない。
「ヒサト、オベルに戻ろう！」
「ああ」

オレーグを連れてオベルに戻り、リノにもカメラを見せた。やはり彼も絶句する。
「おい……こりゃあ……」
「方向から考えてほぼ間違いなくエルイールだろう。多分イルヤは……全滅に近いだろうな」
ネイ島の港にはイルヤ島から流れ着いた残骸が溢れていた。夫婦が一組流されてきたらしいが、かろうじて助かったのはその二人だけだと思われる。
「こんなもん、撃たれりゃそれまでだ。為す術もなくやられる」
キッパリとヒサトは言い切る。イルヤ島に向かって放たれた光。

無慈悲なまでの圧倒的な力が、次に向けられる先は、どこか。
リノは息をつき、ライガたちに船を出すことを禁じた。クールークの侵攻が始まるのは間違いない。船を出すのは危険だ。
「ヒサト、お前……これどうにかできないか」
「……リノ、お前も俺を万能だと思ってないか？　無理言うな。それを何とか出来たら人間じゃねえ」
「お前ある意味人間じゃねえだろが」
「殺すぞ。ここでフレアに王位を託すか？」
などというやり取りがかわされてから、ライガたちはオレーグを仲間に加えて一旦洞窟に戻ることにした。
船が出せないのなら、人材集めも出来ないので、洞窟で待機するしかない。
「ねえヒサト」
「ん？」
ライガはヒサトと手をつないで歩きながら訊いてきた。
「リノさんに頼まれたら、ヒサトも戦うの？」
クールーク。トロイのいるところだ。
「……状況によるな。お前まで危ないようなら討って出る。並みの艦隊戦なら近付けば確実に落とせるが……あの一撃が来るなら……オベルは滅ぶな」
ヒサトは言わなかった。リノは期待せずに聞いてきただけだろうが、剣神にはあれに対抗できる手段がある。
それを使ってまで、オベルを護る義理はない――だが、ライガがこの国にいる以上、もしあの一撃が来たら躊躇なく、その手段を使って護るだろう。
ヒサト本人としてはあまり使いたくない手段なので、できればクールークには艦隊で攻めてきてもらいたいものである。
それなら百隻で来られようが勝つ自信があった。
「リノさんのことあまり好きじゃないの？　なんかいつもケンカ腰だよ？」

「……そりゃまぁ、俺の可愛い恋人に面倒くさい仕事を押し付けてやがるからな」
ライガは無言で赤くなった。ヒサトがリノにつっかかるのは、自分を心配しているからなのだ。
嬉しくなって抱きつこうとしたら、ヒサトの腕はライガを引き寄せて彼の大きな背中に隠してしまった。
「？」
なんだろうと思った瞬間、向かっていた方向に人が立っていたことに気がついた。
どこかで見たような三人組――うちのひとりにライガはハッとした。
オラーク海運の、ラマダだ。ラズリルにいたとき、騎士団に護衛を頼んできたひと。
積荷はかなり怪しい物だったようだが、あのときはブランドに襲われたのでうやむやになっていた。
どうしてここにこの人が。
ヒサトはライガを背にかばい、三人組に鋭い視線を向ける。
「何の用だ」
ラマダは言った。
「その紋章が欲しいんですよ」
――『罰の紋章』！！　ライガは反射的に左手を隠した。
「ですから、死んでください」
ラマダの脇にいた男女が飛び掛ってくる。
ヒサトは無言で瞳を細めただけだった。彼がめちゃめちゃ怒っていると気がついたのは、かばわれているライガだけだ。
「ひ、ヒサト？！」
無言。ライガの前から彼の背がわずかに離れる。
彼は剣を抜きもしなかった。切りかかってきた女の腕を掴み、ぐんっと振り回し、もうひとりの男にぶつける。
「ぐわっ！？」

「くっ！？」
声を上げて倒れる男女に、ヒサトは右手を突き出した。
「……舞い踊れ」
低く呟くのを、ライガはあわてて彼の腕にしがみついて止める。
彼の紋章魔法が発動したら、後方にいるラマダもまとめて間違いなく消し炭だ。
「ちょっと待ってヒサト！　死んじゃうって！！」
「……俺は殺す気満々だ。ライガを狙ってきたんだぞ？」
ほんの一瞬で迎撃しておいて、顔色ひとつ変えずに、いとも平然と言ってのける剣神だ。
「この世から痕跡を消してやろうと思ったんだが、何で止める」
「真顔で言わないでよ……」
これはかなり怒っている。
彼の怒気が伝わったのか、ラマダがひきつった。ライガの後方のケネスたちも怯えている。
ライガ、ヒサトを止めて止めて止めてぇえぇえっ！！　と心で祈っているのだろう。
「ケネス、ジュエル、この人たち拘束して」
「はいっ！！」
ライガの指示に即座にジュエルたちは従い、ヒサトによる殺人を防いだ。憮然としてヒサトが腕を組む。
「……なんで邪魔する？」
「だめ。ヒサトなら生け捕りだって簡単でしょ？　何か聞き出せるかもしれないんだから、簡単に迎撃しないの」
「こういう輩は早めに消し去ったほうが世のためだろ」
「それはヒサトの個人的感情でしょ。嬉しいけど、僕のために人を殺すのはダメ」
「……ところで、なんで俺が叱られているんだ？」
怒りをほどいて息をつくヒサトにライガは抱きついた。
「ありがと。でも、殺さないで？」

「……分かったよ」
可愛い恋人からのお願いに、剣神はため息をついて同意し、愛しい人を抱きしめる。
いちゃつく彼らを見て、ラマダがようやく息をついた。どうやらライガのおかげでとりあえず剣神の怒りは収まったらしい。
「いや……お強いですね。さすが剣神の異名を持つだけはある。まさかこんなに簡単にこの二人がやられるとは思いませんでしたよ」
男女二人と共にぐるぐる巻きに縛られてしまったラマダは、申し訳なさそうに言う。
「で、私たちこれからどうなるんでしょう？」
「それは……とりあえず王様に突き出してからかな」
ジュエルが言う。
「死刑だろ。王の代理人に襲い掛かったんだから」
ヒサトはさらりと告げる。
「やっぱりそうですかねぇ……あの、できるなら後ろの二人だけでも助けてもらえませんか？」
「それは、王様次第だな。あと……」
ケネスはちらりとヒサトを見る。
「……剣神の機嫌次第」
「あううう……」
ラマダが呻いたとき、洞窟から騒ぎを聞きつけたらしいデスモンドが走ってきた。
「な、なにがあったんです！？」
「え……っと、刺客みたいです」
ライガが答えると、デスモンドは顔色を変えて早く王宮に連行してくださいと叫んだ。

永遠の空・２０（後書き）

怒ると怖いのです。

永遠の空・21

『罰の紋章』を狙って刺客が現れたと聞いて、リノは驚いた。
「それで、ライガに怪我――はあるわけねえか。ヒサトがついているからな」
その点では心配は要らない。
リノはラマダたちに意図を問いただした。
何のために『罰の紋章』を狙うのかと。
「……答えますから、彼らの命を保証してもらえますか」
ラマダは男女の命を助けてくれと必死だ。自分はどうなってもかまわないから、この二人は助けてくれと。部下の命は大事にする人間らしい。
リノが頷くと、ラマダは命じられたのだと言った。
「……クレイ商会か」
ヒサトは呟く。ちょっと前に、オラーク海運も裏でクレイ商会と通じているという話を聞いたのだが、本当だったらしい。
だが、何故『罰の紋章』を。
リノが知っていたのかと問うと、ラマダは何のことか分からずに眉を寄せている。この分では、『罰の紋章』の話も知らないのだろう。リノは改めて説明した。
この紋章が命を喰らうこと。所有者が死ねば近くに居るものに強制的に宿ってしまうこと。
「……ラズリルのグレンは、それで死んだ」
剣神の呟きに、ラマダは目を見開く。やはり知らされていなかったのだろう。
「それでは……彼を殺せば、紋章は我々のうちの誰かに宿っていた、ということですか……」
捨て石だ。ただ紋章を運ぶための器。
そのことを、ラマダは理解した。

「危険な紋章、なのですね……」
人を食い殺す紋章。ラマダの声に、王の横に控えていた老臣セツが声を上げる。
「そうですとも。この青年にもとっとと出て行ってもらいたいものですな。こんな物騒なもの、王や姫にもしものことがあったら――」
老臣の声は途中で途切れた。喉に、銀色に輝く刃が押し当てられている。
いつ抜いたのか。
「……ちと黙ってろ」
ヒサトの目は本気だ。誰の目にも留まらぬ、彼の剣さばき。極寒の夜のような冷えたものをその場の誰もが感じる。剣神の殺気に、動けない。
「ハイ」
セツは応と答えるしかない。そうしてからようやくヒサトは剣を収めた。
うつむいているライガの肩を抱く。
誰よりも苦しく、紋章に怯えているのはライガだ。いつ殺されるか、食い尽くされるか分からない。
その上ライガは前の所有者、グレンが紋章に食われ尽くして死ぬところを見ている。なおさら恐いだろう。
いつ自分があんなふうに死ぬのか分からない。
――恐い……！！
ライガはヒサトに寄り添うように擦り寄る。彼のぬくもりだけが、この恐怖をやわらげてくれる。
二人を見て、リノも辛そうに顔をゆがめた。
遊び人だったヒサト、その彼にはじめて出来た本命の恋人ライガ。
彼らが愛し合っているのは見てすぐに分かった。
だが、少年の手には命を食う『罰の紋章』が宿っていて、いつまで保つのか分からない。
幸せには、なれないのか？

ラマダと男女は、リノの計らいでライガの手助けをすることになった。男はアカギ、女はミズキというらしい。ライガの命を狙った連中だが、もうクレイ商会に使える気はないと言う。当然だろう。人の命すら捨て石にしてしまうようなところに、いられるわけがない。

「仇(あだ)を恩で返されましたからね。一所懸命お仕えさせていただきますよ、ライガ様」

本当なら、処刑されていておかしくない三人を、助けてくれたのはライガだから。

だから、彼に仕えよう。この命に代えても。

仲間が、新たに三人増えた。

王宮から出ると辺りはすでに暗くなっていた。静かに虫が鳴く中を、ゆっくり歩いて洞窟に戻る。

ヒサトは無言でライガの手を引いて歩いている。その力強い手が、ライガには涙が出そうになるほど愛しい。

彼が居てくれてよかったと心から思う。

そのときだ。

ふっとヒサトの身体に緊張が走ったのを、繋いだ手からライガは感じ取った。

「ヒサト？」

彼は暗い海のほうに視線をやっている。

ライガもつられてそちらを見たが、何かがあるようには見えなかった。

感覚の鋭い彼のことだから、何かを感じ取っているのは間違いないだろう。

何を感じ取ったんだろう、と思った瞬間。

ドンッ！！

地面が揺れ――赤光（しゃっこう）が辺りを染めた。
砲撃、だ！！！
「クールーク……！！」
炎で揺らめく闇夜の海面に戦艦の姿が確認できた。
よほど手はずを整えていたのだろう。あっという間に攻め込まれ、オベル側は防戦一方で、このままでは押し負けると目に見えた。
「……」
何もしなければ、オベルは攻め滅ぼされるだろう――。
ライガは左手を見下ろした。
ここにある、力。
脳裏に蘇るのは、ラズリルで海賊船をなぎ払ったあの赤い光。
使えば、クールークの数を減らせる。そうしたらオベルは助かるかもしれない……。
「ヒサト」
愛しい人に声をかけ、微笑みかける。
ライガの瞳には、強い決意。
この人を護りたい。護られるばかりではなく、護りたい。
あなたがいるから、僕は戦える。
あなたがいるから、僕は前に進んでいける。
「そばに、いてね？」
そしてあなたのために、いつか、僕は――。
だから、そのときが来るまで抱いていて。
そのあとは、あなたにこの呪われた紋章が宿らないように投げ捨ててくれていいから。
僕の意識が消えるまでは、抱いていて欲しい……。
自分の命を使うことを少年は心に決める。
ライガは左手を掲げた。
もう、迷いはない。

ドクン。

その脈動を、ヒサトは止めることが出来ない。
ライガの瞳を見てしまった。
決意している少年を、その想いを、受け取ってしまった。

ドクン。

その強い意思を、愛しているから止められない。
その魂をこそ、愛しているから止められない。
ヒサトはライガの肩を抱きとめ、支える。
今出来ることはこれしかない。それでもライガはそばにいてと望んだ。
ならば。
迷うな。
そのときが来ても、俺はライガのそばを離れはしない！！

キィヤァアアアアアアーーーッ！！！

決意した彼の目の前を、赤くおぞましい光が走り抜けていった。

クールークの戦艦が、次々と薙ぎ払われ爆砕していく。
「あの青年、やってくれたようですな！！」
嬉しげに言うセツとは反対に、応戦していたリノは光が放たれた方向を苦しげに見上げた。
「……ライガ……ヒサト……すまん……！！！」
少年は命を削り、それを見ている青年は何を思うだろう？
すまない。王は詫びることしかできない……。

紋章の力を使った後、ライガはヒサトと共に船に乗り込み、クー

ルークの迎撃に出た。
傍らにはリノの乗る船。
対するクールークの船は四隻。罰の紋章で大半を沈めたとはいえ、まだこちらのほうが不利である。
だが、剣神がいる。
「二隻沈める。リノのフォローに回れ」
ライガにそう告げて、ヒサトは迷わず接近したクールーク戦艦に飛び移った。
すぐさまライガたちが乗っている船は離れていく。ほかの人間は続かない。彼一人だ。
剣神は怯えず、ひるまず、甲板に立ち剣を抜く。
あれだけの距離を飛び越えて来た男にクールーク兵は唖然とした。
その一瞬で、ヒサトには事足りる。
だんっ！！　踏み込みの音は最初のひとつだけ。
転がる体は数知れず――甲板に広がる血潮は大量に。
夜の闇、けれど炎に照らされて、血液はてらてらとぬめるように光る。
剣閃が止まることはなく、命は失われ続け、船は瞬く間に血臭で溢れた。
横のクールーク船が、味方の船の異常に気がついた。そのときにはもう、その船の船員が全て物言わぬ屍になっているとは思いもよらず。
見張り台の兵士が望遠鏡で甲板を見て絶句する。
立っているのはひとりの男。甲板は血潮で真っ赤なのに、その男は返り血ひとつ浴びていない。
剣を収めてこちらを見た。
そして――ヒサトは薄く笑む。
彼が右手を突き出すのが、見張り兵には見えた。
彼の頭上に炎の紋章が浮かび上がる。
届くわけがない。届いたとしても船にはたいして損傷はないだろ

う。
所詮、個人が使う紋章魔法だ。人相手ならともかく、紋章砲でもないものが、船に損傷を与えられるわけがない。
剣神は右手を握りこみ、振り下ろした。

ズンッ！！！

重く響く音。
そして、炎が吹き上がる。
めきり。船体がきしむ音を、見張り兵はかしいでいく見張り台の上で確かに聞いた。
男の放った紋章魔法が、船の中ほどをごそりとえぐりとっている。
紋章砲より強力な、個人の放つ紋章魔法などありえるのか。
――ここに、ある。
非情なまでに目の前に。
えぐれたところから爆発的に炎が広がり、あっという間に兵士を飲み込んでいった。
そんな、ばかな。
愕然とする見張り兵の視界もまた炎に包まれ……もう一隻の船も沈んだ。
圧倒的な、剣の神の力。
ヒサトが沈めた船を見て、リノはゾッとした。同船していたセツも表情をなくしている。
「……あの青年……人間なのですか？」
セツの声に、答えられるものはない。

クールークの突然の襲撃にも関わらず海戦はオベル国の勝利で終わった。
戦闘が終わり、船から下りて桟橋を歩いていたライガの身体が、

揺らいだ。
「っ！！　ライガ！！！」
崩れ落ちた少年を、咄嗟にヒサトが抱きとめる。
ライガは完全に意識を失っている。紋章の力を行使したせいだ。
「……！！！」
ヒサトは唇をかみ締めて恋人を抱き上げた。
死なないでくれ。切にそう思う。
だらりと垂れた少年の左手に宿る『罰の紋章』。
連れて行くなと思うのは、許されないのか。
ライガを抱いて洞窟に戻っていくヒサトを、仲間たちは心配そうに見送った。

少年は目覚めない。まだ食われる尽くしたわけではないようだが。
ライガの左手を握り締めて、ヒサトは祈るように額を押し付ける。
何人も殺した血塗られた手。それでも護りたい人がいる。
命を斬り捨てることに慣れた手でも、護りたい命は確かにあって。
呻くように、ヒサトは呟く。
「……護るから、護ってくれ……！」
旧き友たちよ、どうか。
この少年を、ライガを、この呪われた紋章から。
どうか。
神には祈らない。いないことを知っているからだ。

闇のような赤い影。
「……キカ、行ってくる。心配するな」
「エドガー……あんたはいつだってそう言うだけ」
「だがいつだって、こうして戻ってくるじゃないか。お前のもとに」
「……」

「……エドガー。今度の海賊は、少々名の知れた男だ。気をつけて行こう」
「そうだな、ブランド」
気心知れた、仲間との会話。
「おい！！　エドガー！！！　返事をしろ！！！」
「ブランド……俺……に……何か……あったら……」
「エドガー！！！　……くそ……こんなところで死ねるかよ……！！！」
力尽きる友との、最後の会話。
「……な……なんだ……？　あの……光は……！？！！！！！
くそ……俺は……帰るぞ……そうだろ……エドガー……！！！」
運命と覚悟の瞬間。
「……助けてくれ……早く……早く楽にしてくれよ……」
疲れきってしまった……声。
ああ、あなたも？
ライガは剣を振り上げる。
戦って戦って、そして孤独に疲れきって、開放を願っているのか。
いいよ。もういいよ。
僕が開放してあげる。
「……あばよ……キカ……
むこうで……お先に、ヤツと……ラムでもやってるさ……」
影は消えていった。

永遠の空・２１（後書き）

存在が反則な剣神。ここまで強いとは……（作者が言う）

永遠の空・22

左手が温かい。確かなぬくもり。『罰の紋章』が宿る場所に恐れなく触れてくれる人。

それが誰だかすぐに分かった。

ライガは目をあけて視線をやる。

「ヒサト……」

「……ライガ、気がついたか」

彼はホッとしてライガの髪を撫でてきた。

倒れたのだと、そこで気がついた。『罰の紋章』を使った反動。

削られていく命。

でも、後悔はしていない。

起き上がってヒサトに抱きついた。彼も無言で抱き返してくれる。

言葉はなくても、今はただ。

あなたに触れていたいのです。

しばらくそうしてヒサトに甘えてから、王宮に行って、これからのことをリノと話すために外へ出ようとすると、サロンで仲間たちが何か話しているのが聞こえてきた。

アカギが話している。

『罰の紋章』が、次に誰に宿るのか考えたことはないのか？　自分に来ると思ったら恐くはないのか？　と。

ドアを開けようとした手を、ライガは思わず引っ込めた。

自分が死んだ後の話を、サロンの仲間たちはしているのだ。

この紋章の犠牲者に、次は誰がなるのか分からない、と。

ヒサトは迷わずドアを開け放った。

「！」

ライガとヒサトの姿を目にして、仲間たちが固まる。

ライガがそこにいると考えてもいなかったのだ。

「ひ、ヒサト」
「……恐いなら去れ」
彼はうろたえもせず言い放つ。
「その程度のことにうろたえるようなヤツはいらん。ライガは俺が護るし、死なせない。
『罰の紋章』なんぞに余計な心配は無用だ。ライガはこの俺が死なせない。それでも信用ならないと言うのなら、ここを出ろ。止めんし、追わん」
ライガのそばにいると心に誓った。ならば『罰の紋章』程度に怯えるような仲間はかえって足手まといだ。
「あんた恐くねえのかよ。命食われるんだぜ?!」
アカギが食って掛かってくる。
「それがなんだ? 俺はライガの命をむざむざ紋章なんぞにくれてやる気はない」
きっぱりと、彼は言い切る。
「ライガは魂の端まで俺のもんだ」
……沈黙。誰も彼もが赤くなっているのは、気のせいではない。
なんつーことを真顔で言うのだろうこの男は、と全員が思っている。
ずれたことを言っているのに、言葉は真摯(しんし)で、だからこそ誰も何も言えなくて、想いの強さと深さに赤面する。
真の紋章に怯えるどころか、それを『なんぞ』とか言ってしまうヒサトのほうが恐ろしい。
「ひ、ヒサト……」
ライガはもう首まで赤い。ヒサトの背中に隠れるようにして縮こまっている。
心から嬉しいけど、同時に、猛烈に恥ずかしい。
「……あー、そうさせないように、俺たちもがんばるよ、ヒサト」
どこへ視線をやっていいのか分からずに、泳ぐ目でケネスが言っ

てくる。
「ライガは死なせない。皆でがんばればいい。そうだろ？」
「そうだよー！　ライガは死なない。俺たちが死なせない！　ね？」
チープーも声を上げる。
「剣神がついてるんです！　怖いことなんてありませんよ！！」
ラクジーまで目を輝かせて言う。
聞いていたルイーズがふふふ、と笑った。
「ヒサト……だっけ？　あんたほんとにイイ男だねえ。そっちのトサカとは大違いだよ。それに、子供たちのほうが賢い意見を言うじゃないの」
「う……」
アカギは居づらそうに頭を描いた。視線が彼に集中する。特にミズキの視線を受けたとき、アカギは腹をくくった。
「……分かったよ！　この戦いが終わるまでは……協力するって！！」
「無理するな。居なくてもかまわんし」
ヒサトはしれっと言ってのける。
ぶっちゃけ自分がついていれば充分だとも思うので。
「無理してねーよ！　……あんたイイ性格してるなぁ、剣神サマよお。さすがだぜ」
アカギはあきれたように呟いた。
「あんたに勝てるやつなんていないんだろうな」
「いや、いるぞ。俺が唯一勝てない相手」
「！？　いるのかっ！！　誰っ！！？？」
サロンに居た全員が驚愕する。剣神でも勝てない相手とは！？
ヒサトは一歩脇に退いた。
立っているのは、赤面しているライガ。
少年の肩を抱いて引き寄せ、青年はにやりとする。
「こいつ」
「！？　えっ、僕！？」

あー、なるほど。ラズリルからの同行組は心から納得し、ほかの面々は目を丸くした。
「ヒサト、ほんとにライガにベタ惚れなのねー……」
「……ライガ、最強だな……」
「……ヒサトのこと尻に敷いてるもんねぇ……」
「あっはっは、ライガの尻なら喜んで下になるなぁ、ひきしまってて可愛いし」
「ヒサトッ！！！」
恥ずかしさにいたたまれなくなったライガは、ヒサトの腕を抱えるようにしてサロンから出て行った。
「……あー、つきあっていらっしゃるんですか？　あの二人」
ラマダがラズリル組に問いただす。
「うん。そう」
ジュエルはあっさりと頷いた。ラマダはどことなく遠い目になって呟く。
「……私たちがライガ様に襲い掛かったとき、ヒサトさんがあんなに怒ったわけが理解できました」
「でしょうね……本当に、あのときのヒサトは恐かった……」
同じく遠い目になるケネスである。剣神を怒らせるものではない。あのときそれを痛感した。
「海戦のときも恐かったよ？　ヒサトひとりで二隻も沈めちゃってさぁ。しかも余裕っぽかったしね」
チープーの言葉に、その場の全員が心に誓った。
ヒサトを怒らせる真似だけはするまい、と。

崖道を歩きながら、ライガはぶつぶつと文句をこぼした。
「ヒサトのばか」
「なんでだ？　本気だぞ？　ライガの尻は可愛い。足も綺麗で顔は可愛くて声も可愛くて身体はどこもかしこも――っていかん、押し倒したくなってきた」

「すけべ！」
「男がすけべでなかったら、人類はとうに滅びていると俺は思う」
またもや真顔で言い切るヒサトである。
「……皆がヒサトじゃないでしょ」
「好色の代名詞のように言わんでくれ……否定はしないが」
「しないんだ」
「しないというか、出来ないというか」
言いながらヒサトはライガのお尻を撫でた。
「ひゃっ！」
「……こういうことをいつもライガにしたいと思うからなぁ」
「ヒサトっ！！」
……いちゃついている。誰かが見ていたら砂か砂糖を吐いただろう。
だが、ライガはどことなく嬉しそうで、ヒサトの腕に抱きついている。
『罰の紋章』のことを仲間たちが話しているのを聞いたときは、心が凍りつきそうな感覚を受けた。
まだ、僕は生きているのに。
あなたたちを犠牲にすることなど、考えてもいないのに。
そんな心配は要らないのに。
死ぬときは、ひとりで逝くから……心配しないでいいのに。
そばに居てほしいと思うのは、ヒサトだけだから、あなたたちが心配するようなことにはならないよ？
「ヒサト」
「ん？」
「キス、して」
ライガからの求めに、ヒサトは微笑み、愛しい少年を抱き寄せてキスを落とした。
そのときだ。
角笛の音が響いた。

触れるだけのキスで二人は顔を上げて離れる。
そして王宮方面に向かって走り出した。

王宮前には兵士が立っており、二人に洞窟までお戻りくださいと促した。
「どうやらクールーク軍に再び、動きがあるとのことです」
本格的に攻勢に出てきたらしい。昨夜の艦隊は第3艦隊だった。
次はおそらく最強の艦隊――トロイ率いる第1艦隊が来るだろう。
オベルの軍では勝ち目はほとんどない。それは断言できる。
トロイは間違いなく指揮の天才だ。ヒサトはそれを知っている。
クールークを退けるために、そう何度もライガの『罰の紋章』を使うことは許さないし、リノがそれを求めてきたら迷いなくリノを斬り捨てオベルを捨てる。
ライガに紋章を使わせるくらいなら、オベルをクールークに差し出すほうがずっといいとヒサトは思っている。
さて、この状況に、リノ国王はどう動く？

「オベルを出る」
ライガたちが拠点にしていた洞窟の作戦室で、リノは言い切った。
今のこの戦力ではクールークに抗う術はない。
無用な犠牲者を出すくらいならば、国を明け渡し、他で力を蓄えてから奪還する、と。
苦渋（くじゅう）の選択だ。
だが、今はそれが最善だろう。ライガの『罰の紋章』に頼り続けるわけにはいかない。
オベルにはクールークに今の時点でかなう戦力がない。剣神の存在はあるものの、ヒサトはオベルを背負って立つ者ではないし、彼本人にもそのつもりは毛頭ない。
ならば、力を蓄えて反撃の機会を待つ。

リノは決断したのだ。
「で？　どーやって？」
ヒサトが問うと、リノは何故この洞窟を拠点にしろと言ったかを説明した。
ここは天然の洞窟ではない。船なのだと。
クールークとの戦いのために、トーブに秘密裏に作らせていた巨大船。
「……なるほど」
あきれるヒサトである。クールークに対抗するための船で、クールークから逃げ出す羽目になるとは皮肉なものだ。
リノがライガに人員集めを頼んでいたのも、これのためか。
「で、だ。俺たちは準備がある。ライガ、街の住民でついてくるという連中を連れてきてくれんか？　あと、医者が必要だ。それと――」
「リノ」
「おう、何だヒサト」
「斬るぞ」
口元だけを笑わせて、ヒサトは釘を指した。あまり使うな、と。
ライガは元々フィンガーフート家の小間使いだったので、人に使われることに違和感を覚えていないのでまた困る。
リノはひきつって降参するように両手を上げて答えた。
「分かった！　でもこれだけはやってくれ。本当に俺たちは手が離せんのだ」
「分かりました」
「おいライガ」
「これくらいならいいよ。大切なことだし」
ライガに微笑まれ、ヒサトも不承不承頷く。二人で街のほうへ行こうとしたとき、フレアも行くと申し出た。
三人連れで町へと向かう。崖道を歩きながら、ヒサトはひしひしと気配を感じている。

クールークの攻撃は近い……。

戦闘が始まる、独特の感じ。わずかに心が沸き立つ。

戦え、斬れ、殺せ、やりつくせ。焼き、潰し、刻んで、命乞いを蹴りつけて刈りつくせ。

――いのちを。

おもちゃのように奪えばいい。剣神にはそれが可能だろう。

ヒサトはゆるく首を振った。戦闘に高揚するような未熟さはとうに通り過ぎた。

感情を制御できずに死んでいくのは未熟な証だ。

息を吐くと殺意のような高揚は霧散する。

血にたぎる必要はない。死に敏感になる必要もない。

今は戦うのではなく、生き延びるために逃げるときだ。

街中でついてくる人と残る人は別れた。オベルを愛しているから残るという人と、リノが言うのなら離れるという人と。

医者は街角に立っていたユウを誘った。彼は一も二もなく頷き、船に乗ることを了承した。

交易所の前に立っていた鍛冶屋の少女、アドリアンヌにも乗ってもらう。

他に数人の住民を誘い、港の男を誘うと、フレアがそろそろ戻りましょうと声をかけてきた。あまり時間がない。

崖道を戻る途中、フレアが足を止めた。

「フレアさん？」

どうしたのとライガが振り返る。オベルの姫君は一度目をつむり、

「……やっぱり、私はこの島に残るわ。残った人たちのそばにも、誰かが居なきゃ……お父さんにもそう伝えて！」

己の心に誓うように言った。

オベルを愛している人たちのために、ここに残ると。

「ヒサトさん、父をお願いします。いつかオベルに戻ってきてくれることを、待っているからって」
「……ああ」
リノを頼むといわれてヒサトは微妙な表情で、でも頷いた。
フレアは街に向かって歩き出し、一度振り返った。心配そうなライガに、手を振って言う。
「私は大丈夫！！」
元気に言って走っていく。不安だろう。父と離れ、これから来る敵国のことを考えて恐くないわけがない。それでも、彼女は笑った。
大丈夫と、言った。
「ヒサト、行こう」
ライガは前を向く。
「僕は……必ず戻るよ。ここに、必ず……！！」
誰も犠牲にはさせない。不安を隠して、自分は大丈夫と言った彼女のためにもそう思う。
オベルに来て時間はそれほどでもないけれど、この島の人たちは優しかったから。
流刑にされた自分にも、とても優しくしてくれたから。
少しでも何かを返したい、でも今は何も返せない。
でも、いつか必ず。
「戻って、来る」

永遠の空・２２（後書き）

いちゃつくシーンは、砂吐きながら書いてます。誰だこれ書いてるの、と、自分の心が突っ込むことも多々あり。

フレアは残ると告げたとき、リノは大きく息をついた。
「そうか……アイツは本当に母親似だな」
今は亡きリノの妻、オベル王妃、フレアの母親。
彼女もフレアのような女性だったらしい。
セツがあわてた。姫が残るのなら自分も残ると。
「セツ……フレアを頼むぞ」
「はい！　王こそお気をつけて……！！　ヒサト殿、王のこと、くれぐれもよろしく頼みますぞ！！」
「……なんでお前ら揃ってリノのことを俺に頼むんだ……いいおっさんじゃねえかよ、てめえの面倒くらいてめえで見れるだろう……」
「あなたが一番お強いだろうからです」
「短パラ起こしてリノをたたっ斬る可能性が一番高いのは俺だと思うぞー」
「止めてください。そんなことされたらワタクシ夢枕に立ちますからな」
腹の突き出たおっさんに夢枕に立たれるのは気持ちが悪い。しぶしぶ頷く。
セツが出て行ってからヒサトは息をついてリノを見た。
「……いい臣下だな。娘もお前に似なくて良かったよ」
「まぁな……って、おい。俺に似なくて良かったってのはどういう意味だ」
「まんまだろ」
ひとことで斬り捨てておいて、ヒサトは甲板に出た。
まだ洞窟の中なので暗い。洞窟を塞いでいる岩を落として出航するのだと聞いた。
ライガがついてくる。
「危ないぞ？　岩落ちてくるかもしれん」

「いいの。ヒサトと居たいから」
やわらかく微笑んで、寄り添うように立つ。
「……なかなか、ゆっくり……してられないね」
「そうだな」
戦争が始まる。それは間違いなく、命と時間を容赦なく奪っていく。
『罰の紋章』からの回避策もいまだ見つからない。ライガは紋章の力を使い続けている。
いつ、限界が来てもおかしくないのだ。
「ねぇ、ヒサト？」
「ん？」
「嬉しかった。ありがとう」
サロンで彼が言ってくれたこと。
『死なせない』――『魂の端まで俺のもんだ』。
本当に嬉しかった。
すごくすごく、嬉しい。
「大好き」
たまらないくらいに愛している。
それだけは、覚えていて欲しい。
「……ああ」
ヒサトは頷いてライガの肩を抱いた。遺言のような少年の言葉。
それをそうと口に出すのはあまりにも辛かった。
覚悟している少年が、悲しくて憎くて――狂おしいほど愛おしい。
死ぬなと願うことが罪のような、生き抜くことすら願うことを許されないような『罰の紋章』の存在が、心から疎ましい。
こんなものさえ無ければ、誰も苦しまなくて済んだのに。

ガラガラバララッ！

岩が崩れて光が差し込む中を、巨大船はゆっくりと船出した。
甲板に出ていたリノは愕然とする。前方にすでにクールークの船が見えるのだ。
「くそ！　早い……クールークの犬どもが！！」
すでに侵攻してきていたのだ。洞窟の中だったので、気がつくのが遅れた。
だが、今このときを逃せば脱出など出来ない。
「全速前進っ！！！　急げっ！！！」
リノが愕然としている間に、一瞬で状況を把握したライガが声を張り上げた。
「はいっ！！」
応じて船員たちが走る。リノがライガの横で目を丸くしている。
ヒサトは欄干（らんかん）に歩み寄る。見えるクールークの船はやはり第１艦隊だ。
「……トロイか」
呟く。砲門がこちらを向いているのも見える。向こうからの射程距離内には入っているから、すぐさま撃ってくるだろう。
その点ではトロイは甘くない。ヒサトが乗っているかどうかまではまだ知らないだろうが……すぐに、知れる。

ゴンッ！！

紋章砲が発射された。確実に当たる、そんな角度と距離。
ヒサトは笑みを浮かべて右手を突き出した。
残念だったな、トロイ。
炎の紋章が浮かび上がり、ヒサトは自身の魔力を解放する。
ここには俺が、いるんだぜ――？

ゴバァッ！！！

海面で紋章砲と紋章魔法が打ち消しあい、相殺した。
「!!!??」
誰もが驚愕した。紋章砲を、紋章魔法で阻む男。
そんなことが出来る人間がいるのか!?
ラズリルで一度見ていて、知っているライガはうろたえない。
「紋章砲は彼が防いでくれる!!　急いで戦闘海域から離脱っ!!!」
強い瞳と声で即座に指示を飛ばす。
あっけに取られていた船員たちが再びあわてて動き出した。
リノは少年と青年の動きと判断の早さに、感嘆の息をつく。
この、二人は。
確信する。
まごうことなく、至宝だ。

オベルの巨大船は、ライガとヒサトの二人のおかげで損傷もなく脱出を果たした。
ライガは大きく息をつく。何とかなった。ヒサトのおかげだ。
「ヒサト。ありがとう。リノさん、勝手なことしてごめんなさい」
「お!?　い、いや……かまわん!　お前のおかげで助かったようなもんだしな」
「違いますよ?　ヒサトのおかげです」
きょとんとするライガは本心から言っているようだと、リノは唖然とする。
この少年は自分を知らな過ぎる。痛感した。
「ライガ、こっち来い」
ヒサトは苦笑している。てこてこと寄ってくるライガを抱きしめて、
「なんでだか、理解したか?　リノ」
にまりと笑っている。どうして自分がこの少年を愛したか、理解できたかと目が言っていた。

ヒサトがライガを本命だと言ったとき、どうしても信用できなかったリノだが、先ほどの瞬間に理解した。
「……おう」
頷くしかない。
「??　なんのこと?」
ライガはきょとんとヒサトの腕に抱かれている。自覚は全くないようだ。
「ん。ライガは俺のだってことだ」
「え、えと、そ、そうだけど……なんで今?」
赤くなりつつ否定しないラ　イガだ。
「いつだって自慢したいぞ?俺のだって」
「ヒサトっ」
「俺のだろ?　俺もお前のだし」
「え」
「だから、俺はお前のもんだよライガ」
「え、え」
ライガは真っ赤だ。そんな風に考えたことはなかった。ヒサトに独占されることは考えても、ヒサトを独占することなどありえないと思っていたから。
誰にも捕まらない人だと思っていたから。
「なんだよ、熱烈に、僕だけ見ててって言っただろ。お前がそう言うから俺は実行しているだけだぞ?」
「わあああっ!!」
あわてるライガだ。確かに言ったが、こんなところで暴露されても。
「ひ、ヒサトッ!」
「なんであわてる?」
ニヤニヤしながら言っている。からかっているのかと思いきや、彼は本気だった。
「ライガだけだって何回誓ったら安心するんだ?　まぁ、一生言い

続けるのも悪くないかと思うが」
　一生離さない宣言だ。
「そのうち指輪でも作るか。どっかの国で、恋人とか伴侶とかはお互いの左手の薬指に指輪するとかって話を聞いたことある」
　しっかりと抱きとめて、ヒサトはライガの首筋にキスした。
「ひゃうっ」
「……可愛いな。いかん、理性が飛ぶ」
「ヒサトのばかーーっ！！！」
　絶叫するライガだった。ここは船の甲板で、当然仲間たちもいるわけで、周りを気にせずライガに触れているヒサトに目を点にしている。
　猛烈な勢いでいちゃつかれているので誰も何も言えない。
　と、いうか、ヒサトの腕の中で赤面しているライガが可愛らしく色っぽく、またライガを抱いているヒサトがとんでもなく格好良く、これまた色気たっぷりに恋人を口説いているので、見ている皆が呆然と見惚れているというのが正しい。
「……部屋行くか？」
　ヒサトに囁かれてライガはビクンと身をすくめた。
「……ばか」
　囁き返す。拒否している声ではなく、むしろ連れていってと言っているような甘えた声だ。
　甲板上の時間を止め、周囲を置き去りにして船内に戻ろうとしたライガとヒサトを、近寄ってきた一隻の船が止めた。
「げ」
　船を見たヒサトは呻く。ライガも身を硬くしてヒサトから離れた。見覚えがある船――乗っているのは、海賊キカ。
　クールークにオベルが襲われたのを確認しに来たのだろう。
　そして、クールークの脅威を確信したらしい彼女は、話があると言った。
　彼女が根城にしている海賊島まで来るといい、と。

船を走らせて、ライガはヒサトと船内に戻った。海賊島に行くにせよ、着くまでには数日かかる。それまでは休んでいてくれとリノに言われていた。

船が出港しても、ライガの部屋はそのままだ。

一応一通り船内を見て、中の様子を把握したが、とことん広かった。

第五甲板階層までである。空き部屋はまだまだ多いが、これからクールークと戦うのならば、もっと仲間が必要だろう。

新たにリノが、あとは航海図を書いているハルト、紋章砲の調整をしているパブロ、見張り台に立つ視力のいいニコが仲間に加わったが、確実に戦闘要員が足りない。

ここにはヒサトがいるが、いくらなんでも彼ひとりに全てを押し付けるのは気の毒だ。彼ならできるかもしれないが……そんな無理はさせたくないとライガは思う。

人を集めなければ。

部屋に戻ったライガはベッドに座って息をついた。

リノに頼まれた人集めは、続けなくてはならないだろう。こうして同じ船に乗っている以上、知らんフリは出来ない。

「……人、集めなくちゃ」

戦うために。

隣に座っているヒサトは軽く息をついてライガを抱き寄せた。

「止めないが、無理はするなよ」

「うん……」

キス。

受けているとベルトが外され、剣がよけられた。

「する、の……？」

「……イヤか？」

「ううん……」

首を振った。脳裏によぎるのは海賊たちの姿。

キカ。綺麗な女性。
そして、クールークの船。
指揮していたのは、トロイだろう。
騎士団でクールークの船の見分け方を訓練されていたライガにも、船を見て判別できた。
トロイ。そしてキカと海賊たち。
ヒサトと付き合っていた人たち。
「あ……」
やんわりとベッドに押し倒され、服を脱がされていく。
こんなふうに、ほかの人にも……？
悲しくなってヒサトに抱きついた。愛しているのに、信じているのに、どうして嫉妬してしまうのだろう。

その不安は、ヒサトに見抜かれ、それから海賊島につくまで毎晩、ライガはヒサトに鳴かされた。
ライガの部屋の前にいつも立っているセドリックが、夜になるたびサロンに顔を真っ赤にして逃げていくのが、お約束になったくらいだ。
「ヒサト、お前な……ライガを殺す気か？」
「はん？　何言ってんだ？」
もうすぐ海賊島というところで、さすがにリノから待ったが入った。
その日もライガは昼過ぎ近くまで寝こけ、やっと起きてきたと思ったら、甲板でヒサトの肩に寄りかかり眠っている。夜、ほとんど寝かせてもらえないようだと、目撃した全員が思った。
「何ってよ……立てなくなってるじゃねえか、ライガ」
ぐったりとしているライガと、なんでなのか心底から理解できないがピンピンしているヒサト。同じくらい消耗していておかしくないだろうに、元気なヒサトは化け物だ。
「大丈夫だ、怪物は俺が片付けてやってるだろう」

甲板に毎日のように襲い掛かってくる海上の怪物たちを、ヒサトは躊躇なく片付けている。
今はジュエルやケネス、ミツバたちに代わってもらって休憩中だ。
「いや、そうじゃなくてよ……ライガの身体が保たんだろうがっ！！」
「ああ」
そこでようやくヒサトは手を叩いた。
それからケロリと言い切る。
「そんなヘマはせん」
「……こいつは……」
へたり込みそうになるリノである。
「もう少し考えてやれよ……初めて出来た本命なんだろう？」
「あのな、リノ」
船が揺れ、ライガが転がった。ヒサトは少年を起こさないように抱えてやる。
「俺が、ライガの嫌がることをすると思うか？」
……沈黙。言われたことを反芻して、しばし。
リノはようやく言葉を返した。
「……つまり、ライガが望んでるのか？　ここまでぐったりするようなことを」
「まぁ、そういうことだ」
「……おいおい……マジか……」
「そろそろ目的地近いからな。ライガもそれは理解してる。今夜からはちゃんと眠るさ。だから、お前の心配はいらん心配だ」
キッパリと言い切り、ヒサトは愛しい少年の寝顔を眺めた。
嫉妬していいからと何度も言ってやった。
かまわない。言えばいい。そのたびに抱いて不安を打ち消してやるから。
ライガは泣きながら頷き、ヒサトに何度も抱いてと訴えてきた。
だから抱いた。愛しくてたまらなくて抱いた。

ライガを愛している。
ただ、単純にそれだけだ。
それをライガが理解するまで、何度だって応える。

永遠の空・２３（後書き）

剣神、体力の化け物です。がんばれライガー。

永遠の空・２４

海賊島。その酒場で、ライガ、ヒサト、リノはキカ一味と会談した。

クールークとクレイ商会の結びつき。死の商人の力を得て、クールークは巨大な力を手に入れた。

それが、ライガとヒサトがネイ島で見た、あの紋章砲。

クレイ商会はキカたちにとっても敵であり、それと結びついたクールークも敵だ。

だが、相手の力は巨大で、個々では対抗できない。

向こうが結びついたのならば、こちらも手を組まないか。

キカはそう言った。

彼女たちの協力を得られるのは、正直言ってありがたい。どう考えても戦力が足りないと思っていたところだからだ。

「どうする？」

リノが訊いてくる。

「何で俺たちに訊くんだ、オベル国王」

ヒサトは半眼で言い返す。お前が決めろよと言いたげだ。

「……お願いします。力を貸してください」

言ったのは、ライガだった。一番嫌がっておかしくないだろうに。

「ライガ？」

ヒサトの声に、ライガは一度目をつぶる。

今は、個人の心がどうこう言っているときではなく、海賊とかそんなことを言う場合でもない。こだわるときではないと、少年は理解している。

目を開き、まっすぐにキカを見て、ライガは頼む。

「キカさん、お願いします」

「……承知した。こちらこそ頼む」

キカは微笑む。ライガの態度に好感を持ったようだ。

ヒサトがライガを抱え込んだ。
「俺のだ。ちょっかいかけるなよ」
「……ヒサト、珍しい態度を見たような気がするのだが」
さすがのキカもあっけに取られている。
横のシグルドとハーヴェイも同様だ。
「ああ、このライガはヒサトの大本命でな、こいつが、この！！
ヒサトが！！！！　ベタ惚れしてるんだよ」
リノが強調して言うのに、ヒサトは青筋を立てた。
「てめえリノ、今ここで死ぬか」
「ホラ見ろ。ライガの件でからかうと面白いんだこいつ」
「……ライガ、すまん。オベルを奪還する前に国王を殺してしまうかもしれん」
「ひ、ヒサト！！」
あわててライガが止める。ヒサトは真顔だった。
そして、騒いでいた海賊たちが、声をなくした。皆一様に同じ表情でヒサトとライガを見つめている。
ひとことで言えば、愕然。
「……むかつく……暴れていいか、ライガ」
「だめ」
苦笑して止めるライガ。むっかりと止まるヒサト。面白そうにそれを見守るリノ。
どう見ても、少年の尻に敷かれている、剣神。
「うーそーだぁあぁぁあああぁあっ！！！？？？」
ハーヴェイが絶叫した。
「ヒサトがっ！？　だってあんな……あんたメチャクチャ遊び人だったじゃんかっ！！　俺の時だってたった二日だぜ、付き合ったの！！」
「へえ」
ライガがかすかに呟く。気付かないシグルドもまた叫ぶ。
「本当なんですかっ！！？？　私の時だって一週間ですよっ！！？

？　どんなに頼んでも残ってくれなかったのに！！！」
「ふぅん」
またもや小さく、ライガは呟く。
キカが続けた。
「私には二週間だったな。ベッドでは熱いのに、まぁ、別れるときは冷たいものだった。一言の挨拶もなしだ」
それから後ろのほうで俺もあたしもと続く声が多数。どうやらヒサトはここでも満遍なく自分好みの美形に、気が済むまで手を出していったらしく。
「……」
ついに黙ったライガに、ヒサトも息をつく。
「……なんだ、大暴露大会か、おい」
リノは楽しそうだ。
「……ライガ？」
「……」
「……説明したほうがいいか？　はっきり言って、あまり覚えていないが、思い出せる限りは話すよう、努力する」
もうそう言うしかないヒサトだ。
「覚えてねえのかよ……」
ハーヴェイが呟く。
「俺は忘れたことないのに」
「私もないな」
「私もありません」
海賊ズ、引っ掻き回す気満々だ、ヒサトはそう理解した。
「……よーしおまえら全員そこに並べ。殴って記憶飛ばしてやるから」
全力で殴ってやるとこぶしを握り締めたヒサトの腕から、ライガはするりと抜け出した。
「……ライガ？」
「リノさん、先に船に戻ってます」

声と表情はこわばっている。あまりの迫力に、リノもからかいすぎたかと思いながら、逆らえず頷く。
「お、おう」
ヒサトは頭を抱えた。がしがしと髪をかき回す。
ライガはメチャクチャ怒っている。
「くっそぉ」
吐き捨てるように呟いて立ち上がった。ずかずか歩いていく怒気も露(あらわ)な少年にすぐ追いついて腕を掴む。
「ちょっと来い」
「いや」
「いいから来い」
「やだ！！」
拒むライガを強引に肩に担ぎ上げて、海賊たちのところに戻る。
「下ろして！！！」
「ダメだ」
戻ってから、ライガを強引に椅子におろしてキカたちのほうへ顔を向けさせる。
ライガは今にも泣き出しそうに瞳を潤ませた。ヒサトのお手つきたちの前で泣き出したくなくてうつむく。
険悪な雰囲気に、海賊もリノも何も言えない。何より、ヒサトが喋るなと視線を鋭くしているのだ。
「いいか？　ハーヴェイとは二日、シグルドとは一週間、キカとは二週間、そのほかのヤツとでもせいぜいが十日だ」
聞きたくない。でも両方の二の腕をヒサトに掴まれて耳を塞ぐこともできない。
首を振るライガに、ヒサトは続ける。
「で、俺の寝顔を見たやつは誰も居ない」
「……」
ライガは顔を上げた。
意味が。

「愛していると囁いたやつもいない」
きっぱりと、ヒサトは告げる。
「俺が頭を抱えて、それでも追いかけようと思ったやつもいない」
海賊たちは目を丸くしている。それでヒサトが言ったことが嘘ではないと知れた。
本当に、ヒサトの寝顔を見た人はいないのだ、
愛していると言われた人も、彼に追いかけられた人も。
言ってヒサトはようやくライガを抱き上げた。
「分かったか？　お前だけだ、ライガ。俺が隣で眠ることを許すのも、愛していると言う相手も、こんなみっともなく追いかけてもいいと思う相手も、お前だけなんだ、ライガ」
「……」
ライガはヒサトの首に抱きついた。泣き声も泣き顔も海賊たちに聞かせたくないし見せたくなくて。
ヒサトは安堵に息をつき、リノに視線を向けた。
憮然と告げる。
「船、先に戻ってるぞ。それから、あとで俺に刺されても文句は言うな」
「……せめて殴る程度にしてくれ」
「よーし、脳漿飛び散る一撃を期待しておけ」
「殺る気満々かよオイ……」
ヒサトは殺気混じりで一同を睨んで戻って行った。剣神の殺気に言葉もなかった海賊たちが彼が去ってから大きく息を吐く。
「……ヒサトが頭を抱えるところなど初めて見たな……」
キカもさすがに目を丸くしている。
「……一緒に寝てるんだ、ヒサトと……すげえうらやましい……！」
力一杯呟くハーヴェイ。
「……言われているのか……愛しているって……あのヒサトさんに……」

シグルドも呆然としている。
「……ってか……剣神が誰かを追いかけることなんて……マジで……！？」
誰もが今見たことを信じられないようだった。
ヒサトが、なりふり構わず一人の人を追いかけるなんて。
「まぁ、信じられんわなぁ……俺も信じられんかったよ」
リノが苦笑した。
いずれ海賊たちにも分かるだろう。
ヒサトがライガに惚れた理由。
ライガがヒサトを愛して止まないことも、すぐに。

ライガとヒサトのただならない様子に、迎えのラクジーがあわてて何かあったんですかと言ってくるのを無言で制して、ヒサトはライガを抱えたまま船に戻った。
そのままライガの部屋に直行する。
部屋に入るなり鍵もかけずにライガをベッドに押し倒した。
「ヒサト……っ！！」
泣きじゃくるライガに口付ける。
何度も何度も告げた。
「愛してる、愛してるんだライガ、お前だけなんだ、愛している……！！」
衝動のように、情動のように。
だがそれは確かにヒサトの中で揺らがない感情。
たったひとつ、ライガにだけ向けられるもの。
「ふ、う……うん、うん……っ、もっと、言って……僕だけに……ずっと！！」
ようやくそれだけを言って、ライガもヒサトにキスをする。
少年から青年へ、青年から少年へ。返される言葉と思いと行為。
何度も繰り返されるそれに、ライガは至福を覚えた。
この人は僕だけのもの。その実感。あっけに取られていた海賊た

ち。
渡さない。それだけは確かに思う。
誰にも渡さない。僕のヒサト。

今まで何も持たなかった少年に生まれたのは独占欲。
それを育(はぐく)んだのは、愛しい彼から注がれるとても強い愛情。

キカ、ハーヴェイ、シグルド、ダリオ、その息子のナレオを仲間に加え、ライガたちは再び仲間集めを始めた。
クールークは巨大で、対抗するためにはどうしても数がいる。
キカの船、グリシェンデ号が使えるようになったのは、とてもありがたかった。
海賊たちとライガは打ち解けないかもしれないとリノは考えていたが、あの一件の次の日にはもうライガは笑っていて、海賊たちとも何のひっかかりもなく接していたりする。
大物だ。
「ヒサト……何をライガに言って機嫌回復させたんだ?」
「火種撒いたやつには教えん」
きっぱり。ヒサトは言い切り、何も教えてくれなかった。
「……気になる……」
思わず呟いたオベル国王を、ヒサトはシカト。
ざっくり無視してハーヴェイに絡まれているライガに目をやった。
「ヒサトってどんな寝顔してんですか? うらやましいなぁ、ライガ様っ! 一晩ヒサト貸してくんないですか?」
「ダメです」
にこやかに少年は言い切る。
それはもう、天使のような顔で。
「僕のですから」
渡さない、と。

ネイ島で福引屋のバン、兵士を殺したためクールークから追われている賞金首バーソロミュー、なんだかよく分からないがついてきた瞬間移動娘ビッキーを、ナ・ナル島で釣り人ウゲツ、えれべーたー男マニュ、宿屋で遊び相手を捜していた少女リタ、色っぽい美人紋章師ジーンを仲間に加え（彼女を見た瞬間、ひきつったヒサトが「……変わんねえな……変わらず綺麗だよ、ジーン」げんなりと告げる彼にジーンは「うふふ、ありがとう。あなたも相変わらず素敵よ、剣神ヒサト……」などと嫣然と微笑みかけ、そんな会話が為されたことから、剣神と彼女は古くからの知り合いだということが判明したりした。ちなみに、本当にただの知り合いらしく、関係は一切ないとのことで、ライガはほっとしていた）

それから、ミツバがいた集会広場にひとりの女が立っていて、ライガが話しかけるなり襲ってきたりもしたが、ヒサトが瞬間で撃退、刺客だったらしい女が逃走する一幕もあった。

本拠地船に戻ったら戻ったで、ヒサトと一晩自室で過ごしたライガにトーブが声をかけてきて、開かずの部屋に気配がすると相談されて行ってみたら、いつ乗った、いつからいたというような男がキノコを栽培していたりして、ゲンナリして自室に戻ったライガに、またもやトーブが声をかけてきて、もう一度同じ部屋に行ってみたら似た顔の男がミントを栽培していたりした。うりふたつの栽培男の名は、マオとナオ。

得体の知れない二人にぐったりとして、気分転換にウゲツと釣りでもと後部甲板で釣りをしていると、人間が釣れてしまってびっくりした。

ウゲツの兄貴分、シラミネだった。どうして釣れたのかはいまだ謎である。

海賊島にも仕立て屋フィルがいて、仲間にしようと海賊島に戻ったときである。

ひとりの漂流者が、事態を急変させた。

フィルを仲間に入れてから、ライガたちは奥にあるキカの部屋へと足を運んだ。

そこにいたのは、カタリナ。

ラズリルのガイエン騎士団副団長の彼女が、何故ここにいるのか。

彼女は衰弱著しく、かなり拷問されたらしい。

「ヒサト……あなた、どうしてここに」

ヒサトの顔を見て、カタリナは驚き、彼の隣にいるライガを見て目を見開いた。

グレンを殺した罪により、彼女自ら流刑を決めた少年。

彼女の父親を殺したと思った少年が、何故父の親友のヒサトと一緒にいるのか！！

「ヒサト、どうしてライガといるの……団長を殺したのは、彼よ！？」

「……惚れた相手だ」

「！！」

カタリナは炎のような瞳でライガを睨みつけた。グレンを殺しただけでなく、ヒサトまでたぶらかしたのかと、目が言っている。

「あー、カタリナ？　言っとくが、ライガは」

「……今なら……今なら私を殺すことができるわね……憎いでしょう……私が……」

「おーい」

「……殺すなら殺せばいい……団長にそうしたように……！！」

「……聞けよ、おい」

ゲンナリするヒサトである。カタリナは全く聞く耳を持っていないようだ。身体が弱っていて心も弱っているこの状態では、説得は難しいかもしれない。

ライガは少しだけ寂しげに、だが、微笑んでヒサトの腕を軽く叩

いて、分かっているからと示す。
それからカタリナに問う。
「どうして、ここに？」
カタリナは悔しげに、それでも状況を語った。
ラズリルがクールークに陥落した、と。
「！！」
ガイエン本国からの救援はなく、騎士団の団長に就任したスノウがあっけなくクールークに売り渡し、彼は今クールークの海賊討伐隊長に就任している、と。
「うーわーあー、ヤな名前を聞いたー」
ヒサトは正直に顔をゆがめた。
「そんな……！！」
ラズリルが陥ちた。その衝撃。しかも、護るべき立場のスノウが売り渡したのだと聞いて、ついてきていたラズリル組は驚愕した。
「スノウ、が……」
呟くライガに、カタリナは肩を落とす。彼女はラズリルを護るために戦ったのだろう。だが、上に立つ者に裏切られ、クールーク側に捕まって拷問を受けた挙句、海に投げ出されたのだ。
「ヒサト……あなたがいてくれたら、こんなことには……！！」
呻く彼女に、ヒサトは冷酷に告げる。
「……グレンが死に、ライガも流刑にされた場所に、俺が居続ける理由はないぞ、カタリナ」
自分はグレンに呼ばれ、ライガのために滞在していた。だから、両者がラズリルから居なくなれば、ヒサトがラズリルにいる理由もない。カタリナはうつむく。
「……」
ヒサトがいれば、確かにこんな事態は防げただろう。
そのかわり、ライガは今ここに居なかった。
「……少し休ませてやれ」
横の椅子に座っていたキカが促す。今のカタリナには何を言って

も無駄だろう、と。
「そうだな」
ヒサトも頷き、ライガの肩を抱いた。
今は、時間が要る――。

本拠地船に戻ったライガを、待ち受けていたのはクールークの船だった。
海賊討伐船……カタリナが言っていた人物が乗っている。
「スノウ……！」
「うわぁ、会いたくない顔」
ライガが驚き、ヒサトが呻く。カタリナの話は間違いなく真実だったのだ。

「ライガ……ヒサト……！？　どうして君たちが……」
海賊のところに居るのだと、スノウは目を見開き、寄り添うようにヒサトと居るライガに眉を寄せた。
あの日ラズリルから姿を消したヒサトが、どうしてライガといるのか。
しかも、海賊たちのところに。
自分の好きな人、愛している人、ずっと捜していた人。
両想いだと、信じていた人。
「ヒサト……！」
なのに、どうして？
ライガなんかと一緒に居るんだ！？
スノウはこぶしを握り締めた。
ライガの横に居るヒサト。そこは自分の居場所だったはずなのに。
勝手にそう考えていた青年は、勝手な嫉妬に心を焦がした。
海賊の討伐に来たのだ。ライガがここに居るということは海賊になったのだ。
ならば、スノウのやることはひとつ。

「……戦闘準備！！」
ライガを倒して、ヒサトを奪い返す！！

「ヤる気だよ……あのボンボン」
ヒサトは今日二度目のゲンナリ感を味わった。カタリナといいスノウといい、こちらの話を聞かないような連中ばっかりだ。相手をするのは、疲れる。
「どーする、ライガ？」
「……戦うよ。向こうがその気だからどうしようもないし、スノウを捕まえて話し合う」
ライガにはスノウを殺すつもりはない。世話になった相手という思いが今だにあるのだ。
「ヒサト、お願いできる？」
クールーク艦は二隻。片方はスノウが乗っている。
ライガにすがるように見上げられ、ヒサトは呻いた。少年が言いたいことは瞳を見てすぐに把握できた。
「……生け捕りがご所望で？」
「うん。怪我無しで」
「……斬ったほうが楽なんだが」
「ダメ。怪我無しで」
ライガは譲らない。ヒサトは大きく息をついた。
断れるわけが、ない。
できないことでも、ない。
むしろ簡単だから、なおさら断れない。
「……行ってきます」
「行ってらっしゃい♪」
嬉しそうに言うライガに、ガックリと肩を落としたヒサトを見て、リノとキカは目を丸くした。

ところが、近付いてこない。

いかにヒサトといえども、ある程度近付かないと敵艦に乗り移るのは不可能で、スノウが乗っていない艦は寄ってくるのだが、ヒサトがいるとわかっているスノウ艦はこちらに近付かない。

「お、生け捕れんな、これは♪」

「ヒサト……嬉しそうに言わない」

「撃沈しよう、な？　ライガ」

「嬉しそうに言わないの！！」

「そーら、沈めー♪」

「紋章魔法使っちゃダメっ！！！」

ライガはヒサトを止めるので大忙しだ。剣神は心底からスノウが嫌いらしい。

「ヒサト……お前あっち沈めて来いや」

近寄ってきているスノウの乗っていないガイエン艦を指して、苦笑してリノが言う。

「面倒い」

ひとこと。

「つかこっちは紋章砲で充分だろう。俺はぜひともアッチを沈めたい」

この機会に某フィンガーフートを亡き者にする気が満々。こいつのおかげでライガを手に入れるまで一年半かかったのだ。恨みと言えば恨み骨髄である。

スノウ艦から紋章砲が発射されたが、ヒサトは視線を向けもせず右手を振り払って紋章魔法で相殺する。

ズドンッ！！

衝撃で波が荒れ、船が揺れた。

相殺してのけた本人はなんてことでもないと言うように恋人に駄々をこねている。

「なあ、ライガ、アッチ沈めよう」

恋人はにこやかに、こちらもなんてことがないと言うように答える。

「ダメ」

海賊たちがまた目を丸くしていた。

「……デタラメだ……なんだよあれ……」

「……紋章砲を……どうやって紋章魔法で……」

ハーヴェイとシグルドが頭を抱えている。どう考えてもヒサトの強さは人外だ。

紋章砲を、紋章魔法で、しかも属性関係無しに相殺する男。

ありえない。

こちらからの砲撃は相性があって相殺されたりされなかったりするが、あちらからの砲撃は全てヒサトが防いでしまった。

こちらに被害はなく、圧勝である。

ガイエン艦が沈むのを見て、スノウ艦は逃げ出した。

「スノウ……！！　ライガ、追いかけよう！！」

ケネスが言う。ジュエルも頷いた。

「きっとスノウがラズリルを売り渡したなんて何かの間違いだよっ！！」

一緒にラズリルを護るために騎士団で稽古してがんばったのに。

ラズリル組はスノウの行動が信じられないようだった。

「……うん」

ライガは頷いた。騎士団で過ごした日々は嘘じゃない。

スノウだってラズリルを護りたいと思っていたことを知っている。

「スノウに話を聞きに行こう」

言って、横のヒサトを見る。

彼は頭を掻(か)いて苦い表情をつくった。正直、彼から見たスノウはライガたちの受ける印象とは違う。

そもそもこちらに向かって砲撃してきた時点で、信じられる相手ではないだろう。

スノウはライガが乗っていることを分かっていて砲撃してきた。ケ

ネスやジュエルの姿も確認できたはずである。
それでも撃ってきた。
それでも――ライガたちは信じたいのか。
「……分かった。お前が決めたのなら、それでいい」
おそらくはその心こそ、自分が愛したものだから。
剣神は頷く。そこで待つ現実がどんなものであろうと、彼らは受け入れるだろう。
その上で、判断すればいい。

ラズリルに達したスノウ艦は、港にたどり着くなり火矢の攻撃を受けていた。
矢を放っているのは、住民だ。
「売国奴！！」
「お前にラズリルの地は踏ませない！！」
「お前の親父はすでに逃げていった！！」
「出て行け！！」
向けられる罵声。
帰るところなど、もうないのだと、スノウは知る。
船首を返すしかない。
向かう先には、追ってきていた本拠地船。
「……捕まえてくるか？」
ヒサトが言うと、ライガはうつむいたまま頷いた。
「……うん。お願い」
剣神が欄干を蹴り、スノウ艦に降り立つのを見送ったライガは、胸を抑えた。
どうしてだろう？　分からない。
スノウ、君はどうしてラズリルをクールークに？
クールークから護ろうとしていたんじゃなかったのか？
どうして――？

「ヒサト……ヒサト！！」
駆け寄ろうとしたスノウを、ヒサトは剣先で制した。
「ヒサト……？」
「……とことんぼっちゃんだな、お前は」
疲れたように息をつき、襲い掛かってきたクールーク兵を瞬時に斬り捨てる。
「！！　なにを……なんで！？」
「何でって？　俺が愛しているのはお前じゃなく、ライガだからさ」
あっさりと言ってのける。スノウが固まった。この場に及ぶまで、愛されていると疑っていなかったスノウ。
ラズリルからヒサトが出て行っても、ライガの横に佇んでいるのを見ても、こうして剣を向けてくる彼を見ても。
哀れで愚かな、良家の子息。剣神は同情しなかった。
この選択を選んだのはスノウだ。彼自身だからだ。
「さぁ、ライガが呼んでいる。せめて説明してやるんだな。何故ラズリルをクールークに売り渡したのかを」

「あの時は楽しかったね……何で、遠い日になったんだろう……どうして僕は今ここにいるんだろう……」
スノウは説明しなかった。殺せばいい。それだけ言って黙り込む。
「……スノウ」
ライガは彼の前に立つ。かたくなな拒絶に悲しげに瞳を揺らして。
「一緒に、来ない？　僕らの仲間として」
スノウに拒絶され、それでもライガはそう言った。
ラズリルに拒否され、行くところがないのなら。
昔みたいに、一緒に。
行くところがない自分を拾ってくれたから、せめて。
スノウは首を振った。できない。
「……殺してくれ」
すがるようにヒサトを見る。

せめてあなたが殺してくれないだろうか。
ヒサトは容赦がなかった。
「お前を、俺が？　俺のこの刃にかかるくらいの価値はあると自分で思うのか、スノウ」
「……！！」
殺す価値もない。剣神の刃は苦しませないで殺してくれるだろうに、彼はそれすら許してくれない。愛しい人に殺される夢すら見させてくれない。
「……このまま、海へ」
ライガはそう指示した。スノウを殺す気はない。それはいまこの状況でも変わらない。
ラズリルに戻れなくても、海へ出れば、どこかへ行くチャンスはある。
「ライガ……同情ならいらないよ……」
スノウの声に、ライガは首を振る。
「生きてて。そうしたら、きっと……きっと、絶対」
先はあるから。
「またね……スノウ。どうか、元気で……」
小船に乗り、送り出されるスノウはじっとヒサトを見ていた。
ヒサトは視線を向けもしなかった。

「いつか……また、会えるよね……？」
呟くライガの肩を抱き、ヒサトは苦笑した。
「あんなんでも再会したいのか？」
「ヒサトは、スノウ嫌い？」
「おう」
即答だ。
「ついでに言えば、アイツの親も揃って大嫌いだ」
「……なんで？」
「お前をこき使ってたから」

「……僕、こき使われてないよ？」
「……用事を言いつけられて、それが出来なかったら殴られるのはこき使われているって言うんだ」
「……そうかな。そんなことないと思うけど」
やはり自覚がないライガだ。
「騎士団、入れてくれたし」
「そりゃスノウの面倒見させるためだろう。お前宿舎にも入れてもらえなかったんだぞ」
「……でも、おかげでヒサトの部屋、行けたし」
ちょっと赤くなるライガだ。宿舎に入っていたら、ヒサトとの密会もままならなかっただろう。ヒサトは息をついた。スノウと居て良いことなんて、そのくらいしかなかっただろうに。
「……はいはい、分かりましたよ。お前は俺よりスノウがいいんだな」
「!?　ち、違うよ!?　そんなんじゃなくてっ」
「嘘だよ。分かってる。次があっても殺さないで捕まえてやるから、納得行くまで説得しろ」
「……うん」
ありがと、と恋人は小さく呟いて抱きついてきた。
その手に呪われし『罰の紋章』があっても、人を思う少年。
人を思える少年。
全てに恵まれていても、人のことなど何も考えずいる青年のそばに居て、良いことなど数えるほどしかなくても、それでも、スノウの身を思い案ずるライガ。
ライガを抱きとめ、ヒサトは思う。
ライガのような部分が少しでもスノウにあれば、ラズリルを追い出されることなどなかっただろうに。
グレン。お前も嘆いているだろう。
いずれ。
剣神は思う。

そう遠くない内にラズリルをクールークから取り返してやるよ。
お前が護り、愛した場所だから。
紋章に喰われた亡き親友よ。お前の嘆きが苦しみが、せめて薄くなるように――。

永遠の空・26

クールークの勢力が拡大する中、キカがひとつの案を持ち出した。
軍師。
軍に必要なものは、強力なリーダーと、それを補佐する頭脳。
それがなければどれだけ人がいようがクールークには勝ち目が薄い。
「心当たりがあるのか」
「エレノア・シルバーバーグ」
ヒサトの問いに、キカはその名を上げた。
「問題あるか？」
「……ない。だが、来るか？　あいつ。隠遁（いんとん）してるんだろ？」
「話はこちらからつけておく」
だから会いに行ってこい、と。
キカとリノはライガにそう言った。
「……おい」
ライガを名指しする辺り、怪しい。何か企んでないか、とヒサトは半眼になる。リノはその視線からあからさまに目を逸らしてライガの肩を叩いた。
「て！！　いうわけで、だ！！　ライガ、ちょっくら行ってきてくれ。ヒサトも一緒ならかまわんだろう？」
「はい。じゃあ行ってきます」
「リノ、キカ」
じっとりとした目でにらんでいるヒサトから二人とも目を逸らしているのは気のせいではない。
「ライガ、すぐそこの庵がある小島だ。迷うことはないからな」
「はい、キカさん」
「コラ待てお前ら」
ヒサトの様子に、ライガはきょとんとする。

「どうしたの、ヒサト？」
「や、何かこいつらの態度がアヤしい――」
「気をつけて行って来いよー！！」
リノがライガの背を押して室内から追い出してしまう。
「ほらヒサト、置いていかれるぞ？」
薄く笑うキカに、ヒサトは憮然とする。
「……なに企んでやがる」
「さて。なんのことだ」
ヒサトは忌々しげに息をつく。彼はライガを追って部屋を出た。
ドアが閉まってから、キカは呟く。
「何があっても、お前が護るのだろう？　剣神ヒサト。私は正直ライガがうらやましいよ」
「……腐ることはあるまい。ライガがその器だってのはすぐに知れるさ」
リノは笑っている。
「なんせあの剣神を骨抜きにしたヤツだからな」

エレノアが隠遁しているという小島は海賊島のすぐ近くにあった。
ヒサトと一緒に上陸すると、シグルド、ハーヴェイ、ダリオが心配してついてきてくれた。
「や、ぶっちゃけヒサトがついてれば心配要らないとは思うんだけどね」
「まぁ、念のためということで」
「剣神の力ぁ、見てみたいってわけじゃあないぜ？」
とは言いつつも、ダリオはヒサトを見ている。
「……見ただろ」
うんざりとヒサトは返す。ダリオはかまわずヒサトを見上げる。
「なぁ、あんたなに食ってそんなに強くなったんだ？」
むさいオヤジの上目遣いに、即座にヒサトは言い切った。
「シグルド、ハーヴェイ、こいつウザいから斬って捨てるぞ。後で

キカに言い訳しとけ」
「はい」
「分かった」
躊躇(ちゅうちょ)なく頷く二人に、
「止めてください、シグルドさん、ハーヴェイさん」
ライガが思わず言うと、二人は首を振った。
「止めらんねえって。ヒサトを止められるのはあんただけだよ、ライガ様」
「私もそう思います」
「……ヒサト」
ライガが見ると、ヒサトは剣の柄に手をかけていた。そこからダリオの命を奪うのなど、彼には一瞬で済む。ライガはあわてて止めた。
「ダメ！！」
「ちっ。命拾いしやがったな、ダリオ」
ライガが止めると簡単に止まるヒサトだ。これがほかの人間だったら、止められても関係なくやっている。
「行くよ！！」
「はいはい」
ライガに腕を引っ張られ、ヒサトは苦笑して抵抗なくついていく。それを見て、シグルドもハーヴェイもうらやましそうにしている。
「いいなー……簡単にヒサトの腕取ってるよ、ライガ様」
「……触ることも許さないからなぁ……本来の彼は」
たとえばシグルドかハーヴェイがライガと同じようにヒサトに触れようとしたならば、剣神は即座に反応して、彼らの手が触れる前に、殴るかひっつかんで投げ捨てるか斬り払うかのどれかの行動に出るだろう。
ヒサトと腕を組むということがどれだけ特別なことなのか、ライガは知っているのだろうか？

「廃屋じゃん。人住んでるのか、本当に」
一目見たハーヴェイの感想はそれだった。ぼろぼろの建物は、とても人が住んでいるとは思えない。
「失礼ですね！！！」
声を上げたのは一人の少女。
キカから連絡が行っていたのだろう、彼らが来たことについて驚いてはいない。けなすような言い方をしたハーヴェイに、ここに住んでいる人に失礼でしょうとか怒鳴りつけている。
あまりの剣幕に、ハーヴェイはしどろもどろで謝った。
ここで住人だろうこの少女の機嫌を損ねるのはまずい。
ライガは戸惑いながらも少女に声をかける。
「あの……あなたが、エレノアさんですか？」
「まぁ、違いますよ。私程度がエレノア様に追いつけるわけありません。私はアグネス。エレノア様のお世話をさせていただいているものです」
ライガには多少柔らかい態度で接する少女だ。それでも、多少、だが。
めちゃめちゃ歓迎されていない。
それはよく分かるのに、アグネスはライガたちを歓迎すると言った。
エレノア様とお会いする前に、酒と料理を用意しましたから、どうぞご存分に召し上がってくださいと。
「……ライガ、あまり口にするなよ」
ひそ、とヒサトはライガに小さく囁く。
どうして？　と目で訊いてくる少年に、ちょっと笑いかけ、
「歓迎されていないからさ」
そう答えた。
案の定、酒と料理には薬が盛られていた。少し口にして確信したヒサトである。

彼は味と匂いで毒物や薬物を判別できる特技がある。
毒ではない。単に意識を混濁させるものだ。だがそんなもんを盛るあたり、エレノアとアグネスが何を考えているのか分からない。動けなくなること間違いないような薬なので、怪物の出るところにでも引きずっていかれたらそこで人生が終わる。
口にするふりだけして、ころあいを見計らってヒサトは意識を失った真似をした。
ライガの横で壁にもたれて目を閉じる。少年もヒサトの忠告に従って少ししか口にしなかったので、意識は保っているが、彼に習って肩によりかかってきて目を閉じた。
海賊三人は、たらふく飲んで食って撃沈している。
ややあって。

じゃり。

足音と気配。
歩幅と歩き方から予想して女。おそらくこれがエレノア。
寝転がっている海賊三人を、音からしてビンか何かでだろう、それで小突きながら彼女は訪れた目的を訊いている。
世を捨てたもの特有の、絶望して空っぽの声だと、ヒサトは感じる。
全てにやるせなく、あきらめている声だ。
「死人を何のために引っ張り出す気だい？」
彼女はそう言っていた。
この世界の中で、彼女はもう死んでいるのだ。希望を忘れて。
近寄ってきた気配。今度はこちらに目的を問いただす気なのだろう。
「……ビンで小突くのはカンベンしてくれ。反射的に殴り返しそうだ」
ヒサトが目を開けると、アグネスが目を丸くした。

「……あんたにはあたしの薬が効いてなかったようだね」
「口にしてないだけだ。そこのお嬢さんに歓迎されているとはとても思えなかったからな」
「は、食えない男だ」
「ライガ、もういいぞ」
少年も寝たふりをやめて起き上がる。
「エレノアさん、ですか？」
「ああ、そうだよ。あんたたち、中へ来な」
彼女は話す気になったのか、ライガとヒサトだけを家の中に入れてくれた。
口直しなのか解毒薬なのか、やたらと苦いお茶を出された。
「心配要らないよ。頭がスッキリするただの茶さ。アグネス、外で寝てるだらしない連中にも飲ませておやり」
アグネスがビンを抱えて出て行く。
エレノアは斜(はす)に構えてライガとヒサトを見つめる。
「で？　この死人に何の用だい？」
飾らずに、ライガは訴えた。力を貸してほしいと。
クールークと戦うそのために、どうかあなたの力を貸してほしいと。
エレノアはしばらく考え、それから決意を見せなと言ってきた。
この庵から奥に進んだところに洞窟がある。そこの一番奥にある物を持って来いと。
「ただし、あんたひとりでだ」
ヒサトの手を借りずに。怪物が出る道を通って。
「保護者がいないと、立つことも出来ないようなヤツに手を貸す気にはならないね」
「……分かりました」
ライガは頷いた。
「ヒサト、待ってて」
「……ああ。気をつけてな」

「うん」
裏口から出ていくライガを見送って、ヒサトはエレノアに向き直る。
「……あいつになにかあったら、殺すぞエレノア」
「は、剣神も変わったね。なにがあったんだい、この数年で」
「やかましい」
久しぶりに会った相手に向かってこれか。それとも知らないフリをしたことをさりげなく責めているのか。
「お前のほうこそ腐ったな。使い物になるのかよ」
「うるさいね。あんたの下半身よりはずっとマシさ」
「なにをぅ？　ズルベタに糸引いてる脳みそよりはいいだろうが」
「どこがだい。種巻きまくって責任とらずと比べてほしくないよ」
「失礼な。当てたことはないぞ、気をつけてるし」
「……確かにそうだろうさ。あんたの子供を孕んだって話は聞いたことがないからね」
エレノアは息をついた。苦笑する。
「……変わらないねぇ、あんたは」
この男と出会ったのは、いつだったろうとエレノアは思う。
「童顔だからな」
ヒサトはしゃあしゃあと言い切った。
「……本当かい？」
「さてね」
不敵に笑う。
「で、本題だ。お前の力を貸してくれ。さっきライガも言ったし、キカからも聞いているだろうが。とりあえずクールークを何とかせにゃならん」
「あたしが出ることもないだろう？　剣神ヒサト、あんたがいるのに」
この男一人で、ほとんどのことは為せるはずだ。
「俺はライガ以外を守る気はない。だが、あいつは群島諸国を護り

たがっている」
「……あの子、あんたのなんだい？」
そこで初めてエレノアはいぶかしげな表情になった。
「恋人だ」
「……それにしちゃいつもと感じが違うね？」
「愛人じゃない。恋人だ」
そう聞いて、ようやくエレノアにも意味が通じたらしい。
マジ惚れの相手だと。
そしてやはり、ほかの面々と同じようにエレノアも絶句した。ぽかんとしている彼女に、
「……どいつもこいつも……！！」
呻くヒサトである。どうしてこう、誰も彼も同じような反応をするのか。
自分の過去の行いを、胸に手を当てて考えてみれば一目瞭然なのだが。
「……あんたが？」
「悪いか」
「……あんたが？」
「うるせえよ」
「……あんたが？」
「……ボケたか？」
即座にエレノアは反論した。
「誰がだいっ！！」
「同じこと繰り返すからだろうがっ！！」
同じ勢いでヒサトも返す。
「だって信じられるかい！？　あんたに本命！？　は、笑わしてくれるねぇ、どのツラでそんなことぬかすんだか」
「うっさい。このツラだ、このツラ！！　よく見やがれ！！！」
にらみ合うように言い合う二人を、アグネスがおろおろと見守っている。エレノアがこんなに口調を荒げて、しかも楽しそうなのは

彼女も初めて見る。
かなりの勢いで口ゲンカのようなじゃれあいをしておいてから、ヒサトは息をついた。
雰囲気を一変させて、言う。これだけで伝わるだろうから。
「……『罰の紋章』があいつに宿ってる」
「！！」
絶句したエレノアに、ヒサトは心から真剣に訴えた。
「力を貸してくれ、エレノア」
――この男からの真剣な頼みを、断れる人間がいるのだろうか。
そうでなくともエレノアには断れない理由が出来た。
『罰の紋章』。
ならば、彼女は頷くしかない。
「ずるい男だね、ヒサト」
「自覚はしてる」
「あたしはあたしなりにやらせてもらうよ？」
「かまわん。それでいい」
「……あの子。大事にしてやりな」
「ああ。分かってる」
気配が戻ってくる。愛しい少年。無事のようだ。
「頼むぞ」
「分かったよ」
そうして、旧き友の密談は終了した。

永遠の空・２６（後書き）

エレノアさんともお知り合い。赤月にも行ったことあるようです。

永遠の空・27

エレノアとアグネスを仲間に、ライガたちは船に戻った。エレノアが船に慣れるまでの少しの間、再び仲間集めに走る。

なつかしの無人島では温泉好きの風呂職人タイスケとリーリンの姉妹、リーレンを、シラミネに引き綱をかけてもらってネイ島周辺を航行していると、人魚（これまたリーリンの姉妹）リーランが網にかかってあわてたり、海賊島周辺に戻ってみると海面からの呼びかけがあり、覗いてみるとまたリーリンの姉妹リーロンだったり。

「リーリンって、姉妹多いね」

「うん、まだ、おねえちゃんもいる」

「まだいるの！？」

「うん」

などという会話をしたりしていると、エレノアからお呼びがかかった。

ヒサトと一緒に呼ばれた作戦室に言ってみると、主要メンバーが勢ぞろいしていた。

これは大事な話らしいと、ライガは表情を引き締めた。

エレノアは言う。

これからは群島の力をまとめていかなければならない。

クールークに対抗するためには、諸国が一致団結する必要があるのだ。

そして、それを纏（まと）め上げる力のあるリーダーが必要だ。

リノかヒサトだろう、ライガはそう考えていた。だから、エレノアとリノがライガを指し示したときには心底から驚いた。

「え……！？」

思わずヒサトを見た。自分より彼のほうがよっぽどふさわしいではないか。

「ヒサトはダメだ。カリスマも実力もあるが、本人に率いるつもり

がない。こいつは船が沈みそうになったら部下も見捨てて即行でライガだけ抱えて行っちまう、いい加減な男だからね」

「……よく分かってるじゃねえか」

ヒサトは忌々しげに呟く。リノとキカが企んでいたのはこれかと、ようやく気がついたのだ。

ライガをこの軍のリーダーにしてしまうこと。そのためにエレノアのところに行かせ、彼女にライガがリーダーの器かどうかを判断させたのだろう。それが彼らの目的だったのだ。

そして、エレノアが出した結論は。

「リノと一騎打ちして実力で決めな。現状、王に従いたいと思う人間も多いだろうからね」

オベルの国王、リノ。人を纏め上げることに関しては一日の長がある。

だが、ライガにはリノにはない魅力があった。

どんな人間でも包み込むような、そして自然と率いていくような力がある。

ライガは一度目を瞑る。できるか？　自分に。

人を率いて、群島を護るだけの決意は？　たくさんの人を纏め上げていくことが、自分には可能か？

自信など、ない。

でも。

少年は目を開く。傍らには彼がいてくれる。

ライガはそれを知っている。彼に頼ることは悪いことではないから。

助けてくれる人がいるから。その人を護りたいと思うから。

なによりも、彼と出会って過ごしているこの場所を護りたい。

ならば。

「どうする、ライガ？　俺との一騎打ち、受けるか？」

リノは真顔だ。

ライガは答えた。

「望むところです」
揺らがない、強い瞳で。

ヒサトはライガとリノの一騎打ちを壁際で見守る。
ライガが負けることはないだろう。
リノは弱くない。だが、ライガはその上をいく。
愛情を抜きにしても、ヒサトが目をかけている少年だ。負けるわけがない。
「……不満かい？」
エレノアが近寄ってきた。小声で呟くように訊いてくる。
「あんたが率いてくれるほうがいいんだけどね」
「……」
ヒサトは無言で首を振った。
真っ平だと思う。人を率いて戦うことに経験がないわけではない。過去を振り返れば確かに人を率いていたこともあった。
出来ないわけではないけれど、それ以上に……思い出すものが重いから。
「もう……たくさんだ。冗談じゃない」
それをライガに背負わせるのもイヤだった。
けれど、ライガ自身がそうと望むならば……精一杯支えてやろうとは思う。
「あんた……本当に何者なんだい？」
エレノアが呟く。これだけの強い男なのに、どこにも残らず誰にも仕えない。
過去に垣間見た姿からは上に立つものとしての貫禄のようなものさえ見受けられた。
そして、人を率いて戦うことを拒む男。
その、理由は？
ヒサトは答えない。
剣の神とも言われる男はただ、ライガとリノの戦いを静かに見守

る――。

リノが槍で突いてくるのをライガは身をかわし、すくい上げる様な鋭い一撃で返した。

たまらずリノは倒れ、あわてて手を上げた。

「まいった！　……ってて、本気でやりやがって」

呻いて立ち上がる。そして宣言した。この船は今後ライガの指揮で動くこと。

皆はそれに従うこと――。

ライガは息をついた。負けるとは思わなかった。

ヒサトの動きを見ていたら、リノの動きは止まって見える。

一緒にいるだけでも彼の存在はライガにとって確実に力になっているようだ。

「ライガ」

リ　ノは歩み寄り、少年に金色の塊を渡す。

オベルの金印だ。国王――指導者の印。

これを持って各地を訪れて、纏め上げろと。

「じゃあ、最初の仕事だ」

エレノアは言った。軍として正式に動き出すこの船に名前を。

そして軍勢にも名を。

名前の候補はそれぞれいくつか出された。

ライガは考え、

「船名はティターナ。軍は――ライガ軍で」

自らの名を冠した軍と、女神のような名前を得た船。

この瞬間、少年はその主となった。

決起は、為された。

まずはミドルポート。以前はガイエンの領地だったが、独立を勝ち取り、交易を中心に栄える島へ。

「ヒサト」
自室に戻ったライガは、恋人を見上げた。
「……怒ってる？」
「？　なんでだ？」
「勝手に決めたから」
ヒサトは苦笑した。可愛い恋人を抱きしめて、耳元に囁く。
「お前が決めたんだ、何で怒るんだよ？　かまわない。俺はお前のそばにいる」
ライガはヒサトの胸元に擦り寄った。
「そばにいて。僕はクールークから全部を取り戻すから。ヒサト、力を貸して。あなたの……剣神の力を」
「……お前が望むのなら」
ヒサトは答えて、見上げてくる少年に口付けた。

それはまるで、誓いの儀式のように。

ミドルポート。ライガもお使いや任務で以前何度も訪れた島。買い物をするには最適で、活気もある。
ここは独立しているので、誰でもどこからでも入港できるはずの場所だ。
ところが、入港する間際に、でかい怪物に襲われた。
甲板でライガとのんびり日向ぼっこをしていたヒサトは、一目見てアホらしいと息をついた。襲ってきたのはどう見ても、でかい巻貝だ。
「！！　大変っ！！」
ライガが立ち上がろうとするのを、腕を掴んで止める。
「これから狸（ミドルポート領主を指す）と交渉するんだろ、無駄

な体力精神力使うな」
「で、でも、あれは放っておくとまずいと思う……」
巨大な本拠地船の半分くらいはありそうな、でかい巻貝のような怪物だ。
触手がにょろんと海上にはみ出した。あれに握られたら、人間の体はあっけなく軟体生物なみに骨が砕かれそうだ。
「船、壊れちゃうよ」
「……そういうときはだな、ライガ」
「うん」
「俺に命令すればいいんだよ。雑魚を一掃しろって」
「……」
ライガは一瞬きょとんとして、それから戸惑うように瞳を揺らし、そして決断した。
「ヒサト、片付けて」
「はいよ、軍主殿」
あっさりと答えてヒサトは巻貝に視線を向けた。座ったまま何気なく、右手を突き出す。
「船揺れるぞー、甲板にいる連中、落ちるなよー」
一応そう告げて、開いていた手を、握りこんだ。
炎の紋章が彼の頭上に浮かび上がり――瞬間。

ズガンッ!!!

轟音の後、巻貝はばっくりと大半を抉り取られて燃え上がった。
そのまま、沈んでいく。
「……」
甲板にいたほかの仲間たちは、絶句していた。
やる気のないヒサトの態度だったが、彼がやったことはほかの誰にも出来ないことだろう。
あれだけの威力の紋章魔法を、間近の本拠地船には傷すらつけず

に放つなど、ヒサト以外にできる者など考えられない。
威力だけでなく、精密度も抜群だ。
しゃあしゃあとやってのけた当の本人はのんびりとライガを抱きしめて再び日向ぼっこの体勢。ミドルポートに着くまではのんびりするつもりらしい。
「ラム酒がうまいんだよなぁ、ミドルポートって」
「えっと……じゃあ、後で買ってあげる。今のご褒美に」
「おお、貝を燃やしただけなのに褒美が出るのか」
『だけ』って……。聞いた連中は脱力感を覚えた。どう考えてもあの巨大巻貝は怪物だ。それを瞬間で片付けておいて、『だけ』ときたもんだ。
「……ばけもんだ……」
「……すごいな」
アカギとミズキが呆然と呟いた言葉に、聞いた全員が同意した。

入港すると、分けのわからない二人組みが出迎えた。
領主の息子とその使用人らしい。
使用人、ミッキーは巻貝を倒したことを聞いてあわてた。あの怪物貝は領主のペットだったらしい。
「……ちゃんとしつけ、しといてください」
ついてきたラマダが頭を抱えている。ペット殺害犯のヒサトは知らんぷり。
父を説得しますから大丈夫ですよと胸を張る領主の息子、ラインバッハについて館に行くと、領主はいい顔をしなかった。
どうやら、クレイ商会とも取引を交わしているらしく、繋がっているクールーク軍と戦うということは、領主にとってクレイ商会と波風を立てることになる。
だから全面的に協力は出来ない。ただし、この島でのライガたちの行動にも制限はしないし、港も好きに使っていい。
そのかわりクレイ商会とのかかわりを他言しない、干渉もするな、

と。

ずいぶん勝手な言い分だ。商人らしく、危ない橋は渡らないということだろう。

確かに、今この状況でクールークに刃向かうのはある種の賭けだ。下手を打って、島ごとなくなりでもしたら目も当てられない。

「こちらには、剣神がついていても、ですか」

ラマダの意見にヒサトは少し眉をひそめた。

「それが何の力になると？　ただのウワサが島を護ってくれるとでも？」

どうやら剣神の話をただのウワサだと思っているらしい。

ここにいますよとラマダが口にしようとしたとき、ヒサトは領主から見えない絶妙な角度でラマダの足を蹴った。

「……なんですか？」

振り返ったラマダに、にんまりと笑ってやる。

余計なことは、言うな。

目が語っているので、ラマダは黙り込んだ。

どうやらこの領主、ヒサトの嫌いなタイプらしい。

察したライガが声を出した。

「……それでも、ご協力感謝します。ありがとうございました」

それから、ヒサトの手を引く。

「船に戻ろう、剣神ヒサトどの」

さすがにライガに言われると何も言い返せないヒサトだ。彼の名前も、利用できるものならするとライガは決めたのだろう。

苦笑して少年についていく。彼らの後ろで、ウワサを目の当たりにした領主が目を丸くしていた。

「言いますねぇ、ライガ様」

「そうですか？」

きょとんとしているライガに、苦笑しているヒサトが声をかける。

「……ライガ、ご褒美のラム酒買ってくれ」

「あ、うん」
ライガは交易所に走っていく。ラマダがヒサトに並んだ。
「剣神どのも、ライガ様には勝てませんか」
「……軍主はライガだ。お前が喋ってどうする。舐められるだけだろう」
静かな声に、ラマダは愕然とする。
もしや、誘導したのか。
ライガがそう振舞えるように。
軍主として、発言するように。
「……あなたは……」
「始めだけだ。そのうちライガにも自覚が出来る。俺の名を利用すると決めたのなら、そんなものすぐだからな」
ヒサトは薄く笑む。
ラマダは声もない。この男は、剣技や魔法だけではないのだ。己の名すらも利用するしたたかさと賢さをちゃんと持っている。
ライガの尻に敷かれているだけかと思っていた。だが、違う。
「……恐い人ですね、ヒサトさん」
ライガといる間はそんなものは見せない。ただ可愛い恋人にメロメロな好色男だ。
けれど、それだけではないのだと、ラマダは知る。
そして魅せられた。ほかの人たちがヒサトのことを忘れられなくなる理由が分かる。
とんでもなく魅力的で、恐ろしいくらい有能な男だからだ……。

永遠の空・２８

港に戻ると、ラインバッハと使用人をクビになったミッキーが追いかけてきた。
軍に加えてくれと言う。
「私は父に失望しました！！」
クレイ商会、クールークなどと手を組むなどと、汚い真似は許せない。
だから軍に加えてくれと。
「喜んで」
ライガが微笑むと、ラインバッハはにこやかに、では、と続けた。
「……ライガ、本当に仲間にするのかこんなの！？」
ラインバッハの言葉を聞いて、ヒサトは心底からそう言ったものである。

ネイ島の宿屋に泊まっている彫刻家から『薔薇の胸飾り』を受け取って、ミドルポートまでもう一往復する羽目になった。
渡すとラインバッハは大喜びして、ミッキーと共に船に乗り込んだ。
「……一発殴ったらダメか、ライガ」
何でこいつのわがままを聞くためにわざわざネイ島まで、とヒサトは不満顔だ。まぁ、ビッキーが仲間に入ったのでテレポートできて、以前より移動は格段に楽になってはいるのだが。
ライガは苦笑してなだめる。
「ダメ。ラム酒もう一本買ってあげるから」
「菓子をねだる駄々っ子じゃねえんだから……どうせくれるならライガをくれ」
「……あげてるでしょ、いつも」
「いや、今」

「……すけべ」
「おう。よく知ってるだろう？」

ついでに買い物でもとあちこち覗いていると、宿屋でデボラという老婦人がライガの顔を見て一緒に来ると言い出した。人相を見る占い師に近い人らしい。
で、そこで一緒にお茶を楽しんでいた男（？）オスカルも何故か寂しがってついてきた。
ラインバッハと共に彼の家の前に行くと、音楽家エチエンヌも加わり、港でシグルドを始末しようと待ち構えていた怪しげな男に１００００ポッチ払って、シグルドをあきらめてもらい、その怪しげな男、キーンも船に乗った。
その後ライガの自室に戻ると、なんでかリノやエレノア、アグネスがいて、見たこともない男が二人、立っていた。猛烈に、臭い。
名をジャンゴとブレック。海賊だと言う二人は、クールークと戦うために力を貸してやろうじゃねえかと、とても強引に仲間に加わった。ライガになれなれしく子分になれとか騒いでいる。
「ほほう？　で、ライガの部屋に？」
にんまりとヒサトは微笑み、コブシを握り締めた。
ライガが止める間もない。
剣神のお仕置きが炸裂した。
エレノアは目を逸らし、リノは近寄ると危ないとライガを止め、アグネスは硬直している。
「なれなれしいんだよてめえらっ！！　俺のライガにその汚ぇ手で気安く触ったら殺すぞっ！！？？　いつから風呂入ってねえんだっ！！！？　異臭を放つ身体でこの部屋に入るなっ！！！！」

どかばきぐしゃごきごがっずどん。

一通り殴って気が済んで、ヒサトは軽く息をついた。どんだけ殴

ってもやはり、返り血を浴びない男である。
「ふー、これくらいにしておいてやるか」
「……それくらいにしときな。死ぬよ」
エレノアが原型をとどめていない顔の海賊コンビに同情の目を向ける。
「あー……分かったと思うが、この船でライガに逆らったら、ヒサトに殺されるぞ。気をつけておけよ？」
何度か自身も殺気を向けられているリノがひきつった笑みを浮かべている。ライガはため息をついた。
「ヒサト、やりすぎ」
「ははは、そーかなぁ。俺としては海の藻屑にしてやりたいところなんだぞ？」
さわやかな笑顔で言ってのけるヒサトだ。
殺してやりたいらしい。
「ダメ。あの、ジャンゴさん？」
「はひっ！！」
びしっと気を付けをする汚海賊コンビ。
「えと、第四甲板に医務室がありますから、そこで手当てしてもらってください。それから、第三甲板にお風呂もありますから、これ以上ヒサトに怒られたくなかったら、入ってくださいね」
「はいっ！！」
「……大丈夫ですか？　歩けます？　僕、ついて行った方が――」
「いえとんでもないです滅相もありません結構です自分で行けますからお心遣いありがとうございますライガ様っ！！！」
心配そうなライガの背後で、ヒサトが再びにんまりと物騒な笑顔で剣に手をかけているのを見て、汚海賊コンビはあわてて出て行った。
「……どうしたんだろう？　大丈夫なのかな」
「そーだなぁ、大丈夫なんじゃないのかー」
「……ヒサト、何かした？」

「なんのことやら」
とぼけて見せるヒサトに、リノとエレノアは苦笑し、アグネスはまだ硬直していた。

それから、カタリナの見舞いに行った。
どうしてもと、ライガが望んだのだ。
彼女は大分回復したようだった。
ベッドに腰掛けて座っているカタリナに、ライガは近寄る。ヒサトは少年の背後で腕を組んで立っていた。
ライガはもう一度、団長を殺したのは僕ではありませんとカタリナに告げる。
あの日あの時、彼女はそれすらも聞いてくれなかったが。
「……本当に……あなたが殺したのではないの……？」
今は、海賊たちからでも事情を聞いたのだろう。ライガの声を確かに聞きとめた。
「……殺していません」
そして、ライガは左手のグローブを外して、そこにある『罰の紋章』をカタリナに見せた。
「……グレンを殺したのは、その紋章だ」
静かに、ヒサトも告げる。この紋章が命を削り、グレンは死んだのだと。
「……この、紋章に……？」
カタリナは顔を上げた。表情は激しく歪んでいる。怒りなのか悲しみなのか、どうしようもなく揺らいでいて、やるせないくらいだ。
「では……では、団長は死んだのに、どうしてあなたは生きているのよッ！！？？」
「カタリナ」
ヒサトは腕を解いた。彼女に近寄り、彼女の頬を軽く叩く。
「！」
それからヒサトは痛いくらいに彼女の肩を掴んだ。

うつむくライガに聞こえないように、囁く。
「ライガも命を削っている……分かるか？　いつ……グレンと……同じようになるか、分からない」
ひとつひとつ言葉を切って、確かに伝える。
ライガもまた、苦しんでいるのだ。
そして、ヒサトも。
「俺は――親友だけでなくライガまで……愛した人までこの紋章に奪われるかもしれないんだ……！！」
血を吐くような、小さな声。
カタリナは目を見開いた。ヒサトの苦しみをようやく彼女も知ったのだ。
それはグレンを失った彼女が味わった感情だから。
「……ごめんなさい」
ようやくそう言って、カタリナは顔を上げた。ヒサトも彼女から離れる。
ライガの肩を抱き、出て行こうとした。
「待って」
カタリナは彼らを呼び止めた。
「私も……船に乗せてもらえないかしら……？　こんな、お願い……今更だけど……戦わせて。ラズリルを……取り返したいのよ……」
グレンが護っていた地。彼が死んだ地。彼が生きていた場所。
ライガは微笑んだ。
「もちろんです。歓迎します、カタリナさん――」
ようやく、分かり合えた。

それから、エレノアに頼まれて忘れ物を取りに庵の小島に行ってみると、狼を連れた変な男に襲われた。
獣の皮をかぶったその男は一緒にいたケネスを即座に殴り倒し、一撃で昏倒させた。
えらい怪力である。あわててケネスを介抱しようとしたライガに

襲い掛かっていったため、すぐさまヒサトが応戦。
　唸りを上げて迫り来るコブシを軽々とわずかに首を傾けただけでかわし、顎に右コブシを叩き込み、同時に左コブシで腹部を殴り、男がよろめいたところをくるっと身体をまわして蹴りを叩き込んだ。
　一連の動作を流れるような動きでやってのけ、瞬殺。
「ライガ、ケネス生きてるか？」
「うん。今シグルドさんが水の紋章で癒してくれてる。で、そっちの人は？　生きてる？」
　走り寄ってきたライガに、ヒサトはちょっと首をかしげた。
「手加減したけど、動かんな。やばいかも」
「うそっ！！？？」
「そんなにヤワな感じはしなかったんだけどなぁ」
　あわてたライガが男に近寄ろうとしたが、ヒサトは肩を掴んで止めた。
「ヒサト？　早く手当てしないとあの人本当に死んじゃうよ？」
「あー、うん。俺が行く」
　ヒサトは一見無防備に近寄った。
　彼が一定の距離まで近寄ったとき、倒れていた男ががばぁっと起き上がってヒサトに飛び掛っていく。死んだふりだったらしい。
「！！　ヒサト――」
　ライガが声を上げたが、ヒサトは簡単にひょいと半歩ずれてかわし、落ちた男をものすごい勢いで踏んづけた。
「おぎゅっ」
　……静かになる。
「ヒサトぉっ！？　踏み殺しちゃダメだよっ！？」
「あははは、死んでない死んでない。多分」
「多分ってなにーっ！？」
　……そんなことがあったものの、男は死んでおらず（頑丈だ）ヒサトの強さに感嘆してついてきた。ゴーと名乗った男をとりあえず船に戻して、奥までいくと、道端に男が立っている。

「……なに、してるんですか？」
心から不思議そうにライガに訊かれて、男も首をかしげた。
本人にも分からないらしい。ずっと昔に仲間とはぐれて、気がついたらここにいたという。
「えっと……一緒に、来ます？」
誘うと、嬉そうに男は頷いた。彼の名はアルドと言った。

次はナ・ナル島の協力を求めてライガたちは島に降り立った。
珍しくリノも一緒に行くというので、ライガとヒサト、リノとジーン、アカギに同行してもらう。
港に降り立ったとき、ヒサトは眉をひそめた。
なんだか、以前訪れたときと印象が変わったような気がする。
雰囲気のような、何かが違う……。
「なんか、変だな」
「なにが？」
「……分からん。でも、おかしい。注意しろよ」
「うん」
ライガは素直に頷いたが、アカギは何のこっちゃと言いたげで、ジーンは旧知の友を信頼しているのか微笑むだけ、リノはいぶかしげだ。
だが、ヒサトが言っていたことがなんなのかすぐに分かった。港の町へと通じる道に、クールーク兵が立っていたのだ
彼らを無視して町に入ろうとしたが、兵はそれを許さなかった。
襲い掛かってこられ、ライガたちは応戦する。
戦っているうちに町のほうから後続の兵が走ってくるのが見えた。
押し切られると思ったときだ。
戦っている通路のような場所が狭いので後方にいたヒサトが、同じく後方にいたジーンと一緒に腕を上げた。
「うふふ……いくわよ？」

色っぽくジーンが誘い、
「へいへい」
ヒサトはやる気無く応える。
一瞬後。
空から空気を切り裂くように帯電している球体が落ちてきて、

カッ！！

グォォオッ、ッゴーーーーンッ！！！

……爆裂した。
雷と火の合体魔法・火炎陣である。
気がつくと、クールーク後続の姿は、ない。
あるのはえぐれた地面と、そこから立ち上がる焦げた匂いのする煙だけだ。
雷魔法の強力な使い手のジーンと、魔力も人外のヒサトが合体魔法を仕掛けると、人体も残らないらしい。ライガたちと剣を合わせていたクールーク兵も、余波で倒れてしまった。
ちょっとぴくぴくしているので、こちらは生きているようだ。
その陰になったライガたちには怪我もないが、
「……っておい、やりすぎだろ」
思わずリノも呟いたくらいだ。
「……地形は壊さないように俺のほうは加減したぞ？　壁とか壊してないだろ」
「もう少し加減するべきだったかしら……？　ちょっと地面えぐれちゃったわね」
加害者二人は、自分たちがしでかしたことにたいして驚いていないようだった。
「……あんたら……人間外だろ、絶対……」
アカギが呟く。そのときだ。

「今の音はなんだっ！！？？」
走ってきたのは、ナ・ナルの住民らしい青年だ。
ライガたちと、倒れているクールークの兵を見て、彼は目を丸くした。
「な、なんてことを……！！　おい！！　こいつらを捕らえろっ！！！」
彼が後ろの島民に出した指示に、ライガたちは驚いた。
何故、クールークを倒した自分たちが拘束されなくてはならないのだろう？

永遠の空・２８（後書き）

コメディィちっくだったりシリアスだったり。

現れた青年は島長（しまおさ）の息子で、名をアクセルというらしかった。彼に連行されてライガたちは島長の屋敷に連れて行かれた。

そこで驚くべきことを告げられ、絶句する。

ナ・ナルはすでにクールークと友好関係を結んでいるというのだ。

一歩遅かったのである。

ナ・ナルへの不可侵条約。島民の身の安全をクールークは保証したという。

リノは顔をゆがめた。

「クールークの連中がそれを守ると思うのか？」

「少なくとも、いきなり押しかけてきて協力を迫るそちらよりは紳士的でしたな」

「……ふーん。ってことはトロイか、来たの」

ヒサトはそう看破（かんぱ）する。

「……よくお分かりで」

「まぁな。あいつなら確かに約束は守るだろう」

それは確信できる。トロイはその点では紳士と言っていい男だ。

きちんと住民のことを考えて行動するだろう。

「あんたどっちの味方だ……」

アカギが突っ込み、

「仲が良い人なのね、ヒサトの」

くすくすとジーンが微笑む。

「おい、ヒサト」

リノもどっちの味方なんだと言いたげだ。ライガはヒサトの腕に掴まっている。

「だが、俺がそう保証できるのはトロイだけだ。ほかのクールークの連中があいつと同じように紳士的に振舞うとは思えん。リノが言ったようにな」

ヒサトはまっすぐに島長とアクセルに視線を向ける。
「トロイはどうした？　まだ滞在しているのか？　それとも……すでに呼び戻されたか？　ならばその約束はもう果たされないだろうな」
「！！　そんなわけがあるか！！」
アクセルはムキになった。ちゃんとクールークは約束を守ってくれると。ムキになるということは、トロイはすでにこの島には居ないのだろう。ヒサトはそう予測した。
島長は息子よりは遥かに落ち着いていて、クールークの兵を負傷させたことについての賠償を求めてきた。
島の奥にあるエルフの集落で、エルフ特製の特効薬を入手してくることを強要された。
要は、盗んで来いというのだ。
夜になったら忍び込んで、取って来いといわれ、ライガたちに断る術はない。
「夜になるまでもう少しありますから、近くの宿にご案内しましょう」
どうぞ、ごゆっくり、と案内されたのは――集会広場の横にある、牢屋だった。
「おいおい……こそ泥の代わりをして来いってか……」
ゲンナリ呟くリノだ。ヒサトはけろりと言ってやる。
「逃げたいなら格子（こうし）くらい斬ってやるぞ。ただ、ナ・ナルの協力は得られんな」
「こともなげに言ってるよこの人……鉄の格子だぜ？」
アカギがこんこんと鉄格子を叩くと、ジーンが嫣然と微笑んだ。
「あら、軽いわよね、ヒサト？」
「おう」
こちらも軽く頷くヒサト。
「……人間外がいるよぅ……」
アカギはリノに泣きついた。心境的にはライガに泣きつきたかっ

たが、それをやると鉄格子と変わらない運命になりそうなので、止めたのだ。
　ライガはヒサトの腕の中、難しい顔で考え込んでいる。
「ところで、ヒサト。お前ヤケにトロイのことを知っているようだが……ひょっとしてお前のお手つきか」
「……あー、昔な。クールークに居たことがあってな」
「マジか！？」
「本当ですよ。トロイさん、ヒサトにまだ未練あるもんね、確実に」
　黙っていたライガがいきなり言ったので、リノは目を丸くして、ヒサトは固まった。
「ら、ライガさん……？」
「分かるよ。あの時すごく切ない目でヒサトのこと見てたから」
「……俺のほうには未練ないぞ？」
「それも分かってる。未練あるって言うなら、泣いてあげるからね、たっぷりとヒサトの目の前で」
「……ライガ」
「なぁに？」
「……いろんな意味で強くなってきたなぁ、お前」
「ヒサトのおかげだよ、いい意味でも悪い意味でも」
「……ほんとに強くなっちゃって……」
　トホホとか呟いて苦笑するヒサトだ。こういうライガも可愛いと思えるので、別に全然かまわない。
「……トロイが滞在してるならなぁ……まだ何とかなったかもしれんが。あの息子の様子だともういないな。エルイールに呼び戻されたか……本国に帰還しているってことはこの状況ではまずありえないから」
　ライガの髪に擦り寄りながら呟く。さらさらで気持ちがいい。
「じゃあ、島長が言ってた約束ってやっぱり……」
　ライガもヒサトの胸に擦り寄る。
「ほぼ確実に単なる懐柔策（かいじゅうさく）になってるな。トロイは本気だったろう

が、ほかの連中がそれを為すとは思えない」
ヒサトはライガの髪をなで、軽く口付けた。
「……どうにもならないの？」
キスをねだるようにライガが顔を上げてヒサトを見つめながら訊く。
「難しいな。大体兵を残しているって時点でもう占領の意味が強いと思うし」
頬にキスを落としてやってヒサトは答える。
「開放することは出来ないのかな……この島の人だってそれを望んでいるわけじゃないでしょう？」
「あー……二人とも」
真剣にナ・ナルを開放する手段を検討し始めたライガとヒサトを、リノが止めた。
顔が赤いのは気のせいではない。
「はい？　なんですか、リノさん」
「なんだよ、真面目な話してるだろう」
「それは分かる。聞いていてよく分かる」
ライガはきょとんとする。
「？　じゃあどうして止めるんですか？　あ、いい手が浮かんだとか――」
「いや、そうじゃない」
「はぁ？　じゃあ何で止めるんだよ」
ヒサトもいぶかしげだが、アカギが顔を赤くしながら突っ込む。
「真面目な話しながら、ナチュラルにいちゃつくなよ……」
「うふふ、仲がいいのね。うらやましいわ」
ジーンはひとり、うろたえていなかった。
「！！」
気がついて赤くなるライガだ。何も考えずに条件反射のようにヒサトに応えてしまっていた。あわててヒサトから離れる。
「ヒサトっ！！」

「えー？　俺のせいかー？　ライガが可愛いからだろう」
「ヒサトが触ってくるからでしょうっ！！」
「だから……ここ牢屋だろ、ナチュラルにいちゃつくなって……」
そんな会話もまた、いちゃついているようにしか思えないアカギだ。
「あー、ライガ、遠くに行くなよー。触らせてくれ。禁断症状が出る」
恋人から離れて隅っこに行くライガに、ヒサトはそう呼びかける。
「出るわけないでしょ！」
「出る。アカギかリノを斬りたくなるので我慢するためにこっちに来なさい」
「……ライガ様、行ってやってください……」
アカギはライガに頭を下げた。痴話ゲンカに巻き込まれて殺されるのはさすがにごめんである。ヒサトにはライガをあてがっておくのが一番安全だと痛感した。
ライガはちょっと迷ったが、結局ヒサトのところに戻った。少年もそばに居たいのだ。
「もう……あんまり触っちゃダメだよ？」
「えー」
「えーじゃないの」
「……気になるならリノとか追い出すけど。ジーンはこっちのことあまり気にしないから大丈夫だぞ」
「ふふ。見えないふりしてあげるわよ。ごゆっくり」
「止めてください、ジーンさん……」

そのまま眠り、夜更けに本当に寝たのかと訊きたくなるヒサトに起こされて、エルフの里に不法侵入開始。
広場の奥の道から渓谷をたどっていくと、大樹が見えてきた。あの根元にエルフの特効薬があるらしいというのは島長から聞いている。

大樹の根元には大きな入り口があり、中に入ると祭壇があって、そこには木から滴る雫を受けているビンが置かれていた。
これが、エルフの特効薬だろう。
「全く……なんでオベル国王が盗人なんぞ……」
ぶつくさ行っているリノがビンを取る。
「……」
ヒサトは無言でとある一点を見つめていた。
「ヒサト？」
「……ああ、今行く」
ライガに呼ばれて彼は出て行こうとしたが、出入り口前でもう一度振り返った。
「……一応、借りていく」
呟くように言い、出て行く。
ややあって、
「……よろしいのですか」
「うむ。考えがあってのこと。馬鹿な人間たちは少し痛い目に遭う位がちょうどいい……」
木の中に声が響く。
「……しかし、あの者……こちらに気付いていたようだが……何故なにも言わずに出て行った……？」

エルフの特効薬を島長に持っていくと、これ以上クールークとの友好にヒビが入っても困るので、ナ・ナルから引き上げてくれと一方的に指示された。
こちらの意見など聞く耳がないのだろう。アクセルに連れられ、町を出ようとすると、大剣を背負ったエルフの女性にその大剣を突きつけられた。
「……一緒に来てもらおう」
「なんだと！？」
アクセルが剣に手をかける。その頭をはたいて止めたヒサトが前

に出た。
「結果を見ていけと？　やらかしたのはそっちだろう？　俺たちは知らずに持って行っただけのこと。違うか？」
「……やはり、気がついて……ならば何故だ」
「愚かなのはどちらなのかと思ってね？」
ヒサトの言っている意味が分からず、ライガたちはきょとんとしている。後ろ頭を叩かれたアクセルはヒサトに向かって抜刀しようとしたが、アカギに止められていた。
「止めとけって！！　剣神だぞこの人はっ！！」
「そんなもんただのウワサだろっ！！」
「いやマジ。マジ！！　本物！！　死ぬぞ抜いたらっ！！！」
必死である。
「剣……神？　ではお前があの？」
エルフの女性は剣を持ったままヒサトを眺める。
「“あの”かどうかは知らんが、ヒサトは俺だ。で、いつまでそうしてるつもりだ？　あんまり得物（えもの）を向けられてると、斬りおとしたくなるんだが？」
「……同行してもらえるのならばすぐに収める」
ヒサトはライガを振り返った。
どうする？　と目が訊いている。
ライガは頷いた。
「行きます」

またもや牢屋である。そして牢の前にはエルフの長老がいた。
そ　して長老は言った。人間が勝手に集落を作り、誰が長と決めるまでは許す。しかし共に島に暮らすものを無視して島を売り渡すなど言語道断。
「人間がいかに愚かか、すぐに理解できよう」
「……愚かだよ。わざわざ証明することもないくらいだ」
ヒサトは呟く。

「だが、それでも……考えが甘いあんたよりはマシだろう」
「なに？」
「避けるためにどれだけ踏みにじる？　コソコソ隠れて胸を張るだけならちょっかいを出すべきじゃない。それでまた犠牲は広がるぞ。あんたがやったこと、この里にまで広がる可能性を考えたか？　やつらはやるぞ」
「……つまらぬ戯言（ざれごと）を」
長老の声にヒサトは笑った。
「今ここで俺が暴れる可能性は考えたか？　俺は殺すぞ？　女だろうと子供だろうと、血に濡れた剣神だからな……やつらと同じように」
「……！！」
何かを、長老は感じ取った。
「貴様……！？」
「まぁ考えろや。あまり長居はしたくないんでね」
ヒサトは会話を打ち切り、牢の壁によりかかった。長老は細かく震えている。
ヒサトを見てはいないが、何かを恐れているのは間違いなく。
「長老？」
エルフの女性に声をかけられ、長老はハッとして首を振り女性と共に出て行った。
「……わけ分からん。何の話だよ？？」
アクセルが不満げに言う。ライガは無言でヒサトのそばにいき、彼の顔を見上げた。
「ヒサト？」
そっと、触れる。
「どういうこと？」
「……アレ。毒入りだ」
「！！　エルフの特効薬のこと？」
「俺たちが持っていくのをじっと待ってやがった。潜んでたのは気

配で分かったし、香りで毒だと分かった」
町まで特効薬を持って帰る途中、ヒサトはビンの中の液体の匂いをかいでいた。ライガはそれを思い出す。
「人間がどういう行動に出るのか、その愚かさを見せたかったんだろう」
ゆるく首を振って、
「それがどんな結果を起こすかを俺たちに見せようとここに入れた。でも、考えてないんだ」
「……何を？」
「結果を、さ。どこまでも人間を愚かだと舐めきって、どういう結果になるかを……甘く考えすぎている」
「どういう意味だ」
リノが身を乗り出した。
「毒薬を差し出されたクールークは何をすると思う？　何を予測できる？　ここはやつらにとって植民地と変わらない。ここの人間など奴隷と同意義としか考えてないぞ。奴隷に毒を盛られて、支配者ならば何をする？」
「！！！」
リノは絶句。ライガも顔色を青ざめさせている。
「それが、エルフの仕業だと、やつらが気がついたら？」
ヒサトは冷然と指摘する。
「……虐殺、ね」
ジーンが頷いた。
「……それで、考えが甘いって……」
アカギもことの結果を予想して顔をゆがめる。
「気がついてたら止めろよ……！！」
アクセルがヒサトに食って掛かった。
「なんでだ？　クールークと手を組んだのはお前の親父で、薬を取って来いと指示したのもお前の親父。で、毒盛ったのはエルフの長老。エルフとの信頼関係をお前の親父がちゃんと築き上げていたら、

こういう状況にはならなかったぞ」
しれっとヒサトは言ってのける。
「ヒサト！！」
ライガが止めた。恋人に言われると弱いヒサトは頭を掻いて、
「……ぶっちゃけると、毒殺っていう手が嫌いなんだよ。はっきり言って関わりたくなかった。やるなら勝手にやってくれって」
疲れた様子で言ってのける。
「なんで？」
「昔、弟に毒盛られて殺されかけたから」
これまたサラリと、言ってのける。
「嫌い、なんだ……」
そして、ひどく疲れたように息をつく。
「！！！」
誰もが息を呑んだ。声に秘められているのは痛み。
確かな過去に、彼が受けた痛みの結晶だ。
「……実の弟さん？」
ジーンが訊く。
「いや……実のって言うか……腹違い」
「いろいろあったのね」
「……ああ」
ライガは胸を突かれてヒサトに駆け寄り抱きしめた。
「ヒサト……！！」
「……昔の話だぞ？」
苦笑して、ヒサトも抱き返す。
昔の話。彼はそう言うけれど、それは今でも彼の心に傷として存在しているのは間違いない。ライガは痛感している。
普段なんの悩みも苦しみもなさそうな彼だが、そうではないのだと思い知った。
「あー……すまん」
リノが苦く言う。

「何で謝る。これは俺の個人的意見だ。確かに止められた。でも止めなかったからかなり人死には出るぞ。まぁ、俺の責任っちゃー、そうだろうな」

止めなかったせいで起こる悲劇を、予想していながら止めなかったから。

それを責めるのならば責めろと彼は言う。

どれだけの命が失われても、背負うと。

「……ヒサト」

ライガはきつくきつく彼を抱きしめた。

こうすることで彼の痛みが和らぐのならば、いくらでもそうしようと思った。

「どうしてくれるんだよ……俺は!!　島の人間が殺されるなんていやだっ!!」

アクセルが声を上げた。

「クールークを信じているんじゃないのか?」

ヒサトは皮肉るように笑む。痛みを押し込めて。

「毒なんて盛ったらいくらなんでも……あんたのせいだっ!!」

「毒を盛ったのは俺じゃない。クールークを信じたのも受け入れたのも俺じゃない。では、責任はどこにあると思う?　それでもお前は俺を責めるか?」

「……!!!」

始めから、クールークを受け入れたりしなければこんなことにはならずに済んだ。

エルフと信頼関係を築き上げていたならば、こんなことにはならなかった。

「俺を責める権利は、お前にあるか?」

冷たく言うヒサトの声に、アクセルはうつむいた。

永遠の空・２９（後書き）

剣神、毒が嫌いな様子。

永遠の空・30

ややあって、ヒサトが顔を上げた。
「……始まったらしいな」
「!?」
少しして足音がこちらに向かってくる。現れたのはあのエルフの女性だ。
彼女は牢の外にあった牢屋の鍵を叩き壊す。
「早く出ろ!!　町へ……急げ!!」
牢の扉が開く。外へ出たライガたちに、彼女は急げともう一度言って、ヒサトを見た。
「……お前の考えは正しかった……!!」
「だろうな。間に合うことを祈っておけ。ここまでやつらが来ないことを」
皮憎げに言うヒサトに、ライガが叫んだ。
「ヒサト……お願い、先に行って止めて!!」
「……はいよ、軍主殿。リノ、ジーン、アカギ、ライガをしっかり護れよ」
苦笑して、剣神はひとつ地面を蹴った。

ザンッ!!

踏み込みひとつ。それでもう彼の姿はライガたちの視界から消える。
「……!?」
アクセルとエルフの女性が目を丸くした。これから彼らはウワサでない、剣神の力を目の当たりにすることになる。
「僕たちも行きます。牢から出してくれてありがとう」
女性に告げて、ライガも走り出した。

すでに広場には住民の死体が転がっている。
クールーク兵は容赦なく逃げ惑う住民に剣を振り上げていた。
女も子供も関係なく、等しく死を。
「おとーさぁんっ！！！」
「あああっ！！　この子だけはっ！！　この子だけは助けてくれっ！！！」
娘をかばう父親に、娘の目の前で剣を振り下ろし、父親の血で濡れた剣先を、娘に向ける。
「おとーさん……おとうさぁんっ！！」

ギィンッ！！

剣先は、少女に届く前に斬りおとされた。
「！？」
振り向こうとした兵は、次の瞬間倒れている。
何が起こった！？　身体に力が入らない。血が流れていく感覚に、眠るように思う。
何が、起きた……？

「生きてるな？」
「う、うん……」
少女に笑いかけ、恐がらせないように剣神は愛剣を収める。
「歩けるか？」
「ふぇ……おとーさんが……」
父親はピクリとも動かない。
ヒサトは少女を抱き上げた。
「……立派なおとーさんだ。ちゃんと、守った。だから……生き延びないとな、お嬢さん」
「う、ううう……おとーさぁん……」

少女を広場の隅に下ろして、ヒサトはクールーク兵に向き直った。
「貴様！！　何者だ！？」
彼は無言で剣を抜き、背後の少女に告げる。
「目ぇ瞑ってろ、お嬢さん。おとーさんの仇は俺が取ってやるよ」
命をかけて娘を守りぬいた父親に敬意を表して、剣神は力を振るおう。
さぁ、死と敗北と絶望を――与えてやる。

ライガたちが町にたどり着いたときには戦闘はすでに終わっていた。
広場には住民とクールーク兵の屍が積みあがっている。
立っているのは、剣神ヒサト。助かった住民たちは、広場の隅で震えていた。
「ヒサト！！」
「おう、来たか」
「怪我は！？」
「ない」
ひとこと。やはり返り血も浴びていない。ざっと見て、クールーク兵は三十名。犠牲になった住民も、ほぼ同数。
「……」
アクセルは言葉もなく広場の死体を見て立ち尽くした。
これが、クールークを信じた、結果。
「なんで……あんたが、教えてくれてたら……こんなことには」
呻くように呟いてヒサトを睨みつけた。
「よせ、アクセル」
住民を守っていた島長が寄ってくる。
「この人が来なかったら、犠牲者はもっと多かった」
「でも……！！」
ヒサトが来た瞬間、クールーク兵は殺す側から殺される側に回った。

それで住民の大半が助かったのは確かだ。
「……遅かれ早かれ、こうなった。そうですな？」
「ああ」
ヒサトは頷く。これがクールークのやり方。
それは七年前にクールークに滞在したときに嫌というほど知った。
例外は、トロイを含めた数人だけだったことを覚えている。
島長はライガに非礼を詫び、頭を下げた。
そしてこれから先協力することを申し出てくれた。
「アクセルを連れていってやってください。協力の証として。いくらこき使ってくれてもかまいません。むしろこき使ってやってください」
「……よろしく」
「こちらこそ。共に戦いましょう」
ライガは頷き、アクセルの手を取った。
港に戻ると、エルフの女性が立っていた。ライガたちを逃がしたのでエルフの里から追われたらしい彼女も、連れて行ってくれと申し出てくれた。
彼女の名は、セルマ。

それからしばらくアクセルはヒサトに付きまとった。
三十人のクールーク兵をひとりで一掃した彼の強さに憧れてしまったらしい。
「なぁヒサトさん、手合わせしてくれ！！　俺、あんたみたいになりたいんだっ！！」
一見ほほえましいような光景に、
「無理」
「無茶」
「無謀」
「ありえない」
「できないって」

「あの人、人間外ですから、目指すのはやめたほうがいいですよ」
「絶対！！！　不可能だから」
船内の意見は一致していた。
「……キミタチ、俺を一体なんだと思っているのかな？」
ヒサトが半眼で言ったのを、ライガは笑ってこう返した。
「剣の神様だから、やっぱり人間じゃないんじゃない？」
「……ライガ～」
情けなく声を上げるヒサトに、剣神が尻に敷かれている！！　と新規に加わった面々は目を点にした。

永遠の空・３０（後書き）

強すぎる男。人外扱い（笑）

永遠の空・３１

再び仲間探し。
焦土と化したイルヤ島の様子を見に行ってみると、港にリーリンの最後の姉妹、リールンを見つけ、廃墟になった街中には窓職人のナタリーが、中心部分にはイザクと、ミズキの仲間、ケイトがいた。
モルド島の温泉施設にヒサトとゆっくりしに行くと、世話をするという三兄弟がいて、内の一人は女性で、ヒサトに目をつけたのかやたらとサービス過剰だった。
「お背中流しますぅ～あらぁ、こちらのお兄さんいい男ぉ」
「触らないでください。僕が洗いますから」
嫉妬丸出しにしてライガが睨み、それに上機嫌なヒサトが少年を抱きとめた。
「ふふふ、ライガは俺が洗ってやるからな」
「わ、やだヒサト、どこ触って……！」
「どこって洗ってるんだけど？」
「それ、洗ってるって言わな……ん、や、ば、ばかぁっ！」
「可愛いなぁライガは♪」
などといちゃついて風呂から上がると、ライガ軍のリーダーも常連のこの温泉なので、料金は１００００ポッチだという。
「へーえ、ライガ軍の『りいだあ』がねぇ」
「……僕、初めて入るんだけど、ここの温泉」
いぶかしげなライガと、ニヤニヤしているヒサト。
「１００００ポッチは高いだろって言ったら、どーなるわけ？」
ヒサトが言うと、
「有り金置いてきなっ！！！」
と、三兄弟は武器を抜いた。
「……こうなるんだね」
「そーだな。ひねりも何もないな」

「何を期待してたの……？」
などと会話しながら二人は三兄弟を撃退。ライガが本物の軍リーダーだと知ると、三兄弟は仲間にしてくれと頭を下げてきた。
長男がロウゼン、長女がロウハク、末がロウフォンの三兄弟を仲間にした後、もう一度温泉に入りなおそうとしたら、真の温泉の経営者らしいイーゴリが加わった。
ネイ島の宿にいた彫刻家、ガレスの元を訪れると、ラインバッハが『薔薇の胸飾り』を実際に使っていることに驚いて、調整のために仲間になるとついてきた。
石切が原で前に出会った刺客の女性に再び遭遇、再びヒサトが瞬時に撃退して、彼女はまた逃走していった。わざと見逃してやったヒサトは息をつく。
「三度目は殺すからな？」
「さすがにもうないと思うけど、ダメ」
ライガもいつものように返して歩く。
「ヒサトってやっぱりライガの尻に敷かれてるよねぇ」
一緒についてきたチープーが笑ってくるのをからかい返してネコボルトの集落へ。
チープーの希望で交易所を覗いて、店主の言うことがいつもと違っているなぁとか思いながら戻ると、つり橋でライガに一匹のネコボルトがぶつかってきた。
ヒサトは眉を寄せた。
なんだか、不自然なぶつかり方だ。
そのネコボルトは、後から追いかけてきたもう一匹のネコボルトと、集落のほうに戻っていく。
「……ライガ」
「はい、なぁに？」
「なんか、なくなってるものないか？」
「え……なんで？」
「今のネコボルト、動きが不自然だった。なにかスられてないか？」

「！！」
あわてて腰のあたりを探り、ライガは青くなった。
「……金印がない……！！」
「ほほう」
「ええっ！？」
チープーが声を上げ、ヒサトは瞳を細めた。
「あのネコボルト……ライガの腰に触りやがったな？」
「……ヒサト、なんか、視点が違うよ？」
チープーに言われ、ヒサトはこぶしを握った。
「何言ってんだ！！　金印はライガの腰のポケットに入ってたんだぞ！！　そこから抜いたってことはあのヤロウ、ライガの腰に……！！　ふ、楽には殺さん……！！」
殺気を通り越して殺意を発する剣神を止めるなどという無謀なことを、チープーはしない。
「えーと、ライガ。ヒサト、止めて」
さっさとライガに丸投げした。これが一番安全で確実だと、これまでの付き合いで理解している。
「うん」
ライガはとことこと恋人に近寄り、見上げた。
「止めるな。殺して金印取り返してくる」
「だめ。でも、取り返すのは賛成。行こう」
怒り心頭らしい彼の腕を取って、ネコボルトの集落に戻った。
二匹のネコボルトは倉庫の陰に隠れて何かを話し合っていた。
金印の価値は分かったのか、売り払う算段なのか知らないが、とにかく返してもらわないと話にならない。
「コラ。三秒待つ。死んでから返すか返してから死ぬか、選べ」
「ヒサトっ」
どっちにしても殺す気満々な剣神を抑えるのはライガに任せて、チープーが対応した。
ネコボルトの一部の間では、チープーはある種の英雄らしく、彼

が名乗ると、ちょっと丸くてとろくさい印象のネコボルトが声を上げて喜んだ。

金印を返せよこせと騒いでいるうちに、飛んでいった金印が倉庫の中に入ってしまい、ネズミに奪われるという一幕もあったが、チープーのおかげで金印は無事ライガの手に戻り、ライガが必死で剣神を止めたおかげで（道端でキスしたら止まった）ネコボルト二人も命を取り留めた。彼らはチープーに憧れ、船に乗せてくれと言い出した。

ナルクルとチャンポの二人を仲間に入れてから、ネイ島、人間の町に行き、協力を村長に申し出る。

村長は、この島は過疎化が進み、戦力も物資もないと言った上で、それでも、イルヤのような悲劇はもう見たくないと言ってくれた。

命からがらイルヤから流れ着いた一組の夫婦、ケヴィンとパム。彼らもまた同じ思いをもつ人たち。

もう、あの悲劇は二度と見たくない。起こさせない。

いつかもう一度、イルヤを立て直したいという夫婦が仲間に加わった。

ミドルポートで、怪力女が暴れているという話を聞いて、行ってみると宿屋の前で宿を壊したから弁償（べんしょう）云々ともめている女性がいた。名を、ヘルガ。宿屋のオーナー、シャルルマーニュの計らいで弁償は免れ、彼女もまた軍の仲間となり、シャルルマーニュも仲間入り。

ドサクサで宿の前にいたおばさんからインテリアの本を押し付けられたりして、ついでに交易所でラム酒でも、とヒサトが行った先で、ラインバッハの婚約者の話を聞いた。

強引に息子の花嫁を集めているという。

「ラインバッハさん、こんな話を聞いたんですけど」

「なんと！！？？」

驚く彼を連れて各地を移動して話が真実かどうか調べていると、

ナ・ナルで可愛らしい一人の女性がならず者に追いかけられているところに出くわした。
助太刀に入り、ならず者を撃退すると、やはりラインバッハ父の強引な花嫁集めと判明。
ミレイと名乗った少女は、ラインバッハの謝罪を受け入れて、船に乗ってくれた。
弱い相手だったので戦闘にも参加せず、じっと見守っていたヒサトは、ミレイに見えるようにライガを抱きしめ、むっつりしている。
「？　どうしたの？」
「……いんや。別に」
ミレイがライガに好意を抱き始めているのが分かるので、先に手をうっておかねば。
ヒサトはそう思い、まずい、とも感じた。
ミドルポートで仲間になったヘルガもそうだが、だんだん皆ライガの魅力に気づき始めている。
変にちょっかいをかけられても困るし、ライガと別れるつもりは毛頭ない。
「ヒサト？」
「……正直に言うとな」
「うん」
「やきもちだ」
「……なんで？　誰に対して？」
「……ミレイとかヘルガとか、絶対お前に気があるぞ」
不機嫌に言ってやると、ライガはうれしそうに腕につかまって来た。
「ヒサトは？　一番僕のこと愛してくれてるんじゃないの？」
「……愛しているとも。でもな、お前の魅力に気付き始めてるんだよ、ほかの連中が！！」
ライガはとても嬉しそうに微笑んでいる。
「ちょっと、僕の気持ちが分かった？」

ヒサトのお手つきのことを考えたら、ライガもそういう状態になる。

嫉妬。ヤキモチ。胸を焼くような、苦しみ。

「ちょっとどころの話じゃない。くそ、お前に視線向ける連中、皆殺しにしたくなる」

ライガは瞳を輝かせてヒサトを見上げてくる。妬いてくれて嬉しいと、どう伝えればいいだろう？

「ねえヒサト」

「あん？」

「大好き」

告げて背伸びをして彼にキスをした。ミレイが目を丸くして、ラインバッハが顔を覆う。

ついてきていたミツバも『おぉー！！』と目を丸くしていたが、ライガにはどうでもいい。

ヒサトはすぐにライガの腰に腕を回して支え、深くキスをしてきた。

「う、ふ……んん」

長いキス。

「は」

うっとりと息をついて、初めてライガからヒサトを誘った。

「宿、行こ？」

宿へ行くと、その前で親子連れが待っていた。息子を鍛えるためにライガ軍に入れてくれという。早く宿に入りたいライガは一も二もなく頷いた。加わったのは、気弱な青年、ユージン。

彼を船に戻して、ライガはヒサトと宿に泊まった。

この島にも温泉があり、露天風呂になっていると聞き、夜、ヒサトと二人で行ってみた。

空にあるのは輝く星。月が見下ろす中で、二人ゆっくりと湯に浸かる。

「温泉ふたつ目だね」
「ネイ島のネコボルト集落にもあるって話だから、そのうち行こうな」
「うん……」
ヒサトに寄り添い、ライガは頷く。
疲れている。船に乗っている間はずっと書類と格闘していて、それがないときはひたすら勉強していた。
軍を率いるものとして、知識はどうしても必要で、海図やら軍略の本やらとずっと気の休まる間もないくらいだ。
ライガが勉強している横で、ヒサトは分からないことを教えてくれる。
ここが分からないとライガが訊くと、ヒサトからはすぐに答えが返ってくる。
彼の豊富な知識にエレノアやリノも驚いていた。
エレノアなど軍師はあんたがやればいいんじゃないのかと言い出したくらいだ。ヒサトは面倒なことはやらんと頑として受けなかったが。
「ヒサト」
「ん？」
「そばに、いてね……」
左手に宿る『罰の紋章』を見下ろしながら、ライガは呟く。
いつまで保つだろう。
ヒサトはライガの左手を取り、手の甲に口付けた。
呪われた紋章を、恐れていないとでも言うように。
「！！」
「……俺のライガ。愛している」
真摯な、言葉。
ライガは上向く。ヒサトの端正な顔が、目の前にある。
少年は微笑んだ。
「僕の、剣神……愛しています」

告げる言葉が残ればいい。
命が残らないのなら、せめてこの言葉だけでも。

あなたの心に、残ればいい……。

次の日、集会広場に一人の青年が立っていた。以前ミツバに負けて金を奪われた被害者、ジェレミー。
たまたま一緒だったミツバに再びの勝負を挑むが、彼女は笑ってもう止めたからしないと断る。
結構な美青年は、ヒサトを見て目を丸くした。彼もお手つきさんだったようだ。
「おれもいく!!　ヒサトといたい!!!」
「……来んでいいっ」
「いくっ!!!　いいよな、よし決定!!!」
「勝手に決めるなぁっ!!!」
……仲間がもうひとり増えたが、ライガの機嫌を回復させるまでヒサトは大変な思いをしたことを記しておく。

群島諸国からの協力は得た。
では、次はいよいよ奪われた島々の奪還だ。
エレノアはラズリルを奪還すると告げた。
ラズリルは例えるのならば沈みかけた船。利用価値が小さいために本国からも見捨てられている。クールークに襲撃されても本国から援軍が来なかったのはそのためだ。
権力が空洞化しているこの機会に、クールークを一掃できれば、ラズリルの勢力がライガ軍に加わってくれるのは間違いないと。
「ラズリルにいる艦隊が何番隊だか分かるか？」
ヒサトは作戦室で地図を覗き込む。
「ああ、そう言えばあんたクールークにいたことがあるんだって？

リノから聞いたよ。知り合いがいる可能性でもあるのかい？」
「かもしれん」
「……お手つきか、また」
リノに突っ込まれ、ヒサトはしゃあしゃあと答える。
「まだ分からん」
「ヒサト、クールーク軍の連中、何人くらいに手を出してるんだ、一体？」
心から不思議そうにキカにも問われる。
「さて。数えたことねえな」
「うわ」
思わず呟くジュエル。見るとライガは無言でヒサトの横に立っている。怒っているのかどうかは、ちょっと判断しづらい無表情で。
「ええと……調べたところによりますと、ラズリルに駐屯（ちゅうとん）しているのは第3艦隊ですね」
ラマダが書類を見て確認する。
「率いているのは……ヘルムートという青年よ」
カタリナが補足する。
「あー……あいつか」
ヒサトの漏らした声に、その場の全員が彼に視線を向けた。
にこやかに、ライガが訊く。さすがにちょっと怒っているようだ。
「また？」
「……はい」
剣神、おとなしく頷く。
お手つきさん、だ。
全員が、大きく息をついた。本当に、どこまでもタラシな男である。
今、ライガ馬鹿なのが信じられないくらいだ。
「……向こうがあんたに未練がある可能性は？」
エレノアは真顔で訊いている。ヒサトは少し考え込んで、
「えー、あー……トロイかキカ、あるいはシグルドかハーヴェイ並

みには」
と返した。
「ほぼ百パーセントって言わないか、それは？」
「そうか？」
「……百パーセントだよ、確実に」
断言するエレノアだ。
「じゃあ、ヒサトさんの説得でどうにかなるんじゃないですか？」
デスモンドが言ってくる。
「説得ぅ？」
面倒くさそうにヒサトは呟く。
「口でどうこう言うより身体にいうこと聞かせたほうが早いってぇっ！！！」
ライガにわき腹をつねられ、ヒサトは思わず声を上げた。
「……冗談だぞ」
「笑えないものは冗談とは言いません」
むっつりとライガは不機嫌に返す。
「大体そんなに強くつねってないでしょ。ヒサト贅肉（ぜいにく）ないんだからつかめないし」
「つかめない分、無理矢理つねっただろう……真剣に痛かったぞ、今」
ヒサトはわき腹をさすっている。相当痛かったらしい。周りの連中は目が点だ。
剣神に悲鳴を上げさせることが出来る者など、ライガしかいないだろう。
「……まぁ、個人的な話し合いは後にしてもらって、まじめな話、説得は可能かい、ヒサト？」
「……説得ねぇ……やってはみるが、期待はするなよ。奴の方に未練は会っても、俺にはないからな」
「その場合は責任もって斬って来てくれるだろう？」
「まぁ、それくらいは」

身体を重ねた相手でも、斬ることに躊躇(ためら)いはないらしい。例外は、ただひとり、ライガだけだ。

いろんな意味で恐ろしい男である。

永遠の空・31（後書き）

ほんまに酷い男だなオイ。

永遠の空・32

機動力のあるキカの船、グリシェンデ号にヒサトが乗り込み、ラズリル奪回戦は始まった。
出迎えるのはクールーク軍と海上騎士団の混成部隊。
クールーク艦が二隻、騎士団艦が一隻。
対するこちらは本拠地船と、グリシェンデ号の二隻。
戦力的には少し不利だが、こちらには――。

「ライガ！！　ヒサト！！　お前たちの帰りを信じてたぞ！！！」
海上騎士団の艦がこちらに味方したのは、海戦が始まってすぐのことだった。

この勢いを逃すなと、ライガは指示を飛ばし、グリシェンデ号のほうに視線を向けた。
船はまっすぐに、ヘルムート率いる敵艦へ向かっている……。

「俺が向こうに行ったら、離れろよ」
「分かっている。巻き添えを食いたくはないからな」
近くにいれば敵艦が沈むのに巻き込まれる可能性がある。
キカは疑っていなかった。ヒサトは必ず生きて戻ってくる。
ヒサトは舳先（へさき）に立ち、距離を計る。側面から近付かなければ砲撃を受ける心配はない。
だから、真正面から、行く。

「――ッ！！！」
向かってくる船の舳先に立つ男を確認して、ヘルムートは声を失った。
腰に双剣を携（たずさ）えた、見覚えのある男。

捜しても捜しても見つからなかった、彼。
まっすぐにこちらを見ている男が、どれほど強いのか、ヘルムートも知っている。
「あの船を近付けさせるなっ！！！」
近付かれれば終わる。
「ですが……向こうのほうが……早いです！！」
部下からの報告に、ヘルムートは絶句する。

ヒサトは迷わず舳先を蹴った。
ひゅん。風を切る音がして、次の瞬間には彼の体は敵艦の甲板、敵の艦長、かつて腕に抱いたことのあるヘルムートの前にある。
ヘルムートは自身の死を間近に感じつつ絶望的に呻いた。
「ヒサト……！！」
「よう。久しぶりだな」
ヒサトは剣を抜きもしない。
ヘルムートも、動けない。
焦がれた男。あのトロイをも手中にしておきながら、留まらなかった人。
群島諸国についていたのか。
「俺を、覚えていたか？」
武器を持ったヘルムートの部下たちに囲まれつつあるというのに、ヒサトは余裕の笑みを浮かべている。
「……覚えていると、思うのか」
部下を手で制しながら、ヘルムートは言い返す。迂闊に刺激すれば、部下に死者が出るだけだ。
ヒサトは顔を近づけてきた。
ヘルムートの心を奪っていった、あのときと変わらない、端正な、顔。
「俺を、忘れられたか？」
自信たっぷりに、言う。

ヘルムートは唇を噛み締めた。
忘れられたかだと？　そんなわけがない！！！
忘れられるわけがないと、この男は分かっている。
分かっていて、それでも顔を寄せて訊いている。
部下の前、海戦の最中だというのに、この男は。
いとも簡単にヘルムートの心を揺さぶっている。
「なぁ、忘れたか？　俺を……受け入れたことも」
「！！！」
ビクンと体が震えた。
声音が。
「ヘルムート」
行為を思い出させるような、声が。
「本当に、忘れられたのか？」
膝がくず折れそうになって、ヘルムートは必死に耐えた。
なんてことだ。
声だけで。
ヒサトはわずかに声のトーンを変えただけだ。
情事の際のような、少しかすれた声で話しかけているだけだ。
それなのに。
身体が――思い出してしまった。
七年近く前のことなのに、昔のことなのに。
「……っ！！」
彼の腕、引き締まった身体、すがりついて抱きとめられた行為。
奥を貫く、熱いモノの感触まで……！！
顔を赤く染めて瞳が潤んでいくヘルムートの様子に、ヒサトは確実な感触を感じ取った。
このまま、オトす。
ふっと口元を笑わせて、ヒサトは囁いた。そのままの、声で。
「……ヘルムート」
「っ！！！」

がくんとヘルムートはくず折れた。そのまま甲板にへたり込む。
肩で息をしている艦長に、部下は何かされたのかとヒサトに殺到しようとしたが、
「やめろっ！！　……殺されるだけだ……」
ヘルムートが顔を上げずに止めた。
耳まで赤い。
「……ヒサト……何が、望みだ」
ずるい男だ。
触りもせず、腰砕けにしておいて。
思い出させたくせに、触れてもくれないなどと――何て、ひどい。
あっさりと、かつてヘルムートを腕に抱いた男は告げる。
「降伏しろ。それがダメなら力ずくだ。全員殺す。それだけの話だ」
ひどい男だ、本当に。
こんなに簡単に揺さぶっておいて、もっと簡単に殺すなどと言う。
ヘルムートが降伏しなければ、彼は実行するだろう。
簡単に、ヘルムートを腰砕けにしたのと変わらずに、無造作に皆殺しにするだけだ……。
「……部下の身を、保証してもらえるか。私はどうなってもかまわぬ。それくらいの覚悟はある……」
唇を噛み、ヘルムートは彼の勧告を受け入れた。
剣神に乗り込まれた時点で、もはやこちらの負けは確実だったのだ……。

「ヒサトッ！！？？」
もう一隻を沈めて寄ってきた本拠地船の上から、ライガはヒサトを見つけて嬉しそうに顔を輝かせ――その一瞬後にいぶかしげな表情になった。
恋人の横にへたりこんでいる敵艦長らしい人間の様子がおかしい。
確かに説得するようにとエレノアの要請でヒサトは説得した。
敵艦に抵抗の様子はなく、説得は成功したらしい。

が、何故に敵艦艦長らしい美青年が顔を赤らめてへたり込んでいるのだろう？

ヘルムートを捕縛し、本拠地船の甲板で、ライガ軍のリーダーとそれを支える剣神は向き合った。

「何したの？」

「何って……説得？」

疑問形で答えるヒサトに、ライガは胡散臭げに言う。

「キスでもしたわけ」

「してない。触ってもいないぞ。話しかけただけだ」

「じゃあどうしてヘルムートさん、へたり込んでたの？」

ヘルムートの様子は言ってみれば情事の直前か直後のような雰囲気がした。

ただ話をしただけであんな状態になるわけがないと、見たもの全員が思っている。

なにせヘルムートは過去ヒサトのお手つきだったとの話だし、出陣する前にヒサトは、口で何か言うより身体に言うことをきかせたほうが早いと冗談をぬかし、ライガにつねられていた。

「いや、話しかけただけだって」

「……どうやって？」

ライガは心からいぶかしげだ。話しかけただけでどうして腰砕けになっているのだろう？

ヒサトはちょっと考え込んだ。こうして言葉で言うよりは、ライガにも体験してもらうほうが早く、分かりやすいだろう。

「……分かってもらうために実践（じっせん）しよう。こうやった」

「う、うん」

顔を近付ける。

でもって、囁く。

「ライガ」

「！！！」

低く、愛を囁くように。かき口説くように。芯からの熱を、呼び覚ますように。

一瞬で沸騰したように真っ赤になったライガはかくんと膝から力を失った。ヒサトは少年を抱きとめ、いまさっきの雰囲気をケロリと消して、言う。

「……理解したか？　まぁ、もうちょっと段階踏んだけどな、ヘルムートには」

「……ヒサト……」

「ん？」

「……すけべ……っ！！」

聞いていた甲板上の仲間たちも赤くなっている。

ヒサト流の『説得』。

「……あれは……誰も勝てないな……」

キカが呟く。

「……心底タラシだねあいつは……」

エレノアはむしろ感心したようだ。

「気の毒に……あいつに引っかかったばっかりになぁ……」

リノは同情するようにヘルムートとライガを見る。

ヘルムートはこほんと咳払いをして、ライガに向き直る。武装を解除もされていない。

ヒサトがいるからその必要もないということだろう。

ヘルムート本人もまだ身体に力が入らないので、抵抗以前の問題だ。

「……私の処遇は決定しただろうか。覚悟はできている。部下の命を保証してもらえるのならば……私はどうされようとかまわん」

ライガに視線が集中した。軍の主はライガだ。決定権は少年にある。

ラズリルを占拠したクールークの軍人であり、かつてのヒサトの愛人だったヘルムートを、どう裁く？

「……仲間になってください」

少年はそう言った。迷いなく、まっすぐにヘルムートを見て、言い切った。

「！！！」

ヘルムートは声もなく少年を見る。

つい一瞬前まで敵だった自分を、仲間に誘うか。

器が大きいのか、それともただ愚かなだけか。

「何故だ？　私が受けると思うのか？　もし受けても、いつ裏切るかも分からんぞ」

「そうは思いません。あなたは部下思いの軍人だ。誰にどう思われようと自分を貫く強さもお持ちです。ご自身がどうなってもいいと納得しているのなら、僕らの仲間になってもかまわず、また、裏切ることもないでしょう」

部下の無事の代わりに己の命を差し出す男。

ならば、その命も貰い受けようと、ライガは言う。

自分たちの力として。

「……分かった」

ヘルムートは頷いた。

完敗だ。見抜かれている。

お飾りのリーダーだと思っていたが、全く違うということを思い知らされた。

「……ところで、ひとつお訊きしたい」

「なんでしょう？」

「……あなたもヒサトの愛人か」

どうしても気になるらしい。エレノアの予測どおり、ヒサトに未練百パーセントだ。

「違います」

ライガはキッパリと言い切る。ほかの人とは違うのだと言っておかなくては、またヒサトに言い寄る人が増えてしまう。

「僕はヒサトの恋人ですから」

ヘルムートの目が驚きに丸くなる。

「……だよなぁ、分かる分かる」
「……彼を誘って今夜は酒でも飲もうか、ハーヴェイ」
ハーヴェイとシグルドが頷きあい、これがきっかけで美青年攻撃が生まれたとか生まれなかったとか。

永遠の空・３２（後書き）

美青年三人お手つき。超こじつけ。

永遠の空・33

ラズリルの港に入ると、タルとポーラが出迎えてくれた。
かつての騎士団仲間。彼らもライガを心配していてくれたという。
「ライガとヒサトが海賊になったって言うウワサが流れてて……びっくりしたんだ」
どうもそういうウワサが流れていたらしい。違うと信じてたと二人は言い、仲間になってくれた。打倒クールークを目指し、また昔のように……一緒に戦おうと。
「団長を失って……ヒサトまでいなくなって……混乱していたとはいえ、ラズリルがここまでやられちまうなんてさ……」
タルは言い、ポーラがヒサトを見た。
「そう言えば……ヒサトさん、どうしてライガと？」
やはりヒサトはライガを嫌っていたのだと思い込んでいる。
「それがね、ポーラ、ヒサトの本命、ライガなのよ」
ジュエルが説明すると、タルもポーラも目がまん丸。
「は、はは、冗談だろ？」
「……あまり笑えません」
ひきつるタルと真顔で言うポーラ。その反応にケネスとジュエルが笑いをこらえている。
確かに自分たちも初めて知ったときは同じ反応を返したものだと思い出して、なんだかとてもおかしくなった。
「苦労した甲斐があったというか……いっそここまで言われると怒る気も失せるな……」
ヒサトが呟く。ライガは苦笑して、彼の腕を取った。擦り寄るように頭を寄せる。
そのしぐさに、丸を通り越して目を点にするタルとポーラ。
「ほんとなのかっ！！？？」
「……！！？？」

「あー、本当だとも。というわけで、ライガにちょっかいかけるなら命がけで来いよ。俺は容赦しないぞー」
ヒサトは言ってライガの肩を抱いた。
「いや、そんな絶対に命なくなるような無謀なことはしないけど……驚いた……」
「はい。驚きました……」
苦笑するしかないライガだ。ヒサトは本当に上手に皆を騙してくれていた。それもひとえに　ライガのためだけに。
どれほど愛されているのかを、実感する。
そして彼との時間を思った。
あとどのくらい、一緒にいられるだろう？

打倒クールークのために、町の住民に協力を呼びかけた。今この島には領主がおらず、騎士団も崩壊してしまっているので、やれることと言えばそれしかない。
騎士団の館内に人を集めるためにライガたちは駆け回った。
ひとりでも多くの人に協力してほしい。
クールークの横暴から、多くの人の生活を守るために。

集まった人々の前で、『罰の紋章』を持つ少年は決意の宣言をする。
「みんな、共にクールークと戦おう！！！」
打倒すべきは、クールーク。

館の外へ出ると、ダメ親子の親のほうが現れた。
「か、勝手をするのは許さんぞ！！」
下っ端連れである。
ヒサトはやる気なさげに前へ出た。

ことさらゆっくり剣を抜き、一閃。
フィンガーフート伯の両脇にいた兵士の武器と身にまとっていた鎧が、斬り裂かれて落ちた。鎧の下の服には傷一つない。
見ていた誰もが驚愕した。あまりの速さに見えない剣閃。
そして、確実な腕前に、剣神の異名を納得する。
「……で？」
武器と防具を失った兵は青ざめ、手だれだと思っていた人間をあっという間に無効化された伯は蒼白になった。
ヒサトの手にはよく斬れそうな愛用の刃があり、その刃先はゆっくりと伯に向けられたのだから。
「軍主殿？　ご命令を」
王に仕える騎士のように優雅に、ヒサトは言ってのける。
「ま、待て！！　そうだ、こうしよう！　あなたたちがラズリルを欲しいというのなら、適正な値段でお譲りしましょう、それで……いかが？」
あわてる伯に、怒りの声を上げたのは民衆だった。
「ふざけるな！！」
「そうだ！！　俺たちはお前を認めんぞ！！！」
民の勢いに、伯はうろたえる。
「だとよ。どうする　？このままここで死ぬか？　言っとくが、楽には殺さんぞ？　てめえのおかげで俺とグレンはいらん苦労をし続けたからな。それなりに恨みがある」
フィンガーフート伯に頭を押さえつけられて、しなくていい苦労をさせられていた親友と、伯がいたせいでライガを手に入れるまで一年半かかったヒサトだ。
親友の苦労と自分の苦労をあわせて考えると、このぼんくら貴族にはそれなりの苦痛をプレゼントしてやりたい気も、する。
ライガはヒサトのジャケットの袖を引き、ふるふると首を横に振った。
それから、伯に視線を向ける。

無言ではあったけれど。
行け、と言っているのは明らかで。
世話になったから、せめて命だけは助けようと。
「く……！」
伯は逃げ出した。二度とラズリルに戻ることはないだろう。なにより民衆がそれを許さない。
そして、ラズリルは完全に民の手に戻った。

夕暮れ。
久しぶりに見る、ラズリルの夕日。騎士団の仲間たちと共に眺めながら、ライガは思う。
もう二度とここには戻れないと思っていた。
戻ることなど出来ないと思っていた……。
でも。
仲間たちが楽しそうに話している。
また会えた。
そして一緒に戦える。
これから先、戦いは激しくなる一方だろう。
でも、仲間たちがいるから、先へと進める。
なによりも、彼がいてくれるから。
そばに佇む剣神に寄りかかり、ライガは思う。
呪われた紋章を宿すこの身の時間が許す限り、戦おう。

晩。
人々が眠りについたころ、ヒサトは騎士団館の屋上に立った。
手にはラム酒のビンとグラスが二つ。ミドルポート産の、親友が好きだった酒だ。
ひとつのグラスは彼が倒れて消えた場所に置き、もう一つは自分が持ち、座る。

酒を注いで、乾杯するようにグラスを軽く合わせた。
「……取り戻したぞ」
お前がいた場所。お前が愛し護ろうとした場所。
お前が……死んだ場所。
「まだ、続くよ……」
戦いは終わっていない。ラズリルを取り返しただけでは終わらない。
奪われたオベルを取り戻し、そしてあの紋章砲が置かれているエルイールを陥とさなければ、群島諸国に安息は戻らない……。
「今度は俺が、エルイールを攻める羽目になるなんて、おかしなもんだな……」
七年前。
あのときの攻防戦で、ラズリル軍相手に戦った自分が、今度はラズリル軍を率いてエルイールに攻め込むのだ。
それが、済めば。
「……いずれ、また、ここを出る。もうお前はいないからな……群島諸国には当分……」
戻らないつもりだという言葉は飲み込んだ。
共に酒を飲む相手を失って、まして――ライガも。
愛しい少年を、失ってしまうかもしれない。恐くて口にも出せない未来。
すでにあの呪われた紋章に食われてしまった親友に、祈るように願うように頼む。
ライガを。
「あいつを……護ってやってくれ」
呟くような声には、心底からの懇願（こんがん）が含まれている。
グラスの酒を一息に飲み干し、ヒサトは目を閉じる。
剣神が、願うことはただひとつ。
望むことも、それだけだ。
……気配を感じてヒサトは目を開けた。

少し、口元を緩ませる。
戸惑うように、こちらに来ようかどうしようかと出入り口で迷っている――剣神の愛する人。眠っていたはずだが、目が覚めてヒサトがいないことに気がつき、捜しに来たのだろう。　ヒサトは声をかけてやる。
「こっち来い。別に怒ったりしないよ」
「……うん」
ライガはちょっとだけ迷って、それでもヒサトの横に来た。おずおずと座り、置かれたグラスに目をやる。
ヒサトが誰と酒を飲んでいるかはすぐに分かった。
ここで死んだ、団長グレン。
「……一応、報告を、な」
「……うん」
ヒサトの親友。とても仲が良かったと聞いている。実際グレンとヒサトは仲が良かった。
互いに信頼していて、たとえ敵として向かい合っても、その信頼が崩れることがなかったのは、ライガにも分かった。
「ライガも飲むか？」
「ええ！？　ぼ、僕あんまり飲んだことないんだけど……」
「ちょっとだけ付き合え。飲みたい気分なんだ。口つけるだけでいいよ」
「う、うん」
ヒサトが飲み干したグラスを受け取り、注がれる酒に目をやる。
月光に透き通る琥珀に似た液体。
「グレンが……好きだった酒なんだ」
ヒサトは寂しげに、もはや永遠に飲み交わすことが出来なくなった親友を悼んで……微笑む。
それを見て、ライガは勢いよく酒を飲み干した。
「！？　おい、一気に飲むことないんだぞ？　それ、かなり強い酒――」

「僕がいるから！！」
少年の叫びに、青年は目を見開く。
「団長の代わりに……ヒサトとお酒飲んであげるから……」
くらくらする視界の中で、それでも。
ライガは告げる。
限られた時間かもしれないけれど、それでも彼の寂しさを拭ってあげたくて。
「ヒサトと……一緒に……いる、から……」
ぱたりと倒れる少年を咄嗟に抱きとめて、青年は苦笑した。
「こんなに弱いのに、無理するなよな……」
一杯で潰れてしまった少年は、意識を失う瞬間、確かに言ったのだ。
だから、かなしまないで、と。
「……ありがとう、ライガ」
呟いて、剣神は愛しい人にキスを落とした。

永遠の空・３３（後書き）

親友への鎮魂。祈りと願い。

永遠の空・３４

翌日。本拠地船に戻ったライガたちを迎えたのは、ヒサトの大っ嫌いな人物だった。

「……スノウ……！？」

向かってきた船は海賊船で、その上にいるのは間違えようもない、スノウだ。

「……なんつーか、アホか？　あいつは。いや、アホだな。確実に」

半眼で断言するヒサトに、ライガは苦笑。

「ライガ！！　ヒサトを返してもらうよ！！　彼は僕のものだっ！！」

とか何とか言っている。

「まだ勘違いしてやがる……なぁ、ライガ、沈めよう。海の藻屑にしてやろう」

「ダメだってば。どうしてそんなにスノウのこと嫌いなの？」

「言っただろう。お前をこき使ってたからだ。で、お前と俺の仲を邪魔していたヤツの筆頭だからだよ」

言いながらヒサトは右手を突き出す。

「ダメ！！」

「なんでだよ。沈めよう。俺はアイツの顔を見るのもイヤだ」

「ダメだって言ってるよ？」

「……じゃあ誤爆ってことで」

「確信犯でしょ！！」

とにかくスノウを抹殺しようとするヒサトと、止めるのに忙しいライガ。

なんせヒサトが紋章魔法で一撃しただけで海賊船は簡単に沈む。まず確実にスノウを範囲に入れるだろうから、船が沈む前にスノウはこの世から消えることも確実だ。

「ヒサト」

「ん？」
「前、僕が納得するまでスノウのこと捕まえてくれるって言ったのは、ウソ？」
「う」
「僕、スノウと話したいよ」
じいっと見上げるライガに、ヒサトはあっけなく降伏した。
「……行ってきます」
「行ってらっしゃい♪」
相変わらずスノウの船は近寄ってこようとしなかったが、今回は他に二隻船がいる。
ヒサトはグリシェンデ号と新たに加わったガイエン艦を足場にして、あっけなく海賊船に乗り込んだ。
「！！ヒサト……！！」
「あー、無駄に抵抗してくれ。頼むから。そしたら正当防衛でライガもきっと納得してくれる」
剣を引き抜く彼に、スノウは青ざめて後ろに下がった。
「し、しないよ。あなたに抵抗なんて……できるわけない」
「してくれ。頼む」
「なに寝ぼけたこと言ってやがるこのヤロウッ！！」
海賊が一斉にヒサトに襲い掛かってくる。
ヒサトはわずかに場所を移動しただけのように見えた。
一瞬後。

ぼてぼてぼて。

襲い掛かった海賊たちが倒れ、少ししてから身体の下に血だまりが広がり始める。
「ひ……！」
呻くスノウに、ヒサトはケロリと綺麗な刃を向けた。
たった今人を斬ったばかりなのに、血も脂もついていない、剣。

「な、抵抗してくれ」
「できな……できないよっ！！」
「ち。ヘタレが」
遠慮なく言い切り、ヒサトはスノウを肩に担ぎ上げた。
そのまま、人一人抱えているとは思えない跳躍でガイエン艦に下りてから、振り向きざまに右手を振る。

ッゴンッ！！！

放たれた紋章魔法に、海賊船は半分ほどを失って燃え上がり、沈む。
あまりの威力に、肩のスノウは呆然としており、おとなしくするしかない。
「……めちゃめちゃ八つ当たりしてませんか、ヒサトさん……」
「何か言ったか、ハルト」
「いえ何も！！！」
的を得たツッコミをしたハルトはブンブン首を振った。
ヒサトはグリシェンデ号を乗り継ぐように跳躍して、スノウを抱えたまま本拠地船へと帰還する。怪我など当然、ない。
「ただいま。持ってきたくなかったけど、これ、土産な」
言うなりスノウをほん投げる。甲板に落とされて呻くスノウなど綺麗に無視だ。
「おかえり。ありがと、ヒサト」
苦笑して礼を述べ、ライガは起き上がったスノウに向き直る。
「スノウ……」
「……ライガ、どうして君は……君ばかり……」
「……仲間に、なってよ」
真摯に訴えるライガに、スノウはクビを振った。
「ライガ……僕は君に協力する気持ちにはなれないんだ……」
殺せと、スノウはまた言った。

「……蹴落としていいか、ライガ。死体処理はこの海原に任せよう」
「だめ」
ヒサトの提案を苦笑して却下してから、ライガは言う。
「このまま……海へ」
以前と同じ、選択を。
小船に乗せられ開放されたスノウは、ライガを見上げて呟くように言った。
「ライガ……どうして君の周りにはそんなに人が集まるんだ？　……ヒサトまで……」
それは、自分の矮小さに気がつかない者の問い。

何度目かの仲間集め。
ネイ島で拾ったメッセージボトルを頼りに、ドーナッツ島にいくと、トレジャーハンターのルネが仲間に入り、ラズリルではライガと仲が良かったコマ遊びが得意なバジル、騎士団の館で調理人をしていたフンギ、裏通りで立っていたカール、昔騎士団の教官をしていたコンラッドと、二回もライガを襲ってきた刺客の女性、マキシンが今回は自分を雇えと言ってきて、ライガはお人よしにも頷いた。
「ライガを裏切ったら、殺すぞ」
「分かっている。お前の力は思い知ったよ、剣神どの」
で、もって。
その後に問題が三つほど待っていた。
一つ目。防具屋の前にいた女性剣士、グレッチェン。
二つ目。道具屋にいた美人、フレデリカ。
三つ目。騎士団の屋上で、町の人と契約して用心棒をしていた、アメリア。
美人三人が、声をそろえてヒサトの名を呼んだものだから、ライガの機嫌は急降下。
機嫌の悪さを仲間に入った美人三人に向けはしない。そこらへん

はさすがに軍主だ。
大事な戦力に個人的な苛立ちを向けはしない。
向く先は、片腕であり、その前に恋人であるヒサトだ。
「ねえ、また？」
「……はい」
「僕、綺麗な人見るたびにイライラしないといけないの？」
「……すいません」
「しかも男女関係ないしさ」
「……全くもって言い訳できません」
「……僕とどっちがいいの」
「ライガ」
そこだけは即答するヒサトだ。ライガは頬を膨らませた。
「……ヒサト。ずるい」
「……申し訳ございません」
「……証明、して」
「全身全霊でさせていただきます」
ヒサトは即座にライガを抱き上げて船内に戻っていく。
「……甲板で痴話ゲンカしないでくれ……」
見送ったケネスが呟き、同じく見ていたタルも呟く。
「てーか、ヒサト……美人なら何でもいいのか……？」
「すっごい面食いだよねぇ……」
ジュエルが確信し、ポーラが呟きの終わりをしめた。
「……私はああいうヒサトさんを操縦できるライガを尊敬します」
「「「それは言える」」」
声をそろえて頷いたのは、ラズリル組だけでなく、仲間全員の意見だった。

永遠の空・３４（後書き）

剣神はフンガフンガフンガのおぼっちゃんが本当にお嫌いのようです……面白いヤツなのに（ネタ満載で↑そこかい）

永遠の空・35

シーツがどろどろになるまで、ずっと抱き合った。
果てにライガは気を失い、そこまでしてからやっとヒサトは身体を離す。
官能の果てに気をやったライガは、色気たっぷりな表情のまま目を閉じている。
根性でそこから目を離して、ヒサトは後始末を始めた。これをしておかないとライガの身体が大変だ。
下手をすると、腹を壊す。
本来性交に使うところではないところを使うのだから、ちゃんと気を使わないといけない。
ヒサト自身が吐き出した精液を掻き出してやると、ライガはかすかに声を洩らした。
気がついたわけではない。身体にまだ快楽の残滓(ざんし)が残っているのだろう。
ライガの身体にはいたるところにヒサトの口付けの痕跡が色鮮やかに残されていた。
見えるところにはつけないでとライガはいつも恥ずかしがるので、服の下になるようなところばかりだが、風呂に入れば丸分かりだ。
だからライガはいつも跡が消えるまでほかの人間と風呂に入れない。
掻き出してやってから、ヒサトはライガの身体をシーツでくるんで抱え上げた。
本拠地に風呂が出来てから、事後はいつも風呂で身体を洗っているのだ。
ほとんど気を失っているライガは知らないことだが。
もう夜中のため、風呂にはほとんど人がいないことが多い。
部屋の外にいるグレッチェンやミレイ、ヘルガの三人に、シーツ

交換をルイーズに頼んでくれと伝言を頼み、ヒサトはライガを抱えて風呂に向かった。

昼間はにぎやかな第三甲板の施設街も、夜は静かで別の空間のようだ。

音もなくヒサトは歩き、ライガを抱いたまま風呂の戸を器用に開ける。

「お……今夜もかい、ヒサトさん」

「まぁな。いつもどおり頼むわ」

「へいよ」

出迎えたタイスケに、誰かが入ってこようとしたら断ってくれと頼んで中に入る。

万が一誰かが入ってきて、ライガの身体を見ようものなら風呂場が血に染まることは間違いない。ヒサトは風呂まで短剣を持って入るので。

武器を放さないのは彼の習性のようなものだ。長く人に追われ、狙われるような生活を送っていた名残（なごり）のようなものである。

自分も部屋から羽織ってきたローブを脱ぎ、裸になって風呂場に入った。

最初にライガを洗ってやってから、溺れないように風呂桶に入れてやって、少年がのぼせないうちに自分も身体を洗う。

あとはライガを抱えて風呂場から出、身体を拭いて、持ってきた服を着て終了。

気を失ったままのライガを抱えて部屋に戻る。

部屋の前ではライガの警護女性三人組が頬を赤くしてなにやら囁きあっていたが、無視。

ベッドのシーツは綺麗なものに代わっていた。さすがルイーズ、手早い。

ライガを寝かせると、少年はそこでやっと目を開けた。

「……ヒサト……？」

とろりと潤んだ瞳で見つめてくる。扇情的な瞳を、何とか見つめ

返してヒサトは微笑んだ。
「寝ろ。疲れただろ」
「う、ん……ヒサト、も……」
「ああ、俺も寝る」
言って愛しい少年の髪にキスをして、ヒサトもベッドに入った。
抱きしめると、ライガはほっとしたように目を閉じる。
すぐに寝息に変わった。
それを確認してから、ヒサトも目を閉じる。
明日、ライガの目が開くことを祈りながら。
腕の中で少年が息絶えたりしないよう、繋ぎとめるようにしっかりと抱きしめて。

その日の会話は違った。紋章砲制御室に行くと、パブロがミドルポートに紋章砲を生み出したすごい魔法使いの工房があるというのだ。
仲間になってくれるかもしれないので行ってみようかと、ミドルポートへ。
裏道奥の空き家に行くと、開いた宝箱に問題を出された。
「間違ったほうが正解とか言ってたよね、パブロさん」
「ああ」
「ええと……じゃあ、２６」
ライガが答えた瞬間、床が抜けた。そういう仕掛けだったらしい。
ヒサトは難なくライガを抱えて着地したが、ついてきていたポーラとタル、ゴーはまともに落ちてそれぞれ身体を打った。
「……ライガしか助けないし……」
呻くタルに、
「あのくらいの高さで死にはしないだろうが。怪我してせいぜい捻挫だ。大げさなんだよ」
ゴーなんかピンピンしてるだろう、と指差すヒサトの前で、ゴーは嬉しげにポーズを取っている。ヒサトに褒められていると嬉しい

のかもしれない。
いくつもの通路に枝分かれしている地下道を歩いて、途中に現れた降竜を何とか撃退したときも、タルは文句を言った。
「手伝えよヒサトー！！」
ヒサトは後方でのんびりと見物していたからである。
「なんで」
「ライガを護るためについてきているのではないのですか？」
肩で息をしているポーラもさすがに不満げだ。
「おんぶに抱っこじゃ強くならんだろうが」
ヒサトは一刀両断。ライガも真顔で仲間たちに告げる。
「僕は強くなりたいんだ。ヒサトに頼るだけじゃなくて、ヒサトを護れるくらい、強くなりたいんだ。だから、タルたちもあまりヒサトに頼らないで。それが当たり前になってしまったら、自分で戦えなくなってしまうよ」
言われて、タルたちも納得した。確かに、彼に頼っていては自分たちは強くなれないだろうから。
「……分かった。俺たちがんばるよ」
「まぁ、死ぬ前に助けてやるから安心して気絶するまで戦え」
「……励まされている気がしません、ヒサトさん」
「ゴーがんばるぞっ！！」
「よしがんばれっ、骨は拾ってやるっ！」
「ヒサト、それ励ましてない」
「がんばるぞーっ！！」
「ゴーも。乗らなくていいからっ」
そこからすぐに魔法使いウォーロックの部屋にたどり着いた。気難しいらしい魔法使いは、最初ライガたちが紋章砲を買いにきたのだと思ったらしく、売らんとかたくなに言ったが、ライガは根気よく説得。
イルヤの惨劇を、彼も理解していて、愚か者どもと呟きながらも、

紋章砲を作り出したことを後悔しているのだろう、仲間に加わってくれた。

そのあと、空き家を改造しようとしていた婦人、ペコラにライガがインテリアの本を持っていることを見つかり、彼女は本拠地船のインテリアを整えると仲間に入った。

一旦本拠地船に戻り、作戦室にいたリノに、ほかに仲間になりそうな人材の話を知らないか尋ねに言ったときだった。

船が大きく揺れる。

「！！」

ヒサトが眼光を鋭くし、すぐさま甲板へと身を翻した。

この、気配……！！

彼の予想通り、本拠地船のすぐ横に、得体の知れない船が横付けされている。

船体からはどこの所属か分からない。

「ヒサト、どうしたの？」

追いついてきたライガとリノが船を見て眉を寄せる。

変な船だ。それだけは一目で分かる。

渡し板がかけられ、ローブ姿で深くフードをかぶった男が現れる。

「……こちらへ……船長のところにご案内します」

ライガとヒサトを、手招く。

首をかしげるライガと、瞳が危険な光を帯びているヒサト。

彼はローブの男を見て、眉を寄せ、息をついた。

「……俺だけでいいだろう」

「！？　ヒサト？」

「ライガ、残れ。俺が行く」

「え……どうして？」

「いいから」

「分からないよ、説明して！！」
強くライガはヒサトの瞳を見上げる。ローブの男は静かにライガに言う。
「……あなたもこちらへ」
「俺だけでいいだろうが！」
「いいえ」
ローブの男は、ヒサトに隠された顔を向ける。
「お二人とも、です」

その言葉が意味するのは。
同じことを示すものであり。
だからこそ、二人ともだと。

「……強欲が……！！　くそったれ！！！」
吐き捨てるヒサトに、ライガは目を丸くした。
ヒサトがここまで嫌悪するような言い方をするのは、初めて見た。
「お、おい、ヒサト？」
リノも驚いている。いつものったりとあわてることなどないようなヒサトが、この態度だ。
「……お待ちしております」
ローブの男は船内へと消えていく。
「……！！！」
忌々しさにヒサトは欄干を殴りつけた。
硬いはずの欄干が、べこりとへこみ、ヒサトが相当腹を立てていることが知れる。
ゾッとするリノだ。あの船に何があるというのだ？　ヒサトをここまで怒らせるような何かがあるというのか。ライガはひとつ息を吸い、決めた。
「行こう」
「ライガ！　俺だけでいい！！」

「いやだ。僕も行く」
ライガはヒサトを見上げた。
「何も言わないで行くなんてさせない。ヒサトは僕のだから、勝手にどこか行っちゃだめ」
「ライガ……！」
「危険なところだって言うなら、なおさらヒサトだけで行かせないよ」
ライガは言い切る。
なんとなく、ヒサトの様子からあの船が危険なものなのではないのかと予想はついた。
ライガをそこに連れて行きたくないから、ヒサトはひとりで行くと言ったのだ。
何があるのかは分からない。でも、ヒサトだけを行かせるのはイヤだ。
「俺も行くぞ」
リノも声を上げる。ヒサトをこのまま一人で行かせるのは危険だと、リノも感じていた。
「もう一人くらい連れて行きましょう、リノさん」
「そうだな」
「……お前ら……」
ヒサトは息をつき、あきらめた。
ライガには勘付かれているようだと内心で苦く息をつく。
確かにこの船は、危険なものなのだ——ある特定の人間にとっては。
さ迷い続ける、この船が。
記憶のそこから忌々しいものを思い起こさせる。
『その——を、寄越せ』
ふざけるな。
あの日自分はそう返し、その場から逃れたけれども。

フードの男、彼を見てしまったから。
剣神は行くしかなくなった。

永遠の空・35（後書き）

フードの男と、霧の船。剣神、なにやら関係がある模様。

永遠の空・36

カタリナを加えて、ライガたちは謎の船に乗り込んだ。
うす暗い船内でローブの男がランタンを持って待っていた。中はとても暗く、細い道が長く続いている。これほど大きな船だっただろうか？
いぶかしみながらもローブの男に続いて進む。
「……辛くはないですか」
男は言う。
「真の紋章……それを宿したことを……後悔したことはありませんか……？」
進む度に、男は問いかけてきた。『罰の紋章』を宿して、辛くはないかと。
苦しくはないかと。
ライガは答える。
「辛いです。苦しいですよ。でも、僕には護りたい人がいて、一緒に戦ってくれる人たちがいるから、前へ……進みます」
「……あなたは？」
誰に問いかけているのか。
ライガは顔を上げたが、ローブの中からの視線は窺えない。
「？　誰に言ってるんだ」
リノもいぶかしげだ。
誰も答えないので、男はあきらめたようだった。
何度か怪物に襲われた。船内には怪物が生息しているのだ。こんなところにどうしてこの男と船長とやらはいるのだろう？
そして、船内に入ってから、ヒサトがひとことも喋らないのも気になった。
「ヒサト？」
「……」

とても険しい顔をしていて、ライガの声にも答えないくらいだ。
「変、ですね」
「ああ、おかしい」
カタリナとリノは頷きあう。ライガには愛想がいいヒサトが、これだ。
絶対に何かあると確信できる。
怪物と戦いながら、何度かロープの男からの問いかけにライガが答えていると、目的の船長室へとついたらしい。

『真の紋章を持つものよ、辛いだろう、苦しいだろう、紋章を我に渡してその苦しみから解放されるがいい……』
中にいたのは、人ではなかった。
真の紋章を寄越せという、人ではない存在。
霧の船の導者と名乗った存在は、ライガの『罰の紋章』を欲していた。
そして。
『天空の覇者よ、そなたの力を我に寄越せ……そして共に真の紋章へ復讐を遂げようではないか……』
ヒサトの力をも。
「断る。俺の返事は変わらん。何度訊かれようが、何度俺の前に現れようが無駄だ！！！」
吐き捨てるヒサトに、霧の船の導者は言う。
『そなたの考えが変わるまで、我は何百年でも待とうぞ……さぁ、真の紋章を寄越せ、継承者よ……！！』
霧の船の導者はライガに向き直る。
少年は言い切った。
「断る！！　僕はこの紋章の呪いに負けない！　お前に渡せばきっと多くの人を不幸にする遣い方しかしない。それが分かるから、この紋章は渡さない！！！」
少年の決断は勇気あるもの。誰も紋章の犠牲にしたくないという、

強い決意。
「決裂だ、霧の船の導者。俺も何度も貴様に付きまとわれるのはごめんなんでな、ここで終わらせてもらうぜ。それから――」
ヒサトは後ろのローブの男をちらりと見る。
「俺の知り合いも返してもらう」
「！！」
「テッド！！　いつまでこんな辛気臭いところにいる気だ！！？？　引っ掴んででも連れて行くぞ！！　いいな！！！」
「……はは、変わらないな、ヒサト……」
どこか力が抜けたように、男は笑い、ローブを脱ぎ捨てた。
現れたのは、ライガとそう年頃の変わらない少年だ。
「当たり前だ。俺は俺だからな。で、お前もお前だ。そうだろう？」
「……うん。ありがとう……」
矢筒を背負った少年は、霧の船の導者に視線を向ける。
「俺の紋章、返してもらう。こいつらに会って、少しだけ……逃げないでおこうと思うから……！！」
ライガの決意と、ヒサトの叱咤と。
それが、凍りついた少年の心を溶かしていく。
もう一度。
――戦う力を！！

ライガとヒサトの渾身の一撃が、異界からの訪問者に止めを刺した。
『う、ぐ……』
悶える霧の船の導者に、テッドは右手を向ける。
「返してもらう。戻って来い……ソウルイーター！！！」
霧の船の導者の身体から、ひとつの紋章が浮き上がった。
まるで死神の鎌のような、紋章。
魂喰らい――『生と死を司る紋章』――別名を『ソウルイーター』と言うのだと、ライガは知らなかったけれど、真の紋章のひとつだ

ということは直感する。
自分が宿している『罰の紋章』と同じく、恐ろしいくらいの力の塊。
それがどんな力を持つものなのかまでは分からない。でも、怖いくらいの力を感じる。
これの継承者が、テッドなのだ。
少年の右手に宿った『生と死の紋章』に、ヒサトはようやく安堵を覚えた。
あれが霧の船の導者の手に渡ったままだったら、一体この世界にどんな影響を及ぼしたことか。
霧の船の導者は真の紋章を手にして、この世界に復讐しようとしているのだから。
テッドが倒れた。
「あ、テッド！」
ヒサトはあわてて少年に駆け寄る。無理に『ソウルイーター』を身体に戻したせいだろうかと呼吸を確かめる。
……気を失っただけのようだ。脈もしっかりしている。
「よくやった。根性であれを身体に戻すなんざたいしたもんだよ……」
気を失っている少年の髪をぐしゃぐしゃと撫でてやる。一度手放した真の紋章を、再び自らの身体に戻すのは、勇気がいることだろう。
それでもテッドはやり遂げた。
『ぬ……返せ……我は……真の紋章に……復讐、を……』
まだ消え失せない霧の船の導者の視界に、淡い光が灯る。
ライガたちの背後に現れたのは、目を閉じた女性――運命の道標者、レックナート。
彼女は霧の船の導者に言う。
それはあなたの役割ではありません、と。
ヒサトは無言で立ち上がった。

『海王』を引き抜き、霧の船の導者の前に立った。
構えた両刃に、うっすらと光が宿った。
『天空の覇者よ……力を……そなたの……天空の――――』
「消えろ」
ヒサトは刃を振りぬいた。宿っていた光は、そのまま放たれ――
霧の船の導者を切り裂く。それは間違いなく、異界の者にとっても致命傷だ。
『う、お……あぁあぁ……』
呻き、悶えながら、霧の船の導者はテッドの右手――『ソウルイーター』に喰われていった。
見届けたレックナートは、静かに呟く。
人の心の強さ、確かに見せてもらいました。
そして彼女はヒサトに顔を向けた。
天空の覇者……剣神……あなたも、また戦い続けているのですね……。
「失せろ」
ヒサトはそっけない。レックナートは悲しげにうつむき、いずれまた、と言って消えた。
「ヒサト……やっぱり知り合いなの？」
「言っただろ。知り合いになりたくないって」
「……そりゃ知り合いってことじゃねえのか？」
リノはいぶかしげに問うが、ヒサトは知らん振りで倒れているテッドに近寄った。
「う……」
「お、気がついたな？　気分はどうだ？」
「うん……大丈夫みたいだ」
「そうか。良かった」
起き上がる少年に、ヒサトはがしがしと頭を撫でてやる。
「わ、なにすんだよ！？」
「よくやったな」

笑う彼に、テッドは一瞬言葉をなくし、それから小さく、うん、と頷いた。
なんとなくムッとして、ライガはヒサトに近寄った。
「ヒサト、この人――」
ドンッ！！
船が揺れたのはそのときである。
「あ」
ヒサトが何かに気がついて声を上げる。
「……ヒサト、もしかして」
テッドが物問いたげに見上げると、彼は苦笑い。
「とどめさしたな……あいつの魂ソウルイーターに喰われてたし」
「！！　船が消えるじゃないか！！　この船船長の魔力で実体化してたんだぞっ！？？」
「！！？？」
目を丸くするライガたちに、ヒサトはさわやかに笑いかけた。
「……というわけで、逃げよう」
大脱出、開始。
ライガたちが渡し板を渡り、次にヒサト、最後にテッドが渡ろうとしたところで、霧の船は消え失せた。同時に、渡し板が落下する。
その上には、テッド。
「「あ」」
声がハモった。がくんと少年の身体が沈む。
「！！」
ライガが咄嗟（とっさ）に手を伸ばし、テッドの手を掴んだが、もろともに落ちそうになった。その腰を掴んで一度に二人を軽々と引き上げたのは、ヒサト。
「大丈夫か」

「うん……ありがとう。ええと……テッドさん？　大丈夫ですか」
「……ああ」
ぶっきらぼうに答えてテッドは立ち上がる。
背後で、完全に霧の船が消え行こうとしていた。
「ありゃあ、一体……なんだったんだ？」
リノは何かを問いたそうにヒサトに視線を向ける。
「俺が知るか」
一刀両断してのけるヒサトだ。現に、あの船に関して彼が知っていることなどほとんどない。理解しているのは乗っているのが異形の者で、そいつが真の紋章を探していることくらいだった。
「そういやお前、ヤツに止めを刺したとき、剣光ってたな。アレなんだ？」
「……」
「それに『天空の覇者』とか呼ばれてただろう。あの化けもんにも……その後現れた女にも」
「……」
「……だんまりか」
リノは息をつく。改めてこの青年を不思議に思った。リノがヒサトに会ったのは十年近く前だ。なのにそのころからこの青年は何も変わっていないように思える。
本人は童顔だと言うが、本当にそうだろうか？
ヒサトが生まれたところは？
育ったところは？
どこにいて、どこから来た？
彼の家族は。
ここまで強い男だというのに、その強さが伝わり噂になったのは、ここ十年前後だ。
……今更ながらに思い知る。
ある程度の付き合いがあると思っていたが、ヒサトのことを何も知らない。

「ヒサト」
ライガが駆け寄ってきた。
「あの人、ヒサトの知り合いなんでしょう？」
「ああ、うん」
「……どういう？」
ライガはいぶかしげ。その反応を見て、ヒサトは少し遠い目になった。また、お手つきと疑われているのが、ちょっと悲しい。
そして、過去の行いについては、反論が全く出来ないことがさらに悲しかった。
「信用ないね、俺」
「下半身に関しては。で、どういう仲？」
ライガにキッパリ言われて、彼は苦笑した。甲板に立つ少年に手招きする。
「テッドや、ちとこっちおいで」
呼ばれた少年はヒサトには素直に寄ってくる。
「……なに？」
「ライガ。紹介しよう。こちら、テッド君。テッド、こちらはライガ。この軍の主で、俺の恋人だ」
恋人。紹介されてテッドは目を丸くした。
「本命決めたのか！？」
「……お前もか」
少年の反応にぐったりとうつむくヒサトだ。
「なんかなー、散々同じ反応されてなー、いくら俺でも最近はちと傷つこうかなーとか思い始めたところだ」
「……わが身を振り返るのが遅いんじゃないか？」
思わず呟いたテッドに、ヒサトはさわやかに微笑みかける。
「テッド」
「なに？」
「犯すぞ」
「撤回します」

即座に意見をなかったことにするテッド。ヒサトはその反応に満足したのか頷いて、テッドに肩に手をおいた。

「で、ライガ。こいつ俺の弟に似ててな。前会ったときなんとなく世話やいたんだ。テッドも俺のこと兄貴みたいになついてくれてた。以上」

「弟……さん？」

ライガは一瞬目を瞬き、それから思い出した。以前ナ・ナルでヒサトが言っていたこと。

『弟に毒を盛られて殺されかけたことがある』――腹違いの弟がいると、ヒサトは言っていた。

その弟に、テッドが似ている、と。

「ヒサト」

思わず呟いた。

「大丈夫、なの？」

憎しみはないのか。恨みは？　いや、とライガは思う。彼は悲しんでいた。何よりも、ただ、悲しんでいた。伝わってきたのは、裏切られたという痛みだけだったから。

「……テッドは俺の弟に似てるだけで、弟じゃない」

ヒサトは笑んでいる。そこには痛みは見受けられなかったけれど。

「まぁ、その分可愛いよ。弟分ってとこで。な？　テッド」

「……まぁ、いいけど」

テッドはぶっきらぼうに言い、それでもどこか嬉しそうだった。

そして、『ソウルイーター』を持つ少年はライガの誘いで仲間に加わった。

よろしく、と微笑むライガにテッドは目を逸らす。疲れたかのように関わりたくないと態度で言っているが、ヒサトに可愛くねぇぞーとか言われて頭をぐしゃぐしゃにされて、なにすんだよっと怒鳴っている。ヒサトに接するときは外見の年相応に見えた。

弟のような少年の肩を抱き、がしがしと頭を撫でてやり、ほかの誰にも聞こえないようにヒサトはテッドに囁く。

「……がんばったな」
人の命――特に近しい人の命を喰らうことを好む呪われた紋章。
それを再び宿すことは、身を斬るように辛い決断だったろう。
「……うん」
テッドは青年を見上げた。
変わらない人。出会ったのは十年位前。でも、ヒサトは変わらない。
「ヒサト」
テッドは悲しく問いかける。
「あんた、変わらないな……」
それは霧の船の中でも彼に言った言葉。ヒサトは笑みを浮かべて何も返さなかったけれど。
でも、テッドにはうすうすと理解できる。
霧の船の導者が呼んだのは、『罰の紋章』を持つライガだけではなかったから。
ヒサトも一緒に呼んだから。
真の紋章を求める異形の者は、二人を呼び寄せたから――だから、ヒサトも、きっと。
テッドの口からその言葉が出ることはなかったが。

永遠の空・３６（後書き）

さて、ネタバレが始まります。

永遠の空・閑話

それは群島諸国の面々を率い、クールーク軍と戦っているライガ軍の本拠地船がミドルポートからイルヤ島に向かって航行しているときに起こった出来事。

軍を率いる軍主である、ライガはたまたま甲板で仲間たちと会話していた。

傍らには最近仲間に入ったテッドという少年と、ラズリルにいたころからの恋人で、ずっとライガを支えている剣神（けんしん）という異名を持つ青年ヒサトも一緒だった。

何の変哲もない、晴れた日。

軍師エレノアや、オベル国王リノ・エン・クルデスとイルヤ島での仲間探しのことを話し合っていると、船が突然大きく揺れたのだ。

立っていられないくらいの揺れだった。よろけたライガを、ヒサトが支える。彼の視線は鋭くなっていた。

「な、なにかいます！　船の下……大きい……！！」

見張り台の上から愕然とニコが叫ぶ。とんでもなく視力のいい彼が気がつかなかったということは、その影は海中深くから静かに気付かれぬように近づいてきたのだ。

再び船が揺れ、海中にいた『それ』が姿を現した。

「――ッ！！」

誰もが声を失う。本拠地船に勝るとも劣らぬ大きさの、八頭もある海竜だ。

これだけの大きさの海竜など、話にも聞いたことがない。

「なんだこいつは！？」

リノが叫ぶ。海竜は甲板に立つ小さなモノたちに向けて吼えた。

完全にこちらを獲物とみなしている。巨大な本拠地船ですら、こいつにとっては餌だろう。

生半可な武器や紋章では太刀打ちできないだろう。やわな武器で

は刃を立てることさえ出来なさそうな皮膚だ。
紋章砲を使うには近すぎる。
「！」
テッドとライガが同時に動こうとした。テッドには生と死を司真の紋章『ソウルイーター』が、ライガには贖いと許しを司る真の紋章『罰の紋章』がそれぞれの手に宿っている。
真の紋章の力はとてつもない。それを使えば確かにこの巨大な海竜は倒せるだろう。
だが、『ソウルイーター』は所有者に近しいものの命を、『罰の紋章』は所有者自身の命を削り取る。
「ライガッ、テッドッ、使うなッ！！！」
ヒサトが鋭く叫ぶ。
少年たちには断じてその力を使わせるわけにはいかなかった。
使って苦しむのは少年たちなのだ。『ソウルイーター』を宿しているテッドはすでに百五十年もの苦しい時を過ごしている。
真の紋章を宿したものは時の流れから切り離される運命だ。
ひとり孤独な時を苦しみながら過ごしていた彼と、これからも紋章に命を削られ続けるヒサトの愛しい少年。
彼らはヒサトの声にビクリと身をすくませた。
たったひと時のやすらぎを、少年たちが得られるのならば。
剣神と呼ばれる己の力を振るうことを、ヒサトは厭わない。
彼はすぐに腰の双剣を抜き放った。
横にいるリノに小さく声をかける。
「船を離せ」
「！」
リノが反応したときにはヒサトはすでに欄干を蹴っている。
「！　ヒサト！！」
ライガが恋人の名を呼んだ。
海竜の頭のひとつが炎を吐き出そうとしていた。その頭に、ヒサトは自身の剣『海王』の片方をつきたて、重力に惹かれるまま下へ

と落ちていく。
勢いのまま海竜の首に傷がつけられていき、その痛みに竜は吼えた。口中の炎が霧散する。
その隙に、リノが叫ぶ。
「全速で離れろッ！！」
「！」
ライガが愕然とする。ヒサトを置いていくというのか！？
今、彼は海竜の背中に降り立っていた。竜に比べて、あまりにも小さな身体。竜はこの小さなものをうっとおしいとでも言いたげに幾つもの首をもたげ、一飲みにしようと狙っている。
「ヒサト！　ヒサトッ！！」
叫んで欄干に駆け寄るライガをエレノアとリノが押さえ込んだ。
「早く出しなっ！！」
エレノアが叫ぶ。
「ダメだ！！　ヒサト、戻ってっ！！」
叫ぶ声とは裏腹に、船はどんどん離れていく。
「いやだっ！！　ヒサトーーッ！！！」
彼が、死んでしまう――！！

船が離れていくのを視界の隅で確認し、ヒサトは剣を構える。海竜は完全にヒサトに傷つけられたことで船のことを忘れた。
彼は無言で襲い掛かってくる竜の顎をかわしてのける。たやすいことだった。
児戯（じぎ）にも等しいが、さすがにこの巨体を倒すのはちまちま攻撃していては無理だろう。

ギャオオウゥ！！

竜が吼える。なまなかの人間なら、間近で聞いた咆哮だけでショ

ック死したかもしれない。
剣神はその程度では揺らがない。
『海王』の刃が光を帯びる。
ヒサトは迷いなく片刃を振り下ろした。
剣先から巨大な青白い光が鋭い刃となって飛ぶ。海竜の首が一本吹き飛んだ。
上級の紋章魔法以上の威力があるだろう。
竜は怒り狂った。
一本を傷つけられ、一本を落とされた。
この上は、この小さきものを呑み込まねば気が治まらない！！

ガアアアアッ！！

身を激しく震わせて、背中にいる小さきものを振り落とす。

離れ行く船の上から、誰もが見た。
竜の背中からヒサトが落ちる。そのまま彼が海中に転落するのを。
海の中。当然人は上手く行動できない。
どう考えても竜に……呑み込まれるだろう。
巨大な竜は転落したヒサトを追うように飛沫（しぶき）を上げて潜っていった。
ヒサトは助からない……。
「あ……っ」
ライガがへたり込む。
「うそ……ヒサト……」
声が力ない。いつも皆の先頭に立つべき立場の少年は、愛しい人を目の前で失ったと絶望する。いつも、いつも、ずっとヒサトはライガと一緒だった。
初めて会ったときからずっと彼が好きで、彼も自分を好いてくれ

ていたのに、結ばれたのは一年半後だ。
やっと結ばれて、でもすぐに戦争に巻き込まれて……それでも離れることなく、今まで。
一緒に。
いた、のに。
「……こっちに来るかもしれない。急ぐんだっ！！」
エレノアが怒鳴る。ヒサトが気を引いてくれたとはいえ、まだ近くにいると分かれば竜は次に船を狙ってくるだろう。人間一人の小さな身体で満足するわけがない。
ヒサトが喰われたのは、エレノアにとっても衝撃だった。
彼はこの軍の中核をなす人材だったのに。
何よりも、軍主であるライガの心の支えだ。
彼がいなくては、ライガが……！
そのとき、だった。

ごばぁっ！！

竜が海中から頭をもたげる。

ギィィギャアアア！！

「！　ヒサトさんですッ！！」
ニコが歓声を上げた。全員が欄干に駆け寄る。ライガも顔を上げた。もうすでに船がかなり離れているので彼らの視力では何がどうなっているのか判断がつかない。
それでも、ライガには見えた。
ヒサトが、竜の頭に剣を突き立てている。
竜は頭を振って彼を振り払った。そして違う頭で空中の彼を飲み込もうと迫る。

ヒサトは目前に迫る竜の顎にも動じない。刃に神経を集中する。
そのまま双剣を振りぬいた。双曲の月のように光が飛び、迫る顎を引き裂き、違う竜の頭を根元から二本吹き飛ばす。
これで、半分。
スタミナでは竜のほうが圧倒的に上だ。長期戦ではまず負ける。
ヒサトは落ちていきながら視線を走らせた。
船はかなり離れている。巻き込むことはないだろう。
ならば、もう加減する必要はない。
高く飛ばされ、足元は再び海中だ。彼は体勢と呼吸を整え、身体を丸めて衝撃を殺すように足から海に落ちた。

ザボォン！！

視界を白い泡が埋める。
泡が収まるより先に、竜の顎が彼の視界を埋めた。
ヒサトは海中で薄く笑む。
今から竜に呑み込まれるものとしては、あまりにも不適なその笑み。
竜よ、剣神――この俺の力、存分に味わえ。
『海王』の刀身が強く光った。

海が――その一瞬、確かに、割れた。

何が起きたのか、誰も分からなかった。巨大な見えない力が、海を真っ二つに割ったようにも見える。
それに竜は両断され、海中から跳ね上がった。
巨体が海に落ちる。大きな波が起こった。
「ヒサト……っ！！」

揺れにもかまわずライガが欄干から落ちそうなくらいに身を乗り出した。
あわててテッドが彼を支えたが、ライガは気付きもせず目をいっぱいに凝らして愛しい人の姿を探す。
いま、なにがおこった？
ヒサトは！？
波が収まった後、海は静けさを取り戻した。
竜の身体はここから見てもはっきりと分かるほど真っ二つになって浮かんでいる。
「ヒサトっ、ヒサトッ！！」
声を上げてライガが叫び、恋人の姿を探すが――。

ゴバァッ！

海面に顔を出して、ヒサトは大きく息をした。乱れた呼吸を整える。
さすがに大きな波が起こる海中を泳ぎきるのは息が乱れた。
危うく岩に激突するところだったが、咄嗟に体勢を入れ替えて蹴りつけたので怪我もない。
近くの岩によじ登る。
座ってはーっとまた息をついた。
「……さすがに疲れた」
呟いて、陽光に片方の剣をひらめかせる。
きらめきが、船に自分の無事を知らせる合図だ。竜から逃げ、遠く離れた本拠地船まで泳いで戻るつもりはない。体力が尽きたわけではないが、面倒なのである。
服を着たままで、その上武器を下げて泳ぐことほど体力を使うことはないだろう。
迎えに来てもらうのが一番手っ取り早いのだ。

海面に煌めく光。それがヒサトからの合図だと分かって、仲間たちは歓声を上げた。
すぐに船をそちらに向ける。巨大な竜の死体のそば、岩の上に腰掛けているヒサトの姿を見て、ライガは安堵のあまりに泣き出しそうになった。
小船とはしごが降ろされ、剣神は船に戻ってきた。
ずぶぬれで船に上がったヒサトを、仲間たちが出迎える。
「ヒサト！」
真っ先にライガが飛びつこうとし、
「ライガっ、待てっ、濡れるっ」
あわててヒサトは止めたが、恋人はかまわず彼に抱きついた。少々濡れようがなんてことはない。ただ、愛しい人の無事を身体で確かめたかった。
「濡れるって言ってんのに」
苦笑して、彼は抱きしめてくれた。強い力に、ライガはほっと安心する。
「怪我はないかっ？」
リノが声をかけてくる。
「ねぇよ」
あっさりヒサトは答える。周りが驚愕した。
「ないのか、怪我！？」
ハーヴェイが声を上げ、シグルドが愕然としている。
「あれだけの相手に……無傷で……？」
勝ったというのか。
あの巨大な竜を一人で相手にして。
「……デタラメだね、アンタの強さは」
エレノアは感心を通り越してあきれている。まあ、巨大な戦艦にたった一人で乗り込んで、皆殺しにして戻ってこれるような男であ

る。竜の一匹や二匹くらい、どうということもないのかもしれない。
「……心配するだけ損だな」
キカが息をつく。
過去確かに彼と付き合ったことのある彼女だが、ヒサトがここまで強いとは知らなかった。
剣神――剣の神とは誰がつけたものなのか、確かに彼にふさわしい二つ名だ。
「お前ら、言いたいことはそれだけか」
ヒサトはジト目だ。腕の中にいる可愛いライガのように、心配してくれる仲間はいないのか？　と呟いている。
「やっぱライガが一番だな」
言って彼はライガの頤を掬い上げ、唇にやさしいキスを落とした。
ライガが真っ赤になる。皆の前だ。いくら恋人同士と仲間たちには知られているとはいえ、公然とされると困る。
「ひ、ヒサトっ」
「ん？　足りねぇか？」
「違う……っ」
言うなり唇を塞がれた。
口腔を荒らすか犯すかのような深いキスをされ、脳天から蕩けていく。遊び人だったヒサトに、彼と付き合うまで経験など全くなかったライガが抗えるわけもない。
「っ……」
全身から力が抜けてしまい、くたんとした少年をヒサトは抱き上げた。
「風呂入ってあったまってこよう。後始末頼むなー」
軽々とライガを抱き、ヒサトは甲板を去った。
やれやれ、と仲間たちは苦笑する。剣神の名と共に、タラシ、コマシでも有名だったヒサトが、えらい変わりようである。
ライガに一目惚れしたのが、彼の転機のきっかけだろう。
ひとつところに長居しなかった彼が、ライガと出会ったことでラ

ズリルに長期の滞在をし、そして今に至る。それは幸せなことだろうか。

彼が愛している少年は、命を削る紋章を手にしている。いつか紋章に殺されるだろう。

ライガはそれを覚悟して、ヒサトもそれを覚悟して、その上でそばにいる。

いつか別れが来るだろう。

それも、遠くない未来に、確実に。

だが、彼らは歩き続け、人々を導き続けている……。

「……さぁ、後片付けだ。一番の難関はヒサトが切り抜けてくれたからね。後はあたしらの役目だよ」

エレノアが海を見下ろした。巨大な竜の死体がある。

これを一人でやった男。恐ろしいまでの力だ。

テッドもまたそれを見下ろしていた。少年の目には、確信がある。

ヒサトは。

……ヒサトも。

永遠の空・閑話（後書き）

何かに気がつくテッドさん。

永遠の空・37

疑問が噴出したのは、海賊島に向かおうとしていたときだった。
甲板で怪物の大群に襲われ、ヒサトと分担してそれぞれが戦っていたところ、テッドをかばったライガが、怪物の牙を受け致命傷に近い傷を負ったのだ。
「ライガ！！」
テッドがあわてて左手の水の紋章で癒しを試みるが、魔力の高いテッドの紋章魔法でも、それでもライガの命が失われるほうが早い。見る間にライガの顔から血の気が引いていく。
「ライガ……ライガ！！　くそっ！！！」
近くで戦っていたキカが駆け寄ろうとするが、怪物に阻まれ近づけない。
そこに甲板後方で怪物を一掃してきたヒサトが戻ってきた。彼は状況を一目見て、恋人の命が失われかけていることを知る。
あそこまでの傷は、どんな紋章魔法でも無理だろう。誰もがそう直感していた。
ライガを癒すテッドに怪物の牙が迫る。誰もカバーに入れる距離ではなく。
ここで軍主を失うのか。
こんな、ところで――これからというときに！！！
絶望が、甲板を覆う。
だが。
「――――レンカ！！　ライガとテッドを護れ！！！」
叫んだのは、ヒサト。
応えたのは。
ライガが巻いているバンダナ。そこに刻まれている紋様が確かに輝いたのを、誰もが見た。

キュバァッ！！

渦を巻いた水を、テッドは呆然と見上げる。
それは透き通り、とても美しい水。水のような……大きな鳥。
水は甲板上を覆うくらいに大きな翼を広げ、吼えた。

ヒィィイン。

美しい音色のような、日を受けた玻璃のように煌めく、その声。
一瞬。
莫大な魔力がライガの体を包み、身体から傷の痕跡が消える。血の跡どころか、服すら元通りになっている。
そして、テッドたちに襲い掛かろうとしていた怪物が、瞬時に凍りつき――音もなく砕け散った。
「！！？？」
甲板の仲間たちだけでなく、怪物までもが動くのを忘れて硬直した。
今のは、なんだ！！？？
うろたえていないのはヒサトだけだ。彼は瞬く間に甲板上の怪物たちを一掃して退け、ライガの元へと駆け寄る。
水の鳥はそれまでずっと、テッドとライガを護るように翼を広げ、二人を抱えるように佇んでいた。
「テッド、怪我は」
「あ、な、ない、よ」
「そうか」
ヒサトはライガの手を取り、胸に耳を押し当て、少年の鼓動を確かめた。
とくん、とくん。

確かな命の息吹。
剣神は安堵の息をつき、それから鳥を見た。
「もういいぞ。ご苦労」
鳥は彼の言葉を理解しているようにこくりと頷き、光に包まれて消えた。
淡く残る光の残像に、テッドは声もない。
今のは、なに？
あんなに強力な力、紋章魔法ではありえない。
真の紋章とも違う力だ。
「おい、ヒサト」
キカが剣を収めて寄ってきた。
「あれは、なんだ」
同じ疑問を、見たもの全員が抱いている。
直感していることも見な同じ。
紋章魔法ではない！！　ならば、なんなのだ!?
ヒサトは眠るライガを抱き上げ、船内に無言で戻ろうとする。
「ヒサト、答えられないのか」
キカの再度の呼びかけに、剣神は自嘲するように言い捨てる。
「……最初に俺を愛していると言ってのけて、俺を裏切って、俺のために死んだバカ二人だ」
「!?」
そのまま彼は船内に入っていった。テッドも後を追いかける。
「……どういう意味だ……？」
リノは呆然としている。怪物との戦いで負った傷は、あの鳥が吼えた瞬間にリノたちのものまで癒えていた。たった一声、それだけで甲板上の仲間全員の傷を癒し、怪物の半数を砕いて見せたあの鳥は、一体？
ヒサトは『レンカ』と叫んでいた。人の名前のような叫び。
だが現れたのは水の結晶のような美しい鳥で……でもヒサトはバカ二人と言ってのけた。

『二人』と。
あれがまるで人間のような、物言い。
「どういう……意味なんだ？」
かばわれていたエレノアが、呟いた。
答えを持っているものは、この場にはいない……。

ライガは手を引かれていた。
彼の手を引くのは、ひとりの女性で、その前を道案内するかのように歩いているのは、男性だ。ライガよりは年上だろうが、ヒサトより年下に見える。
金髪の男女。とても美しい二人で、二人は同じ顔をしていた。
双子。
ライガはぼんやりと思う。
この人たちは兄妹なのだろう。
ヒサトの好きそうな顔だなぁ、とかぼんやり考えて、意識がハッとした。
『ヒサト……』
彼はどこ？
ここは真っ暗で、愛しい人の気配はない。
『この先に、いらっしゃいます』
男性が、ライガに微笑みかけた。
『お戻りになってください、ライガ様』
女性も微笑む。
二人が指差す先に、光が見えた。
『どうか、ずっとあの方のおそばで、あの方とお幸せに過ごされてください』
女性は言う。とても嬉しそうにライガを見つめて。
『初めてあの方が愛されたあなたです。どうかお体ご自愛ください』
男性も言う。彼もとても幸せそうだ。
『あの……あなたたちは……？』

ヒサトの知り合い。それは直感できる。この二人はヒサトをとてもとても愛している。

それも、理解できる。

ライガもそうだからだ。

『わたくしはレンカと申します。ライガ様』

女性はレンカと、

『わたしはレンと申します。ライガ様』

男性はレンと。

二人はとても幸せそうに名乗り、ライガに伝えた。

『これから先も、ずっとあなたにお仕えさせていただく、二人です』

『え……』

ライガはぽかんとした。

『な、仲間になってくれるということですか？』

『この身はすでに現世（うつしよ）にはございません。わたしどもがお仕えできるのは、ただ、この力』

レンは己の胸を指す。

『ただ、力とだけご理解していただければ』

レンカは微笑んでいる。

そして二人は彼方を見上げた。

『ああ、お呼びでいらっしゃる……』

声を、至福だと言うように。

『さぁ、ライガ様。お戻りを。ヒサト様があなたのご帰還をお待ちしております』

ライガの体がふわりと浮いた。そのまま光に向かってひとりでに突き進んでいく。

ヒサトの声がするような気がする。彼が自分を呼んでいるという、確信。

ライガは振り返った。

綺麗な双子は、深々と頭を下げていた。

目を開けた。
「ライガ……」
ヒサトがいる。彼の横にはテッドも座っていた。ライガは腕を上げて恋人の顔に触れた。
「ヒサト……僕を、呼んでた？」
「……ああ」
ライガの手を握り、ヒサトは微笑む。やわらかい笑みに、ライガはホッとして、彼から伝わるぬくもりを感じている。
とても心配してくれたんだろうということは分かった。
ライガはゆっくりと起き上がり、ヒサトに抱きつく。彼は何も言わずに抱き返してくれた。
「夢、見たよ……」
「夢……？」
「うん……」
アレは夢であって、夢ではない。ライガにはなんとなくそれが理解できた。
「レンとレンカっていう双子さんに会ったの」
「……そうか」
ヒサトはそれが誰だか分かっているようだった。テッドは無言で二人のやり取りを聞いている。
「ヒサトの、知り合い？」
「……昔の……なんて言ったら分かりやすいかな……関係がちょっとややこしいんだ」
「教えて。難しくても、聞きたい」
見上げると、ライガにキスをひとつ落として、ヒサトは少し考え、それから言った。
「まず、レンもレンカも俺の弟の部下だった。でも、俺の幼馴染でもあって、仲はよかった。ここまではいいか？」
「うん」
弟さんの部下。部下がいるというならば、ヒサトの家は軍人か何

かの家柄なのだろうか。
「そんで、だ。二人揃って俺のことを愛していると言ってのけた最初の人間だ。でも、俺も愛したわけじゃない。俺は愛してはいなかった。信頼はしていたが、愛じゃない。これもいいか？」
「……うん」
「で、二人揃って、俺を殺しに来た弟の刺客だった」
「！！」
テッドが愕然とする。弟に似ていると、ヒサトは自分を可愛がってくれたけれど。
その弟に、刺客を送られたなんて。
「夜伽（よとぎ）……あー、ようするに、ヤってる最中に俺の隙を見て殺そうとしてたんだが、そんなもん俺はとっくに見抜いてて、まぁ、殺されるならその前に楽しんでおこうと、いいだけ抱いたんだけど……昔の話だから怒るなよ？」
「……うん」
「……止めるか？」
「ううん。続けて」
ライガはヒサトの胸に擦り寄った。ヒサトはライガの髪を撫でながら続ける。
「……何度も抱いたよ。そのたびに殺されるだろうと思った。今夜は、今度こそは殺されるだろうって。でも、あいつらはどっちも俺を殺せなかった。俺を愛していたからだと言っていた。ただ、俺に名前を呼ばれるだけで、それだけで良くなったって」
「……うん」
「……そのうち、レンカが弟の何番目かの花嫁に選ばれた。兄のレンもだけどレンカも魔力が強くて……魔力の強い子供を産むのが、最大の目的だったんだ」
「……どうして？」
ヒサトはゆるく息をついた。
「俺の……生国（しょうごく）には、真の紋章があったから」

「！！」

「それを宿すための、子供を」

それは、道具だ。とてつもないくらいに、ただの、道具。

「……レンカは最後の晩に俺のところに来て、子供をくれと言ってきた。俺の子なら生みたい。心から願って生めるから、と」

ヒサトは首を振った。

「俺は……断った。弟が……可愛かったんだ。だから、早く殺して欲しかった……俺は強すぎたんだ。剣も、魔力も……皆が恐れるくらいに」

ヒサトはライガの体から左手を離し、グローブを外した。

その手の甲には、何もない。彼が紋章を宿しているのは右手だ、左手には、何も宿していない、はずだった。

「――これに選ばれるくらいに」

呟きと共に、浮かび上がったのは。

「っ！！」

「ヒサト……あんたも、やっぱり……！！」

ライガもテッドも声がない。青白い光と共にヒサトの左手の甲に浮かび上がったのは、間違えようもない、紋章だ。

近くにいるだけでもとんでもない力を感じる。

間違えようもない、真の紋章だ。

渦巻く棘（とげ）のようなライガの『罰の紋章』、死神の鎌のようなテッドの『ソウルイーター』、

そして、天翔る翼のようなヒサトの紋章。

「……これが、俺の国にあった真の紋章――天空の紋章だ」

ふぅっと、紋章はヒサトの手の甲から姿を消した。

「こいつは特殊でね。力を行使するときか、こうして継承者が意識したときにしか姿を見せないし、気配も感じさせない。だから今まで俺を真の紋章の所有者と思うやつも……これを見せるまではいなかった」

ヒサトは同じく真の紋章の継承者たる少年たちを見る。

「二人とも……気がつかなかった、だろう？」
ライガとテッドは頷いた。少年たちは互いに宿るものに気配と力で真の紋章だと、お互いすぐ気がついたが、ヒサトのものには本当に気がついていなかった。
かなり特殊な紋章だ。

永遠の空・37（後書き）

天空の紋章は創作です。原作にこんな紋章あったら便利すぎる……；

永遠の空・38

「で、話の続きだが……弟はこれを自分のものにしたがった。他にも宿そうと試みた連中はいたんだが、全てがこいつの制御に失敗して、ことごとく爆死したんだ」

「爆……死」

テッドが呟く。真の紋章は非情で、厳しい宿命を持つ。ヒサトの持つ紋章も、例にもれないのだ。

「ああ。こいつは制御に失敗すればその場で所有者の魔力を吸収、拡散させる。結果が爆死だ。だから……自分からは誰も宿そうとはしなかった。死ぬからだ」

ヒサトは左手に再びグローブをはき、話を続ける。

「レンカが弟の花嫁になった晩に、俺はこいつに呼ばれたよ。最初は誰が呼んでいるのかも分からなくて、ふらふらと歩いてた。気がついたら……俺が入ることは許されない場所に立っていて、目の前にこいつが浮いていた。呼ばれたんだと気がついたのは……左手にこいつが宿った瞬間だ」

とん、と指先で左手甲をつつく。

「一昼夜苦しんだ。制御に苦しんで、死ぬかと思うくらいにのた打ち回って……俺をその場から極秘裏に連れ出したのはレンだったらしいが、俺にその記憶はない。苦しくてそれどころじゃなかったからな」

そして、彼は真の紋章の主となった。

「……俺は耐え切ってしまった。耐えてはいけなかったのに、こいつの主になってしまった。それが周りに知れたら……どうなるかは目に見えてた。俺はそれでも良かった。自分の命に……こだわっていなかったから」

ライガを腕に抱きながら、テッドを横に感じながら、ヒサトは遥かな過去に思いを飛ばす。

あのころ、自分は生きていてはいけない存在だった。
「……縋(すが)ったのはレンだった。生きてくれと。俺はどうでも良かった。そう思っていた。半年経って……俺が紋章の主になったことに弟が気がついて……レンが……俺をかばって殺されるまでは」
あの晩、禊(みそぎ)に出ていたヒサト。近くの湖でいつものように身体を清めていた。
「俺の住んでいた家に……弟は火を放ち……それを止めようとしたレンは……弟に斬り捨てられた。俺は時々近くの湖に水浴びしに行っていて……それを知っているのはレンとレンカだけだった。他には誰も知らなくて……」
そして弟は火を放ち、レンは傷を負い、それでも。
「レンは、湖まで来たんだ。瀕死の状態で、血まみれのまま、俺の無事を確認しに。そして、俺の顔を見て、俺の声を聞いて……俺の手の中で、息絶えた」
良かった。そう言って死んでいった人。
「……レンを湖のそばに埋葬して……それでも俺はまだ生きてた。いっそ自分で死ぬべきかとも思った。顔を隠して、町に戻って……そこで見たのは、腹を裂かれて胎児を引き出されたレンカの……晒(さら)された死体だった」
ヒサトの子を宿したと、密通の罪で殺されたレンカ。
「……俺の子じゃない。弟の子だった。だが、弟は信じきれずにレンカも殺した。腹の子供まで……一緒に……」
あなたの子が欲しいと願った女。その願いも、かなえてやらなかった自分。
「そのとき初めて殺そうと思った。レンとレンカを殺した弟……ナセルを」
『天空の紋章』の力を使って、弟の寝室に入り込んだあのとき、真剣に殺すつもりだった。
でも。

「……出来なかった」

兄上。そう言ってついてきた幼い弟を、たった一人、自分を、必要としてくれていた弟を。

ヒサトは、殺せなかった。

「……ナセルだけだったんだ。あいつが生まれた瞬間に用なしになった俺を、それでも慕ってくれたのは。それが子供のときだけでも……俺は愛おしいと思ってた。この弟のためなら……なんでもしようと、思って、いた……」

けれど弟は疑心のままレンを殺し、レンカを殺し、家を焼き――ヒサトから全てを奪っていった。

「……俺は国を出た。もうどうでも良くなったから。ナセルを殺せず、レンもレンカも亡くして……どうしたらいいのか分からなかったんだ。そして――さ迷ってしばらくして、怪物と戦って死に掛けたんだ。そこで気がついた」

くい、とライガがしているバンダナを軽く引く。

「これ……レンとレンカが俺に送ったあいつらの形見でな。これにあいつらの魂が宿っていたことに、そのとき初めて気がついたんだ……さっきの、鳥」

テッドを見る。

「あれはレンカだ」

「……鳥、なのに？」

テッドは不思議そうに返し、気を失っていたライガはきょとんとしている。

「レンカが得意としていたのは水の紋章魔法でな、死んでから紋章の化身に変わったらしい。回復と攻撃をほとんど同時にやってのけただろう？　レンカの得意技だった。まぁ……死んでから威力は跳ね上がったようだが」

くい、とライガのバンダナをもう一度引っ張る。

「ここ。二種類紋様が入っているだろ？」

バンダナの端、垂れ下がっている場所に、それぞれ二種類の精緻な紋様が刺繍されている。

「こっちがレン、こっちがレンカだ」

ヒサトが示す。文様は似ているようで違っていた。赤い紋様と、黒い紋様。

赤がレンカ、黒がレンだとヒサトは言う。

「ちなみに、レンは雷系が得意だったから、雷の獅子で具現する。レンカは……テッドは見ただろうが水の鳥だ」

見たいような見たくないような。テッドは複雑な表情で首を傾けた。

「ヒサト」

ライガは困ったような表情で恋人を見上げる。

「そんな大切なもの、僕が持っていていいの？」

彼が持つべきものではないのか。彼の信頼していた死んだ人。

魂が宿る、その形見。ヒサトを愛しているがゆえ、死してもなお、仕えようとする双子。

「いいよ。お前を護ってくれるから。俺はそのためにお前にやったんだ」

「でも……」

「いいんだ。あの馬鹿ども、俺をかばって勝手に死にやがったから、俺の大事な人を護ることくらいはさせてやらんと。ふ、死んでからもこき使ってやるとも」

ヒサトは笑ったが……悲しみがあるのは間違いなく。

「レンカなんかな、殺される理由はなかったんだぞ？　なのにあいつ、密通を疑われたとき、俺のことを愛していると胸を張ったらしくてな……馬鹿だろう？」

ライガは声もなくヒサトにしがみつき、首を振った。ヒサトは悲しんでいる。愛した人ではなくても、信じていた人を失った痛みがある。

「ヒサト……」

ライガは泣き出しそうになり、テッドは辛そうな表情でヒサトに訊いた。
「なぁ、ヒサト。あんたの故郷は？」
「もうない」
きっぱりと彼は告げる。
「俺が国を出た五年後に、他国に滅ぼされたよ。その国々を抑えていた俺の存在がなくなったからな。滅ぶのは早かった」
聞いていた少年たちは確信した。ヒサトは軍人などではない。
「……国の名は？」
「……聖王国ティアマト。ざっと五百年前だな、滅んだのは」
五百年前。
弟も、そのときに捕らわれて殺されただろう。
戻らなかった兄を待っただろうか？他国に恐れられていた、武神の帰りを、待っていたかもしれない。それはヒサトの淡い期待でしかないだろうが、訊く相手を失っている今は、どうにも出来ないことだった。
「……ヒサト、あんたその国での立場……高かったんじゃないのか？」
テッドは確信していたが、訊いた。ヒサトは苦笑して、答える。
「……第壱皇子とは言われていたよ。俺は妾腹だったから、継承順位は低くてな、正妃から生まれた弟――ナセルが生まれた瞬間に用なしになった」
だから、何度も殺されかけた。
正当な血の持ち主であるナセルがいる以上、兄皇子ヒサトの存在は邪魔でしかなく。
けれど彼は生来の強さで何度危険な戦に先陣を切って出て行っても、必ず勝って返ってきてしまった。
そこで死んでいれば良かったと、ヒサト本人も思うのに、彼は死ななくて。
その存在が他国の侵略を抑えていたのは間違いなくて。

王になるのはヒサトのほうではないかと、人々は噂し――ナセルは怯えたのだ。
兄が、自分から王位を奪っていくのではないかと。
その疑心暗鬼が、惨劇の始まりで、そして祖国が滅ぶ理由になった。
ヒサトなき王国が、他国の侵略の格好の目的にならないわけがない。
ナセルは国を護りきれなかった。彼は最期の国王として、他国に処刑されたはず。
「……皇子……」
「昔の話だ。国はもうない。俺はヒサト。ただの、ヒサトだ」
名はそれだけ。家名などもう忘れてしまった……あまりにも遠すぎて。
「五百年、も……？」
ライガがヒサトを見上げる。真の紋章の継承者。彼の姿が変わらない理由。
時間の流れから切り離され、真の紋章と共にある限り、永遠に続く生。
それゆえに彼はひとつところに留まらず、ひとりで、ずっと――
五百年も。
「そうだよ」
彼は笑う。
「まぁ、それなりに楽しんで生きている。こいつとも気があってね」
左手を示す。
「今じゃほとんど……いや、確実に俺が爆死することはないな」
「そうなのか？」
テッドが身を乗り出す。真の紋章。長く年月を生きれば、制御しきることが可能なのか。
「おう。なんつーか、紋章に惚れられているらしい」
「……それ、ヒサトにしか出来ないことじゃねえの？」

どこまでタラす気なんだこの男は。
半眼になるテッドだ。人間だけでなく、真の紋章までタラしこむ男。
――あきれるしかない。
「わはは。そうかもな」
「……参考にならない……」
頭を抱えるテッドだ。ライガも苦笑して、ヒサトの胸に擦り寄る。同じだった。
真の紋章を抱えた人。
ライガより、もっとずっと、たくさんの痛みを抱えて生きている、ヒサト。
長く、永く――それでも、彼は。
「つか、あんたのその強さ、自前なのか？　紋章のおかげじゃなくて！？」
「ああ、自前だ。だから恐れられてなぁ……おかげでほかの国の連中、目の色変えて見合い話持ってくる持ってくる。俺を引き抜けばそれで勝ちだったから」
「……タラシも昔からか？」
「はっはっは、言わなくても分かれ」
「……昔からなんだな……」
ぐんにゃりと脱力するテッドである。他人を寄せ付けない雰囲気を放っている少年も、今は明るく素で話している。これが、テッドの本来の性格なのだろう。
「ねえ、テッドとヒサトの紋章って……何ができるの？」
苦笑してテッドとヒサトのやり取りを聞いていたライガは、ふと気になって訊いてみた。
自分の紋章は自分の命を削りながらだが、攻撃に特化している。
「……俺のは……他人の魂を喰らう」
テッドは目を逸らして言った。
他者の魂を喰らって力にする紋章。攻撃しながら自分の身体を癒

すことも可能だと。
その紋章を宿して、彼はもう百五十年の時を過ごしている。
「ヒサトは？」
テッドに視線を向けられ、ヒサトは左手に視線を落とした。
「魔力と空間を司っているらしくて、簡単に言えば……どんな場合でも転移できるし、魔力や魔法の増幅、減少が出来る」
実はこれで『罰の紋章』の力を抑えてもいたのだ。ときおりヒサトがライガの左手に触れていたのはそのためでもある。
「……ヒサト……！！」
ライガはたまらなくなった。彼はずっと、紋章からも自分を護ってくれていたのだ。
「……それ、真の紋章にも干渉できるのか……」
唖然と呟くテッド。
「俺だけだろうけどな。生来の魔力が強くないと、多分不可能だろう」
「……ヒサト、魔力も化けもんだもんなぁ……」
「テッドに言われたくないぞ。お前も魔力強いだろう」
「ヒサトほどじゃない……」
言い合う彼らはどちらも魔力が高く、さすがは真の紋章持ちといったところか。
「……ところで、ほかの連中には秘密にしといてくれ。なんつーか、知られたくない」
「どうして？」
ライガとテッドという真の紋章持ちがすでに二人もいて、隠すことはないと思うのだが。
「……俺の紋章はお前たちの紋章と違って危険性が低い」
「……爆死するのに？」
ライガは心配そうにヒサトの左手に触れた。
「しないよ。俺が宿している以上は。で、それを見て自分も大丈夫だと思う連中は今まで山ほど見てきた。俺は、それが恐い」

ヒサトから紋章を奪おうとする輩は、この五百年でいろいろと見てきた。
ほとんどが、お前に出来るのなら自分にも可能だろうと軽く考えていた。
「これも真の紋章であることは間違いない。でも、俺が持っているのを見た連中は、非情で危険な紋章だと思わないんだよなぁ……俺が宿しているから、安全なんだと思わないんだ。自分も出来ると思うらしい」
「あー……なるほど……」
テッドは納得した。ヒサトは軽々と紋章を宿しているように感じてしまうのだろう。
同じく真の紋章を宿しているテッドとライガにはその苦しみも理解できるが、知らないものには予想も出来ないはずだ。
だから軽く考える。
自分も制御できる、と。
「だから内緒だ。いいな？」
「うん」
「分かった」
真の紋章を持つ三人は頷きあった。
「でもさ、リノ国王とか結構怪しんできてると思うぞ」
何年ぶりに出会っても、変わらない人。ヒサトはキッパリと言い切った。
「今までどおり童顔で通す」
ライガは首をかしげた。かなり強引ではないだろうか。
「無理がないかな……」
「あと、それ。ライガのバンダナ。絶対ありえないから。死んだ人が宿ってて魔法の化身になってるなんてさ」
テッドは赤いバンダナを指差す。確かにありえない力だ。他にそんな話聞いたことがない。
それだけレンとレンカのヒサトに対する愛情が深いということな

のだろうが。
「……実際ここにあるんだが」
「それだけ話しちゃダメかな？　人の魂が宿ってるって」
「……ライガ、どこからどこまで話す気だ？」
テッドが突っ込む。
「う、う～ん」
さっきヒサトから訊いた話を全部話すわけにはいかなくて。
でもバンダナの話をするにはある程度のことを話す必要があり。
ライガは悩みこんだ。どう話せば『天空の紋章』のことやヒサトが皇子だったことをぼかして話せるだろう。
「いい。しらばっくれろ。何も知らんと言う顔をしておけ。俺もばっくれる」
ヒサトは言い切り、少年たちを苦笑させた。
結局、それしかないのだろう。ライガとテッドはヒサトに関して何も知らないふりをして、ヒサトはほかの追求を涼しい顔でかわしてのける。
「共犯だ。いいな？」
にんまりと笑う剣神――天空の覇者は楽しそうで、ライガとテッドもようやく笑った。
ヒサトの存在に、確かに救われていることを感じながら。

真の紋章。
それは非情で、厳しい運命を継承者にもたらすもの。
けれど、それでも確かに生きようとするのは、人の心。
紋章は、何を思って人に宿るのか――。
答えはまだ、どこにもない……。

永遠の空・３８（後書き）

そして、ティアマトも創作です。弟皇がナセル鳥と同じ名前なのも、実は勝手に設定を作ったりしてます（笑）

「おいヒサト」
「あれは一体何なんだ？」
「ヒサト、あんなコトどうやってしたんだい？」
それから数日、ヒサトは目撃した面々にひっつかれ、質問攻めにあい、心底からうんざりした。
「なぁなぁ！　なんだよあれ！？」
「どうやったんだ？」
「俺にもやり方教えてくれ！！」
「ねえ、教えてよぉ」
エンドレス。
「……ライガ。俺にこいつらを始末する許可をくれ」
「ダメ」
「……じゃあ、その辺で素振りしていいか。数人斬り殺すかもしれないが」
「それ素振りじゃないでしょ」
「……急に紋章魔法の練習がしたくなったなぁ！！」
「ダメだってば、船も沈むでしょっ」
一連のライガとヒサトのやり取りに、周りに引っ付いていた連中はサーッと退いた。
ここまでやればあきらめるかと思ったが、あきらめない奴もいたのである。
リノ、エレノア、キカとその配下の海賊連中は、全く退かなかった。
「ヒサト、あんた一体何者だい？　考えてみればこの船の誰もあんたのことを詳しく知らない。おかしいだろ？　あんたと関係を持っているのも一人や二人じゃないのに、誰も知らないなんて」
「そうだ、おかしい。ヒサト、お前あの船でやったことも、この間

ライガを助けたときのことも、普通の人間が出来ることじゃないだろう？説明してくれ」

「……クールークの者なら知っているかと思って訊いたが、ヘルムートも愕然としていたぞ。やはりお前のことをひとつも知らない、とな」

この船の中心人物に詰め寄られてもヒサトはうろたえず、半眼でヘッと笑っただけだった。

「なにか？　身上調査かこれは？　俺は事細かに年から家族構成から特技まで羅列しなきゃならんのか。冗談だろ。面倒い」

エレノアは大きく息をつき、ヒサトを正面から見つめる。

「……リノから聞いたよ。あんた腹違いの弟がいるって？　毒盛られたことがあるって話じゃないか。お家騒動か、それとも財産問題か……相当良い家の出だね？　でも、赤月帝国じゃない。あたしは赤月の出身だが、あんたの話は聞いたことがないからね。ハルモニアかい？　それとも、ハイランド？」

ライガはヒサトを見た。以前洩らした一言をリノから聞いただけで、エレノアはヒサトが良家の出だとまで見抜いている。

どうやってごまかすつもりなのだろう？

「……リノ」

「おう」

ヒサトはリノに顔を向けた。

「うっかり洩らした俺も俺だが、てめえも相当だな」

「何がだよ」

「……過去ほっくり返して楽しいか？　俺が思い出したくないことだと……考えてはくれなかったらしいが」

「！！」

ヒサトは痛みを感じさせるような笑みを浮かべて、ライガの肩を抱き、作戦室から出た。

誰も追いかけては来なかった。

「ひ、ヒサト……」

怒っているか傷ついたのかと、ライガはヒサトを見上げる。彼はライガの視線に気がついてウィンクしてきた。
怒っていないし、傷ついてもいない。
「ふっふっふ、ああ言っておけば早々詮索は出来まい」
「……わざと？」
「おう」
五百年生きているだけあって、追及をかわすのはお手の物らしい。
さっきの傷ついたかのような笑みも、芝居だ。
「……ヒサトって……」
「こうなっちゃいかんぞ、ライガ。お前は素直にまっすぐに生きてくように」
にんまり笑う彼に、ライガは苦笑した。
「どうかなぁ、ヒサトとずっといたら、まっすぐには無理かも」
彼の腕を掴んで、少年は言う。
「……ずっと、一緒にいたい、よ？」
「……ああ」
願いのように。

海賊島で、これからのことを話し合おうと上陸すると、ひとりの女性が海賊たちに詰め寄っていた。エレノアを捜しているらしいその人は、荒くれの海賊にもひるまずに食って掛かっている。声をかけるとエレノアに憧れる読書家、ターニャはエレノアの行方を訊いてきて、船にいますとライガが素直に答えると、強引に仲間になった。

次はオベルを奪還する。
海賊島の酒場でエレノアはそう言い切った。群島諸国の力はひとつにまとまり、あとはオベルを奪還すれば準備は整う。
ライガはそこで金印をリノに返した。もうこれは少年に必要ない。

そんなものがなくても、ライガは名実共にライガ軍のリーダーだからだ。
もはや彼とその傍らの剣神を疑うものはいない。
「いよいよ、か」
「そうだな」
「……ところでヒサト」
「ああ？」
エレノアは真顔で言ってのけた。
「あんたまだなんか隠しダネもっているだろう」
「……何の話だ」
「リノから聞いたよ」
「またかい……どこまでも口の軽いおっさんだな、リノっ！！」
「あたしも見たしね」
「……何をだよ？」
「海竜とあんたが戦ったときのことだよ。なんだか光みたいなものが飛んでいただろう？　霧の船でもやらかしたってリノは言っていたし……あれはなんだい？」
ああ、とヒサトは頷いた。
これは話しても良い話だ。転じて言えば、どうでもいい話でもある。
「ありゃこの剣の特殊能力だ」
「剣！？」
ライガも声を上げた。それは少年にも初耳だ。
「あれ？　ライガに話してなかったか？」
「うん。聞いてない」
「ああ……悪い。この剣な、なんか特殊なものらしくてさ」
ぽんと腰の剣を叩いて示す。
「集中するとああやって光を飛ばせる。魔力使うけどな。だから近～中距離までこの剣だけでフォローできる」
海竜を両断したのは思い切りヒサトが魔力を込めたからだ。

人外の魔力を持つ彼が渾身の魔力を込めると、あそこまでの威力が出せるのである。
「遠距離はさすがに無理だけどな。途中で消えちまうから」
「遠距離は無理かい……それは微妙に使えないね」
「実はそうなんだよな……使いようによっては可能かもしれんが、今のところは無理だ」
エレノアとヒサトの会話を聞いて、キカは何気なく突っ込んだ。
「そんなシロモノ、一体どこで手に入れた？」
「……俺にもよく分からん」
ヒサトは真剣にそう返した。
「船に乗ってたときに嵐にあって難破して、気がついたら海底の神殿みたいなとこにいてな、そこにこいつが『いた』んだ。で、手に入れた。以上」
「……それは……マジ話か？」
リノは冗談と思ったらしい。
「マジ話だ。俺だって目を疑ったぞ。自分の頭の上に海があったんだから。どうやって出ようかと考えて、こいつを手にしたらいつの間にかどこかの砂浜にいたし」
「……マジ話かい？」
「だから、マジだって」
エレノアにまで言われて苦笑するヒサトだ。
「……すごいね、ヒサト」
ライガは素直に感心している。
「それ、海の神様の剣なんじゃないの？」
「……そうすると、俺は黙って使っている泥棒になるのではなかろうかと、今思った」
首をかしげている。
「でもなー、誰もいなかったし、気配もしなかったし……こいつ手に取った瞬間『海王（カイオウ）』って名乗ったし……他に主はいなかったんじゃないかなー」

「ぅおおい！！」
リノが声を上げた。
「名乗ったってなんだ！？」
「いや、頭の中にこう……ばばっと声がして」
ヒサトは真剣に事実を語っている。
「……ヤバい剣なんじゃないのか、おい」
「……今までなんともないぞ？　むしろ……なんつーか、使いやすいと思ってる」
手になじむ両の剣。それはもはや己の身体の一部のようで。
「つか、剣は剣だろ。使う人間に左右されるだけで。要はどう使うかだ」
剣神が使うに値する剣。だからこそ剣は彼を呼んだのだと、ヒサトはまだ知らない。
己の主を選ぶ剣――それが『海王』だと。
「すごいねぇ」
ライガは素直だ。
「……ふむ。ヒサト、見せてもらってもいいか？」
海の底で手に入れたと聞いて、海に生きるキカは興味を抱いたらしい。触れてみたくなったようだが、ヒサトはそっけない。
「俺が、自分の武器を人に触らせると思うか？」
「ダメか。ではライガ、お前が持ってみてくれないか」
「え、僕ですか？」
「ライガにならいいだろう？」
キカは少し笑ってヒサトを見る。
恋人には甘いことを、これまでの時間でよく知っている。
「……持ちたいか？　ライガ」
「う、うーん……持てるかなぁ」
興味がないわけではないが、話を聞くとなんだか恐い気がしてきた。
ヒサトは苦笑して、剣帯を外した。鞘に入れたまま、ライガに手

渡そうとする。
　受け取った瞬間、ライガは思わぬ重さに剣神愛用の両の剣を持ったまま手を落とした。
「？　どーしたライガ？」
　ヒサトはきょとんとしている。ライガは目を見開いたまま、恋人を見上げた。
「ヒサト……これ、すごく重たいよ？」
「へ？」
「持てない……」
　ライガの両手は剣に敷かれてびくともしない。少年は力を振り絞って持ち上げようとしているのだが、果たせないでもがいている。
　座っているベンチに縫いとめられているかのようだ。
　ライガとて双剣使いで、船のメンバーの中では今はもうヒサトの次に強く、それなりに力があるにも関わらず。
「……本気か？」
　ヒサトは心底から不思議そうにライガを見ている。
「うん。ヒサトどうやっていつもこれ振ってるの？？？」
　とても軽々と剣を振るヒサトを見ているライガには、信じられない重さだ。
「軽いぞ？」
　ヒサトは一言いって、剣を持ち上げた。彼が手に取ると嘘のように剣はライガの手から離れる。
「……ほんとに？」
　ライガも不思議そうだ。
「ヒサトが怪力なだけじゃなくて？？」
「……いや、ライガよりは力あるけどよ。これ、軽い剣だぞ、すごく」
　そのままお手玉できそうなくらいに、と彼は言う。
「うそ？？　すごく重かったよ？？？」
「ヒサト、ちょっと試させてくれ」

いよいよ興味を覚えたらしいキカが席を立ち、回り込んでくる。
「……少しだぞ」
剣神は自分の武器を触らせるのが本気で嫌そうだ。キカにしぶしぶといった様子で危なくないようにテーブルの上で剣を渡し――結果。

ジンッ！！

「痛うっ！」
キカの手は剣に触れることなく弾かれた。
そのまま剣はテーブルの上に落ちる。
「……」
これには一同目が点になった。持ち主のヒサトもである。
リノが声をかける。
「……おい、ヒサト」
「……おう」
「……俺も触ってみていいか」
「やってみてくれ」
ヒサトは頷く。今見たものが彼にもよく分からない。
リノが触ろうと手を伸ばし――結果。

ジンッ！！

「痛ぇっ！！」
やはり弾かれる。
瞬間で痺れるような痛みが走った。キカもリノも手をさすっている。かなり痛かったらしい。
ヒサトは半眼になった。
手を伸ばして触れてみる。彼には何の反応も返さない剣、『海王』。

「……お前……めちゃめちゃ自己主張強い剣だったんだな……知らなかったよ」
「いや、しみじみ言ってる場合かい。とんでもない剣じゃないか……」
エレノアはあきれたように言う。さすが剣神の使う剣だけあって、とんでもないシロモノのようだ。
ヒサトは剣を自分の腰に戻した。とりあえず、こうしておくのが一番安全な気がする。
「なんつーもんを拾うんだお前は……」
リノが苦笑している。『海王』に触れようとした手は赤くなっていた。
「だが、ライガには何もしないあたり持ち主の意向を汲んでいるのだろうな……」
キカも苦笑している。
ライガはハッとした。そういえば、持てはしなかったけれど自分だけ弾かれていない。
「あー……はっはっは、そうだな、ライガに同じことしてたら捨ててたかもしれんなぁ。叩き折って」
ヒサトはケロリと笑っている。
不可思議な剣でも、大して気にせず使うつもりらしい。
「あんたねぇ……恐くないのかい？　そんな怪しい剣、まだ使う気か」
「そうは言うがな、エレノア。こいつ、俺が使うのが多分一番安全だぞ。そんな気がする」
この左手に宿る紋章のように。言葉に含まれたものを、ライガだけが理解していた。
彼だけが宿せる紋章と、彼だけが扱える剣。
それが多分一番ほかの人にとっては安全なことなのだ、と。
……ライガが宿す『罰の紋章』のように。

剣の話が一段落したところで、エレノアはライガに言った。
「ライガ、ひょっとしたらの話だが……覚悟はしておいておくれ」
少年の左手に、軍師の視線は向いている。
この戦いで、もしかしたら。
紋章の力が必要になるかもしれない……。
「おい」
苦いヒサトの声に、ライガは微笑む。
ああ、この人も同じだから。
少しだけホッとした。ヒサトも真の紋章の持ち主だ。だから、自分が死んでも彼にこの紋章が宿ることはないだろう。
彼を愛する『天空の紋章』がそれを許すわけがないから。
だから、安心して使える。
自分が死ぬ瞬間まで、ヒサトのそばにいられる……。
ヒサトの紋章の力を使うことは考えていなかった。彼の紋章は使って失敗すればその場で死ぬものだ。
たとえ、紋章が彼を愛していても、その可能性がわずかでもあるのならば使って欲しくない。
少しづつ命を削られていくライガのものとは違う。
彼に、死んで欲しくないから。
「分かりました」
だから、ライガはためらいなく頷く。
この命ひとつで護れるものが確かにあって、終わるその瞬間に愛しい人が触れていてくれるのなら。
ずっと一緒にいられる未来を夢見ないわけではないけれど、それでも。
あなたがいてくれるならば、僕は。
ただそれだけで。
充分、幸せなのです……。

永遠の空・３９（後書き）

バンダナだけでなく、剣にも設定が。勝手な紋章もあるしね……創作ですから（笑）

永遠の空・４０

エレノアの策が冴え渡る。
リノがオベルの民への呼びかけと、クールークへの宣誓をしている間に、ミズキを上陸させ、内側のフレアたちと連絡を取った。これでクールークの後手を封じる。
そして、海戦。
別働隊を編成し、二手から責める。
クールーク船は四隻。
ヒサトは別働隊、キカのグリシェンデ号に乗り込み、かく乱、殲滅を担う。
「……沈めていいんだな？」
「かまわない。ただ、指揮官は捕らえたいんでね、できればほかの船を頼むよ」
「ほかの船と言うか……多分ほかの船じゃないと無理だな」
「何故だい？」
「第２艦隊の指揮官のおっさん、前に漂流していたときに会った。俺の力を知っている」
第２艦隊を指揮しているのはコルトン。以前トロイと共に会ったあの男だ。
散々馬鹿にするようにあしらったから、ヒサトの力はよく理解したはず。
だから、ヒサトがいる船には近寄らないだろう、と。
「つーわけで、俺の役目は指揮官以外の二隻を沈めることでいいんだな？」
「ああ」
「了解」
さらりと言ってのけたヒサトに、
「人間外だよね……」

「人間??　人間かあの人??」
「デタラメだぁ」
などと騒ぐ輩が、数名。ひとつ視線をやって黙らせておいて、ヒサトはライガを見た。
恋人は決意を瞳に宿している。
そこにある、誰よりも強い意思。
剣神が、何より愛してやまない瞳。
「……行ってくる」
「……行ってらっしゃい」
淡く微笑むライガに、触れるだけのキスをして、ヒサトは作戦室を出た。
自分の左手に宿る紋章が、少し疼く。
昨夜も『罰の紋章』に触れて力を押さえ込んだせいだろう。
並みの紋章ならそれがどれほど上位紋章であっても、ヒサトに押さえ込むことはたやすいが、相手も真の紋章だけあって、やはり簡単には押さえ込めない。
命を削る特性だけでも無力化することが出来れば、ライガも死なずに済むのに。
ぐ、とこぶしを握り締める。
死なせない。
映るのは、決意の瞳。
すでに自身の死すらも考慮に入れた、愛しい人。
ダメだ。
剣神は思う。
五百年生きて、ようやく見つけたただ一人の人。
――死なせるものか!!!
「別働隊か!!??」
コルトンが叫んでいる。かまわずヒサトは艦に飛び移った

グリシェンデ号が離れてほかの艦への攻撃に移る。
ヒサトに援護は必要ない。むしろ味方の船が近くにいるほうが返って邪魔だ。
「馬鹿め！！　たった一人で何ができる！！！」
襲い掛かってくる兵に、笑みを浮かべて剣神は愛剣を抜き放つ。
さぁ、敗北を、死を、絶望を、そして、恐怖を。
血塗られた道は、彼のすぐ後ろから続いているのだから。
踏み込む。
払う。
人体に食い込む感触もない。鋭すぎる刃と早すぎる剣閃は、人体がやわらかく硬いものだと感じさせる瞬間すらない。
甲板を足裏で擦るように移動して、次の獲物へ。

ギガンッ！！

硬いはずの鎧が断ち割れる。
思い鎧など身に纏(まと)っているから、遅いのだ。
必要なのは己の身と、屠るための武器。
そうしてずっと、生きてきたのに。

どどど、どさ。

兵士たちが倒れて、立っているのはヒサトだけ。
彼は剣、彼は刃、彼は屠(ほふ)るもの。
彼は武神、彼は天空の覇者、彼は、剣神。
けれど今は。
ヒサトは右手を突き出す。目標は、次の艦。
炎の紋章が浮かび上がり、炸裂する。

ッゴォンッ！！！

爆裂した炎が、瞬間でもう一隻を沈めた。
火を噴出した艦が海中に沈んでいく。海はまた、たくさんの命を飲み込んだ。
生きている人間は彼だけになった艦の上、ヒサトは本拠地船に目を向ける。
そこにいる、恋人。
彼のために。
ただひとりの人のために。
そのために、今は――何者からも護る盾でありたいと、剣の神は願うように思った。

それから少しして、ほかの艦も沈んだ。
エレノアの采配どおり、コルトンは捕らえられ、本拠地船に拘束される。
コルトンは増援部隊を用意していた。以前本拠地船が隠されていたドック、そこに船を潜ませていたのだ。
エレノアはそれも読んでおり、開戦前に連絡を取っていたフレアたちに増援部隊の艦を押さえさせていた。
現れた艦の上に、フレアが立っていて、こちらに手を振ったとき、コルトンは完敗したことを悟った。
「万策、尽きたか……」
うなだれるコルトンは、ライガの横に立っているヒサトに視線を向ける。
あのとき、この青年を捕らえることが出来ていたなら。
たったひとりで艦を二隻も沈めた男。
恐ろしい。
「……人間か、貴様」
呻くように言うコルトンに、ヒサトは肩をすくめた。
「よく言われる」

「何故、クールークを出た」
トロイ。剣神のお手つきといわれていた青年。
クールークには彼がいて、なのにこの男は群島諸国側についている。
「別に」
そっけなくヒサトは言う。
理由。
それは彼の左手に宿る。
知っているライガはそっとヒサトに寄り添った。
そのときだ。
「敵艦増援、接近してきます！！」
見張り台からニコが声を上げた。
「くそっ！　次から次に……しかし、ずいぶんと船を持ってやがるな……大丈夫か？」
リノはエレノアに視線を向ける。
「予想の範疇だ。問題ない」
軍師は落ち着いている。
「……正式な艦隊じゃないな。私掠用のヤツか？」
ヒサトは目を細めている。正式な援軍ではない。
「あれは……総督の」
コルトンの呟き。
彼にとってもこの艦隊の存在は意外だったらしく、いぶかしげに見ている。
なんにせよ、敵であることは違いない。
「迎撃する！！！」
ライガの指示で、再び海戦が始まった。

ヒサトはすぐに眉を寄せた。
違和感。
そして胸騒ぎ。

むこうの船からの砲撃はなく。
ただまっすぐにこちらに向かってくる。
ちりちりと首筋にくる、この予感は。
「……自爆艦……！！」
呻くように呟き、ライガとエレノアを見る。
「船を離せ、逃げるんだ！！」
「は？　何を言い出すんだヒサト？」
気がついていないリノと、気がついたエレノアの反応は真逆だった。軍師は目を見開く。
「まさか……！？」
「特攻目的の自爆艦だ、あれはっ！！！」
ヒサトの叫びに、ライガは向かってくる艦隊に目を向ける。
逃げるには遅すぎた。近すぎる。
こちらが反転する前に向こうの艦隊は突っ込んでくる。潮の流れも向こうの艦隊に味方しているのだ。
「くそっ！！」
ヒサトは右手を突き出そうとしたが、距離にためらった。
火薬を積んでいるのは間違いないだろう。それが三隻。どれほどの量かは分からないが、そこを烈火の魔法で追撃するのは自殺行為だ。
旋風か流水の紋章にしておけばよかったと、今悔やんでも遅い。
「ライガ」
エレノアが軍主に声をかける。
「これしかない。頼むよ」
紋章を、使ってくれと。
「！！」
「ち、ちょっと待てよ！！」
ラズリル組が声を上げた。制してエレノアは言う。
「悪いがこれしか方法がない。それとも、今からほかの軍師を雇いにいくかい？」

そんな時間はなく、回避策もなく、だから。
「で、でも……！！」
これ以上紋章を使えば、ライガは。
ヒサトは自分の左手を見下ろした。そこに宿る、力。
使うか？　これもまた真の紋章。『罰の紋章』に勝るとも劣らない力を秘めたもの。
爆死することはない。仲間たちには知られるだろうが、それは恋人を失うことに比べたら些細なことだ。
その手を、ライガがつかんで止めた。
無言で首を振る。
使わないで、と。
エレノアが声を張り上げた。
「紋章が恐いものは今すぐこの船から降りな！！」
ライガが死んだ後、誰に宿るか分からない、命を削る呪われた紋章。
ヒサトはライガを見つめた。
恋人。愛しい人。失いたくない人。
共に。
――そばに。
ヒサトは足を踏み出す。
「！？　ヒサト！！？？」
誰もが目を見張る。
まさか彼はこの船を降りるつもりなのか！！？？　ライガの恋人で、何よりも誰よりも支えであり続けた男なのに、ライガを見捨てるのか！？
ヒサトは足を止めない。
迷いない足取り。
向かった先は、船首。
そこで剣神は振り返る。
彼の視線の先には、恋人であり、軍主。

無言。
ヒサトは手を差し伸べるように向ける。
『来い』ライガだけがそれを理解する。
軍主の少年もまた無言で駆け出して、彼のそばに立つ。
剣神は少年の肩を抱いた。
少年は左手を掲げる。
『離れないから』
『そばにいるから』
『だから』
向かってくる、自爆艦隊。
愛しい人の存在を、その背に感じながら、少年は。
「……我が真なる罰の紋章よ……！！」
己の命を……使う。

キィヤアアァアアアアアーーーッ！！！
赤い光が、海を裂く。
命を喰らい、殺し尽くすような、紅。
死をもたらす……赤。

ヒサトに支えられてライガは反動を耐え切った。
視線を向ける。
敵艦は、ひとつも残っていなかった。
すぅっと意識が遠ざかる。
……ああ、護れた。
肩に置かれたヒサトの手を感じながら、ライガは満足感を抱いて
意識を失った。

永遠の空・４０（後書き）

削られていく、命。大切な人のために、使う。

永遠の空・４１

「ライガ！！」
背中から声が上がるが、ヒサトはかまわず恋人を抱き上げる。
まだ、命はある。喰われつくしてはいない。
まだ、大丈夫。
でも。
険しい表情でヒサトは甲板を船内へと戻る。
エレノアと擦れ違った。
「……無事だよ」
彼女に小さく呟いて、あとは振り返らない。
苦渋の決断だったことくらいは分かる。彼女とてライガを死なせたいわけではあるまい。
だが、笑いかけてやる気にもなれない。
仲間たちの視線が不安げに追いかけてくる。
あと一度か、それとも。
左手が。『天空の紋章』が疼きで伝えてくる。
ない。ない。時間はもう、ない。
同じ真の紋章が伝えてくるのだから、間違いないだろう。
彼は問う。

いつまで。
保(も)つ……？

彼を愛する紋章は答える。

あと少し。もう少しだけ。
それだけ。

残された時間は、もうわずか。

留まるように、影がある。
「……さぁ……くるがいい……
お前の力で……俺を、倒してみせろ……」
それはよく知った声だった。
かつてライガを導いてくれた人の声。
愛する人の大切な親友。
あなたまで。
捕らわれているのか。
ライガは剣を振り上げる。
開放を。
愛しい人の大切な親友のあなたを。
この呪われたところから。
あなたを尊敬していました。とても尊敬していました。
だから、もう、苦しまないでいいように……。
「ライガ……強くなった……
あいつを……頼む……」
穏やかな声を残して——影は消えていった。

目を開ける。
ヒサトがいた。
なんともいえぬ瞳で、ライガを見ている。
ライガは起き上がり、愛しい人を抱きしめた。
彼も気がついている。自分も分かっている。
きっと、次は、ない。
ヒサトの腕が抱きしめてくれるのを感じて、ライガは目を閉じる。
愛しい人。

「……そばにいる」
ヒサトはかすれた声で言ってくれた。
それで、充分だった。

オベルは奪回された。

取り返したオベルに、ライガたちは足を踏み入れた。
待っていたのは、フレアとセツ。
王の帰還を待っていた人たちが、彼らを迎え入れてくれる。
そこには新たな仲間たちもいた。
ニコの妹分と言うウェンデル、鑑定所の店主ナボコフ、ところどころでよく会ったギャンブラーのギュンターがここでようやく仲間に入り、占領下のオベルをまとめてくれていた夫婦ゲイリーとエマも加わった。何故か王宮の玉座の後ろに隠れていた猫耳少女ノアを確保し、医者のユウの助手をしていたキャリー、自分を病弱と勘違いしているトリスタン、それから、食い逃げ犯セドリックの借金を取り立てに彼を捜していた借金取り、レイチェルに５０００ポッチ払ってセドリックを開放してもらい、なんでかセドリックを気に入った彼女も仲間入り。
それからライガは『罰の紋章』が眠っていた場所、オベル遺跡の奥にヒサトと二人で訪れたが、そこには先客がおり、見たヒサトは沈黙。
「ヒサト……」
剣神の名を、意味深な声音で呼ぶのは、結構な、美青年。
ライガはにこやかに恋人を見上げた。
「またですか、ヒサトさん」
「……スイマセン」
何番目かの、お手つき。いや、ヒサトが生きてきた年月を考えると、何百人、下手をすると千人単位のお手つきさんかもしれない。

はぁ、と息を吐いてそれでもライガはその青年に声をかけた。
仲間になってはくれませんか？　と。
青年はヒサトから目を逸らして、呟くように言った。
「……すり抜けの札を使ってくれたら……なってもいい」
「？　すり抜けの札、ですか？　いいですよ」
「！？　待てっ、ライガ――」
ヒサトの静止は一瞬遅かった。
すり抜けの札。効果は、ダンジョンからの、脱出。
「あ」
ライガとヒサトはオベル遺跡の入り口に立っていた。
「……そうだよね。こうなるよね」
ライガはきょとんとしている。
「あのひと、なんですり抜けの札使ってって言ったんだろ？」
「……あのヤロウ。確信犯だ」
「え？」
「人間嫌いなんだよ……ものすごく」
遺跡内をもう一度進みながら、ヒサトは面倒くさいと言いたげだ。
「すごく人間嫌いなの？」
「そりゃあもう、ものすごく」
「……どうやって口説き落としたの、そんな人」
ライガは心底から不思議そうにヒサトの顔を覗き込む。
「……覚えてないって言ったら、怒るか？」
ヒサトも真剣に返す。実際どうやって口説いたか覚えていなかった。
一晩付き合って、その次の朝には別れた相手だったので。
実はそれで青年の人間嫌いが悪化したことを、ヒサトは知らない。
「ヒサトって……最低？」
「……反論のしようがございません……」
やつあたりで遺跡奥にいたキラーゴーレムをバラバラにして、ライガたちは人間嫌いの青年、トラヴィスを仲間に入れた。

それから。
モルド島で、丸太に乗っていた人間の話を聞いた。
「……漂流？」
「見つけて助けてあげないと」
ライガはそう言うが、ヒサトはなにやら嫌な予感を感じていた。
命に関わるくらいの重大なことではないが、何か嫌な予感。
「……ライガ、放っておかないか？」
「何言ってるの？　僕らだって漂流しているところを助けてもらったんだから、漂流する辛さは分かっているでしょ」
「うーん……なーんか素直に頷けないのは何故だろう……？？」
首をひねるヒサト。自分の直感は確かにイヤーなものを感じ取っているのだが、それを放っておくのもダメなような気がする。
こういうときの勘は良く当たる。
経験からしてヒサトはよく知っていたので、ライガの言葉に頷いた。
嫌な思いをしても、しなくてはならないことのような気がするのだ。

武神であり天空の覇者であり剣神と呼ばれる青年の、その直感は、正しい。

波間に漂う丸太を発見したのは、やはり視力のいいニコだった。
「ひ、人です！！　人が丸太に……！！！」
報告に、ライガはすぐさまそちらの方向に船を向けた。
近付く。確かに丸太の上にぐったりと人が倒れていた。
「ん……？」
ヒサトは瞳を細め、確認するなりライガの肩を掴んだ。
「ライガ」
「ダメ」

「見なかったことに」
「ダーメ」
「……安らかに眠」
「紋章魔法使わないのっ！！！」
「全速で前進っ！！　轢き殺」
「早く回収。彼は僕が抑えている」
ライガはヒサトを押さえ込みながら指示する。真剣な指示に、船員たちはすぐさま従った。
ヒサトが本気なのは分かっている。
丸太の上でぐったりしているのは、某フィンガーフートの馬鹿息子だったからだ。

引き上げられたスノウは、ライガを見つめ、ヒサトを見、うなだれた。
見る影もないぼろぼろの服。ライガに救われなければ、あのまま海の藻屑と化していただろう。
騎士団に入り、そのあと騎士団長になり、クールークに国を売った代償に海賊の討伐隊隊長になり……海賊になり、そして、全てを失って。
スノウはようやく自分の弱さを認めた。
「わかってる、分かってたんだ……」
でも、認めたくなくて。
全てを持っていると思っていた。だから何をしても皆ついてくると思っていた。
愚かで、そして哀れな青年は、全てをなくしてからようやく気がついた。
ライガの周りに人が集まる理由。ヒサトがライガを愛した理由。
「……スノウ。仲間に、なってくれる？」
ライガはまっすぐにかつての友人を見る。
その瞳。人を信じ、許し、受け入れる強さ。

スノウの中から、ライガに対して持っていた全てのわだかまりが解けた。
だから、ヒサトはライガを愛したのだ。
「こんな僕で……いいのかい？」
「スノウだから、言ってるんだよ」
ライガは微笑む。
スノウは泣き出しそうに顔をゆがめ、やっとのことで頷いた。
「よろしく……ライガ。いままで、ごめん……」
「歓迎するよ、スノウ……」
優しく微笑むライガに、この上もないほどの許しを得た気がして、スノウは泣いた。

「ヒサト」
「……あ？」
スノウの声に、剣神はとても不機嫌そうに答え、ライガにどつかれた。
「痛いぞ、ライガ」
「当たり前でしょう？　どうしてそんなに機嫌悪いの」
「……お前がスノウをかまうから」
むっつりと言い切るヒサトは、どうやら嫉妬している模様。
ライガは頬を赤くして、ヒサトの腕を取った。
「あのね、スノウ。ヒサトは僕のだから。それだけは言っておくから」
「う、うん。いや、あの、ヒサトにも謝っておこうかと思っただけで……ごめんなさい」
「そう。だって、ヒサト」
「へいへい」
あからさまに聞き流している恋人に、ライガは仕方ないなぁと言いたげに苦笑している。
「ちゃんと聞いてるの？」

「ライガがキスしてくれたら聞いてもいいかなー」
ヒサトは言ってにんまりと笑う。ライガは耳まで赤くなった。
「ヒサトっ」
彼らのやり取りを聞きたスノウは目を丸くしている。
その肩を、タルがぽんと叩いた。
「すげぇだろ、あのバカップルぶり」
「びっくりだよねー」
ジュエルも寄ってくる。
「ヒサトって……あんな人だったっけ……？」
呆然と問うスノウに、ケネスが苦笑した。
「なんか、ライガに会ってからしいぞ、ああなったのは」
「ヒサトさんのお手つきの皆さん全員が目を丸くしていましたから、間違いないと思います」
ポーラが補足する。
「そ、そう……はは、驚いたよ」
ようやく、スノウの顔にも笑顔が広がる。
だって彼らは幸せそうだから。
見ているこちらも嬉しくなるくらいに、幸せそうだから。

それが覚悟の上でのものだと、スノウはその後すぐにラズリル組から耳にする。
呪われた紋章の話を。
ライガの命は、もはや残り少ないだろうことも。
「そ、んな……」
「そんな……！！！」
ライガはそれを覚悟の上で戦い、ヒサトもそれを覚悟して共にいるのだと。
ずっと、紋章と戦いながら。命を削りながら。
なのにライガは自分を許した。ヒサトも自分を許した。
死を目前にして、どうして。

ライガはあれほど優しく笑えるのだろう？　ヒサトはあれほど幸せそうに微笑むのだろう？

護りたい。スノウは心から思った。

自分の力など微々たるものだろう。

それでも。

あの二人が笑える時間が、少しでも長く続くように。

それは、仲間たち全員の、願いでもある。

永遠の空・４１（後書き）

仲間が全て揃い、１０８の星が集いました。

永遠の空・42

彼は左手に目を落とす。
宿るもの。
「……あいつが、死ねば……」
呟きは続かなかったけれど。
俺もこれと共に死のう。
言葉が、口から出ることはなかったけれど。
今まで生きた五百年が全ての意味を失うくらいに、あの少年を愛したから。
少年がいなくなることが恐い。命を失うよりもずっと恐い。
彼を失った世界に色はないだろうから。
「なぁ、付き合ってくれるか？　それとも、他を選ぶか……？」
青白い翼が浮かぶ。
その光が彼の手から離れることはなかった。

彼は左手に目を落とす。
宿るもの。
「……あと少しだけ……」
呟きは続かなかったけれど。
あの人と一緒にいたいのです。
言葉が、口から出ることはなかったけれど。
生まれて生きて今までであれほど幸せな時間はなかったから。
あの人のために生きたい。あの人のために……死にたい。
彼が生きる世界こそ自分の全てだから。
「もう少しだけ、力を……ください」
赤く渦を巻く姿。
それから声を拾うことは、少年にはまだ出来なかった。

ライガが甲板に出たとき、一羽の鳥が落ちてきた。
それはラマダがいつも連れていた鳥で、よろよろと甲板に落ちたその鳥は、筒を持っていた。
アカギとミズキのまえで力尽きるように落ちてきた鳥。
もう一度戻りたい、羽ばたきたいというように空を見上げて、一声高く鳴き――鳥は甲板に倒れて動かなくなった。
「……ラマダさん……？」
彼の身に何かあったのかと、アカギは呆然と呟いた。
恐くて、筒を手に取れない彼らの様子に、見かねたヒサトは近付き、鳥が持ってきた筒を手に取る。
中身は数枚の紙だった。ライガも彼の横から覗き込む。
広げたそれを見て、軍主と剣神は目を見開いた。
地図だ。
それもエルイール要塞の。
「ラマダ、さん……」
ライガが呟く。これを探るためにラマダはしばらく姿を消したのだろう。
そして、戻ってきたのは鳥だけだった。
「……何やってんだあいつ……エルイールの中なら俺が知ってるのに」
ヒサトが言うと、アカギが目を丸くした。
「なんでっ！！？？」
「何でって……俺七年前の攻防戦に参加してたから。あそこにいたんだよ。中のことなんてバッチリ知ってるっての」
ラマダ、犬死にか。
「ラマダさん……」
違う意味でライガが呟く。あまりにも悲しすぎて言葉がない。
そういえばそうである。ヒサトは何度も自分がクールーク側にい

たことを言っていたではないか。
「早く言えよっ！！！」
アカギは激昂（げっこう）。しなくていいことをしてラマダが犠牲になったのなら、悲しすぎる。
「……七年前だよ。中だって変わってるさ。新型の紋章砲が設置されている場所だって、あんたは知らないだろ？」
調査を依頼していたであろうエレノアが地図を覗き込む。
「いや……変わってねぇ。つかあそこ要塞だぞ。模様替えなんて早々しないし出来ないだろ。紋章砲だって、あんなでかいもん群島諸国を狙って設置できるところなぞ限られるし」
ヒサトは地図を目で追い、ああやっぱりと頷いた。
覚えているエルイールの中で、紋章砲を各島を狙える位置に設置するなら多分あそこだろうなと予想していた場所に、紋章砲は設置されているようだった。
予想通りすぎて、なおさらラマダが哀れだ。
「うわー……ラマダ……安らかに眠れよー」
「ヒサト……お前も早く言えよ……」
リノも目頭（めがしら）を押さえている。悲しみと言うよりどちらかと言うと、頭痛をこらえているような感じだったが。
「無茶言うな。ラマダが斥候（せっこう）に出てたことも俺に黙っていただろうが。知らんことの責任まで持てん」
それは確かにそうなので、エレノアとリノは黙り込んだ。ヒサトとライガに黙ってラマダを斥候に使っていたのは事実だ。
「うわぁぁあああっ、ラマダさぁぁぁあんっ！！！」
アカギが吼えている。
「……あー、作戦室行って、作戦練るよ」
エレノアがごまかすように言った。
「……生きててくれるといいなぁ……ラマダさん……」
ライガは空を見上げて呟いた。

ラマダが入手したのは地図だけではなかった。
あの恐ろしい威力を誇る紋章砲、それの弱点も入手していたので、とりあえず無駄死にではないようだ。
「これを見ると、あれは一度撃ったら、次の一発までに時間がかかる。ざっと……二時間」
エルイールを攻略するのは、あの紋章砲をなんとかすることが第一の難問だ。
一度撃ったら、二時間。
その間が、こちらにとっての絶好のチャンス。
まずは紋章砲を黙らせることが先決だ。
そして……トロイ率いる第1艦隊を、叩く。
「ヒサト」
エレノアは剣の神を見る。
「あんた第1艦隊に知り合いはいるのかい」
「……いる」
全員の視線が彼に集まった。ライガとラズリル組、そしてヘルムートも知っている。
「誰だい」
「……トロイだ」
ざわめきが広がった。『海神の申し子』にまで手を出しているのかこの男は。ここまで来るといっそアッパレである。
「説得できる可能性は？」
「ない」
ヒサトは言い切った。
「え、で、でも」
ジュエルが戸惑う。どう見てもトロイはヒサトに未練があったように見えた。ヘルムートのように説得できるのではないだろうか？
「……トロイ殿は私のように甘くない」
ヘルムートは苦く呟く。
「あの方は生粋（きっすい）の軍人だ。ヒサトの説得にも応じることはないだろ

う」
それは確実だ。ヒサトもそう感じているからこそ、説得できないと断言した。
「……説得じゃなくて身体に向かって実力行使なら言うことききかせる自信はなくもないが……俺、ライガに振られたくないからなぁ……」
ヒサトは本気で言っている。
「……一応訊くけど……身体に向かって実力行使って、どうやるの？」
ライガは少し赤くなって問い返す。
「いつもライガにしているようなアレコレを。具体的に言えば腰抱いて引き寄せてキスから始まって――」
「却下！！！」
「はい」
首まで赤くなってライガは遮り、ヒサトはおとなしく頷いた。
する気など毛頭ないので、言ってみただけだ。
「つか、なんでそんなに自信たっぷりなんだ。気持ち悪いとかってトロイにぶった斬られる可能性のほうが高いとか思わねえのか？」
リノが突っ込む。いくらタラシと言えども過去の話だ。トロイも忘れてしまっているのではないかと、タラシ、コマシの技量を知らない王はいぶかしげ。
「……ありえんな」
キカの呟きが、耳に入った。
「……ありえねえ」
ハーヴェイも呟いている。
「忘れられるわけが……」
ぼそぼそと、ヘルムート。
そんでもって、他にもヒサトのお手つき全員が、頬を赤らめてうつむいている。
ライガも真っ赤だ。ヒサトとのアレやコレを思い出してしまった。

リノは真顔でヒサトに振り返る。
「……ヒサト」
「おう」
「……お前変な薬でも使ってるのか？」
「なわけあるか。純粋に、技術だ」
それで五百年前に刺客として現れた幼馴染をタラしたくらいだ。
筋金入りなのである。
「抱き込んでキス一発かませばなぁ……トロイを腰砕けにする自信はあるが」
「ダメっ！！！」
ライガは大反対だ。そんなことをしたらトロイだってヒサトに抱きついて離れなくなると簡単に予想できる。昔のお手つきさんと濃厚なキスをするヒサトなど見たくない。
それなら正々堂々と正面から海戦を仕掛けたほうがずっとマシだ。たとえ相手が『海神の申し子』トロイでも、ヒサトを取られるよりは戦ったほうがずっといい。
「軍主殿の猛反対にあったので、俺による説得とトロイ捕獲は却下なー。俺もやりたくないから。ライガに振られたくねえ」
「こちらの損傷を抑えられていい手だと思うんだけどねぇ……」
まだ説得大作戦に未練があるエレノアに、ヒサトは笑いかける――にんまりと、意地悪く。
「エレノア、リノとキス三分できるか？　それやったら俺も考えてやる」
「却下しよう」
「却下だ」
キッパリと言い切る二人は、見るも露（あらわ）な鳥肌を立てていた。
「おぞましいこと言うんじゃないよっ！！！」
「そうだ！！　鳥肌立ったじゃねえかっ！！！」
「人に無理矢理させようとしておいてそれかい。根性ねえな」
ちっと舌打ちしながらも、二人の反応に満足したのかヒサトは引

き下がってライガの肩を抱く。
咳払いしてエレノアは話に戻った。
まずは紋章砲を叩く、先遣別働隊を編成する、と。
誰を入れるか決めてくれと彼女はライガに言った。
紋章砲を叩くために、先にエルイールへ乗り込む部隊を。
軍主は真剣に考え込み、能力を考え、リノ、ジーン、フレデリカ、ハーヴェイを選択した。
「……ヒサト、あんたはどうする？」
エレノアとしては、先遣別働隊に内部に詳しいヒサトが入ってくれたほうが心強い。
「……いや、俺はライガと共に突入するよ」
彼は首を振り、断った。
トロイとの海戦が終われば、どのみちエルイールへ突入することになるのだ。
それに、トロイは間違いなく手強い。いままでで最強の敵であることにも違いない。
「あいつは……舐めてはかかれんからな」
すぅっとヒサトの瞳に宿る光は、冷たく強い。
ゾッとしながらエレノアは思う。
この男が敵でなくて良かった。今もこの男がクルーク側についていたら、こちらの勝ちなど無きに等しかったはずだ。誰よりも強く、その上エレノア並みに賢く、頭も回る男。
『海神の申し子』と『剣神』を同時に敵に回して勝てる気などしない。
心から思う。
ヒサトが、味方でいて助かった。
息を吐いて、エレノアは怯えを隠すようにしてから言う。
「別働隊にはあたしも加わるよ。要塞の図面と紋章砲の構造は頭に入っているからね」
自分も行って、別働隊のサポートをしよう、と。

「何言ってんだ!?　軍師がそんな危険なことする必要があるのか!?」

リノが目を丸くして、ライガも首を振った。

「危険です、エレノアさん」

「……やれやれ、みんな心配性だね。分かったよ」

肩をすくめるエレノアだが、ヒサトだけは彼女があきらめていないことを知っている。

……クレイ商会の頭、グレアム・クレイ……ヤツは、確かに。

『罰の紋章』。

それと絡む過去の因縁。

赤月帝国の貴族。

赤月の軍師だったエレノアと。

その弟子だったのは。

そしてあの事件が起こった理由も。

エレノアをそれでつついてここまで引きずってきたのはヒサトだ。

彼にも責任があることなのだ。

止めるべきか？

否。

それで彼女が息を吹き返すのならば。

過去の因縁から開放されるのならば。

行かせるべきだと――思った。

だが。

「……なせねぇよ」

呟きを、彼に抱かれていたライガだけが聞きとめた。

「ヒサト？」

「……馬鹿女め」

呟いて、ヒサトはライガに顔を向け、囁く。

「ライガ、後で話がある」

「う、うん」

作戦は決まった。
まずはおとりの船を使って紋章砲を発射させる。二発目が来る前に別働隊が紋章砲を叩き、海戦で第1艦隊を叩き――それからエルイール要塞を完全に叩く。
エルイールを押さえてしまえば、クールークからの侵攻もしばらく抑えることができる。
そこまでやってこそ、初めて群島諸国に平和が戻ってくるのだ。
負けられない、最後の戦いが始まる。

見つめあう、海の色。
青年の瞳は遠く深い海、少年の瞳は淡く浅い海。
それはどちらも同じ海の色。
違う海の色。
蒼と青。
似て非なる色。
自分とは違う人。
――愛しいあなた。
どちらの瞳にも宿るのは決意。
「……死なないで」
「……死ぬなよ」
生き抜くことを、考えて。
話を終えて、ライガはヒサトの腕の中に飛び込む。
これが最後の戦いだろうことはどちらも理解していて、そのあとに自分たちが生きているかどうかは分からなくて。
「ねぇ」
ライガはヒサトを見上げる。
願うこと。
「そばに、いてくれる……？」
「ああ」
ヒサトはライガに頷く。

願うこと。
「ずっと、そばにいるよ」
「うん」
生きていてください。
死なないでください。
そして、そばにいてください。

まるで永遠を願うかのように。
くちづけを。

溺れるように愛を交わす。
愛しい人を抱きしめて、喰らい尽くすかのように。
情欲、愛欲、なんだって良かった。今この瞬間に代わるものなどどこにもない。
ひたすらに、互いを求めた。
明日はもう、こんなことをしている時間すらないだろう。
明後日はもう、全てに決着がつくときだ。
生き延びたい。
死にたくない。
生きていたい……！！
恋人は何度も左手の紋章に口付けてきた。
すがるように少年も恋人の左手、姿を隠す紋章に口付ける。
どちらも命を懸けて使わなければならない紋章。
死ぬかもしれない、死なないかもしれない。
紋章なんて関係なくて、闘いの中で命を失うかもしれない……。
脳をかき回すような快楽の中で。
背筋を突き上げるような快楽を与えながら。
愛していると、ただ。
告げる。

朝。ライガが目覚めるとヒサトはもう部屋にいなかった。
今日は最後の準備日だ。明日の早朝、作戦は決行される。
身支度を整えて部屋を出た。いつも部屋の前にいるセドリックに声をかけて、ヒサトを見なかったかと尋ねる。セドリックはちょっと顔を赤くして教えてくれた。
昨夜も彼はサロンに避難したのだろう。
「甲板のほうに行ったみたいですよ」
ライガが目覚めるちょっと前だと言う。いつもならライガのほうが早く目覚めるのだが、今日はさすがに起きられなかった。
……腰の辺りに倦怠感があるので。
ヒサトを追いかけて甲板に出てみる。恋人はぼんやりと欄干にもたれるように立っていた。
周りに人影はなく、ぼうっとしているように見えても、彼は神経を緩めているわけではない。
たとえば今、誰かが彼に斬りかかっていっても、彼は瞬時に斬り捨てるだろうから。
ライガは黙って近寄っていった。
「起きたか。おはよう」
声をかけて微笑みかけてくる彼が愛おしい。
「おはよう。今日は寝坊しちゃったね、僕」
「寝坊と言うほどじゃないぞ。ほかの連中はまだ寝てるやつのほうが多い」
ヒサトの肩に頭を寄せて、ライガは海を見た。
風が吹いていて、航海するにはとてもいい日だ。
けれど船にある緊張感はいつもの非ではない。
明日、全てが終わる。
装備や道具を整え、着々と準備は進む。

あっという間に夜になり、決戦の号令をかけるときが来た。
作戦室。
集まった仲間たちの前で、軍主・ライガは高々とこぶしを突き上げる。
「われらに勝利を!!!」
長く苦しかった戦いを、終わらせるために。

永遠の空・４２（後書き）

決戦。

永遠の空・４３

最終決戦、前夜。
最後の、夜だ。
月明かりが穏やかで、明日の決戦を思わせるものは海にはない。
けれど、船の中は違う。
過去に思いを馳せるもの、未来を掴もうとするもの、これからのことを願うもの、今までのことを清算するもの。
思いはさまざまで、何一つ同じものはない。
ライガは船内をめぐりながら一つ一つ皆の心を聞いていく。
エレノアは過去を悔いていた。クレイとの過去にあった因縁の決着を願っている。
リノは過去に起きた『罰の紋章』を使ったために喰われた自分の妻を思っていた。
ライガは下の子に年頃が近いと、言った。
キカは過去の仲間に思いを馳せていた。昔『罰の紋章』を宿していたかつての友、ブランドを。
シグルドとハーヴェイはこれからのことを話していた。これから先もキカの元で共にあろうと。
リタ、ルネ、ノアは三人で作った木彫りのお守りをプレゼントしてくれた。
フレデリカはクレイに滅ぼされた故郷の、ヤツが何故行動を起こしたかの核心に迫っていた。『罰の紋章』を欲するがゆえに、ライガを狙っているのだろうと。
カタリナはグレン団長を思っていた。ライガの成長を喜んでくれているでしょうと、微笑んでくれた。
ヘルムートは捕らわれたコルトンと話していた。彼らは親子で、これから先進む道を話していた。悔いなく進めと、コルトンは息子に言っていた。

パブロは紋章砲の整備で忙しそうだった。それをトーブが座って見ていた。

リキエとラクジーは『罰の紋章』に縁あるものとして、ライガのことを見守ると言ってくれた。

チープー、ナルクル、チャンポのネコボルト三人は、ぐっすりと眠り込んでいた。

ダリオはナリオに自分が死んだら母親のところに行けと言っていた。ナリオは母親が見つかったんですかと驚いていたが、ダリオは自分らしくないと撤回していた。

自分の部屋がある第一甲板に戻ってきたとき、スノウが話しかけてきた。

「僕の力の全ては、君に預ける。好きに使ってくれ……まあ、僕じゃあんまり力になれないかな」

苦笑を浮かべて、彼は続けた。

「……でも、これだけは言っておきたかったんだ……」

そしてライガを見つめる。もっと何か言いたかったのだろう。でも、言葉が出てこないようだった。

「……じゃあね。おやすみ」

振り返って、走っていく。

ライガはその背を見送って、やわらかく微笑んだ。

それからもう一度甲板に出た。

振り仰ぐように見上げる。ブリッジの上。

双剣を携えた、最強の男……ライガの恋人が夜空を見上げて手すりにもたれている。

「ヒサト」

その姿を見ただけで胸は高鳴る。

名前を口にしただけで鼓動は早くなる。

好きだと、思う。

歩み寄る。黙っていても、伝わる。

一緒にいて、ホッとする空気。この人とだけ得られるもの。

横まで行くといつものように肩を抱かれた。
当然のようにライガに触れてくる人。彼の胸元に寄り添うようにもたれかかる。
この時間は続かない。
永遠など人には許されない。
刹那の恋でも、それが確かに永遠に変わる瞬間があっても。
時間は流れ、留まらない。
「綺麗だね」
それでも。
月と星空を見上げて言う言葉は。
「ああ。綺麗だな」
いつの時代も変わらないだろう……。

たとえばそれが、幸せというものならば、いい。
続くことがなくても、確かにあった瞬間が、心に残ればそれで、いい。
ひたすらに、愛していると、それだけを大切な人が覚えてくれていれば、いい。

刹那の恋よ、久遠の愛に。
永久（とわ）なる想いよ――確かな瞬間と共にあれ。

まだ誰もが眠りの中にある時間。
ヒサトはひとり、甲板に立つ。
左手を掲げた。ほかの誰にも届かない小さな声。
「――我が真なる天空の紋章よ……！！」
青白い光が浮かぶ。天翔る翼、その力。
「我が恋人に勝利を。そのために……遥かなる惑いを……！！」

ただひとり愛した人間に、真なる紋章は応える。
ほかの誰にも感じられないように、弱く力は放たれ、海上を多い尽くすような霧が広大な距離を埋め尽くした。

ライガは人の気配で目を開けた。
横で眠ったはずの恋人はいない。
目をやると、うっすらと光を纏う女性がいた。
――レックナート。
彼女は言う。
紋章の試練が終わります。
贖(あがな)いの時は過ぎ、それは許しへと変化していきます。
その言葉が意味することは。
ライガ。あなたが紋章を持つ限り、それは命を喰らうことはないでしょう。
ですが、その紋章の行方は私にも分かりません……。
奇跡を起こしたのは、仲間たちとライガ、そしてヒサトの想いだと、彼女は言う。
告げて彼女が消えた後、ライガは自分の左手を見下ろした。
何かが、以前と違っている。
でも、何が？　紋章が命を削らなくなったとレックナートは言ったけれど。
ライガが紋章を手放せば、また命を喰らい続けるだろうと言ったけれど。
本当に……？
答えはない。
どうしたらいいのだろう？　ヒサトに伝えるべきか？　でも、もし違ったら。
かえって彼を悲しませることにならないだろうか？
それが恐い。
だから言えない……。

早朝。
いつの間に戻ってきたのか一緒に眠っていたヒサトと、ライガが部屋を出ようとすると、外から鍵がかかっている。
開かない。
「悪いね」
外からはエレノアの声。
「わがままを通させてもらうよ。用を済ませたらすぐ戻る」
彼女はどうしてもエルイールへ行く気だ。
ライガはドアノブをまわしたが、やはり開かない。エレノアの気配が遠ざかっていく。
「ヒサト……」
ある程度ガチャガチャやってから、ライガはヒサトを振り返った。
「……やっぱりな。言ったとおりだろ？」
「うん」
ヒサトからエレノアがこうするだろうことは聞いていたので、ライガはあわてていない。
ノブをガチャガチャやったのは、わざとだ。
「もう少ししたらアグネスが開けに来てくれるさ」
「うん」
少年は青年に擦り寄った。
「エレノアさん、大丈夫かな」
「大丈夫だろ。別働隊と一緒だし」
リノたちと一緒に上陸するだけの話だ。そこまでは心配要らないだろう。
問題は、その後だ。
がちゃん。鍵が開く音がした。
あたり一面の霧は、こちらにとって有利だ。

おとりの船が出た。霧が濃くてどこの船かは分からないだろう。
クールーク軍には敵襲としか思われない。
あとは、その瞬間を待つだけ。

霧の中を紋章砲の光が切り裂くように走った。

「は、馬鹿がいるもんだな」
ヒサトは甲板上で薄く笑う。おとりの船とも確認もせず紋章砲を放ったことで、これで二時間時間が稼げた。
「出撃！！！」
ライガが声を上げた。
この間に、トロイ率いる第１艦隊を叩く！！

霧が、晴れた。
最後の海戦が始まる。

クールーク軍はトロイ率いる六隻。
対するこちらはライガ率いる四隻。
だが、こちらには剣神の存在がある。
戦力は互角。トロイもヒサトが群島諸国側についていることは知っているはずだ。
オベルを脱出するときにトロイからの砲撃を紋章魔法で防ぎ（そんなことが出来る人間はヒサトぐらいしかいないだろう）、次々と島を奪還していったのだから。
今回ヒサトは本拠地船に乗っていた。機動力のあるグリシェンデ号で、以前やったようにかく乱と殲滅（せんめつ）をしたほうがいいのではとエレノアは言っていたが、ヒサトはライガと共にあることを選んだ。
最後の戦いだ。
だから、遠慮はしない。容赦も――しない。
珍しくヒサトは弓を構えていた。ラズリルの騎士団に飾ってあっ

た大きな弓で、ひとりでは誰も引けない強弓だった。
剣神はためらわず弓を引き絞る。キリキリキリ。力強い音。
ラズリル組は目を丸くした。団長も引けなかった硬く強い弓なのに。
ヒサトはいとも軽々と引いている。
彼の頭上に同時に炎の紋章が浮かび上がった。それは彼が引いている矢に収束する。

キュンッ！

鋭い音を立てて矢は放たれた。
風を読み、角度と尺度を計算して放たれた矢は、到底ありえない距離を飛び、敵艦に落ちた。

ッゴンッ！！！

遠くで破滅の音が響いた。煙を上げている敵艦を見て、こちらの甲板、声がない。
「……届くのか、あの距離」
「てか、今の何」
「特製・紋章魔法つき矢。発明・俺。作成・ジーン。ちなみに一本６００ポッチ。とりあえず二十本作ったから経費は合計１２０００ポッチなーりー」
ヒサトはしゃあしゃあと言い切って、次の矢をつがえる。雷の紋章が浮かんだ。

キュンッ！

届くまで、間があって。

ッガラピシャーンッ！！

……破滅の音。マストが倒れたのがここからでも見えた。
「んー、やっぱ下位紋章だと威力低いな。沈まんわ、なかなか」
向こうは大騒ぎだろう。被害も尋常ではないはずだ。
が、一撃で沈まないのでまだ幸運といったところか？
いっそ一撃で沈んだほうがまだ苦しくないかもしれないが。
「……ヒサト、弓矢もイケたんだね……」
もう、そう言うしかない一同だ。
「……紳士のたしなみ？」
首を傾げて言うヒサトに、
「いやソレ絶対違うから」
即座にケネスが突っ込む。
「……デタラメだ……」
タルが頭を抱えている。
「もう一撃くらいかなー」
ヒサトは言いながら弓を引き絞る。今度は風の紋章が浮かぶ。
とりあえず全種類の下位紋章で作ってみたらしい。手軽に売っているものなので封印球がひとつ５００ポッチ。宿すのにさらに１００ポッチ。それで一本６００ポッチなのである。
考え付くヒサトも、作ってのけたジーンも恐ろしい。

キュンッ！
ゴゴゴガッ！！ゾリバキッ！！！

恐ろしい音がして、船が傾いでいくのが見えた。
「ああ、甲板とかマストより船底狙ったほうが早いわ、うん」
とても簡単に、ヒサトは言ってのけた。
紋章砲さえまだ届かないこの距離を、しっかり狙ったところに命中させる腕前。

「……デタラメだ……！！」
仲間の半数以上が頭を抱えて呻いている。
「……なんか文句でも？　あまり好評でないようなので止めますかね、軍主殿」
「続けて」
ライガは苦笑して頼む。
「はいよ」
ヒサトは笑んで次の矢をつがえた。

永遠の空・４３（後書き）

４って紋章球安いんですよねぇ。それにしても反則だろう、ヒサト。

見る間に二隻が沈んだ。誰の仕業かなど聞かなくても分かる。
トロイは歯を食いしばった。
ヒサト。
……強すぎる……！！
「砲撃しろ。あの船を沈めねばこちらの勝利はない……！！！」
狙いは、彼が居るであろう一番大きな船――本拠地船。

ゴンッ！！

敵　艦からの砲撃。トロイ率いる艦だ。向こうは紋章砲を４門構えており、何を撃ってくるか分からない。
「迎撃！！　雷っ！！」
ライガが叫ぶ。読みきれたわけではない。勘だ。
だが、それが功を為した。

ジガンッ！！

相殺。
歓声が上がった。
その隙にヒサトがもう一隻を沈めて弓を捨てる。
「ヒサト？　もう飽きたのか」
テッドが不思議そうに声をかける。ぶっきらぼうにヒサトは返した。
「違う。風向きが変わった。もう矢が届かん」
敏感にそれを感じ取っているらしい。なんというかもう、とんでもない男としか言いようがない。

トロイの艦が離れた。紋章砲の射程は向こうの船のほうが上だ。離れれば不利である。

風向きがもう少し変わらずにいてくれたなら、紋章魔法の弓矢で追撃、撃沈することができたのだが。

グリシェンデ号とラズリル艦、オベル艦が三隻で二隻を引きつけている。紋章砲の相性が良かったのか、こちらに損傷は少なく、もう少し時間をかければ問題なく撃沈できるだろう。

残るはトロイの船だけだ。

近付くことができればヒサトが行く。風向きが変わればこれまたヒサトが矢を放てる。

どうしようもない距離を保たれるのが一番厄介だ。

トロイもその程度は考えているらしく、矢が飛ばなくなったと思ったら距離を取った。

こちらの紋章砲が届かない距離から撃ってくる。

「あー、どうする？」

ッゴォンッ！！！

やる気なく紋章魔法で相殺して、ヒサトはライガに視線を向けた。やりようはある。ヒサトの力を使えばいくらでも、だ。

紋章魔法は距離がありすぎて届かない。

弓矢も風向きが変わってしまい使えない。

だが、そのどちらもヒサトにはどうとでも出来ることだ。

ライガは首を振った。そして命令を出す。

「前進！！　グリシェンデ号に連絡を！！　連携して一気に追撃をかける！！！　ラズリル艦とオベル艦はそのまま敵艦へ攻撃しろと伝えろ！！！」

最後の戦いだからこそ、ヒサトの力でなく、皆の力で、勝利を。

二隻に囲まれるように砲撃され、トロイは顔をしかめる。
巧妙だ。距離を取られすぎないよう、逃げられないよう上手にこちらを包囲している。
あの艦の艦長は、よほど優秀らしい。
あれもヒサトが率いているのだろうか。

ゴガァッ！！

船が揺れた。船の致命傷のような、揺れ。
トロイは悟る。
己の負けを。

オォォオォォオォォッ！！！
トロイ率いる艦が沈黙した瞬間、甲板には歓声が沸き起こった。
『海神の申し子』トロイに勝った！！
ライガ、我らが軍主！！
剣神の加護在りし我らの軍主！！！

海戦は群島諸国が制した。

ライガは自身の腰の剣を確かめた。長く付き合ってきた己の武器・天狼牙双。
それは確かに自分の腰で振るわれる時を待っている。
視線を上げた。
遥かにそびえるのは、エルイール要塞。
ここさえ落とせば、終わる。
共に行く仲間は、キカ、テッド、マキシン――そして、恋人である剣神ヒサト。
「行こう」

紋章砲はずっと沈黙している。リノとエレノアはうまくやってくれたのだろう。

あとは、全ての元凶、クレイのみ。

クールークの南進政策、それに便乗したクレイ商会の紋章狩りが、いつからか完全に目的がすり替わっていた。

いまやエルイールはクレイ商会――グレアム・クレイが率いている。

私欲のための紋章狩り。

何のためにそれを望むのか、何のためにそれを為すのか。

その答を知っているのは、クレイのみ。

ヒサトの案内で内部を駆け抜ける。

襲い掛かってくる兵たちは多く、だがほとんどが敵ではない。ライガとヒサト、ヒサトとキカの協力攻撃でほぼ一瞬で一掃できる。

二階に駆け上がり、ヒサトは扉に手をかけた。

ギチ。

ドアノブが開くのを拒んだ。

「鍵、か。探さないとならないのか？」

テッドが背で呟くのを聞きながら、ヒサトは剣を抜く。

一閃。

そしてもう一度ドアノブをまわすと、軽い音がしてドアは開いた。

わずかな隙間から鍵を斬りおとしたらしい。

「……鍵は必要ないようだな」

キカも呟く。マキシンが顔をしかめた。

「……ヒサト……ほんとうに人間外だな……よくあんな隙間から」

「何を言う。蹴り開けると言う手もあったが、ここは確か引いて開けるドアだったのを思い出したんだ。蹴ったら痛いだけで開かん。斬るほうが早い」

「いや、そういうんじゃなくて」

ここまで来てもヒサトの軽口は変わらない。
苦笑しながらライガは彼に続く。敵の本拠地だというのに、前を行く彼の背が心強いから不安は全くない。
一緒に走れることに喜びすら感じるのだから、困ったものだ。
長い階段を駆け上がる。

どくん。

居る。
ライガには分かる。

ドクン。

近付いている。
左手の紋章からの記憶が伝えてくる。
……おとうさん。
ああ、今は眠るあの子が言っていたのは。
たどり着いたドア。

ドクン。

引き開けるヒサト。
広がる視界。広い部屋。壁際にあるのは大きな樹のようなもの。
その前に立つ男。
――グレアム・クレイ。

永遠の空・４４（後書き）

黒幕、登場。

永遠の空・45

グレアム・クレイはライガを見て笑みを浮かべた。
待っていたというように、ライガの左手を見る。
クレイが見ているのはライガではなく、少年に宿る紋章だ。
彼は言う。
赤月に復讐を、そのための力を、より強い力を。
失ったものがあり、そのために恨み、そして殺そうとしている。
この紋章の力で、全てに。
紋章の力はすばらしいだろうとクレイは問いかけてきた。その中の記憶が伝えてくるだろうと。私の息子の記憶が、そこには眠っているのだからと。
ライガは理解した。
クレイの欲しいもの。
そして答えた。
「……パンが……食べたいと」
あの子はそう言って、消えていった。
最後まで、おとうさんにごめんねと。
クレイは自重するような笑みを浮かべた。
「ああ……ハハハハハ！！　そうですか……ではなおさらだ。その甘やかな記憶と力が、私は欲しい……！！！」
「無駄だよ」
ヒサトは言い切る。
「罰の紋章はお前の元には戻らない。お前は逃れるために腕を落とした。もう一度はない。二度と……お前の元には戻らない」
甘く幸せだったころの、記憶。
それが欲しくて、クレイは。
息子を葬った力でも、食い尽くした力でも、欲しがった。

欲しかったのは、力なのか、記憶なのか。
分からないけれど。
「ふ……剣神よ。私はあきらめない……たとえあなたが相手でも！！！」
クレイは義手ではない右手を上げた。手の中には光がある。
広がる光に、壁際のソレが目覚める。
エルイールの芯であり最終兵器でもある――巨大樹。
樹を生やしたドラゴンなのか、ドラゴンを吸収した樹なのか。
きらびやかに光りながら、それは咆哮する。
そこに宿るのは紋章魔法の力だ。
誰が作り出したものなのか、巨大樹には紋章片が属性の数だけ、それも最大限付けられている。
巨大樹はばらばらと種をばら撒いた。その数、数十。
「種は俺が片付ける。あれは一撃で殺さんと互いと本体を回復するからな」
「分かった。本体は僕らが叩くよ」
ライガは頷き、ヒサトは床を蹴った。
ざらざらと降るように落ちてくる種をヒサトが断ち切り、ライガは仲間と連携しながら巨大樹に斬りつける。外皮はかなり硬い。見たまま樹ではありえない。
これは、兵器だ。
「ソウルイーター！！　裁きを！！！」
テッドが叫び、彼の右手から闇が吹き上がる。
「炎よ！！　我が呼び声に応え給え！！！」
マキシンが叫び、炎の竜を召喚する。
キカはライガを援護するように動きながら樹に確実に傷を刻んでいる。
時折左手の隼の紋章が輝いており、彼女は素早く何度も切りつけている。

オオーオォオオー！！！

樹が叫ぶ。光が放たれた。
白い光が全員に降り注ぐ。ヒサトは素早く距離をとって避けたが、ほかの四人はそうはいかない。まともに吹き飛ばされた。
すぐにライガが立ち上がり、左手を掲げる。
「……永遠なる許しを……！！」
『罰の紋章』が応える。
首と右腕のない天使が光臨し、光と共に消えた。ライガ以外の全員の傷が言えている。
「バカっ！！　水よ、優しき癒しを！！」
テッドが叫んで水の紋章を発動させた。
「自分も治せよ！！」
「……出来ないみたいだ。とりあえず皆を、と思って」
「バカかお前はっ！！！」
本気で怒っているテッドに笑いかけて、ライガは走り出した。
仲間たちが立ち直る時間を、ヒサトが稼いでくれていた。彼は右手を掲げ、一度に種を焼き払い、本体まで焦がしている。

オォーオオォオオォオー！！！

悶える巨大樹。ヒサトは一応加減している。本気でやると、バックファイアで自分まで焦げるし、まず確実にライガたちを巻き込むからだ。
剣神が全開で紋章魔法を放つには。部屋が狭すぎるのである。
ばらばらとまた種が落ちてきた。
ヒサトはそちらへ移る。入れ替わるようにライガとキカが巨大樹に斬りつける。
マキシンが詠唱し、テッドは『ソウルイーター』を使いながら様子を見て回復に回ってくれている。

ライガは床を蹴り、剣を振り上げた。

『罰の紋章』から始まった因縁の戦い。

全てに決着をつける一撃は、『罰の紋章』の許しを得た少年の、剣。

全体重をかけた一撃が、巨大樹の身体を深々と斬り裂く。

ア”ア”ア”イ”イ”ィイ”ィイ”イ”ーーーっ！！！

断末魔の絶叫が、エルイール要塞を揺るがした。

ライガが離れたところを、ヒサトが追撃する。

これはあってはならない。群島諸国の平和を長く保つためには。

右手を突き出し、発動させる。

「眠れ、永遠に……！！！」

ウ”ォンッ！！！

灼熱が踊る――。

爆炎。

そして、クレイは己が敗れたことを知った。

ゴォンッ！！

芯を失ったエルイール要塞に終焉（しゅうえん）の音が響く。巨大樹は兵器であり、この要塞の柱を担っていた。それを失えば、要塞は崩れ落ちる。

「なにやってんだい！！　死ぬよ！！　逃げなっ！！！」

エレノアの声が響いた。
彼女の声に押されるようにライガたちは走り出す。
急いで脱出しなければ巻き込まれるだろう。
ライガの前を走り出しながらヒサトは後方の気配を窺った。
エレノアとクレイ。二人の気配が動き出す様子はない。
バカ女が……っ！！
忌々しく心中で吐き捨てる。だが今はライガたちだ。愛しい少年と仲間たちを無事なところまで連れて行かねば。
要塞が崩れようとしているというのに、兵はまだ彼らを阻もうと攻撃してきた。
ヒサトは容赦しない。足を止めることもない。彼らが駆け抜けてから、兵士たちはゆっくりと崩折れ、息絶える。
出口まで走る。邪魔は何度も入ったが、剣神と恋人、その仲間たちの足を止めることもできなかった。
「あ、ライガ様、ヒサトさんっ！！」
ラクジーが待っている小船に飛び込み、急いで離れ、本拠地船に戻る。
エルイールは振動している。崩れるのは時間の問題だろう。
だが。

ズガンッ！！

本拠地船に接舷してきた、船。
そこに立つのは『海神の申し子』。
見ているのは、軍を率いる少年。
強い瞳、その視線が絡み合う。
挑むように、願うように。
ライガは欄干に立った。そこから飛び降り、トロイの前に降り立つ。

トロイ。
ライガ。
共に剣神を愛し、けれど射止めることが出来なかった者と、射止めた者。
だから、退けない。
だから、負けたくない。
切ない目で彼を見ていた『海神の申し子』。
彼のバンダナを纏(まと)っている少年。
互いに互いの存在にどれほど嫉妬したことか。
欲しかったのは彼の心、彼の存在。
手に入れたかったから。
手に入れたから。
完全敗北を感じたから、せめて一太刀。
流刑船、拾われたときには手も足も出なかったけれど。
だからこそ――ここで全てに決着を。

「おい、止めなくていいのか」
リノがヒサトに声をかける。剣神はかつて腕に抱いた『海神の申し子』と、今心に抱く最愛の恋人の対峙を静かに見ている。
「……迂闊(うかつ)に止められん。一生恨まれる」
「ライガにかぁ？」
「どっちにも、だ」
「どっち……って、おい」
「ライガは負けねえよ」
確信しているかのように、ヒサトは言う。
「ああ、それからな、リノ」
言わねばならないことがあった。リノを引き寄せ、言う。
「！！？？　おい！！」
「頼むわ。それぐらいの頼みは聞いてもらってもいい働きはしたよな、俺」

にやりと笑ってやる。リノは口を開閉し、結局何も言えずに顔をしかめて了承した。
あとは、見届けるだけだ。

剣が撃ち合わされ、火花が散る。
閃く銀の輝き。少年の連撃、青年の一撃。
軽やかに続き、重く阻む。
言葉なく、交わされる攻撃。
それはまるで芸術のようでもあった。
何度目かの絡み合う一撃に、少年の剣が、青年の剣をくぐり抜ける。
腹部に受けた一撃に、トロイは膝をつく。
その手から剣が零れ落ち――決着はついた。

おろされたハシゴを上ってライガは本拠地船に戻ってきた。
「ライガ！！」
仲間たちが出迎え、騒ぎ立てる。ライガはかまわず恋人の下へと歩み寄った。
ヒサトはトロイを見下ろしている。トロイはヒサトを見上げている。
言葉は交わされない。
ライガが近寄ったのを感じ取って、ヒサトは恋人に視線を向けた。
ライガは頷き、トロイのほうを向く。
「……一緒に、来ませんか」
トロイの乗っている船は損傷を受けていて、もはや沈みかけている。
ライガの誘いにトロイは首を振った。
「情けは要らぬ。決着はついた……」

見上げるのは、深い蒼。
かつて愛し、今もまだ愛している人の瞳。
海で死のう。
愛しい人の瞳と同じ蒼に抱かれて死ねるのならば。
トロイはそう思った。
ヒサト。
彼に抱かれているような気持ちで死ねるだろう。

――すとん。

トロイは目を見張った。
ヒサトが、横に下りてきたのだ。
沈みゆく船。頭上には彼の恋人の少年。
何故!?
「トロイ。死ぬか?」
ヒサトは笑みを浮かべている。傾き始めた船の上で。
「な、何をしている!? 早く上に戻れ!!」
「死にたいか?」
愛しい人は笑んでいる。思わず訊き返した。
「……一緒に、死ぬとでも言うつもりか?」
それならば、どれほど幸福な想いで死ねるだろう?
「俺にも死んで欲しいのか?」
「っ……!!」
だが。
ヒサトの死など考えたくもない。
「……違う。早く戻れ!!」
お前ならこのくらいの距離でも戻れるはず。そう声を上げるトロイに、ヒサトは笑ったまま。
頭上の少年を見上げる。彼も困ったように微笑んでいる。
「っ!!!」

それでピンと来た。トロイとて愚かではない。
この、二人は。
自分を生かすつもりなのだ……！！
答えなければヒサトはこのままだろう。
このまま、彼と共に死ねるかもしれない。
それはトロイにとってとてもとても甘美な誘惑で。
けれど。
彼に死んで欲しいなどと願ったことも無く。
トロイはきつく目を閉じた。
完敗だ。
どこまでも、この少年と剣神に、勝てなかった。
「トロイ？」
愛しい人。愛しくて、ずるい人。

お前の死など認めない。

共に死ぬなど望めない。

「……ヒサト」
目を開ける。
愛しい蒼。
海の色。
「……連れて行け」
ヒサトは満足げに微笑んだ。
馬鹿げている。
敗軍の将を救うために命を張る最強の男と、たった今打ち負かした男を救うために恋人を見送った軍主など。
だが、一番馬鹿げているのはこの自分だ。
もう相手が居るヒサトの微笑だけで、満足しているなんて……。

永遠の空・４５（後書き）

助けました。仲間にしたかった……！！（血を吐くように呟いたプレイ時ｗ）

永遠の空・４６

トロイを担いでヒサトは戻ってきた。
「トロイ一丁お待ちーってか。ってことでリノ、こいつのこと頼むぞ。間違っても処刑などするなよ。その折には俺がもれなく暴れに行くぞ。オベルを滅亡させてやるからな」
「……怖いこと言うな……お前マジでやれるからなお恐いわっ！！」
先ほどヒサトがリノに頼んでいたのはトロイの処遇だったのだ。ライガの一撃で怪我を負ったトロイを甲板に下ろして、ヒサトは救護班を呼んだ。
「ヒサト」
痛みに顔をしかめながらトロイは彼を見上げる。
「何故だ？　私を助けて……お前に得があるのか？」
「ねえな」
即答する。
「むしろライガの嫉妬の種になるから、助けないほうが実は俺にとっては得だ」
「……ならば何故だ」
「理由がいるか？」
「……あるのならば、聞きたい」
ヒサトは楽しそうに笑っている。
「割合にお前のこと気に入ってるからだよ」
「！！」
トロイは目を丸くした。
気に、入って、いる？　この男が！？　自分を！！？？
「ヒサト……トロイさん、固まってるよ？」
ライガが苦笑している。
「愛じゃないんだが……って言って聞こえるだろうか？」

「どうかな」
「トロイ？　おーい」
ヒサトに眼前で手を振られて、トロイはようやく我に返った。
「き、気に入っているとはどういうことだっ！？」
「そのままだ」
即答される。
「じゃなきゃわざわざ助けるか。お前のことはわりかし気に入ってたんだよ。そうだな、七年前、お前が軍でなくて右腕でなくて、素のままのお前でただ残ってくれと言い出していたら残ったくらいには」
「――！！」
言葉も無く呆然とするトロイに、ヒサトはにんまりし、ライガはむっつりした。
「へえ、そうなんだ」
「実はそう。ライガ？　昔の話よ？　今は別よ？　現在進行中で未来までお前だけだから」
「……許す」
「ははー。ありがとうございますライガ様ー」
にやりとして遊んでいるヒサトと、顔を赤くして許すライガ。
「まぁ、残ると言ってもせいぜい一月か二月だろうが。ああ、それでも当時の最高記録にはなったかもしれんなぁ、滞在三ヶ月？」
「そ、そうか……」
延ばせたのか、とトロイは呟く。変にプライドなど考えず、ただありのままヒサトに居てほしいと願えば、それで、叶ったのか。
もう遅い話、だが。
それでも嬉しかった。
現金なことに、ヒサトが気に入ってくれている、それだけで嬉しかった。
「うらやましい……」
甲板上でほかのヒサトのお手つき数名が恨めしそうにトロイを見

ていた。引き止めても留まらないヒサトが、留まったかもしれないくらいに気に入られているトロイが、心底からうらやましいらしい。
「タラシ……」
半　眼でテッドが呟いている。心底から不思議になったので訊いてやる。
「なんで刺されないんだ？ヒサト」
「……それは俺もたまに真剣に疑問に感じることがある。返り討ちになるからやらないのかなぁとか考えたけどなー、違うっぽいんだよなー。なんでだ？」
「俺が訊いてるんだけど。ってか俺、ヒサトのお手つきじゃないし、分かんねーよ」
兄弟のようなやり取りをしていると、びりびりと大気が振動してきた。
「お、いよいよ爆発するか？」
エルイール要塞のほうに目をやるヒサト。あそこには紋章砲の砲弾が置いてあるはずで、あれほどでかい紋章砲なら砲弾もかなり大きいだろう。
芯を失って崩壊する瞬間、砲弾が誘爆する可能性がある。
早く離れたほうがいいのは間違いないが――いまだ戻らない人間がいた。
「でも、でもエレノア様がまだ……！！」
アグネスが声を上げる。
ヒサトは大きく息をついた。
彼女は戻らないつもりでいるのだろう。そこまでヒサトは予想していた。
「ライガ、テッド、離れてろ」
真の紋章を持つ少年たちにそう指示する。
「ヒサト……」
ライガは心配そうだ。一昨日、二人で話し合った際、ここまで予想していることはライガに話していた。

そして、そうなった場合、責任を持ってバカ女を連れ戻す、と。
「あのバカ、迎えに行ってくる」
ライガとテッドはおとなしくヒサトから距離を取った。エルイール要塞からの砲弾の誘爆の気配で、大気が振動し、魔力がかなり乱れている。
ビッキーではテレポートできないだろう。いや、ここまで乱れてしまっていて、並みの魔術師では移動できるはずがない。
だが。
彼に宿る力は、それくらいでは揺らがないものだ。
真の紋章にすら、干渉する紋章とその主だから。
万が一のことを考えて、ライガの『罰の紋章』とテッドの『ソウルイーター』に影響が少ないようにと距離を取らせる。

――ヒサトは左手を掲げた。

ビリビリと震える大気が、より強い力に怯えたように鎮まる。
彼の左手に宿る紋章、その力。
テッドが眉をしかめ右手を押さえる。ライガも左手を押さえた。
甲板の端と端にまで離れているのに、中心のヒサトが放つ力に少年たちの紋章が応えようとしている。
これだけ離れているのに。
ゾッとする。
ヒサトがひとこと命じれば、『罰の紋章』も『ソウルイーター』もその言葉に従ってしまいそうで、恐い。
恐るべき力を従えるがゆえに、『天空の覇者』とまで呼ばれた男は、猛る力に告げる。
「……我が真なる天空の紋章よ！！」
声に、甲板にいたライガとテッド以外の者は絶句する。
青白い光がヒサトの左手甲に強く留まる。主の声を合図にいつでも羽ばたけるように。

「旧き友の下へ……俺を導け！！！」
剣神の姿が、甲板から消えるまで、誰も言葉を発さなかった。
「……ヒサト……あいつ……」
リノが呆然と呟く。
「真の紋章の……継承者なのか……！！？？」
「そうです」
ライガが答える。
「！！　ライガ、お前……知って！？」
「大分前にテッドと一緒にヒサトから聞きました。ほかの仲間たちには知られたくないから黙っていて欲しいと言われたので、今まで」
黙っていたと。
「な、ぜ……」
トロイも愕然としている。確かに七年前と容姿が変わらないと思っていた。
その理由が、これなのか。
真の紋章による不老の呪い……。
「まぁ、今ので分かったと思うけど、これでヒサトが一箇所に長居しなかったわけが分かったろ。しないんじゃなくて、『出来なかった』んだよ」
テッドが呟くように言う。それはヒサトと同じく、テッドにも言えることだから。
「……ヒサトの紋章は、制御に失敗したらその場で爆死するそうです。使わせるわけには……いかないでしょう？」
ライガは悲しげに微笑み、その言葉に仲間たちは再び絶句した。
真の紋章を宿す者。その孤独。
己の命を削るライガ。親しいものの命を喰らうテッド。そして、失敗すれば即座に爆死するヒサト。
それがいかほどの孤独を呼ぶものなのか、当人たち同士にしか分からないだろう。
「爆死って……そんな、今、だって……！！」

スノウがあわてる。
今使ったじゃないかと言いたいのだろう。
「エレノアさんがこうするのをヒサトは予測してました。一昨日の晩に二人で話したんです。エレノアさんが自分で戻ってくるならば使わないで済む。でも、戻ってこなかったら、紋章の力を使って意地でも連れ戻すって」
ライガは一度息を吸い、それから続けた。
「……エレノアさんを戦場に連れ出したのは、俺の責任でもあるからって」
『罰の紋章』。それが起こした事件で赤月を捨てたクレイ。
『罰の紋章』。それが起こした事件で赤月を追放されたエレノア。
そこをつついて、彼女を連れてきたのは、ヒサトだから。
全ては『罰の紋章』から始まったこと。
クレイの左手に宿った紋章。逃れるために左手を落としたクレイ。
けれど紋章はクレイの息子に宿り、『人間狩り』事件の際に息子は『罰の紋章』の力を解放、喰われて死んでしまった。
エレノアと知り合いだったヒサトはそこまでをかなり的確に予想していたのだ。
『罰の紋章』はそれから誰に宿ったのか、それはヒサトにもさすがに予想がつかなかったらしい。
『罰の紋章』は人の手を渡り、海賊ブランドに宿り、グレンに宿り——今はライガの左手にある……。
「……帰って……来られるんですか……？」
アグネスがこわごわと声をかける。
ヒサトが死んだら、一番悲しみ、苦しむのは。
ライガは微笑んでいる。
「約束、したから」
一昨日のヒサトとの会話。話したのはエレノアのことだけではなく、トロイのことだけでもなく。
一番大切な約束をしたから。

「ヒサトは、僕のところへ戻ってきてくれるよ」
死なないで。
そばにいて。

それは、永遠の約束。

永遠の空・４６（後書き）

真の紋章の力。それは諸刃（もろは）のように。

永遠の空・47

答えはなかった。エレノアがいくら問いかけようと、クレイから答えは返らない。

「勝手に想像するがいい……」

もはや言葉にするつもりもないくらいに、クレイは敗北に絶望している。

要塞内の振動は強くなってきており、空気に充満する魔力が高まっている。

もはや崩壊するだけだ。

「……やれやれ、もう一度鍛えなおしてやらないといけないようだね」

エレノアはそう言った。あの世ででも鍛えなおしてやるつもりだった。

クレイがしたこと。彼がしたかったこと。そのどれもが彼女には理解したくないことだったけれど、それでも。

死出はひとりでは寂しかろう。

師である自分も共に。

彼がここまでしたことの責任は、上司で師だった自分にも責任があると考えた。

「はは……ご勝手に」

クレイは投げやりに答える。

もはや終わるときを待つだけ。

魔力が収束する。

その、瞬間。

オォンッ！！

「！？」

強すぎる力に怯えたように一瞬振動が止まる。
エレノアとクレイ。二人だけだった空間に、現れた長身の男。
「ヒサト……！？」
エレノアは目を見開く。
剣神はこともなげに彼女のほうを見た。
「よう。迎えに来てやったぞ、ありがたく思えバカ女」
「あ、あんた、どうやって……！？」
クレイもエレノアも見た。ヒサトの左手に宿る光。
強すぎる力。その片鱗。
「……継承者……？」
クレイが呟く。
「剣神……あなたも真の紋章の継承者だったのか！！？？」
「やかましい」
ヒサトは問答無用でクレイの腹部に当身を食らわせた。そのまま気絶したクレイを肩に担ぐ。
「帰るぞ。皆待っている」
エレノアに手を差し出す。
「っ……放っておきな。その馬鹿を置いてあんただけ――」
「お前の弟子はこいつだけか？」
「！」
船で待つ、エレノアの帰りを信じている、彼女――アグネス。
「責任持って面倒見てやれよバカ女」
エレノアは言葉を失った。そしてヒサトの思いを理解する。
死んだはずの彼女を、墓場から引っ張り出した男。
「眠るなら、ちゃんと自分の墓に帰って眠れ。こんな味も素っ気もない要塞じゃなくて」
「……は、余計な世話だよ」
友の軽口に答えながら、軍師は剣神の右手を取った。
ヒサトは左手を掲げる。
集う力。それを感じてエレノアは目を見張る。ここまでの強い力

――ライガの『罰の紋章』に匹敵するだろう。
やはり、ヒサトは。
「……我が真なる天空の紋章よ！！！」
彼の叫びに、エレノアは納得する。
姿の変わらない彼。その理由。
「仲間たちの下へ――！！！」
最強の男の、遥かなる孤独も、理解した。

甲板に現れたヒサトとエレノアの姿に仲間たちはホッとして――
次の瞬間目を見張った。
「グレアム・クレイ！！？？」
「ヒサト、お前っ、何でこいつまで！！」
問いかけの言葉は途中で詰まった。
ヒサトは肩で息をしており、耐え切れずマストに寄りかかったからだ。ヒサトが肩で息をするところも、何かに寄りかかるところも初めて見た仲間たちはあわてた。
「おい、大丈夫か！？」
「……ちと無茶だったか……」
なにせあの不安定で乱れた魔力の中を、人を連れて転移しただけでなく、紋章砲の砲弾、その誘爆も抑えていたのだ。
『罰の紋章』と『ソウルイーター』に影響を及ぼさないように『天空の紋章』を制御しながら。
とんでもなく強い意志の力と制御力が必要なことだ。ヒサトでなければ出来ないことだろう。
それでも爆死しないのは、やはり紋章に愛されているからか。
それともヒサトが人外の魔力と制御力の持ち主だからか。
「ヒサト――！」
ライガが駆け寄ろうとして、船が揺れて果たせない。ヒサトの制御から離れた紋章砲弾が、いよいよ爆発しようとしている。
「！！」

魔力が高まる。
船を出すには間に合わない。
ヒサトは咄嗟(とっさ)に左手を突き出して『天空の紋章』で制御しようとしたが、脱力感が身体を包み、動けなくなった。
このままの状況で、これ以上は駄目との紋章からの警告だ。せめて魔力の乱れが収まらないと、紋章の行使はさせない、と。
「くっ……！！」
膝をつく彼に、ライガが目をやる。
これ以上は彼にさせられない。
要塞から光が走ってくる。
その後に来るのは衝撃だろう。本拠地船など跡形もなく吹っ飛ぶほどの。
ならば。
「ライガ……っ！！」
リノとエレノアが軍主に目をやった。
少年は左手を掲げている。
「っ！」
ヒサトが強引に身を起こし、駆け寄った。
止めるのではなく。
ライガの左手に己の左手を添えて、支えるように。
ライガは恋人を見上げる。
ヒサトも恋人を見下ろす。
一瞬、触れるだけのキス。
覚悟のくちづけ。
最後かもしれない、愛しい人。

そして、少年は己の紋章に命じた。
「……我が真なる罰の紋章よ！！！」

エルイールが最後の咆哮を上げた。

キィイヤァアアァアアーーーッ！！！

断末魔の咆哮をかき消すように、赤い光が全てを薙ぎ払っていく。

何もかもの終焉を告げる、光。

全てが、終わる……。

声もなく、ライガが崩れ落ちる。

声もなく、ヒサトはライガを抱え上げた。

少年の左手は淡く赤く輝きを放っている。

「らい、が……」

誰かが声をかけた。ヒサトは答えず、本拠地船の中心人物であるリノ、エレノア、キカを見る。

彼は微笑んでいた。

「……じゃあな」

剣神は身軽に用意しておいた小船に飛び移る。

一昨日、ライガと話したこと、その最後のひとつ。

『もし、紋章を使って僕が死んだら……ヒサト、僕を連れて、海へ出て。誰かに紋章が移らないうちに……』

真の紋章を持つヒサトには『罰の紋章』は移らない。それを確信していたからこその、ライガの願い。

『灰になるまで、僕を抱いていてください……』

一緒に。

ずっと。

「ヒサト……！！」

「小船、一隻貰ってくぞ」

言葉少なにそれだけを告げ、彼は腕の中の恋人の髪に口付けた。

そして。
「……我が真なる天空の紋章よ……！」
「「ヒサトッ！！！」」
トロイとスノウが叫んだ。
小船ごと、軍主と剣神の姿が消える。
「……そ、んな……！！」
ケネスが呻く。
彼らは分かっていたのだろう。
仲間たちの誰もがそれを理解した。
己の死。それがもたらす事柄までも予想して。
呪われた紋章が誰かに宿ることがないように。
「そんな……ッ！！！」
ジュエルが嘆く。
だからこそ、二人だけで。
悲しい声が、重なった。
「そんな、ことって――ッ！！！！」
彼らが幸せにいられる未来を、仲間たちの誰もが望んでいた、のに。

贖(あがな)いはとうに過ぎ、許しが訪れていると、知っているのは。

永遠の空・４７（後書き）

エレノアさんも助けました。クレイはおまけ（笑）
そして、罰の紋章は？
次回、終了します。

永遠の空・終

影はなくなっていた。
目の前にいるのは、ひとりの女性。
見たことはない。でも知っている。
知らない。でも分かっている。
この人は。
女性はライガそっくりのやわらかい微笑を浮かべて、指をさした。
振り返る。
そこにはあのときに夢で会った双子がいた。
レンとレンカ。ヒサトが信じた双子。ヒサトを愛した双子。
彼らはライガの手を引く。向かう先に、光。
彼が待っている。
ライガは一度だけ振り返った。女性は微笑んでいる。
『ライガ……ヒサトと、どうか幸せに……』
彼女は優しく言う。
ライガは微笑んだ。
彼女とよく似た笑顔で。
『ありがとう、お母さん』
今まで護ってくれたのは、ヒサトだけでなく。
あなたも、ずっと。
『さよなら……』
僕は、彼と。
進むから。

ライガは目を開けた。
海の色。愛しい人。ライガを抱きしめてくれている、人。
「ライ、ガ……」

自分が目を開けたことに驚いている。
だが、彼は一瞬で把握して、ライガを強く抱きしめた。
「ライガ……ッ！！！」
「ヒサト……」
ライガも強く彼を抱きしめる。
「ヒサト、ヒサト……！！」
確信していた。今はもう『罰の紋章』はライガにとって脅威ではない。
力を使っても死ぬことはない。
「もう、大丈夫だよ……僕、死んだりしないから……」
「……制御できるようになったのか？」
顔を寄せて、心配そうに、彼は訊いてくる。
「うん。あのね……」
最終決戦前夜、レックナートが訪れたこと、彼女が言っていたことを、ライガはようやくヒサトに話し、謝った。
「ごめんね。確信がなくて話せなかったんだ。レックナートさんが言ったことが間違っていたら……ヒサトを余計に悲しませるんじゃないかと思って……」
言葉を口にするたびに、ヒサトの表情は険しくなる。黙っていたことを怒っているのかとライガはとても不安になった。
が。
「あの女（アマ）ァァアアアアッ！！！」
ヒサトはライガを抱えたまま、絶叫。
「レックナートォオオォオオッ！！！　てめぇ俺がいないときを見計らって来やがったなぁぁあああっ！！！」
怒りの叫びを上げるヒサトに、ライガは目を丸くした。
どうやら、ヒサトはライガに対してではなく、レックナートに怒りを感じているらしい。
「絶対殺す絶対殺す絶対殺す絶対殺してやる……っ」
「ひ、ヒサト？」

目が据わっている恋人に、ライガは恐る恐る声をかけた。
「お、教えてくれたんだよ？」
「嫌がらせだ……ライガのこと、罰の紋章のことで死ぬほど俺が悩んでいたことくらい予想できるだろうが……あの女、殺してやる……っ」
呻いている。ライガが無事でホッとしたら、レックナートに対する怒りと殺意が湧いたらしい。彼女がヒサトのいないときに現れたのは、レックナートを嫌っているらしい彼に、殺されるかもしれないと思ったからではないだろうか、と予想したライガである。
実はその予想はあながち、外れてもいない。
「ヒサト……」
苦笑して、ライガはヒサトに擦り寄った。
死ぬほど心配してくれたというのが、嬉しい。
生きてこうしてまた彼に触れられるのが、とても嬉しい。
「ね、キスして？」
「……」
ライガの求めに、ヒサトはしかめていた顔を苦労して戻し、キスしてくれた。
「あのね？」
「ん？」
「ヒサトが好きだよ」
「……ああ、俺もだよ」
何度もキスをした。嬉しい。これからは何度だってこうしていられる……いつまでも。
「ねぇ、またあの双子さんに会ったよ。手を引いてくれたの」
「……ほほう？」
「？　どうしたの？」
「ライガの手を、ね……魂をどつく方法はないもんかな……」
恋人の手を握ったというのが、許せないらしい。
ライガのことに関しては、とんでもなく心が狭くなるヒサトだ。

「……ヒサトのところまで案内してくれただけだと思うけど」
そう言ってあげると、ヒサトはしぶしぶ、それなら許してやるかと呟いた。
「それからね、女の人もいた」
「女？」
「うん。僕の……お母さん」
ライガによく似た微笑を浮かべる人。それはライガ『に』似ているのではなく、ライガ『が』彼女に似ているのだと、彼女を見た瞬間に分かった。
「……そうか」
「僕のお母さん、ヒサトの知り合いなの？」
ヒサトと幸せに。そう言ってくれた彼女。その言葉は、ライガの恋人に対する深い信頼と心配が含まれていたから。
「……ああ」
ヒサトはやわらかく微笑んで、とても懐かしそうに頷いた。
それでライガは理解する。ライガの母親はヒサトにとってほかの人とは違うのだ。
お手つきでは、なく。
「……どういう、関係？」
「グレンと同じ」
ヒサトは微笑んだまま答える。
確かな昔を、思い出しているようだった。
「俺が真の紋章の持ち主だと話しても、大丈夫と確信した……親友だよ」
裏切らないと確信できる友。それはグレンと、彼女だけだったから。
「……酒、強くてなぁ。よく飲んだ。結婚するちょっと前まで……滞在していたよ」
遠い空で、彼女の幸せを祈っていた。
嫁いだ先はとても由緒ある、つまりは面倒くさい家だったので、

大変だろうとも苦笑しながら思っていた。
彼女が十五年前に死んだと聞いたとき、とても辛かった。
「いい奴ほど……早く死ぬんだよな……」
子供を護るために死んだ彼女。
上の子は助かり、下の子は行方不明になったと聞いていた。
けれど、助かってここにいる。
そして、ライガが『罰の紋章』を宿してもグレンのように衰弱しなかったのは、彼女がライガを護っていたからだと、理解していた。
死して紋章に喰らわれてもなお、我が子を護った彼女――。
「ヒサト、知ってたの？　僕のお母さんが……ここにいるって」
そっと左手の紋章に触れて、ライガは問う。ヒサトは母親の話をしても驚かなかったので、知っていたのではないかと直感した。
「……無人島で紋章に触れたときに、気配で分かった。ライガがグレンみたいに衰弱しないのは何でだか不思議だったんだが……彼女の気配で理解したよ」
「……教えてくれればよかったのに」
ライガは少しだけ頬を膨らませた。
「すまん。罰の紋章から開放したいとそれだけしか考えてなかった。あの時伝えても……余計に絶望するかと思って」
母親まで紋章に喰われているのか、と。
心遣いを感じ取って、少年は微笑む。
「……許してあげる」
言ってヒサトに口付ける。軽いキスを交わして、もうひとつの質問。
「ね、じゃあヒサトは僕のお父さんも誰だか知っているの？」
「……訊きたいのか」
「うん」
ヒサトは迷っているようだった。確実にライガの父が誰なのか知っているようだ。
珍しく口ごもっている彼に、まさかとライガは青くなる。

「まさか……ヒサト、僕のお父さんなんじゃ……！？」

禁断の近親相姦なのではという恐ろしい考えが浮かんでしまった。

「違う違う違うッ！！！」

即座に否定するヒサトだ。

「子供作るような失敗はしてないッ！！！」

その弁明もどうだろう。

「……本当に？」

「本当に。大体そういう関係じゃなかったって！　グレンとそういう仲じゃなかったのと同じだよ」

彼は苦笑している。関係があるならばあると言うだろう。彼がないと言うなら本当にないのだ。

「そっか。じゃあ、誰なの？　なんで口ごもるの？」

「……」

ふぅ、と息をついて、ヒサトはライガに耳打ちした。

「！！！」

ライガは目を丸くする。

「うそっ！？」

「……本当。マジ」

ヒサトは遠い目になる。数百年の人生で初めて一目惚れをし、本気になった少年が、まさかあの男の息子とは、考えもしなかったのは彼も一緒だ。

だからなおさらライガを使う彼に腹が立って突っかかったのだが。

彼女の息子とも思っていなかったヒサトである。知ったときはさすがの剣神も驚いた。

ライガは無言でヒサトの腕の中、固まっている。

確かにそれらしい話を聞いた。

年頃が似ていると、言っていたけれど。

「……うそ……」

では、彼は父で、彼女は姉だ。
「……どうする？」
ライガの頬にキスをして、ヒサトは囁きかける。
「……戻るか？」
家族のところへ。
ヒサトの力ならば戻れるだろう。
『罰の紋章』の贖いから開放された今なら、戻ってもかまわないはずだ。
息子だと名乗れば、彼は喜ぶだろう。弟が生きていたと知れば、彼女は喜んでくれるだろう。婿であるヒサトも一緒に行ってくれるだろうから、諸共に喜んでくれるはずだ。
ライガがいる限り、ヒサトはその場を動かない。最強の守護神を得ることになるのだから。
でも。

見つめる彼の瞳を見つめ返して、ライガは――首を横に振った。
「いい。ヒサトがいてくれるなら、僕はそれでいいから」
戻っても、混乱させるだけだろう。
何よりも、自由に彼と過ごせないだろう事は容易に想像できた。
戦いは終わった。軍主としての役目も果たした。ヒサトだって剣神としての役目は充分に果たしてくれた。
あとは、残った人たちに任せて、恋人とゆっくり過ごしてもバチは当たらないと思う。
「ずっと……一緒に、いて」
「ああ。一緒に、いるよ……」
時間はこれから先、たくさんある。
許されたから、彼といられる。
やっと手に入れた、静かで穏やかな至福の時間。
群島諸国をめぐる戦いも、真の紋章をめぐる戦いも、今は終わったのだ。

たとえそれが、かりそめの短い間でも……。

後に、オベル国王・リノ・エン・クルデス率いる群島諸国に同盟が発足する。

それはこれから先に続く平和の礎となったが、激戦を率いた少年と、それを支えた青年の姿はそこにはなく、以降、二人の英雄が群島諸国に姿を見せることもなかったという。

死んだのか、それとも……人々はまことしやかに噂した。

だが、真実を知るものは、姿を消した本人たちだけだ。

「ライガ、どこへ行こうか」

「僕、ヒサトの生まれ故郷が見てみたい」

「今は何も残ってないぞ？　あっても遺跡だろうし」

「いいの。見たい」

「分かった。行こう」

青年は少年の肩を抱く。

少年は嬉しそうに青年に擦り寄る。

幸せそうな二人は、街の雑踏の中に消えてゆく。

紋章の呪い。それすら力に変えて。

何者よりも強い青年と、その恋人である少年は、歴史から姿を消した。

真の紋章がその手に宿る限り、彼らは戦い続けるだろう。

けれども、互いがいる限り屈することはない。

手に入れたのは、何よりも強い絆。
愛する人――……。

永遠を、手に入れた。

永遠の空・終（後書き）

グッドエンドにて完結です。ばかっぷるにおつきあいありがとうございましたー。あと、ちょっとだけオマケ書きます。続編・ラプソディアへの道（笑）

だって続編に４主出てるんですもの……（続編発表前に書いたのです、この話；）

永遠の空・おまけ・前

それは、言の葉。
「愛しているよ」
永遠の、言葉。

赤いバンダナが空気を裂くようにひらめく。
額に巻いているのは一人の少年。
まだ、どこか幼い印象を感じさせる可愛らしい顔をした、海の色の瞳の少年。
少年は戦っていた。
両手には小剣。長剣ではない、少し短めの、だが鋭い剣。
器用に両手に武器を持ち、振るう姿は勇ましく、瞳に宿る意思は強く、彼がかなりの腕前の戦士であると言うことを、見た者がいたならその全てに認識させただろう。
剣を突き出し、怪物の腹を切り裂く。
どっと溢れた生臭い血が、少年の服を汚した。
動かなくなった怪物を見下ろして、少年は息をつき、剣を収めた。
それから、周りを見渡す。
……誰もいない。
そもそも、人が通る場所でもない。
見えるのは、たった今少年がしとめた大きな怪物と小さな怪物の死骸だけ。
「まいったなぁ……」
ほとほと困ったと言いたげに、彼は呟く。
断崖絶壁にある巨大鳥の巣の中で、ポツンとひとり、少年は困っている。
「どうやって帰ろう……？」

下を見下ろし霞んで見えない地面――飛び降りてどうこうできる高さではない――を思う。
「下りるのは……無理だよね……うん、死ぬな……間違いなく」
呟いて、少年は腰を下ろす。
ここだよ。
心の中で呟く。
それで充分、彼には伝わるはずだから。
ねぇ、僕はここだよ。
もう一度心で呟いたとき。

ちり。

左手の甲が疼いた。
ああ、来る。

ビリビリビリッ！！！

大気が魔力が振動する。
強い力。
来た。
少年は至福の微笑を浮かべる。
どこにいても。
彼は必ず自分を見つけてくれる……その確信。
左手の甲が熱い。これまで反応している。
二十七の真なる紋章――そのひとつ、償いと許しを司る『罰の紋章』……。

オォンッ！！

青白い光。魔力のはじける感覚。

そして、そこに降り立つ長身の青年。
前髪の中心だけが赤かった。そして、かなり整った顔に、均整の取れた体つきの青年だ。
腰には少年と同じように双剣を携えている。
「ライガ」
彼は少年の姿を見て、目を見開いた。視線は血で汚れている服に向いている。
「怪我したのかっ！？」
ライガと呼ばれた少年はおっとりと微笑んで首を振る。
「ううん。返り血。怪我してないよ、大丈夫」
立ち上がって青年のところへ駆け寄る。
「心配かけてごめんなさい、ヒサト」
ヒサトと呼ばれた青年は大きく息を吐く。それから苦笑を浮かべた。
「……お前が鳥に捕まったときはどうしようかと思ったぞ」
道を歩いていて、巨大鳥に掻っ攫われたのである。鳥は子供の餌としてライガを巣まで連れ帰り、食べられたくないライガは応戦。今に至る。
「……避けようと思ったんだけど、向こうのほうが早かった……」
「無理しないで逃げろよ、そういう時は俺に任せておけ」
「……ううー」
不満げにライガは唇を尖らせる。
少しでも強くなって彼につりあう人間になりたいと思っているのだが、道は遠いようだ。
「無理してお前が怪我でもしたら……俺がどう思うと思う？」
ヒサトに真顔で言われ、ライガはしゅんとした。
「……ごめんなさい」
とても心配をかけたということは分かるから。
とても心配してくれたというのが分かるから。
「ごめんなさい、ヒサト」

最強の青年を見上げて、恋人の少年は詫びる。
「……許す。次からは気をつけてくれよ？　俺の心臓が止まる」
「うん」
ヒサトはライガの腕を取った。
「服、洗わないとな」
「あ……」
「どこか湖か川でもあるか？」
青年は腰の剣を見下ろした。剣が淡く輝き、小さく唸るような音を発する。
「あるみたい？」
「ああ。行こう」
ヒサト右手でライガの腰を抱き、左手を掲げる。
そこにあるのもまた力。
二十七の真の紋章のひとつ、空間を魔力を司る『天空の紋章』……。
「我が真なる天空の紋章よ！」
ヒサトの叫びに紋章が応える。
青白い光が放たれ始めた。
「我らを海の王導く水の場へ！」

クールーク皇国と群島諸国との戦争から、一年が過ぎていた。
それは群島諸国がクールークの南進政策の拠点、エルイール要塞を陥としたため、群島諸国の勝ちで幕を降ろした。
拠点を失ったクールーク皇国は、当分南に攻め入ることは出来ない。
かりそめでも、確かに勝ち取った平和。
今、群島諸国はオベル国王、リノ・エン・クルデス率いる同盟で結ばれ、バラバラだった群島諸国はひとつにまとまって久しい。
激しい戦争は、人々からたくさんのものを奪っていった。

壊滅したイルヤ島。
たくさんの住民を殺されたナ・ナル島。
蹂躙されたオベル王国と港町ラズリル……。
けれども今はどこもが民の手に戻り、平和な時が流れている。
だが、失われた者を人々が忘れることはなく。
その中の筆頭の二人がいる。
決して忘れることなどない二人。
あの激しい戦争を、オベル王に代わって軍を率いていた少年と、
その少年を支えていた青年。
軍主ライガ。
剣神ヒサト。
人々がその名を忘れることはない。
全てが終わった後、姿を消した二人を。

「冷たくないか？」
「平気」
英雄を呼ばれる二人は、のんきに二人で旅をしていた。
戦争が終わったあと、『罰の紋章』に蝕まれていたライガは、自分の死を覚悟した。
だが、奇跡は起こり、彼は命をとりとめ、紋章のコントロールが可能になり、もはや命を削られることもない。
少年は愛しい青年と旅に出た。ヒサトの生まれ故郷を見るために。
彼が『もう何も残ってないぞ』と言ったとおり、五百年が過ぎた今、そこには巨大な遺跡しか残っておらず、ヒサトが生きていた痕跡を見ることは不可能かと思ったが、遺跡の中に潜ってみると、そこには彼の弟が残した壁画があった。今にも壊れそうなものだったが、見る分には欠けたところはなく。
かつて兄の命を狙った弟、ナセル。
聖王国ティアマトの、最後の王。

彼は兄皇子の姿を壁画に残していた。
誰よりも強く、軍神とまで呼ばれ他国どころか自国の者にまで恐れられていた皇子。
『……バカだな、あいつ……』
見上げたヒサトはそれだけしか言わなかったけれど。
描かれていた言葉は旧くてライガには読めなかったけれど。
『……死んでから……謝るなよ。遅いだろ……バカが』
ヒサトの呟きは、重く苦しくて。
何よりも――悲しかったから。
やるせない。
壁画を見上げ、ライガはヒサトから離れないと心に誓った。
戦争中、それ以前からヒサトに支えてもらった。彼は自分の全てを支えてくれていた。
だから、自分も彼の支えになれるように。
彼を悲しませないように。
……そして、今。
ライガは誓いどおりヒサトと共に旅をしている。彼らが離れることはない。
先ほどの戦闘で浴びた返り血を、ライガは一生懸命洗い落としていた。長年小間使いをしていたので、汚れ物を洗うのには自信があるライガである。
ちなみに、現れた先は湖である。
一年が経って、その間ヒサトも自身の力を磨いていた。
なによりも、己の愛用する武器『海王』がかなり特殊な武器だと戦争中に理解したので、その力を使いこなすためにいろいろと試していた。
比喩(ひゆ)でなく、海の王である剣は、どうやらほかの水にも干渉できるようだ。
まず、水場を感知することが出来ることが判明。
その後、いろいろと隠しダネがあることも判明し、結果ヒサトは

とんでもなく強くなってしまったことを述べておく。
ただでさえ存在が反則のように強かった男が、さらに力を手に入れてしまったので、迂闊に発揮できなくなっている現状だ。
ティアマトの遺跡で高位紋章を手に入れたこともあり、ライガもかなり強くなっている。
左手に『罰の紋章』、右手に『流水の紋章』、額に『雷鳴の紋章』を宿しているライガと、左手に『天空の紋章』、右手に『烈火の紋章』、額に『大地の紋章』を宿しているヒサト。
おまけにライガが巻いているバンダナには、かつてヒサトを愛したとんでもない魔力の持ち主が二人、水と雷の魔法の化身となって宿っていて、ヒサトが持っている武器はとんでもない力を秘めている『海王』。
紋章や魔法を使わずとも剣技だけで反則のように強い男と、その愛弟子である少年だ。
おそらく世界最強のカップルだろう。
洗濯しているライガの横で、ヒサトは火を起こした。
天気はいいが、もうすぐ日が暮れる。上半身裸でいたらいくらなんでも風邪をひくだろう。
「落ちたー」
ライガは嬉しそうに洗った服を絞っている。綺麗に落ちたことが嬉しいのだろう。
黒と赤が基調の服なので、落ちなくてもあまり目立たないだろうが、やはり綺麗になると嬉しい。
「良かったな。こっち来てあったまれ。風邪ひくぞ」
「うん」
近くの木の枝に洗った服をひっかけて、ライガはヒサトのところまで戻ってくる。
彼の横に座ろうとしたら、ヒサトに抱きこまれた。
すっぽりと彼の腕の中に包まれ、ライガはそのぬくもりにホッとする。

「……あったかい」
呟きにヒサトは優しく瞳を微笑ませる。
愛しい少年。五百年の歳月を経て、やっと見つけた恋人だ。
誰一人愛せなかった彼を、ほんの一瞬で捕まえた少年、ライガ。
ライガ当人に自覚はないようだが、ヒサトはライガの魅力にやられっぱなしなのである。

群島諸国の近くまで戻ってきたとき、噂話を聞いた。
壊滅したイルヤ島が、復興し始めているという。
「イルヤ……おまんじゅう……」
なつかしそうにライガは呟く。彼の大好物はおまんじゅうだ。イルヤにはとても美味しいおまんじゅうを作る夫婦がいて、戦時中、夫婦一緒に本拠地船でおまんじゅうを作ってくれていた。ライガはそこの常連だったのである。
「ケヴィンさんとパムさん、元気かなぁ……」
戦争が終わったら、イルヤ島を復興させると言っていた夫婦。言葉通りイルヤ島に戻ったのだろうか。
懐かしい味を思い出して、ライガはちょっと寂しそうだ。
「……行ってみるか？」
ヒサトは苦笑してそう言う。ライガのおまんじゅう好きは、彼が一番よく知っている。
「でも、いいの？」
「いいだろ。オベルならいろいろ面倒くさい展開になりそうだが……イルヤなら、それほど俺たちの顔を知っている人間は居ないし」
ライガとヒサトの顔を知っているイルヤの住民は、ケヴィンとパム夫婦、それから窓職人のナタリー、イルヤ島を終の棲家と考えているイザクくらいのもの。
軍主と剣神の顔そのものを知っている人間はそう多くない。
ちょっと行っておまんじゅうを食べるくらいは許される……はず。

ケヴィンとパム夫婦のところに行く際には、顔を隠すか、自分たちのことは他に内緒にしてくれと言う必要はあるだろうが。
「復興の具合も気になるんだろ？」
「……うん」
壊滅したイルヤ。クールークの前哨基地と化したときの状況を、ライガもヒサトも見ている。あのずたずたになったイルヤが、どのくらい復興しているのか、正直に気になった。
「じゃあ、まず船だな」
「うん！」
嬉しげにライガはヒサトの腕を取った。普段の移動はごく普通に歩くか馬車、あるいは船を使っている。ヒサトの紋章に頼った移動はしていない。アレは便利だが、早々多用していい方法ではないのだ。
「そう言えば、ラマダさん大丈夫だったのかなぁ？」
「あー……とりあえず息はあったな。ユウがいるから大丈夫だと思うが」
戦争が終わる寸前に、行方不明になっていた仲間のことを思い出した。
エルイール要塞を陥とした際、別働隊に抱えられて戻ってきた仲間の男は、毒を喰らっていて、瀕死の状態だったのだ。本拠地船には腕のイイ医者のユウが乗船していたから、あまり心配はいらないのではないか。
自分の命が失われるところだったので、呪われた紋章を移さないよう、他に迷惑がかからないように出てきてしまったライガたちに、ラマダの安否を知る術はなかった。
「確認しないで出てきちゃったもんね……生きててくれたら、嬉しいけど」
「大丈夫だろ。根拠はないが。あいつはミズキとアカギの面倒見にゃならんし」
残された仲間。ラマダを思い、慕う二人。それを残して死ねない

だろうとヒサトは言う。
「そうだね」
元気だろうか、とライガは思う。
大切な仲間たち。一緒に戦ってくれた人々。
その中で、特に思うのは、ライガとそう変わらない外見の、ひとりの少年。
「……テッドさん、どうしたかな……」
彼もまた、真の紋章『生と死を司る紋章』――別名『ソウルイーター』の持ち主。
たった一人で長く苦しみ、その果てに一度紋章を手放し、それでももう一度戦うことを選び、再び紋章をその手に宿した人。
戦争が終わったら、また旅に出るといっていた。親しい人の命を好んで喰らう呪われた紋章に、誰かが喰われないうちに。
「旅に出ただろうな、間違いなく」
ヒサトは思い出している。十年位前、初めてあの少年に出会ったときのこと。
彼は孤独だった。どうしようもなく孤独だった。それが宿した紋章のせいであることはすぐに分かった。
『ソウルイーター』。魂を喰らうもの。
ヒサトはテッドを可愛がった。嫌がられてもかまってやった。どこか幼い頃の弟に似ていたからでもあり、テッドの瞳があまりにも寂しかったからでもある。
近寄らないでくれ。少年は何度もそう言ってヒサトを拒んだ。
ヒサトは俺も長居しないから、その間だけでも弟になってくれと笑いかけた。
真の紋章の呪いに縛られていたヒサトとテッド。ひとつところに長居はできない。当時、ヒサトは自分の紋章の話をテッドにしていなかったが、タラシで名高かった彼は長居しない理由をタラシのせいにした。
そう言って初めてテッドは心を開いてくれた。いずれ別れるのな

らば、それならば、ひとときでも、信頼できる相手がいるという、夢のようなひとときを。

それでも少年は『ソウルイーター』にヒサトが喰われるのではないかと恐れていた。

その心は痛くヒサトにも理解できるものだったので。

彼が『ソウルイーター』に喰われることなどありえなかったのだが、それでも。

一月で別れた。じゃあな、元気でと言ったとき、テッドはホッとしていたが、同時にとても寂しそうだった。

「……連れてきてやれば良かったか」

少し後悔している。あの時はライガが死ぬと思っていたから二人だけで船を出た。テッドを残してきたのは、辛い別れをさせたくなかったからだ。万が一、テッドに『罰の紋章』が宿ったらと恐れていたのもある。

『天空の紋章』を宿すヒサトにほかの真の紋章が力を及ぼすことは確実にないが、テッドに『罰の紋章』が宿る可能性はないわけではなかったから。

『ソウルイーター』だけでも疲れきっているような少年に、この上『罰の紋章』までもが宿ることになったらなどと、考えるのも恐ろしい。

「でも、テッドさんはきっと来ないよ……僕らが喰われることを、すごく気にしてくれていたから……」

本拠地船にいたころ、誰とも接しようとしなかったテッド。それはライガに対しても同じで、例外はヒサトだけだった。

兄とも思ったヒサトにだけは素で接していた。

でも、彼は何よりも失うことを恐れていて。

大切な人を、亡くし続けてきたから。

「……そうだな」

テッドは一人で旅に出ただろう。孤独な旅を続けるのだろう……。

「アルドさん、ついていってあげたのかな……」

テッドにかまうお人好しは、ライガやヒサトだけではなかった。
アルド。狩人であった彼は、どうしてかテッドにかまっていた。寂しそうな彼を放っておけなかったのだろう。
テッドも少しだけアルドに心を開いていた。
「……ついていったかもしれないな。アルドもかなりお人好しだったから」
ヒサトは言いながら、果たしてそれは幸せなことだろうかと思った。
アルドはテッドが真の紋章の持ち主だと知っている。それが呪われた紋章だということも知っている。その上で、テッドと共にいるのならば。
――自身の死を覚悟していなければできないことだ。
自分は大丈夫などと甘い考えでどうにかなる『ソウルイーター』ではない。テッドがアルドに心を開きかけているのは紋章も理解しているはず。
そう遠くないうちに、アルドは死ぬだろう。
『ソウルイーター』は喜んでその魂を喰らうだろう。
テッドの嘆きが……どれだけ深くなるのか、分からない。
「やっぱり連れてきてやれば良かったな……俺ならソウルイーターも抑えられる……」
左手を見下ろす。ソコに宿るは真の紋章にも干渉が可能な力。
ここにいるのは、それを自在にする男。
「どこかで、また会えたら……いいんだが」
空を見上げてヒサトは呟いた。『天空の紋章』を使って少年の居場所を感知し、移動することは簡単だが、それをしてしまうとテッドを追っている連中に勘付かれる可能性が高い。
かつてテッドの居た村を滅ぼした連中は、彼の紋章を狙っている。テッドがひとつところにいられない理由は、追われているせいもあるのだ。
ヒサトが返り討ちにするのは簡単だろうが、相手もどうやら真の

紋章持ちだということをテッドから聞いている。一筋縄ではいかないだろう。

彼の道は遥かに遠く、暗い。

遥かな先に一筋でも光明があれば――生きていけるのに。

ライガに出会えたヒサトのように。

ヒサトに支えられたライガのように。

永遠の空・おまけ・前（後書き）

ＥＤ。画面に向かって作者は叫びました。
「あんた生きてたのかラマダさんッ！！！」
しんそこからおどろきました。

永遠の空・おまけ・中

イルヤ島は、まだ傷跡が生々しく残っていた。家屋は建て直され始めているが、まだあちこちに巨大紋章砲にえぐられた跡がある。

それでも、人々の顔は明るかった。希望に溢れている表情だ。

見て嬉しくなったのか、ライガは周りを見るのを忘れた。

街の中心に行ったとき、人並みに巻き込まれてヒサトの姿を見失ってしまう。

はぐれた。

「うわ……迷子になっちゃった」

呟いて、苦笑する。

不安に思ってはいなかった。ヒサトはどんな状況でも自分を見つけてくれると確信している。ライガが『罰の紋章』を宿しているからだ。『天空の紋章』の制御に長けているヒサトは、この一年ライガと共に旅をして、『罰の紋章』の発する力のようなものを感知する術を編み出している。どこまではぐれても、ヒサトは簡単にライガを見つけてくれるのだ。

例を挙げるならば巨大鳥の巣まで運ばれたライガを見つけ出したことが、近い記憶だ。

逆に、ライガのほうからヒサトを捜すのは難しい。ヒサトほど紋章の制御に長けていないからである。

人が多いところで迂闊に彼の名を叫んで捜すわけにはいかないので（その場で大騒ぎになるのは目に見えている）ライガはおとなしくヒサトが捜し当ててくれるのを待つことにした。

しばし。

ライガの腕を誰かが掴んだ。ヒサトかと思って振り返ったライガの視界に映ったのは、日の光に輝く、金髪。

「！！！」

ライガは硬直した。

「まいったな」
はぐれてしまったとヒサトは苦笑する。ライガが浮かれていたのは見ていて分かったが、まさかはぐれるくらいに気がそぞろになっているとは思わなかった。
手でもつないでいれば良かったかと精神を集中する。
感じるべきは『罰の紋章』の波動。可愛い恋人の手に宿る忌まわしい呪われた紋章が、こういうときに役に立つとは皮肉なものである。
感じる波動はあまり遠くなかった。
迎えに行くかと足を踏み出して、しばし。
「げ」
呻いてヒサトは固まった。
可愛い恋人が立っている。その姿はいつもと変わりないが、表情が困りきったものだった。
そして、その恋人の隣、ライガの腕をがっつりと掴んで逃がさないと表情で言っている女性が、いた。
彼女は、ヒサトを見て目を見開く。
「ヒサトさんっ！！！？？？」
腕を掴まれて逃げられないライガが、申し訳なさそうに呟く。
「ごめん、ヒサト……見つかっちゃった……」
「ああ……見れば大体察しはつく……」
ゲンナリとヒサトも呟きを返す。頭痛を感じながら、呻くように、彼女に言う。
「なんで居るんだよ、フレア……」
ライガの腕を掴んでいるのは、オベル王国王女、フレアだった。
彼女の後ろにはお付きのデスモンドもいる。どちらも見慣れた顔だ。
港にオベルの船はなかったはずだが、どうして彼女がここに居るのだろう。
「イルヤの復興の様子の確認です。オベルも協力していますから。

今日船が迎えに来ることになっていたんです。ちょうど良かったわ」
きっぱりと言って、フレアはライガとヒサトを交互に見た。
「……無事だったのなら……連絡のひとつもしてくださいっ！！！」
声を上げる彼女に、ライガは心底から困った顔。ヒサトは大体言われることを予想していたので、無反応。あわてていない。
「そうですよ、ライガ様、ヒサト様。私たちがどれだけ心配したか……」
今にも泣き出しそうにデスモンドがライガにすがりつく。それを見て、ヒサトのこめかみに青筋が立った。フレアはまあ許せるが、デスモンドは許せん。
「デスモンド？　三つ数えるぞ？　死にたくないならライガから離れろよ？　いーち」
「はわわわわわっ」
あわてて離れるデスモンド。苦笑するライガとフレア。
「つか、フレア。お前もあんまりくっつくな。ライガから離れろ」
「イヤです」
王女はキッパリと剣神の要求を棄却。ライガにしがみつくようにして離さない。
「なんでだよ。別に逃げたりしない――」
ヒサトの言葉を遮って、フレアは言い切った。
「ヒサトさんの紋章、転移できるんですよね。あのとき見ましたから、分かってます」
ライガの腕を離したら、その場で彼だけ抱えてトンズラされる可能性があると、彼女は見越しているのだった。ヒサトの紋章が真の紋章のひとつであること。それがどんな力を持つものなのか、詳しくは知らないが、転移することが可能であることくらいは戦争が終結した際、ライガを連れて去ったヒサトを見ているフレアは理解していた。
「ち」
舌打ちするヒサトだ。逃亡する気満々である。

「ヒサトさん……逃げる気満々でしょう？　ダメです。このままライガと一緒にオベルまで連行します」
「……犯罪者じゃねえんだから……」
「ええと……行かなきゃダメですか、フレアさん……」
おずおずと尋ねるライガに、フレアはにこやかに青筋立てて断言した。
「当たり前でしょう」

元軍主と剣神は、オベルまで連行された。ライガにはフレアが、ヒサトにはデスモンドが監視につく有様である。恋人に触れないヒサトは、オベルにつくまで文句を言った。
「っち。デスモンドかよ。ライガに触らせろよフレアー。禁断症状が出るぞー。デスモンド斬り殺すぞー」
「ダメです。逃げる気でしょう。デスモンドなら死なない程度にかまってくれていいですから」
「……死なない程度……俺が一発殴っただけで死にそうだな、デスモンド……サンドバックにもならんのかお前……役立たずが」
「カンベンしてくださいよぉっ！！」
「あの、フレアさん、逃げませんからヒサトのそばに居ていいですか」
「ダメ。あなたはともかくヒサトさんは逃げる気満々ですもの。我慢して」
「ええと、でも……デスモンドさんほんとに殴られますよ？」
「いいわ。あなたたちに逃げられるよりは」
「王女の許可が出たぞ。殴っていいかデスモンド」
「カンベンしてくださいよぅぅ～～～！！！」
「とりあえず骨の五、六本くらいはいいよな？　よし」
「良くないですぅっ！！！」
逃げ回るデスモンドは、監視にはなっていなかったようだ。

まぁ、ライガを押さえられていてはヒサトもおとなしいので、フレアは悠々としたものだ。
「……ほんとに、逃げませんよ？」
ライガは苦笑して、フレアに言う。
「でも、ヒサトさんは」
「ヒサトも逃げませんよ。逃げる気ならもう逃げてます。フレアさんやデスモンドさんを無力化するなんて、ヒサトには簡単ですよ」
分かっているでしょう？　とライガは微笑んでいる。
ヒサトが本気で逃げようと思っているのならば、無駄な会話などしていない。
フレアの腕からライガを引き離すことなどヒサトには簡単だ。そのまま彼女たちの手の届かない場所まで移動するのも簡単だ。
「……そうね」
フレアは苦笑して息をついた。ライガが無理に逃げる様子がないし、逃げるつもりがないのをヒサトは分かっているのだろう。だから、フレアとデスモンドをからかって遊んでいるだけだ。今も逃げ回るデスモンドを、楽しそうににんまり笑いながら視線だけで追い詰めている。　フレアは苦笑し続けるしかない。彼女の横でライガは抱えていた紙袋を覗き込む。そこに入っているのは、彼の大好物。
「フレアさん、おまんじゅう食べます？」
出発する間際にフレアを連れて買ってきたライガだ。ケヴィンとパムはライガの顔を見て、心底から驚いて、それから彼の無事を喜んで、たくさんのおまんじゅうをくれた。
「じゃあ、ひとつ貰おうかしら」
受け取ってぱくりとかぶりつき、オベル王女はもぐもぐした。飲み込んでから、かつての軍主に向き直る。
「ところでね、ライガ」
「はい」
「それ、止めてくれない？」
「はい？」

「それ。敬語。私そういうの嫌いなの。普通に喋って。戦争も終わったし」
「……えーと、でも、お姫さまですよね？」
「いいの。ヒサトさんだって普通に喋ってくれてるわよ」
ライガはちょっと戸惑った。ヒサトは昔皇子だった人だから、フレアに身分の差など関係なく接していられるのだろうが、ライガは小間使いだった少年である。
たとえ、ライガの生まれがヒサトが教えてくれたものだとしても、長年教え込まれてきた地位の高い人への敬語はなかなか直るものではない。
「ね？お願いよ」
「……はい」
「……『うん』でしょ」
「あ」
指摘されてライガは困ったように笑う。
「慣れるまで、待って。フレアさん。がんばるから」
「がんばらなくてもいいわよ。でも、慣れてね」
くすくすと笑いあう王女とライガは、本当に仲の良い姉弟に見える。
瞳の色がよく似ているのだ。淡く浅い場所の海の色。
それを見て、ヒサトは少しだけ微笑んだ。
かつての友が残した忘れ形見の女性と少年。
護ろうと思った。だからこそ自分はここにいるのだ。

オベル王国。
ライガとヒサトが戻ってきたことを、国王リノは目を丸くして出迎えた。
「お前ら……生きて」
いたのか、と言う声は掻き消える。

リノ・エン・クルデスは目頭を押さえ、しばらくそのまま言葉をなくした。
死んだと思っていた。何の音沙汰もなかったこの一年で、青年も少年ももう二度と姿を見ることはないのだと、思って。
それがどれだけ悲しかったか。苦しかったか。結局自分は彼らを犠牲にしただけではないのかと、さすがのリノも自責に苦しんだのだ。
命を削る紋章を宿しているライガ。
制御に失敗すればその場で爆死する紋章を宿しているヒサト。
彼らの苦しみを理解していたようで理解していなかったのではないかと。
だが。
二人は戻ってきた。
生きて、ここに、目の前に居てくれる。
「……生きてたなら……連絡の一つや二ついれやがれ……このバカどもっ！！！」
「あーあーはいはい。分かった分かった。悪かった悪かった。これでいいだろ」
「ヒーサートー！！　てめえ全然反省してねえだろうっ！！！」
怒鳴り散らすリノは心から嬉しそうだった。ヒサトの対応は以前と変わらずやる気がない。
命を削るような悲壮な様子がないことを、リノは嬉しく感じている。
「大体なぁ！　何であのとき二人だけでいなくなった！！　今までどこで何してた！！？？」
リノの剣幕を聞き流して、ヒサトはしれっと答える。
「観光旅行。あ、ハネムーンって言ったほうが分かりやすいか。なぁライガ」
「え、あ、ええ！？」
赤くなるライガだ。

「……変わりませんなぁ、ヒサト殿」
老臣セツが苦笑している。
「安心しました。お元気そうで。ライガ殿、お身体のほうはいかがです？」
訊きたいのは紋章のことだろう。所有者の命を喰う『罰の紋章』、それを宿しているライガが、戦時中どれだけ苦しんでいたのか皆知っている。
「……今は、落ち着いています」
ライガは淡く微笑む。
「あのときは……本当に死ぬと思っていましたから。リノさん、ヒサトのせいじゃないんです。あのとき姿を消したのは僕が望んだことで……ほかの人に紋章が移らないようにって……ヒサトはその約束を護ってくれただけなんです」
「……そんなことぁ分かってる」
リノは苦笑した。それはあの瞬間に理解した。ライガはほかの人間のことを考えて、ヒサトと共に去ったのだと。
呪われた紋章を宿すがゆえに、ほかの誰かを犠牲にしないようにと。
「だが、生きていたのなら連絡くらいしやがれ」
言って、リノはライガの頭をぽんと叩いた。
「心配、したんだ」
それはリノだけでなく、仲間たち全員の心境だ。
力になれなかったと、どれだけ悔やんだかしれない。
助けたかった人。支えになりたかった人。
「俺だけじゃねえぞ？　皆だ。仲間全員が、お前とヒサトを心配してた」
「……すいません」
うつむくライガに、リノは笑いかける。
「まあ、いい。生きていたんだ。それでいい」
それからヒサトに向き直る。

「おい。てめえは別だぞ、コラ」
「ああ？　何だよ」
「何だよじゃねえ！　ライガと違ってお前は確信犯だ！！　後のこと全部押し付けていきやがっただろう！！」
「はん？　何のことですかねー」
しらばっくれるヒサト。その態度がもう言われたことを理解している証拠だ。
「トロイのことやらグレアム・クレイのことやら……どんだけ面倒だったと思ってやがる！！」
敵将のトロイ、それから黒幕のグレアム・クレイをとっ捕まえたヒサトは、まんまと後始末を押し付けて立ち去ったのだ。
「んだよ？　トロイのことは頼むと言っただろう。クレイは……ありゃついでだ。あいつを置いていったらエレノアも戻ってこなかっただろうし」
「あ！　そう言えばトロイさんとかエレノアさんどうしたんです？」
ライガが声を上げた。クレイは黒幕だったので処刑されただろうという予想はつくが、エレノアと、ヒサトのお気に入りだった敵将・トロイはどうなったのか。
「ああ、エレノアは庵（いおり）に戻ったよ。あいつも面倒なこと全部押し付けていきやがった……！！」
リノは苦く顔をしかめている。まぁ、彼女はエルイール攻防戦で死ぬつもりだったらしく、事後のことまで全てリノにある程度指示していったので、彼女が庵に戻ってもさほど困ったことにはならなかったのだが。
「トロイはどうした？」
ヒサトが尋ね、リノが答える前に、駆けてくる足音が聞こえてきた。

永遠の空・おまけ・中（後書き）

オベルに連行。

足音だけでヒサトは理解した。それだけで大体誰だか判別できる。武人であればなおさらだ。

息を切らして現れたのは、長剣を腰に下げた美麗な武人。

――かつて海神の申し子と呼ばれた男、トロイ。

「ヒサト……！！」

彼はヒサトを見るなり駆け寄った。知らせを聞いてなによりも急いで来たのだろう。息が乱れているが、心が急いているらしく、感情のままに駆け寄る。

目前まで行き、そこで止まり、まじまじとヒサトを見つめた。

そこに居るのが確かに彼だと確かめるように。

「生きて……いた、んだな」

ヒサトは無言。彼が気にしているのはトロイでなく、恋人、ライガのほうなのだ。

トロイはヒサトの過去の愛人だった。それをライガも知っている。

そして、ライガが死ぬほどヤキモチを焼いていたこともヒサトは知っている。

「あー……トロイ？」

抱きつくなどされたらライガに後で何を言われるか分からない。恋人との仲にヒビが入ることが何より恐い最強の男は、心持ち体勢を整えた。トロイがどういう行動に出ても対処できるように油断はしない。

「……良か、った……」

震える手でヒサトのジャケットを掴み、トロイはただ、そう言っただけだった。

抱きつくことはしない。ヒサトにはライガがいると痛いくらい理解しているからだ。

かつての愛人同士を眺めて、ヒヤヒヤしながらリノはライガを伺

い、呟くように言う。
「……今はうちの武官と海軍の指揮を務めてくれている」
「……でしょうね。トロイさん、有能な人ですから」
ライガは目だけが笑っていない。
恐ぇ。正直に思ったリノである。
この一年でライガも何かが変わったようだ。以前はどこかヒサトを奪われても仕方ないと言いたげな雰囲気を持っていたが、今は違う。
全身全霊でヒサトは自分のものだと言っている。
恐ぇ。リノは心からそう思う。
「おい、ヒサト」
ライガをなんとかしてくれと視線で頼む。以前なら頼むことも相手も逆だった。怒るヒサトをなんとかしてくれとライガに頼んでいたのだが。
「あ？　ああ、ライガ。ヤキモチか」
ヒサトはあっさりと言い、トロイを見下ろす。
「トロイ、俺とライガの仲を裂きたいわけじゃあるまい？」
身体ではなく、ジャケットを掴んだことで、トロイがすでに気持ちに整理をつけていることを悟ったヒサトである。勘がいいのもここまで来るとイヤミの一種にも思える。
「ああ……すまない、ライガ殿」
トロイは苦笑してヒサトのジャケットから手を離した。
「そんなつもりはない。ただ……無事だったことが嬉しい。それだけだ。死んだと……思いたくなかったから」
微笑む彼はハッとするほど美しい。さすが面食いヒサトのお気に入りだっただけはある。
「あなたも無事で良かった……ライガ殿。あなたが生きていなければヒサトも生きてはいなかっただろうから」
オベルに来てから、トロイはヒサトがどれだけライガを愛していたのかをたくさんの人から聞いた。それはヒサトを愛したトロイに

は辛い話でも会ったが、それよりも嬉しい話でもあった。
自分の知らないヒサトの話を聞けたからだ。
彼の一面を、知ることが出来たからだ。
「本当に……無事で良かった……」
なによりもヒサトの幸せを願う。それはライガとともにあることならば、ライガの幸せをも願おう。ヒサトが幸せになるのならば、いくらでも。
ライガはトロイの心境を読み取ったのかふと瞳を和らげた。
「ありがとう、トロイさん」
微笑む。
かつて戦った二人。海戦だけでなく、実際に剣も交えた。勝ったのはライガで、完敗を期したトロイは死を覚悟したが、その命を拾ったのもまたライガだった。
ヒサトが気に入った人だから。死なせたくないと彼が願ったから。
例えその人が恋敵であっても、ヒサトが望むのならば、救う。
それはトロイがヒサトに持つ想いとたがわない。
どこまでも彼を想う、心だ。
得られなかったトロイと、得たライガと。
それでも想いの質は同じだ。
ただ、愛しいから。
愛している相手の幸せを願うだけ。
「おい」
リノは小声でヒサトに声をかけた。
「お前……本当に何で刺されねぇんだ」
この男が死ぬことがあるのならば、まず確実に痴情のもつれだろうと確信していたリノだが、ヒサトのお手つき連中の様子を見る限りでは、どうもありそうにない感じがしている。
「……なんでだろうなぁ……」
呟くヒサトも、心底から不思議そうだ。
「そのうち確実に女か男に刺されるかどうかして死ぬんだろうと覚

悟していたのに……本命の可愛い恋人までできて幸せになってしまった。何故だろう？　なぁ、何でだと思う？」

逆にリノに訊いてくる。国王はあっけにとられた。

「俺が訊いてるんだが……」

「不倫も死ぬほどしたのになぁ……旦那にも女房にも刺されなかったんだよなぁ……」

「ぅおいっ！！！」

猛烈な勢いで突っ込むリノ。

「お前の人生そんなんばっかりか！！？？」

「あー、まぁ、六割五分くらい？」

「充分だろ……」

げっそりと呟く。この男はどこまでもタラシだと何度目かの確信をした。しかもそのへんのジゴロが泣いて謝りそうな勢いで、とんでもなくタラシだ。

「何の話」

ライガがにこやかにヒサトに向き直る。目が、笑っていない再び。

「昔のお話。刺されてもおかしくないのになぁってリノが言うから」

「俺に振るなっ！！」

にこやかに押し付けるヒサトにリノは悲鳴を上げた。

「振ってきたのはお前だろう」

ヒサトは余裕で笑んでいる。楽しんでいるのが丸分かりだ。

「戦時中散々火種撒いて俺たちで遊びやがったからなー。少し仕返ししてやろうぜライガ」

根に持っていたらしい。

「ヒサト、大人気ないよ」

ライガは苦笑して恋人に歩み寄り、腕を取る。

「五百歳越してるんだから、年下相手に遊ばないの」

「ご……っ！！？？」

その場にいたライガとヒサト以外の全員が言葉を失った。

「あ、歳バラしたなライガ。五百歳ったって身体は若いんだぞ？

不老なんだから。毎晩分からせてやってるだろ」
「……すけべ」
頬を赤くしてライガは呟き、ヒサトに擦り寄った。
「五百……いくつなんですか、ヒサトさん」
フレアが目を丸くしたまま訊いてくる。
「さぁ？　端数は忘れたなー。古文書とか見たらわかるかもしれんが……どうかな。ほら、年号も今と違うから」
本人はケロリとしている。今更年を細かく数えても気にならないと言いたげだ。
「とんでもないじじいじゃねえか……外見俺より若いくせに……」
リノが呆然と言う。年相応の外見のリノと、五百を越えていてもなお若々しいヒサト。
トロイが痛々しげに顔をしかめている。
五百年を越える年を重ねても、ヒサトは変わらないのだ。時の流れから切り離され、ただひとりでどれほどの間彷徨ったのだろう？
真の紋章がもたらす、呪い。
「じじい言うな。顔からしてじじいのお前に言われたくないわ」
そんなこと気にもしていないようにヒサトはにべもなくリノを一刀両断してのける。
「ヒサト」
「あん？」
トロイは真顔で愛しい人に訊く。
「お前の生国はどこだ？」
「……訊いてどうする」
「知りたい」
「……もうどこにもない」
それだけ答えてヒサトは痛そうな顔をしているライガを見下ろした。ヒサトの過去を知っているのは恋人と、この場には居ない、同じ真の紋章持ちであるテッドだけだ。
「今はライガが俺の居場所だ」

な？　と言って恋人にキスをする。
「ばか……」
ライガは呟くように言って、ヒサトのキスを受け入れた。
彼がそう言ってくれるのは嬉しい。自分が彼の安らぐ場所になれるのならば喜んでなろうと思う。
愛しい人。支えられてばかりだったから、支えたいと思う。
強い人、でも誰よりも痛みを抱えて生きている人。その痛みを、癒してあげたい。
そう思うことは嘘じゃない。
「……ここにいりゃあいい」
リノはそう言い出した。
「ライガと一緒に、オベルで過ごせ。第二の故郷にしろ」
ヒサトは胡散臭げな表情を作り、ひとこと。
「あ？　ヤダ」
「即答かよっ」
「国王がむさい」
「しかもそんな理由かおい」
「臣下もいまいちだしなー顔」
「お前の基準は顔だけかっ！！　どんだけ面食いなんだっ！！！」
突っ込みまくるリノだ。もう突っ込むしかない。
「私が居るだろう」
トロイが口を出した。
「お前は私を気に入っていたと言ってくれたな？　ならば私がお前の滞在理由になる」
「あ、じゃあ私も！！」
フレアが手を上げる。
「私のこと美人だって言ってくれましたよね？」
確かに言った。トロイを気に入っていたことも事実だ。しかしそれをこんな形で使われるとは思わなかったヒサトである。苦笑いを浮かべる彼に、リノが王手をかけた。

「あと、お前に拒む権利はないからな。ライガはオベル王国の所属だ。勝手に連れて歩くことは許さん」
「え」
ライガが目を点にする。所属。所属？
「当たり前だろう？　お前は連合軍を率いていた。いまや英雄だ。そのお前を最初に迎え入れたのはオベル。つまり俺だ。したがってライガは俺の臣下でもある」
強引極まりない理論だ。だが、恐ろしい紋章を宿す二人を躊躇なく迎え入れようとしていることにも違いはなく。
二人を何よりも心配しているからこその言葉であり。
「不満か、ライガ。俺ではお前が仕える主にはなれないか？」
リノは真顔になった。真剣だ。彼はライガを買っている。至宝のような輝きを持つ少年。
力だけでなく、真の紋章にも打ち勝つその心。
あの激戦を勝ち抜けたのはライガの指揮とヒサトの力あってこそ。心からオベルに居てほしいと思っている。呪われた紋章を持つこの少年に、安らぎの場所を与えたいと思っている。
それは、ヒサトに対しても同じで。
だからこそまず最初にライガに頷いてもらわなくてはならない。ライガがいなければヒサトは何の感慨もなくオベルを出るだろうからだ。
それは過去、実際にあったことなので考えなくても分かることだった。
リノは昔にも滞在していたヒサトに残ってくれないかと誘ったことがあった。ヒサトは一蹴、そのままオベルを後にした。
金も地位もヒサトを繋ぎとめることは出来ない。彼を繋ぎとめることができる唯一の存在がライガだ。
だから、ライガが頷いてくれなければ意味がない。
「おい、リノ――」
ヒサトが声をあげ、ライガがそれを遮った。

「僕で良いのですか」
「ああ。頼む」
「分かりました、リノ様。ただし、条件があります」
ライガもまた真顔。
「この紋章が……災厄をもたらすようなことあれば、僕はこの地を去ります。それでもよろしければ……お仕えします」
「ああ。充分だ」
涙が出そうだ。リノは思った。ライガはリノたちの思いを汲んでくれている。そしてその思いを得がたいくらいに大切なものだと思ってくれている。
この少年には多くを背負わせた。それでも、ここに滞在すると言ってくれる度量。
なによりも、ライガはヒサトのことを想っているのだろう。故郷を失った彼を。
「……ライガ」
ヒサトは苦い表情だ。ライガの考えていることが大体予測できている。
「そういうことだから、ヒサト。我慢して付き合ってね？　僕、オベルの皆さんに恩があるし。ほら、流刑にあった僕を受け入れてくれたから」
「……それは戦争を終わらせたことで充分すぎるくらいに返したと思うぞ」
「足りないよ」
ライガはケロリと言い返す。
「あ、リノ様、ヒサトはフリーでいいですか？　彼が居るだけで他には充分威嚇になると思いますけど」
「そうだなぁ……ヒサト、お前この際正式にうちの国所属に」
「ならん。断る。絶対に御免だ！！」
力一杯断るヒサトだ。
「あと必要以上にライガをこき使ったら、反乱起こすぞ。オベルが

なくなると思え」
「……本気だろ、お前」
リノは苦笑する。どこまでもライガ本意な男だ。それが今回は幸いしたが。
「当たり前だ」
苦く言いながら、彼はライガを抱きしめた。
「変に気を使うことないだろ……俺はお前がいればそれでいいんだぞ？」
「僕だってそうだよ？　でも、ゆっくり過ごせる場所が……ひとつくらいあってもいいんじゃない？　ヒサトはずっと旅してたんだから」
ライガは微笑んで恋人を見上げた。
大切な人。
あなたに幸せでいてほしい。
願うのは、それだけ。
だからしばらくはここに居よう？
呪われた紋章が許す限り、ここで過ごそう。
安心して眠れる日々を、貴方にあげたい。
ヒサトは息をついた。滅びた遺跡内で話したことを、ライガはずっと気に病んでいたようだ。人と眠れない理由。誰かと一緒に眠れなかったその理由。

――『いつ殺されるか分からないから』。

気が休まるときがなかった、と。
「……分かった。お前がそれでいいなら、いいよ」
苦笑を浮かべてライガの頬を撫でる。
今はライガがいるから、夜を警戒することもあまりないのだが。
恋人と眠る夜が来るとは思ったことがなかった。誰かを愛することなど一生涯ないだろうと思っていた自分を、捕まえた少年。

「ありがとう、ライガ」
だからこそ、何よりも自分を想ってくれるこの少年に――ただひとりの愛しい恋人に最大限の感謝と愛を。
「愛しているよ――」

それは、言の葉。
永遠に変わる、ただひとつの輝き。

永遠の空・おまけ・後（後書き）

はい、これにて『永遠の空』は完結です。長らくお付き合いありがとうございました。
彼らはラプソディアでも暴れるんだろうなぁと妄想しております。
ヒサトがいたら……怖いなぁ（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3491d/

幻想水滸伝４【永遠の空】

2010年10月8日12時53分発行